

『新生紫苑の書』

4 00 6

4 00 6

それは手に持つとしっかりとした重みを感じさせる本だった。本、といっても中は白紙で、至って簡素だ。装丁はわりとしっかりしていて、ハードカバーになっている。何度開いても壊れなさそうな、丈夫な本だ。

黒い髪の少女がその本を手にする。誰にも買われなかったその本は、店主にさえ無視されていたかのように、薄い埃を帯びていた。少女は中を開き、ぱらぱらとページを捲る。周りの客に気取られないように鼻を近づけ、紙の匂いを嗅ぐ。手垢や油の付いていない紙の独特な匂いが鼻をつく。

埃を手で払うと、少女はレジへと歩いた。清算を済ませると、店員は紙袋に本を入れてくれた。店員の声に送り出されて店を出る。少女は一度立ち止まって、後ろを振り返る。店の看板にはサイジムと書いてある。行きつけではない。それどころか初めて来た。

少女は鞆を開けると、袋の中にしまう。ふう、と一息つく。外は少し寒い。それはそうだが、なにせもう明日から12月なのだから。少女は道に迷った子供のようにきょろきょろと辺りを見回した。方向が逆転したので自分がどちらから来たのか一瞬分からなくなっていた。来た道を確認すると、少女は逆の方へ、店を出て右手に歩いていった。

黒い髪は肩より長く、ストレートに伸ばしている。少女が歩くたびに制服のスカートや鞆が髪と一緒にゆったりとしたリズムで揺れる。

突然、胸ポケットのケータイが揺れだした。そうだ、学校にいたからマナーにしたままだった。電話かなと思い、ケータイを取り出すが、はたしてそれはメールだった。送信者は母親。内容は簡素なもので、「今日も遅くなるから夕飯お願いね」だ。

少女はため息をつく、と、即座に「分かった」と打ち、思い出したように「今朝、台所の床が濡れてたけど、どうしたの？」と付け加えて送信した。少女はケータイを胸ポケットにしまうと、歩き出した。これから電車に乗るのでマナーのままでいい。

歩き出してまもなく、メールが返ってきた。

「知らない。コップが倒れたのかな。紫苑の？拭いてくれた？」

いや、自分のコップではない。飲んだら必ず片付ける。それに、床もきちんと拭いておいた。築 15 年のフローリングに早々腐れというのか。

「うん、拭いたよ。で、お父さんも遅いの？夕飯、いる？」と打って、また歩き出す。

まっすぐ歩くと「上福岡」と書かれた駅の前に来た。ここに来るのは初めてではない。何度か来たことがある。だが、普段は利用しない駅だ。駅前にはカメラ屋、ケンタッキー、松屋、コーギーコーナーなどがあるが、どれもあまり興味がない。

上福岡は東武東上線の駅で、川越から 2 駅。間に新河岸を挟んだところにある。街は繁華街の様相を呈しているが、あまり綺麗ではない。駅も同様に、発達していない感じがする。駅の入り口はエスカレータと階段が横並びになっている。

紫苑はエスカレータに乗る。後ろに男が立つが、スカートは十分に長いので何も気にならない。スカートの長さは規定というか、買ったときのままで、少しも短くしていない。いまどき珍しいと大人には好意的に見られるが、同級生には揶揄される。

揶揄されても紫苑は短くする気はない。世のおじさんたちは勘違いしているが、女子が短くしているのは可愛いからでも男に媚びているからでもなく、まして男を誘惑しているわけでもない。単に周りの女子から干されないためだ。だが、そんなことしてまで周りに合わせる必要はないというのが紫苑の考えだ。

化粧もそうだ。一部の女子は薄化粧をしているが、紫苑はしない。女子高生の若さでわざわざ毛穴を窒息させてどうするというのだ。

エスカレータを降りると左に折れ、券売機へ向かう。鞆から財布を出し、列に並ぶ。その間に上を見上げて川越までの値段を見る。160 円とある。切符を買うと、改札に入って左手に折れる。左右に階段があるが、左の階段を下りていく。

階段を下りると左手のホームの電光掲示板を見る。あと少しで電車が来る。

反対側のホームに電車が来る。紫苑は上福岡より向こう側に行ったことがない。確か、志木、北朝霞、和光市、池袋のほうに繋がっていたと思う。池袋は偶に買い物などで行くことがあるが、自宅からだとは赤羽から埼京線経由で行くので、東上線は利用しない。

上りの電車を見送ると、母親から遅れたメールが入った。

「さあ、遅いんじゃない？」

一瞬、何のことか分からなかったが、そういえば父の帰宅を問うたのだった。

紫苑はこうメールを返そうかと思ったが、やはり止めた。

「今日が何の日か覚えてる？」

喉まで、もとい、親指の第一関節まで出掛かった言葉だ。

2005 年 11 月 30 日、水曜日。今日、紫苑は 17 歳になった。もとより友人などいないので、祝ってくれるとすれば親ぐらいのものだ。別に心の底から祝ってほしいわけではないが、忘れられれば素直に悲しい。何か一言くらいあっても……早く帰ってきてくれてもいいのではないか。

紫苑に兄弟はない。一人っ子だ。ふつう一人っ子はもっと愛されると聞いているのだが、どうもウチの場合、事情が違うらしい。愛されていないとか虐待されていると感じたことはない。単に共働きの親が多忙なだけだ。多忙は人間から心を奪う。現に、心を亡くすと書いて忙しいではないか。しょうがない。そう、しょうがない。

紫苑はケータイを胸にしまった。電車が来る。紫苑は乗り、椅子に座った。ぼーっと窓の外を眺めているうちに、すぐ川越に着いた。川越は上福岡と違って大きな駅だ。新宿などと比べると小さいが、それでも大きい。人の出入りも多い。ちょっと変わっているのは、本川越へ向かう出口のほうで虚無僧がよく見られるところだ。

ホームを乗り換え、南古谷までの切符を買う。180 円だ。一駅なのに随分初乗りが高い。さすがは JR だなと思う。行き先は南古谷ではない。そこから自宅駅までの定期を持っているから、これは単なる買い足しだ。

紫苑は埼玉県川越市古市場にある私立北城高校に通っている。今は 2 年だ。北城高校は他の高校と同じく、色で学年を表わす。北城の場合、赤、緑、黄色の 3 種類で学年を表わしている。青がないのが不思議だ。

紫苑のいる 2 年は赤で、上履きなどに赤い線が引かれている。これで 2 年だということが分かる。今の 1 年は緑で、3 年が黄色だ。来年になると赤が 3 年になり、緑が 2 年で、黄色が 1 年になる。

北城はこの辺りでは有名な名門で、生徒の素行も悪くない。現在、偏差値は 70 を若干下回るが、特進クラスは確実に 70 に入っている。紫苑はその特進クラスの間人だ。しかもその中でトップの座を常に占めている。事実上、2 年で最も勉強ができる人間だ。もっとも、紫苑自身はそのことについて特に固執していないのだが。

北城は理系が優遇される学校だ。表立って口外はしていないが、内部では理系＞文系、国立＞私立の図式がしっかり行き渡っており、紫苑は勝手に周りから国立理系狙いだという位置付けで評価されている。自分としては理系も文系も得意だし、将来何になりたいというものがないのでどちらでもいいのだが。

電車が来た。川越を出て、南古谷へ着く。本来は毎日この駅を使う。自宅のある新白岡駅から宇都宮線で大宮まで行き、そこから埼京線で南古谷へ行く。南古谷までは 50 分ほどで行ける。南古谷からはスクールバスが出ており、10 分ほどで学校まで連れて行ってくれる。

北城は辺鄙な所にある。学校の正門を出て右手に歩くと、1 分足らずで 254 号線にぶつかる。車の往来が激しいが、授業中にこの騒音が届くことはない。

基本的に周囲は田圃だ。何もない。最寄のコンビニは 254 の向こうだ。従ってスクールバスが必須になる。さらにスクールバスの目的地もひとつではなく、南古谷の他に上福岡、本川越がある。バスはこの大きな道路を利用して駅まで迂回していく。

三つの駅のうち、新白岡に一番近いのが南古谷だ。上福岡以上に寂れた駅で、正直言ってみすばらしい。本川越は立派だが、西武線の管轄なので紫苑には関連性がない。本川越に行くには先の川越を降り、商店街を歩いて 15 分ほど歩かねばならない。なぜ時間を知っているのかというと、一度川越祭りというのに行ったことがあるからだ。

川越祭りが開催されるときは本川越行きのバスが機能しなくなる。それで学校としてはこの祭りのことを生徒に触れなくてはならない。だから関係ない紫苑もこの祭りの存在を知ったのだ。川越は南古谷から 1 駅なので、ちょっと足を伸ばせば行けるところだった。そして実際 1 年のとき、行ってみたわけだ。結局 1 人で小一時間ぶらっとして帰っただけだったが。

もうひとつの駅である上福岡は南古谷とは異なる方角にある。正門を出て左に行き、養老橋を超えて川崎の道路へ出る。交差点には北城の看板が出ている。ここで右折すれば南古谷、左折すれば上福岡という仕組みだ。バスはこの道を通らないで、上記の道を迂回していく。だがバスでなければこの道のほうが圧倒的に近い。

この日、紫苑は誰にも誕生日を祝ってもらえなさそうな予感のせいで感傷に浸っていた。いつもなら授業が終わると部活に所属していないのでバスで即座に帰るのだが、今日は違

っていた。何となく、そう、何となく——歩きたくなかったのだ。ぶらっと。若さがそうさせたのだろう。

これは初めてのことでない。何度か紫苑は暇つぶしに学校の周りを探索したことがある。歩くとなると、本川越や川越は遠すぎる。行ける範囲は南古谷か上福岡だ。しかし南古谷なら定期のあるバスで行けばいい。わざわざ歩くのなら、定期のない上福岡だ。

川崎の交差点で紫苑は信号を渡り、真っ直ぐ歩いた。駅への最短ルートは左折だが、直進した。大通りの車の騒音が嫌いだからだ。ひたすら真っ直ぐ歩く。音楽教室が右手に見える。次に、個人経営のコンビニが左手に見える。ヤクルトの営業所が左手に見える。潰れたラーメン屋が右手に見える。希望軒と書いてあり、テレビで紹介されたという看板が置いてある。

希望軒を左に曲がればイトーヨーカドーがあり、先ほどの川崎の道路に出るが、紫苑は直進した。右手にコンビニが見える。住宅街に入ってきた。進むと右手に病院が見える。清水医院と書いてあるが、人の往来を見たことがない。寂しそうな病院だ。そこを越えたところはまさに住宅街で、新しい感じの家が右手に並んでいる。

直進すると、西友がある。そこを左折すると、自転車屋が左手に見える。直進し、しばらく歩く。このまま直進すれば駅前の道路にぶつかる。だが、紫苑は途中で右手に折れた。知らない道に行ってみたかった。そこで見つけたのが先のサイジムという店だ。本屋と文房具屋が一緒になっている。ここで紫苑は例の本を買った。

紫苑は今、大宮に着いていた。大宮は大きな駅だ。街並みから行くと川越より遥かに発展している。西口のほうが特に大きく、大宮アルシェ、ソニックシティなど、有名な建物がある。紫苑はよくここに買い物に来る。定期があるのでタダで行けるのが良い。だから休日は大宮に行くことが少くない。

今度は定期で宇都宮線に乗る。土呂、東大宮、蓮田、白岡と進み、新白岡に着く。ここまではおよそ 20 分弱。近いものだ。新白岡のすぐ隣には久喜がある。

地元でない人間に住所はどこですかと聞かれると、白岡の住民は白岡と答える。すると相手はまず間違いなく紫苑の住所を白岡だと思うが、厳密に言えば紫苑の家は新白岡が最寄だ。住所も新白岡の 1 丁目。南埼玉郡であって市ではないものの、ちゃんと名もあるし、駅も存在する。

新白岡は白岡と久喜の間に存在する微妙な位置付けの街だ。白岡ニュータウンがあり、人口が多いにも関わらず、大型店舗が少ない。住宅ばかり増やしてないで大型店舗の誘致も行ってほしいところだ。だがそれも仕方がない。幹線道路が遠いため、商業が発展しなかったのが原因だ。このままでは過疎化が進んでしまうと小さな不安を抱いている。

新白岡は、紫苑が引っ越してきた 15 年前には既に発展を掲げて色々な運動をしてきた。15 年前、企業が行った分譲の抽選があり、それに見事当選したのが紫苑の家だ。引っ越してきたときはまだ 2 歳ほどだから、まるで記憶がないが。

当時は周りにスーパーがあり、他にはほとんど何もなく、一面のタンポポ畑が広がっていたそう。今ではそんな風景は見られなくなってしまったが。

小さいころは随分大きな家だと思ったが、中学にもなるとすっかり慣れてしまった。それは体が成長したからかもしれない。

2 番ホームに電車が着き、紫苑は電車を降りる。電車は久喜、黒磯の方角へ去っていく。1 番ホームが宇都宮線の大宮、上野方面で、毎朝使うホームだ。

改札に定期を入れ、通り抜ける。去年できたばかりのエレベーターが見える。新白岡は南古谷などよりはずっと綺麗だが、コインロッカーがなかったりと、若干不便な点がある。駅周りはケーキ屋やりそな銀行の支店など、様々なものがある。

特にこのケーキ屋は評判が良く、秋には安売りセールをするので、母親などは気に入ってこの時期、ケーキを買ってくる。しかし紫苑は虫歯になりたくないのも、甘いものは食べないことにしている。

また、以前までは駅前に本屋があったのだが、なくなってしまい、本好きの紫苑にはちょっとしたダメージになっている。跡地に何が建つのかと思っていたら、スーパーが建つそう。

しかしまあ、新たに店舗が入るだけマシだと思った。駅近くのニュータウンも空家が多いが、店舗も一度閉まってしまうと次のテナントが入らずに空いたままということが少なからずあるからだ。

また、そうした空いたテナントがあるにもかかわらず、ロータリーにはメガネ屋が 2 軒もあるところが不思議だ。ここで競合してどうするのだろう。

東口を出ると直進し、十字路に出る。ここで信号を待つ。朝、時間がないときはこの信

号でいらいらさせられる。そこを真っ直ぐ歩き、また十字路へ来る。右手に病院の山本クリニックが見える。そこを左手に折れ、歩いていく。

そこから少し歩くと、家に着く。紫苑はいわゆる鍵っ子だ。親が昔から共働きなので、小学生のころから「ただいま」という言葉に誰も返してくれなかった。

親はどちらも外資系の商社で働く正社員で、順風満帆にやっているようだ。それゆえ経済的な不安はまったくなかった。一人娘の紫苑が県立ではなく私立に行きたいといっても何ら金銭的な問題は浮上しなかった。

紫苑は物心つく前から新白岡にいた。小学校は公立で、学区内にある白岡東小に通った。私立に行く資質も財力もあったが、親が特にお受験に興味がなかったからだ。紫苑自身、私立の小学校に行きたかったと思わないからこれで良かったのだと思う。

東小は紫苑の家から歩いてすぐで、ニュータウンのすぐ隣にある。家が非常に近いので、体が小さい6年間の間は随分楽な思いをした。

しかし中学に進学すると学校は随分遠くなってしまった。やはり私立ではなく、そのまま学区内の公立に進んだのだが、そうすると駅向こうの篠津中になってしまう。中学だから小学より遠くても仕方ないのかもしれないが、6年間ずっと楽をしていた脚には辛い距離だった。

篠津中は駅を越え、さらに南下したところにある。ここは篠津小と隣接しており、1年のころは篠津小の出身者を随分羨んだものだ。紫苑はここで3年間を過ごした。思い出はこれといっていない。真面目に勉強し、生活し、運動し、首席になった。大変なことではあるが、紫苑にとっては「それだけのこと」だった。

紫苑にこれといった友人はいない。苛められているわけではないものの、特に深い付き合いの友人はない。会えば話すという浅い付き合いしかない。それは小学校のころからずっとそうだった。

ただ、その能力と人付き合いの悪さから陰口は随分叩かれたし、揶揄もされた。嫌味や嫌がらせを受けることも多々あった。

中学3年のとき、皆が高校受験に勤しんでいる間、紫苑は塾にも行かず悠々自適に生活し、それでも首席を維持していた。学校は公立の浦和第一女子の受験を薦めた。別に親に金を出させたいわけでもないし、そこに行ける生徒は限られているので、紫苑は承諾し

た。中学校での人間関係を解消したい。この中学からこの高校に行ける生徒はまずいないので、それもいいだろうと考えた。

だが、一応念のため、親の薦めで私立も受けることにした。学校は自分で探し、北城高校を見つけた。家から離れすぎず、近すぎない。地元の人間に会わずに済み、しかもそれほど遠くない。まあ、高校にしては遠いほうかもしれないが、通えない距離ではない。偏差値も十分届くレベルで、3教科が得意な紫苑は浦和の滑り止めくらいに考えていた。

誰もが紫苑は浦和に受かると思っていた。実際、その能力はあっただろう。ところが結果は不合格。しかし理由は学力ではなかった。

テストとテストの間には休み時間があるが、教室の移動があるわけではないので、実際はトイレ休憩になる。紫苑は緊張からか、具合が悪かったからか、滅多に起こらないことだが、腹痛を催した。ひょっとしたら風邪を引いていたのかもしれない。

紫苑はトイレへ向かった。ところが女子はトイレに時間がかかる。受験会場の女子トイレは必ず列ができる。とても休み時間で間に合うものではない。紫苑が並んだときには既に長蛇の列ができていた。

自分自身の経験でよく分かっていることだが、女子は必ずしも用を足しにトイレに行くわけではない。この状況にもかかわらず、身だしなみのために行く者さえいる。また、友達同士で受験している女子が友達を連れ添って並ぶこともある。これは本当に迷惑だ。別に友達に必ずしもトイレに行きたいわけではなく、付き合いで一緒に行く。このせいで余計に列が長くなる。

また、生理用品の取替えが想像以上に多い。1月に1回と計算して、1月を4週と計算した場合、4人に1人が生理とっていい。その間は当然生理用品を取り替える必要がある。用を足さなくても単に個室で生理用品を取り替えるだけの女子の数は多い。

紫苑は時計を見ながら、やきもきした。不安になるほど腹が痛くなってきた。緊急性のある人間を優先してくれと切に願うが、一向に空かない。そのまま次のテストが始まってしまった。

それからはテストどころではなかった。腹痛は時間とともに増し、脂汗まで滲んできた。体温が異常に上がり、汗が毛穴から吹き出る。あまりに暑いので自分から湯気が出ているのではないかと思うくらいだ。周りに座っている受験生の鼻に自分の汗の匂いが届いているのかもしれないと思うと恥ずかしくなった。しかしすぐに汗は冷え、寒気すら感じるよ

うになった。

結局、少しも集中できずにテストは終わった。結果は不合格。しかし何と云い訳したものか。トイレに行きたくて我慢してましたなどとは言えない。紫苑は屈辱を感じながらも、実力不足でしたと報告した。

一方、北城の受験の際は、こういったトラブルはなく、すんなりテストは終わった。結果は大勝利。家に帰ったら、合格通知が書類とともに封筒に入って郵送されてきていた。そういう経緯でもう 2 年が経とうとしているが、今となってはあの腹痛も自分をここに引き寄せた何か見えない力だと考えている。

紫苑は後ろを確認してから玄関を開け、素早く中に入る。鍵っ子は家の中で襲われやすいと聞いていたからだ。強姦の起こる一番の場所は自宅だ。特に鍵っ子は中に親がいないことを公表しているようなものなので、変質者に狙われやすい。

変質者は鍵っ子が鍵を開けるまで後をつけ、開けると同時に相手を家の中に押し込み、中から鍵をかけて強姦する。それが手口だという。だから紫苑はいつも背後を確認してから鍵を開ける。そしてすばやく入ってすぐに鍵をかける。

はぁ、とため息をつきながら「ただいま」という。10 年間「おかえり」と言われたためしがほとんどない。「おかえり」と言った記憶ならいくらでもあるのに。

紫苑は靴を脱いで中に入ると洗面所に行き、手を洗い、うがいをする。これから冬になるから特に風邪には気をつけなければならない。風には手洗いうがいが有効だ。手は石鹸で指の叉まで丹念に洗う。時間は 30 秒。

うがいはイソジンを薄め、ぶくぶくと 15 秒してから吐き出す。次に天井を見て、ガラガラと盛大な音を立てて 15 秒。これを 2 回。おおよそ 1 分強ですべてが終わる。これで風邪を引かないなら安上がりではないか。

居間に入り、台所へ行く。少し年を取った白い冷蔵庫を開けて、牛乳を飲む。こうしておけば夕飯までの間に胃酸が出て空っぽな胃を痛めないで済む。紫苑は胃腸が丈夫だが、それはこうした毎日の気遣いが関与しているのだろう。

牛乳をしまうと、コップを流しに置き、水を入れておく。牛乳の飲みっぱなしは良くない。後が面倒だ。

自室は 2 階にある。階段を上ると左手に折れ、廊下の奥へ進む。奥が紫苑の部屋だ。広

くも狭くもない 6 畳間。昔からここが紫苑の部屋だ。窓は外に面しているのでカーテンをかけている。

部屋の中は簡素だ。ドアの正面に窓がひとつあり、通りに面している。カーテンは薄い青だ。窓の前には机がある。小学校のときに買ってもらった学習机で、未だに使っている。引出し付きだ。椅子は回転式で、高さも調節できる。

机の上には本立てがあり、よく使う本が置かれている。その横には電気スタンド。また、カシオの電子辞書が置いてある。いつもは学校に持っていくのだが、今日は昨日勉強したきり、置き忘れていた。

机の左横にはパソコンが置いてある。ラック付きだ。ラックの天井にはプリンタとスキャナーが場所を取り合って乗っている。パソコンはソニーのバイオで、デスクトップだ。CPU はペンティアム 4。何をするにも速くて快適だ。メモリは買った時点では十分だと思ったが、後から増設した。

紫苑はそんなにパソコンをやるほうではない。が、ブリタニカのエンサイクロペディアを買ったとき、インストールしたら起動が異様に遅く、メモリ不足であることに気付いた。それでメモリを増設したというわけだ。メモリを増設したのでワードやエクセルなども気持ち早くなって、少し便利になった。

ドアから入って右を向きそのさらに右手側、つまりドアの右横には押入れがある。ここはクローゼットとして使っている。中には服の他に空手着や剣道着が入っている。

ドアから見て左側は壁だ。壁を突き抜ければ階段があるはずだ。ここには鏡台が置かれている。化粧台だ。いい材質でできている。いいというのに母親が中学に入ったときに祝いでくれた。着替えの際に役立っているが、化粧台としての役目を果たすのはいつのことだろうか。

部屋の右側にはベッドがある。ベッドの横、部屋の右隅には本棚が置かれている。かなり膨大な量が入っているが、本はこれだけではない。使わない分は押入れにしまっている。合わせればかなりの数と額になるだろう。専門書も多いので、かなりの額だ。

電気を点け、部屋のドアを閉める。電灯は何年か前にシーリングライトにした。インテリアとして見栄えが良く、傘が邪魔にならない。だが、シーリングライトには弱点がある。

例えば平均照度が 150 ルクスだとした場合、直下だと明るくそれこそ 300 ルクスほどが出るが、部屋の隅のほうでは 100 ルクス程度しかこないことがある。いまの市場はどうか知らないが、少なくとも紫苑の部屋はそうだ。だから勉強時には机のスタンドと併用することが多い。

床はフローリングだ。以前はカーペットを敷いていたのだが、ハウスダストやアレルギーという言葉が気になってからは外してしまった。紫苑は中学ごろから花粉症を患っている。そこまで重くはないが、軽くもない。ハウスダストにも反応があるので、カーペットは敷きたくない。だから冬は足が寒く、スリッパは欠かせない。もう 12 月になるのでそろそろスリッパの時期だ。

買ってきた本を鞆から出し、胸ポケットのケータイとともに窓際の机の上に置く。鞆をその下に置くと、洋服ダンスの前で普段着に着替えようとした。が、買ってきた本が気になるので、先に机に座った。

サーッとカーテンを開ける。もう暗くなってしまった。通りの明かりが見える。時間は 7 時ごろだ。もうそろそろ夕飯の支度をしなければ。カーテンを閉めようと思ったが、買った本が気になって後回しにした。

袋から本を取り出すと、袋をゴミ箱に捨てる。机の引き出しから古ぼけたコクヨのノートを取り出す。100 ページの分厚いノートだが、糊付けなので装丁が脆く、長く使っているうちにバラバラになってしまった。どうにかセロテープで補強しているのだが、長くはもたないだろう。

内容は日記というか……毎日書いているわけではない文書だ。何かあったときに書くもので、気が向いたときに書くので「気記」と紫苑は呼んでいる。書き始めたのは小学生のとき、7 歳だ。もう 10 年になる。もちろん、同じノートに書いているわけではない。いまでこそコクヨの 100 枚ノートだが、それこそ昔はかわいらしいキャラ物の薄いノートなどを使用していたこともある。

引き出しにはほとんどノートばかりが入っている。10 年分の気記だ。そしてそれを書くのに使う専用の筆記用具が入っている。紫苑は筆記用具と最近の気記を取り出した。

実は最近のものはもうほとんどページがなくなっている。まだ書こうと思えば書けるのだが、今日が誕生日なので心機一転して新しいノートを使うことにした。そのために買ったのがこの本だ。糊付けのノートは脆いので、今回はしっかりした装丁のものを

買った。

最近の気記をばらばらと捲る。その日あったことが主に書かれているが、それだけではない。そのころ考えていた思想などが所狭しと書き込まれている。中でも繰り返し書かれている目を引く言葉が、「異世界」だ。この言葉は7歳に気記を始めた時点から使われている。もっとも、そのときは「べつのせかい」と呼んでいたが。

7歳のころ、つまり小学校に入ってから、紫苑は自分が周りとは違う異質な存在だということに気付いていた。自分の知能が高いことに気付いていたし、見た目が周りの子たちよりずっと良いということも大人の態度を通して知っていた。

そう、紫苑はいわゆる美少女だ。目はくりっとした二重で、鼻はすっと通っている。口は絵の教科書にあるように上唇が下唇の半分ほどの厚さで、口角は瞳孔から下ろした垂直線上にある。顔のパーツの位置は本当に絵の理想像だ。

歯並びは良く、虫歯もない。横から見ても上唇が突出していることはなく、ずっと鼻筋からの素直な流れに沿ってゆるやかなカーブを描いている。肌は白く、黒子は少ない。唇は肌同様の色が薄く、綺麗な桜色をしている。

輪郭は好感を持たれやすい卵型に近いが、それほど完全な卵型ではない。かといってえらがはっているわけでもなく、すっきりしている。頬は痩せこけてもいないし、太ってもない。白くて薄っすら桃色で、健康的だ。

耳は白く、赤みを帯びやすい。寒かったり恥ずかしかったりすると、すぐ赤くなる。形は大きくもなく、やはり理想的だ。

人から言われなくても、自分が美少女だということを紫苑は知っていた。それは幸せなことかもしれないが、特に得をした覚えはない。あるとするなら、ブスだということで悩まずに済んだということくらいだろう。

よく人からハーフ？と聞かれるが、そんなことはない。親はふつうの日本人だ。もっとも、その親はどちらも美形なのだが。よく美形同士を掛け合わせると意外と良くないと聞かすが、紫苑はどうやら例外のようだった。

つまり紫苑は才色兼備なわけだ。その上、運動も得意だ。剣道と空手をやっていて、護身術にも長けている。剣道は2段で、空手はもう小学校のころからの腕前だ。

また、芸術も好きで、音楽も絵も好きだ。音楽は鑑賞はもちろんするが、ピアノを弾く

ことができる。最近の J-POP は正直あまり好きではない。何を聞かかといえはクラシックか、そうでなくば民族音楽、いわゆるワールドミュージックだ。クラシックは比較的手に入りやすいが、ワールドはなかなか売っていない。池袋のパルコにタワーレコードが入っていて、偶にそこまで足を伸ばすことがある。

クラシックも聞くが、特定の作曲家が好きということはない。ただ、傾向はあって、ワーグナーやベートーベンは重すぎて好きではない。チャイコフスキーなど、ちょっと不思議系な曲が好きだ。不思議系というのは抽象的だが、例えば金平糖の精の踊りなどのことを言っている。

別に暗い曲が好きなわけではない。サティのジムノペディは人気で良く流れるが、そんなに好きではない。しかし、ホルストの惑星にある木星は落ち着いて非常に好きだ。惑星の中では木星が一番良い。

この曲は平原綾香という歌手がカバーして一躍有名になったが、紫苑はこのカバーが好きではない。というかこの歌手の低い声が綺麗には聞こえない。声の溜め、あえぐような声も不快だ。そして自分だけの宝物を皆に見せびらかされたような不快感がある。

一方、ワールドが好きなのは、異言語と異文化が好きだからだ。聞くのは何語でも良い。できるだけ色々な国の言語と音楽を聴いている。アイルランドの曲やフィンランドの曲さえ持っている。ヴァルティナという女バンドの CD なのだが、歌詞カードを見ても聞き取りができないほど速い。その聞き取れなさがなんともいえず楽しい。これもタワーレコードで買った。

ヨーロッパだけではない。韓国、中国なども持っている。中国にはフェイ＝ウオンというアジアが誇る歌姫がいる。紫苑は彼女の CD を何枚か持っている。

紫苑は異言語好きが高じて、高校 2 年生の身空で既に英語の他に独仏中の 2 級検定に合格している。広く浅くがモットーだが、それにしてもこの年でここまで習得している者はまずいないだろうとかなりの自負がある。

また、絵も好きだ。見るのも好きだが、描くほうが好きだ。特に鉛筆画のデッサンが好きだ。色を塗ったりするのではなく、ただの一本の鉛筆でモノクロ写真のような精細な絵を書くのが好きだ。もっとも、鉛筆デッサンをするときは何本も鉛筆を使い分けるし、カッターや練り消しゴムも必要なので、文字通り鉛筆一本というわけにはいかないが。

絵といっても最近流行っているオタクが好むような漫画絵は好きではない。あれはデッサンがおかしい。いや、厳密に言えばあれはデフォルメなのだが、実際の漫画、特にテレビアニメを見ていると、デフォルメ以前に明らかに構図がおかしかったり、顔の各パーツの位置がおかしく、見ていて気持ちが悪くなってしまう。脳の中のこうあるべきという正確な情報のせいで、失敗した福笑いに見えてしまうのだ。もちろん、すべての漫画がそうというわけではないが。

見るほうは写実主義が好きだ。他にロマン主義や新古典主義のような描き方も好きだ。ただ、あまりに宗教がかっている作品はキリスト教徒でない紫苑にはいただけない。紫苑はクールベやミレーのような絵が好きだ。人間を人間のまま描いている、現実を抜き出している、そんな感覚を痛烈に感じさせてくれるからだ。

だが、自分の中で反論もある。「その何が楽しいの?」「それに何の意味があるの?」というものだ。つまり、「毎日の生活や日常の一部を切り取ることに何の意味が?」ということだ。

その素朴な疑問はある意味当然で、ある意味反論の余地はない。だが、何でもない日常を切り取って描くことによって初めてその光景が何でもなくなるのではないかと紫苑は考えている。

つまり、絵として特別に取り上げて描くことにより、日常の人間が特別な存在、大切な存在であるということを感じられるのではないかと考えている。一番大事なのはその日その日を生きる人間だ。だからそのワンシーンを切り抜いた絵には意味がある。いや、切り抜いたことによって特別視され、改めて意味を与えられるのだ。紫苑はそう解釈して反論を片付けている。

絵としてはミレーのほうが好きだが、思想としてはクールベのほうが肌に合う。でも、実際、飾っておきたいならコロワのヴィル・ダヴレーだ。あれがあったらどんなに部屋が落ち着くだろうか。夕焼けにせよ朝焼けにせよ、空が赤く燃える時間は非常に短い。その貴重な瞬間がもし部屋の中であって、いつでも好きなときに愛でられるとしたら?それはなかなか贅沢な話だろう。

また、アングルも好きだ。自画像は要らないが、裸婦は見事だ。ただ、すべてが良いわけではない。グランド・オダリスクの寝そべった裸婦が有名だが、当時から解剖学的に見

て人体構造の点からありえないと批判されていたとおり、やはりこの絵も紫苑には漫画と同じく「福笑い」を感じさせる。

好きなのは泉だ。女の腰のひねりや脚の曲げ方、そして水がめの持ち方など、ポーズが巧く取れている。また、背景との溶け込み、明暗の対照も良い。ただ、肝心の水の表現が水飴のようなとろつとした感じなのがいただけない。また、性器が描写されない非リアリティも歓迎できない。禁忌は隠すことによってさらに禁忌化され、かえって不自然になるからだ。とはいえ、この絵には薄っぺらいという悪評が付きまとうが、紫苑は総合的には評価している。

さて、ここまでして紫苑が自分の能力を上げていったのには、どんな理由があるのだろうか。それは手垢で汚れたノートに隠されている。このノートの異世界という言葉がすべての原因だ。

ここまで有能な紫苑であるが、紫苑をこの精進の生活に駆り立てたものは、一重に非常に現実離れした異世界という言葉である。

異世界といえばファンタジーの中ではお馴染みの概念だ。紫苑は子供のころから様々な異世界物を見てきた。そして 7 歳のころには、いつか自分も異世界に行きたいと思うようになっていた。ここまでは子供にありがちなことだろう。

だが、紫苑の場合はそれで終わらなかった。紫苑は高学年になっても本当に、いつか自分は異世界から召喚され、異世界を救うために活躍するのだと思っていた。それは中学に入っても高校生になった今でも一向に変わらなかった。

異世界物を見るたびに紫苑は異世界への憧憬を強めていったが、知能が高いので、その商業性にあっさりと気付いてしまった。つまり、異世界物は小説にせよ漫画にせよ売り物だということだ。売り物であるからには売れないと困るので、エンターテインメント性が求められる。その結果、ご都合主義が生じてリアルな部分が削られる。

一番明らかなのが言語だ。異世界に行っているのになぜか日本語が通じているのだ。中にはそれはおかしいと思う作者もいるようで、現地の言語を作中に登場させるものもある。だが、数ページもすると魔法だか魔法のアイテムだかで意思疎通ができるようになる。しかし幼い紫苑はこれは魔法ではなく、小説という商品を成立させるためのご都合主義だと見なした。

異世界物にはこういったおかしいことがたくさんある。中世ヨーロッパをモチーフにし

たものが多いのだって、単に日本の西洋崇拜主義の名残でしかなく、ここにも異世界物としてのリアリティはない。

紫苑はいつしか本当の異世界はこういうもののはずだという想像をするようになった。小説に書いてあるのは嘘っぱち。でも、異世界は本当にあって、いつか自分を迎えにくる。じゃあそのときもし私が無能だったらどうだろうか。

向こうもたくさんいる人間の中から私を召喚するんだから、有能じゃないと困るはず。そうよ、本当の異世界は本の異世界じゃないのよ。言葉も通じない。文化も違う。文化レベルも分からない。

医者もロクにいない世界かもしれない。いつか召喚されたときのこと考えたら、病気なんてなれない。インシュリンを毎日打たなきゃいけない子が召喚されたら数日で死んでしまう。私には常備薬を飲む資格なんてないんだ。虫歯もダメ。向こうで歯が痛くても歯医者なんてないかもしれない。常に健康でいなくちゃ。

でも、健康だけでいいの？違う。もし剣と魔法の世界だったら？じゃあ剣道くらいやっておかなくちゃダメよ。それに、もし召喚された先ですぐ敵に出会ったらそうするの？剣がないと戦えないんじゃないか危ない。じゃあ格闘技もできなくちゃ。

——という信じられない理由で紫苑は格闘技や剣道を始め、ついには段位まで取った。

とにかく頭が良くななくちゃダメ。向こうの科学力はこっちより下かもしれない。そして科学の知識がきっと役に立つ。

——それで理科と数学を勉強した。また、向こうの社会に慣れるため、公民を勉強した。向こうの歴史を逸早く知るために、歴史の流れを把握できるように歴史も勉強した。向こうで旅をするかもしれないから地理の知識が役に立つだろうと考え、地理も勉強した。

さらに、向こうの言葉に慣れるために、語学力を養った。それで国語と英語をやり、上で述べたような言語まで習得した。それだけでは足りないと思った紫苑は言語学にまで手を出し、一般言語学や応用言語学の知識を得た。これを語学に活かすことによってさらに語学力を高め、いつか来る当地の言語習得に備えた。

とにかく人間はコミュニケーションが大事。何より向こうの言語が話せなければ、何もできない。そう思い、語学に相当な力を入れた。

そんな毎日を送っていたので、正直言って塾に行く暇などなかったくらいだ。受験さえ面倒なだけだった。

そこまで徹底して異世界に行きたい理由は何か。それは紫苑自身分らない。ただ憧憬というのは掴みにくい感情で、把握できない分、無尽蔵の活力を人に与えるものだ。紫苑は異世界への憧憬とひたすらの根性で今の自分を作り上げた。

異世界へ憧れるというのは子供にはよくあることだ。だが、すぐにそんな気持ちは忘れてしまい、そんなことありえないと片付けてしまう。いるはずもないサンタクロースを信じ続けるほど、皆強くはない。

ところが紫苑は強かった。偏屈なほど、強かった。とにかく自分が精進すれば、必要とされる人間になって、スカウトという形で異世界へ召喚されると信じていた。まんじりと待つのではない。積極的に自分を磨きながら待つのだ。

紫苑がここまで頑固に信じ続けたのは、恐らく親が忙しいことと、友達がいらないことに起因するだろう。結局、一人っ子だし、誰も遊ぶ相手がいなかった。本と空想だけが友達。

別に嫌われることをしているわけでも自分から遠ざけているわけでもないのだが、皆紫苑を倦厭してくる。それはそうだろう、これだけ変わり者な上、才色兼備ならば。

要するに嫌われているというよりは、近づきがたい人間、言い換えれば別世界の人間なのだ。そう、奇しくも紫苑は自分を異世界の人間にしていた。でもそういった後ろ向きな原因を紫苑は受け入れようとはしなかった。

以前、あいつは宇宙人だと男子にからかわれたことがある。異世界なら良かったのにと思いながら無視した覚えがある。宇宙人と異世界人は違うんだけどな……。

紫苑のノートには異世界への憧憬が書かれている。多岐に渡って。行った場合どうするかをフローチャートにして書いてある。どんな世界かに場合分けして細かく書いてある。ちょっとした精神病なのではないかと自分でさえ思うときがある。

さて、今日はそんな精進の日でも最も悲しい日だ。誕生日。そう、この日になると、年を取ったということではなく、また今年もダメだったという思いを感じるからだ。誕生日はこの世界に留まった絶望の日。

紫苑は正直焦っていた。心のどこかでは異世界から召喚されるなんてことはないんじゃないかとか、あったとしても別のもっと有能な人間が召喚されているかもとか、戦いに不向きな女は用無しなのか、などと考えてしまう。

もう 17 だ。流石にハードなアドベンチャーは 20 までにしてほしい。異世界物の主人公

の年齢がそのくらいの年であるということもあるが、単に体がついていかないというものもある。

「今年も……来なかったな」

紫苑は買ってきた本を広げた。日付を書こうと思ったが、この言葉が代用になると知っていたから止めた。紫苑はこう書いた。

「今年も来なかった。いつになったら異世界に召喚されるのか。」

手が少し震える。新しい本だから？それとも焦っているから？

「異世界に……行きたい。ここにはもう……いたくないの」

気付いたら泣いていた。

えっ？……なんでだろう。なんで？なんで泣いてるの？異世界に行けないから？誰も来てくれないから？誰も私の誕生日を祝ってくれないから？

……誰も私を必要としてくれないから？

涙で滲んで視界がぼやける。一瞬、目の前が赤くぼんやりと光った気がした。紫苑は手の甲で涙を拭う。はぁ、と息をついてティッシュを取ろうとするが、机の上にはない。

そして後ろを振り返ったとき、そこには男がいた。

「……え？」

——と言おうとしたが、声が乾いて出ない。

繰り返す。振り向いたら、見知らぬ男が立っていたのだ。

男は日本人ではないようだ。かといってどこの人ともつかない。ただ、白人のように見える。肌は白く、目は青く、髪は黄色い。金髪よりももっと黄色に近い感じだ。髪は長く、顔は中性的だ。背丈は 170 以上だろうことは分かる。中肉中背という感じだ。

男は長いローブを着ていた。黒いローブだ。裾も袖も長く、かろうじて手が覗いている程度だ。

男はじっとこちらを見つめている。変質者……には違いない。でも、性的な目的を持った変質者という感じではない。同じ変質者でも、泥棒でも強姦魔でもなさそうだ。殺意も感じられない。穏やかであると同時に冷たい視線を紫苑に注いでいる。

「……誰？」と聞いて答えるはずもないが、つい訊いてしまう。もちろん、男は答えない。すると男は右手をかざし、座っている紫苑の額に近付ける。「ひっ」と小さな声をあげ、すくんでしまう。あまりのことに戦意が湧いてこない。

すると男は小さな声で何か囁いたが、聞き取ることはできなかった。かと思うと男の体から赤い光がぼんやりと炎のように発せられた。先ほど見えたような気がした光だ。

紫苑の前に、右手が掲げられる。つい、見入ってしまう。男は右手を横にずらす。すると男と目が合った。恐怖を感じる紫苑。咄嗟に机の上の本を手にとって投げつけようとした。だが、その瞬間、急に意識が朦朧とした。

真っ暗な世界が近づいてきた。抗ってみても襲ってくる睡魔のような感覚がする。眠くて仕方がないときのような気持ちになり、紫苑は卒倒した。

暗い……暖かいような寒いような場所。

場所、そうだ、何か感じている以上、私はどこかの場所に存在しているんだ。ここは……暗い。でも……同時に「どこか」なのだ。

紫苑はハッと目を覚ました。眠くてぼーっとしていた意識が急に消し飛んで覚醒したような感じだ。その瞬間、紫苑の周りを光が包んだ。大きくて明るい光。紫苑は意識をそちらの光へ向けた。体が動いている気は少しもしない。でも、魂は動いているような気がする。

朝、どうしても起きれないとき、起きて自分はきちんと歯を磨きに歩いている図を思い浮かべることがある。すぐにそれが現実でなく、自分はまだ寝ていることに気付く。だがその繰り返しを何度もして、あたかも自分が何度も起き上がったかのような錯覚を感じることもある。

紫苑はあたかも自分が歯を磨きに立ち上がったかのような錯覚を覚え、光に向かって魂だけを歩ませた。朝、歯を磨いた気になっても、実際の自分は寝ているだけだ。だが、今回は違った。魂が光の果てにたどり着いたとき、紫苑は体がとても強い引力で魂に引っ張られるのを感じた。そうして意志の力で強制的に光の外へ自分自身を引っ張り出した。たとえるならそんな感じがした。

眩しい光の中を出た紫苑は、まるで自分が卵から孵った雛のようだと感じた。しかし、その卵は逆だった。中が光で外が闇。まるでふつうの卵と逆だ。そう、光を出たら、またそこは真っ暗だった。

だが、今度は完全な闇ではない。そこは薄暗い部屋だった。どこかの部屋だ。目が慣れるより先に匂いの変化で場所が変わったと気付いた。目が慣れてくる。

そこには物が乱雑に置かれていた。どちらかというと倉庫に近いのだろうか。紫苑は咄嗟に自分の手と体を見た。よかった、五体満足。紛れもなく自分自身だ。胡蝶の夢のように蝶になってしまったらどうしようかと思った。あるいはカフカの変身だったらと思うと、さらに身震いがした。

さらに紫苑は別件で身震いさせられた。ふと自分に注がれた薄暗い視線に気付いたのだ。

そこには男女がいた。多分男女というのが正確だろう。というのも、一人は少女なのだが、もう一人は覆面を被っているからだ。だが、体格からして男だろう。問題は、その男がナイフを持っているということだ。少女のほうはというと、まさに追い込まれた小動物のような立ち位置をしている。

状況は一切分からない。分からないが、とりあえず、この男が危険だということは分かる。男が善か悪かは分からない。だが、危険なのは間違いなさそうだ。男は——少女もそうだが——驚いた顔でこちらを見ている。覆面の上からでもよく分かる。

そりゃそうだ、突然光の中から人が現われたんだから。けど、驚いてるのは私も同じ。

「ちょっと！何やってるの！」

勇気を振り絞って怒鳴りつける。すると男はさらに驚く。不思議なことに少女もビクッとする。2人は一瞬互いの顔を見る。

あれ？なんだか私と女の子の間にラインが引かれてるんじゃなくて、女の子と男の間にラインが引かれてる気がするんだけど……？え、何？光の中から出てくるのってナイフよりアウトなの？

男は何か訳の分からない罵声を浴びせてきた。よく分からないが、歓迎はされていない。紫苑の心臓がさらに高鳴る。一見頭で冷静に分析しているように見えるが、実はかなり余裕がない。空手などで鍛えているといってもこれは試合ではない。まして相手はナイフを持っている。しかし、この場で怯むとあっという間に見くびられて殺されてしまう。虚勢が大事だ。

「帰りなさい！」

かかって来いというのは逆効果。しかし、これも効果的かどうか、自分としては怪しい。男は一瞬たじろいだが、ナイフを紫苑に向けてきた。

素人……ね。持ち方がおかしい。構えもなっていない。ナイフの心得はない……か。

紫苑は空手の構えを取るが、若干キックボクシングの要領で、後ろ足の角度を大げさには開かずにおいた。

ボクシングなどは踏み込みがあるので後ろ足——右利きの紫苑にとっては右足——は地面の蹴り足となる。これで地面を蹴り出すことによってダッシュ力を付け、パンチを重くする。しかしキックボクシングの場合、キックを出しやすくするため、ボクシングほど後ろ足を開かない。剣道の構えが左右逆になったという言い過ぎだが、比較的前足と後ろ足は揃って相手のほうを向きがちだ。

相手はナイフの素人。恐らく戦闘も素人だろう。素人がナイフを持つと、必ずナイフに頼ろうとする。ナイフが強力だという先入観と、これを取られたら逆に殺されるかもしれないという恐怖感で、手放せなくなる。まず間違いなくこの男はナイフを投げたりはしない。

案の定、構えを取った紫苑に対して男は警戒を見せた。実は構えを見せるのは玄人相手には手の内が読まれるので良くない。もちろん、お互い「やるぞ」という雰囲気的时候は別だ。初手からオンガードでないと容易に喰らってしまう。だが相手は素人。この構えからこちらの狙いは読めまい。それに、格闘技ができることをアピールして、相手が引いてくればそれが一番なのだ。

しかし相手はそれほど思慮深くはなかった。ナイフを手に、猪突猛進してきた。テレビではよく手を絡め取って後ろ手に回し、小手捻りなどに持っていくが、それは危ない。そう巧く相手の小手が取れるはずもなく、取れても男の力だと押し切られる可能性がある。

こういう場合は牽制の前蹴りが一番だ。紫苑は慣れた足つきで牽制の前蹴りを出した。腰が引けないように、前足で蹴る。へっぴり腰になるとかえって自分が吹き飛ばされてしまう。

相手の男は面白いくらいに吹っ飛んでいった。前蹴りというのはダメージこそ少ないが、派手さがかなりある。足を高く挙げて、踵から下ろすようにして胸の辺りを狙うと、棒の上側を指で突いたようにあっさり相手は倒れる。このとき腰が引けていると相手に押し切られてしまうから、むしろ自分からナイフに突っ込んでいくつもりで前向きに打たないとかえって危ない。

素人はナイフで刺しにくるとき、まず腹を狙ってくる。だから脚がナイフに当たらないように、かなり上のほうから胸部を目掛けて蹴り下ろした。男は吹っ飛び、物に当たって

大きな音をたてて転んだ。どうやらこの乱雑さからして、ここは倉庫か何かのようだ。

紫苑は首を振った。蹴ったときに髪が舞って邪魔だ。空手のときはいつも結んでいる。少しでも大きな動きをするとこの長い髪が邪魔になる。まして髪を取られると厄介だ。紫苑は男が倒れている間にとっさに辺りを見回した。

しめた。紐がある。横の棚にガラクタがたくさんあり、そこには髪飾りがあった。玉飾りが2個ついている。紫苑は急いで髪を縛った。

男が立ち上がり、ふたたびナイフを構える。何か罵倒してくるが、聞き取れない。覆面のせいかどうか知らないが。

紫苑が強いと見て、男は警戒の色を示した。紫苑はチラチラと辺りを見回す。他に何か使えそうなものはないか。

あった……棒だ。紫苑のすぐ横に、棒が立ててある。先っぽに装飾がついているが、棒には違いない。紫苑は棒を手にとると、即座に剣道の構えに変えた。これで形勢は逆転だ。男は間合いを取らない。やはり素人だ。剣の間合いの恐ろしさを知らないと見える。一歩も先ほどから動いていないにもかかわらず、今ではすっかり間合いの中だ。それに気付かない以上、間違いなく素人だ。

紫苑は地面を蹴ると、勢いよく「ッテー！」と叫んだ。小手のことで、ある。実際には「こてー」と叫ぶことはなく、「ッテー」と叫ぶことが多い。放った小手は見事男の右手を打った。2段の実力があれば、素人は絶対といっていいほど小手を避けられない。面ならともかく、小手は素人が一番意識しない場所で、まず間違いなく死角となる。

男は小手を打たれてナイフを取り落とした。その刹那、紫苑は小手の発声と被るように、「メー！」と叫んだ。実際、面を打つときには「めーん」ではなく、「メー」のように叫ぶものだ。

小手から面というのはオーソドックスな攻撃だが、素人はまず避けられない。小手に意識がいった瞬間に次は額を割られている。紫苑が放ったのは刺し面で、相手の額を刺し舐めるような打ち方だ。パシーンと上から打ち下ろす兜割りはまず相手に入らない。それよりは刺し面という滑らせるような打ち方が有効だ。

男は刺し面を打たれ、額が割れた。見る見るうちに覆面から血が吹き出てくる。頭というのは想像以上に出血が激しい。むしろ出血しないほうが脳から見ると恐ろしいくらいだ。

男は何か叫ぶと、走って逃げ出した。深追いはしない。退治できただけで良しとする。

ふう、と大きく息を付くと、紫苑は棒を降ろし、元の場所に立てかけておく。ふと下を見ると先ほど買った本が落ちている。これも一緒に持ってきたのか……。本を拾う紫苑。

一方、少女は固まったままこちらを見ている。紫苑はできるだけ柔和な笑みを浮かべ、「大丈夫？」と聞いた。

“C....eC Aeδ”

「え？何言ってるの？大丈夫？」

紫苑は少女に近づく。少女はさらに固くなるが、逃げようとはしない。自分を助けてくれたことは理解しているらしい。近づく、少女の容貌が明瞭になった。

日本人じゃ……ない。少女は肩までの長さの亜麻色の髪に茶色の瞳をしていた。背は紫苑より少し小さいくらいか。紫苑が身長は 163cm、体重は 45kg と痩せ身なのに対して、この少女はそれより一回り小さい。見たところハーフのようだが、白人の血が濃そうだ。

"Ah...are you OK? I thought you were being attacked by that guy"

しかし少女は首を傾げるばかり。英語が通じない？そりゃ外人＝英語ってわけじゃないけど……。でも、分からないと首を傾げる文化圏の人間であることは分かったわ。

" Je m'appelle Chion. Comment vous appelez-vous?"

しかし反応はない。紫苑は少女の体を見る。

" Sind Sie nicht schwer verletzt? "

体を見られた少女は眉をひそめ、怪訝そうな顔で見てくる。通じないが、見たところ怪我はしていないようだ。

「请问,这儿是什么地方？」

“|-|-, Cc 7a Cδδ”

ダメだ、言葉は返してくれたものの、まったく通じている気配がない。彼女の言葉はまるで声調がない。中国語で返したわけではない。そう、いま初めて彼女の言葉が聞き取れた。少なくとも紫苑の知っている言語ではない。

どうしよう……。ここは一体どこなの？

紫苑は辺りを見回す。どうも家屋の中の倉庫という感じだ。物が乱雑していて、埃の匂いがする。

㊦lecΛr㊦

「えっ？」慌ててみると、少女は自分の胸に手を当てて、何か言った。

㊦lecΛr lecΛr㊦

それは lein と聞こえた。カタカナにすればレイン。様子を見るに、彼女の名前だろうか。

l の音だ。英語だったら lain とでも書くのか。しかしそんなの名前になるわけがない。tain の聞き間違いか？いや、彼女に英語は通じなかったし、Rain というのはあまり英語では聞きなれない名だ。

レイン……っていうのが名前ってこと？彼女は胸に手を当てている。自分を表わすボディランゲージなのだろう。日本人なら鼻の前に人差し指を持っていく。ここがどこの文化圏か知らないが、非言語がかなりの情報を相手に伝えるというのは確かだ。郷に入っては郷に従え。ここでは彼らのやり方に合わせるのが一番だ。

紫苑はレインと同じように胸に手を当て、「シオン」といった。するとレインは一瞬驚いた顔をして、㊦ʌcɔΛɖ ɔɔl ʔɥa eʃ ʌcɔΛɖ㊦と言った。とにかく 2 回シオンと反復されたことは聞き取れた。

紫苑は持ち前の耳でその発音を正確に聞き取り、即座に IPA の音声表記に置き換えた。日本語と違ってシの音は鋭く、シュに近いようだ。また、ンの音は舌を歯茎に付けない日本語の [N] ではなく、舌を歯茎に付ける英語などの [n] のようだ。一度で正確に聞き取ると、今度はその発音で「シオン」といった。

㊦hh....ɾ ɔɔΛ, ʔɥa -ɲɔʔ cʌʂcʌ ɟeʃeʂ ʌcɔΛ la-ɾ㊦

えっ、えっ？早すぎて何が何だか分からない。

「ちょ、ちょっと待って。私は貴方の言葉、喋れないの。分かるでしょ？」

㊦eɟ....eʊ ʔɥa ɲeʌʊ ʌe eɪl le le -ɲʔ-, ʌcɔΛ la-ʂ㊦

彼女は何か問いかけて来たようだ。態度で分かる。そして文末のイントネーションが上がっている。どうやらこの言語は疑問のときに文末を上げることがあるようだ。とはいえ、質問の内容は分からない。先ほどからやたら紫苑という名前を呼ばれているのは分かるのだが。

㊦>>....-cl, ʔɥa ɲeleʊ -ɲʔ- ɟeʃeʂ >cl ʔɥa ʌ-ʃ <c- -lʃ㊦

「えーと……そんなにまくし立てられてもなあ……。とにかく無事で良かったじゃないの」

2 人は互いに首を傾げる。この非言語が共通していて良かった。意味合いが細かいところで違っているかもしれないが。

⑥lccΛ, ΛoΛ JeΛC C4a >cl C4a -l7 ΛoΛ JccΛ-ε

少女は微笑む。どうも好意を抱いてくれていることは確からしい。紫苑もにこりと微笑む。人間の笑顔というものは凄い。言語や文化を越えるものがある。

⑥>cleev, ΛoΛ l-l e(e7 <ccΛ- C4aε

「え、何？」

レインはふふっと笑って紫苑の手を取り、倉庫の外へ連れ出す。紫苑は素直に従う。

倉庫を出たところに階段があった。上り階段だ。どうもここは地下倉庫だったらしい。階段を上るとここは……1階だろうか。……うん、窓があつて庭が見えるので1階だろう。

そのまま紫苑は居間らしきところに連れられた。居間にはテーブルがある。レインは椅子を指すと、⑥>ca <c-ΛJ Λ-Λεと言う。座れということかなと思い、紫苑は席についた。するとレインは台所らしきところへ引っ込んでいった。

紫苑はため息をつき、居間を見回す。

家の材質は木のような。綺麗で広い家だ。西洋化された日本家屋と大差ない。レインの顔を見る限り、ここは西洋のどこかだろうか。西洋には紫苑の知らない言語がたくさんある。ふつうに考えればそのどこかだろう。

しかし、解せないことがある。自分はいったい何でこんなところに？

——そうだ、あの男！あの謎の男の目を見た瞬間、意識が抜けて……。それで、気付いたらここにいた。これっていわゆる、拉致……ですか？

でも待って。拉致ならなんでこの民家に？レインは事情を知らなそうだし、この家の主人のようだ。彼女も拉致されているとは考えにくい。

じゃあ何で……。というか、あの男、誰？私をどこに連れてきたわけ？

外を見ると庭は暗い。そうだ、時差はあるのだろうか。紫苑は時計を探した。

あった。部屋の隅に大きな柱時計がある。時間は7時半ごろ。

あれ……？最後に時計を見たときもそうだった気が……。胸ポケットに手を入れる紫苑。しかしケータイがない。そうだ、机の上に置きっぱだったんだ。

持っているものといえば、謎の男に投げつけようとした本だけ。あとは着ている制服くらいなものだ。

参ったなあ……これじゃ何もできない。時差を計ることも。

でも待って。そもそも私、どれだけ寝てたんだろう。寝てた時間によって時差が分かるんじゃないの？

ああ、時計！時計があればこの時計との時差でおおよその位置が掴めるのに！

恨めしそうに柱時計を見る紫苑。そこで妙なことに気付き、そろそろと立ち上がる。

「あれえ……？」

時計はふつうの柱時計だ。左回転というわけでもない。だがヘンなのだ。何がヘンかというと、文字盤だ。1と書いてあるべき場所には𐤀という文字が書いてある。ほかの11個の数字もすべてそうだ。すべてアラビア数字ではない。ローマ数字でもなんでもない。見たこともない字だ。

紫苑はディヴィッド＝クリスタルの言語学百科事典を持っているし、三省堂の言語学大辞典も持っている。別巻の世界文字事典には古今東西の文字が約300種並んでいる。そのすべてに目を通したが、このような文字は記憶にない。

紫苑はさらに部屋を見回してみる。すると、壁に何かの表が貼ってあるのに気づいた。上段に𐤁𐤀𐤏𐤓と書いてあり、その下では𐤀𐤏という文字があった。文字は若干緑色に光っている。また、その下には1列につき7桁の囲みがありm中に見たこともない字が書かれていた。その下にはやはり何か文字が書いてある。

さらにその下には同じく1列7桁の囲みがあり、それが計4段ある。都合28の囲みがある。囲みの中には見たこともない字が書かれている。これは……なんの表だろう。ちなみにここでも𐤀𐤏という字が光を放っている。

紙が光っているように見えるけど、あれは紙じゃないの……？

目を細める紫苑。するとレインがトレイを持って来た。トレイにはティーカップやら何やらが乗っている。

𐤁𐤀𐤏𐤓, 𐤀𐤏 𐤀- h-𐤏 -𐤀𐤓 Jeŋe

「え、あ、ありがとう。そんなお気遣いなさらずに」などと敬語で言ってはみるものの、通じはしまい。だが、つい癖でお辞儀をしてしまう。ここでお辞儀が有効かどうかは知らないのに。

レインはお辞儀に対して微笑みを返した。お辞儀が通じるのか。あるいは単に感謝の意が通じたのか。

トレイがテーブルに置かれる。レインはカップや皿を配る。トレイには透明なティーポットもあり、茶葉が対流の中で舞うのが見える。レインはカップに紅茶を注ぎ、紫苑に渡した。

「ありがとう」

互いに微笑む。しかし、この文化では客は主人にもてなされっぱなしで良いのだろうか、と少し不安になる。

トレイには籠があり、そこには 1 斤ほどのパンが入っていた。ほかに、パンを切り分けるナイフや生野菜やハムなどがあった。レインはパンを切り、野菜やハムと一緒に皿に乗せ、紫苑に差し出した。

紫苑は両親に食事を出すことはあっても、誰かに出されたためしが少ない。ありがたいことは確かだが、非常に居心地が悪いというか、落ち着かない。

まさかこんな知らないところでいきなり言葉も通じない子と食事をするとはね……。それにしても、ここはどこなんだろう。私の知らない言葉はたくさんある。でもこんな文字、見たことない。アラビア数字ってもっとワールドワイドだと思ってたけど。

どこか知らない孤立した文化なのかな。ほら、僻地のさ。……いや、それにしても住宅が近代的でしっかりしてるか。

いまは彼女の手前、ジロジロ見るわけには行かないけど、さっき見た感じじゃ、ここは涼しさ重視より暖かさ重視の住宅ね。ドアといい壁、窓といい、防風がしっかりされている。日本家屋みたいな風通しの良さはあまり考慮されてない……か。

かといってここが高緯度地方とも言い切れない。高山地帯かもしれないし、そもそも寒いかどうかは決められない。日本は周囲が海で湿気が酷いから涼しさ重視・風通し重視の家屋だ。でも、ほぼ同じ緯度にある韓国だと暖かさが重視される。風通しよりも暖を取る住宅設計だ。オンドルが歴史的に発達してきたことからそのことが伺える。

このように、ほぼ同じ緯度でも家屋に求めるものは国によって異なる。だからここが暖かさ重視の住宅だからといっても、ここが必ず高緯度地方だということにはならない。

しかし……レインを見る限り、西洋圏な気がするのだけれど。顔がさ。

いや、それは偏見ね。むしろ彼女の服を見よう。

チラと見ると、彼女は胸に手を当てて 6-1 7-1000 という。

ん？何て言ったの？「いただきます」みたいな感じ？私もしたほうがいいの？

「あの……」

レインは目を開く。くりっとした二重だが、紫苑よりは垂れ目というか、穏やかそうな目をしている。紫苑は咄嗟に男にモテそうだなと思った。

「私もその……食前のお祈りみたいなしたほうがいいの？」と言いながら手を胸に当てる。が、レインは ㊦-....-Λ eΛ -lΛ- elΛ (a-Λ,, (ʧa ʤeΛ (ɔδ ㊦ と首を傾げる。

紫苑は目をつぶってレインが言ったようにごによごによと呟く。実は、先ほどレインが何と言ったかは突然すぎて聞き取れていなかった。レインの口真似をしたが、自信のない呟きになってしまった。

ごによごによ言ったせいで、レインはさらに混乱してしまったようで、苦笑いを浮かべて首を傾げ、 ㊦-, (ʧa (ɔδ ΛɔΛ ʤeʤ >ɔ- eʤ (a-Λ,, (a eʤ ʌɔΛ, -ʌ ʤeʤeδ ㊦ と言う。今回分かったことは、ここでは分からないときは苦笑いする習慣があるというくらいのものだ。

「んん、じゃあ良いわ。とりあえず、食べましょう。っていっても、あなたが先に食べないと、気まずいんだけど……」

レインは苦笑して紅茶を一啜りし、パンに手を伸ばす。

うーん、いま分かっているのはこの子の名前くらいか。「あー」とか「んー」みたいなフィラーを使うのは分かったし、非言語もいくつか獲得したけど、肝心の言語がねえ。

紫苑はうーんと唸った。そしてふっと思い出して、持って来た本を手にとった。本にはお気に入りのボールペンが挟まっている。こないだ替えたばかりだからまだインクはたっぷりある。良かった、これも挟まっていたんだ。よし……。

レインから見えないように、紫苑は真面目な顔つきでぐしゃぐしゃだった模様、スチールウールのような模様を紙一面に書いた。そしてそれを自身有り気にレインに見せ付けた。レインはじっと見入った。紫苑は耳を敬てた。好機が来るのを待って。やがて怪訝そうな顔をして、レインはそっと言った。

㊦(a eʤ (ɔδ ㊦

トゥウェット？トゥウェットって言ったの？とっさに IPA で音声表記に直し、記憶する。

今度はパンの塊を手にとった。これが丁寧な持ち方とは思えないが、仕方がない。そして口ぶりや発音をできるだけ正確に真似て、パンを見せながらトゥウェット？と言った。

レインは「え？」という顔をした。ややあって、おじおじしながら ʔəʔkɔ ʔ と言った。

よし、よし。行けそう。ポフね、ポフ。

紫苑はパンを籠に戻し、指差しながらポフ？と聞いた。するとレインは無言で頷く。

次に紫苑はナイフを指差し、トゥウェット？と言った。何を指差されたか分からないようなので、脅かさないようにゆっくりナイフを持ち上げ、先端を自分の方に向けながらも一度聞いた。この時点でようやくレインは紫苑の意図を理解したようで、ぱっと顔を明るくし、はっきり ʔɕɔʔɕ ʔ と答えた。

やった！意図が伝わった！ナイフはティプスね。紫苑は発音を繰り返すと、ʔɕɔʔɕ ʔ という。ははは、伝わった。

紫苑が始めに書いたスチールウールはまったく何の意味もない。あれは、さも意味ありげに見せることによって「何これ？」という言葉を引き出させるための道具だったのだ。

この手法は言語学者の金田一京介がアイヌ語研究の際に現地人に使ったものだ。こうして彼は情報とインフォーマントを獲得していった。そして紫苑もいま、先哲のおかげで貴重な情報とインフォーマントを手に入れた。

そう、トゥウェット？という貴重な情報と、レインというインフォーマントを。もっとも、インフォーマントという言葉は最近言語学では嫌われてきているが。

ここまで来ればレインに学習意欲を示したことになる。レインは紫苑が言葉を学びたいと理解したことだろう。

紫苑は続けて、皿を指して同じことをした。皿はハットというらしい。同じく、パンに乗っていたレタスはシャクンで、ハムはトックルというらしい。念のためスライスされたパンのほうを聞いてみたら、ポフと言われたが、その後続けてレインはコカと言った。

「コカ？」

ʔɕɔʔɕ, ʔa eʔ ʔɔʔ- ʔ-ʔ ʔɕʔɕeʔ

面白い。夕飯にいきなりパンを持ってきたことからある程度予想はしていたが、やはりここはパン食のようだ。この家がというより、この文化がパン食のようだ。

日本ではスライSPANにわざわざ単純語は設けない。米と稲は分けても、パンは切っても切らなくてもパンでしかない。逆に英語だと米食ではないのでriceは稲も米も同時に表わす。

つまり、その文化にとってその物がどれだけ重要かによって単純語の細かさが変わるということだ。スライSPANが単純語を持つというなら、それはここがパン食であることの根拠のひとつになる。

となると……ここは小麦がよく生産されるわけね。よっぽど言葉が変わるくらい昔から輸入に頼って食文化が変わってない限りは。小麦がメインとなると……ある程度気候が限られてくるわね。

パンを常食すると仮定すると、米は常食ではないでしょうね。米は夏に大量の雨が降り、湿気と高い気温が保たれないと育たない。東北では夏にやませが降りることがある。そうになると米は育たない。これがいわゆる冷害だ。このように、米は夏の暑さと雨が必要だ。

ということは逆に言えばこの地方の気候はそうではないという予想が立つ。まだ予想の範囲で、早計でしかないが、当たらずとも遠からずだろう。

しかし、食卓ひとつ取っても様々な情報を見出すことができるんだなぁと紫苑は改めて実感した。何でもない日常の風景の中に、これだけたくさんの言語と文化が詰まっているのね。

次に机を指差して問うたが、机は広すぎて、何を指しているのか分からないようだ。紫苑は机の端を握り、がたがたと軽く揺らしながらもう一度聞いた。

㊦ム-㊦ム-㊦ム㊦㊦

机はラツラツなのね。基本語だろうに、長いよね。次に椅子を指差したが、レインは紫苑のスカートか脚か何かを指差したものだと思ったようで、何を言えば良いのやらといった顔で迷っていた。紫苑は立ち上がると椅子を持ち、やはり軽く揺らして問うた。

㊦ム-㊦ム-㊦ム㊦㊦

怪訝そうな顔で答えるレイン。あれ？椅子も同じなの？椅子と机を区別しないの？だから語形が長いのかな。

ん？ちょっと待って。彼女の怪訝そうな顔が気になる。もしかして意図が通じてないんじゃない？試しに椅子から手を離してラツラツと言ってみるが、レインは首を傾げる。ああ、やっぱり。じゃあ私が聞いたのは何？ラツラツって何なの？

紫苑は机と椅子にした共通点を考えた。あ——揺らした。私、どっちもガタガタ揺らした。もしかして今のは揺らすとかガタガタという言葉なの？

「ねえ、レイン。あなたの文字を知りたいんだけど、書いてくれる？」

通じないと知りつつも、言葉にしながら動いたほうが自分としては非言語を出しやすい。本を開き、白紙のところに指を指し、持てとばかりにペンを差し出す。レインは分からぬままペンを受け取る。

紫苑は試しにハットといいながらペンで何かを書く素振りをした。ハットハットと何度も言ううちに、レインに意図が伝わり、彼女は紙に h-ſ と書いた。それを見た紫苑は仰天した。耳で聞くのと目で見るとでは驚きの種類が違う。

彼女の桃色の唇から紡ぎ出されるハットという音は少し耳慣れない程度だが、しっかりハットと聞こえる。だが、文字は違う。平仮名とも片仮名とも違う。慣れ親しんだ漢字やアルファベットとも違う。もちろんハングルやサンスクリットや世界の様々な文字とも。まったく見知らぬもの、まったく馴染めぬもののなのだ。

「これは……。ハット？」

レインは頷く。紫苑は指で文字をなぞり、凝視する。そこには h-ſ という 3 文字。ハットという音を [hat] だと解すると、ちょうど数が合う。表意文字ではなく、表音文字のようだ。偶々かどうか知らないが、3 音に 3 文字がピッタリ合っている。

始めの文字は h に似ている。が、余計な装飾も何もなく、少し h と形が違う。似ているが、h とは少し違うという印象を受ける。一瞬アルファベットの改良かと期待したが、どうもその可能性は少なそうだ。まして後の 2 文字はまるで異なる。

紫苑はペンをレインから返してもらい、恐る恐る h-ſ と書いてみる。そしてハット？と聞くと、レインはにこりとして ʘʑ-, h-ſ と言った。どうやら肯定はヤーというらしい。ドイツ語のようだ。でも、ドイツ語のヤーよりは短く、歯切れが良い感じ。ヤーッという感じに聞こえる。

突然レインは ʘʑeʌ V-ſ と言ってすくっと立ち上がるとどこかに行き、すぐに戻ってきた。手にはペンがある。ああ、やる気だなと思った。彼女は非常に協力的で助かる。良い人に助けられたというべきか、良い人を助けたというべきか。

そしてレインは紙一杯に文字を書いた。それは表になっていた。

C CeJ	C CeC	C C-I	C CJ
A Ac>	V VcA	$<$ $<\text{C}$	$>$ $>\text{C}\mu$
L $\text{La}\mu$	Y Y-C	Q $\text{Q-}\mu$	E EeI
h h-h'	Y YaA	h h'a'	μ μaJ
Z Zc>	S ScC	O OcC	I IeC

$-$ $--$	c cc	c cc	e ee	a aa
-------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------

先ほどの字が入っているところからすると、これはアルファベット表のようなものなの
 だろうか。つまり、レインの言語における表音文字のリストなのだろうか。

レインは表の一番左上を指し、そう言った。とりあえずこのことによって分かったのはこの言語が左から右に文字を進める文化だということだ。あと、レインが表を作っているのを横で見ていると分かったのだが、この言語は左から右に進むと、次は下に下りる。つまり、英語などと同じ書き順の横書きだ。縦書きでも牛耕式でもない。

紫苑が分からない反応を示すとレインはうーんと悩んで、左上の字だけを指差し、 $\mathcal{C}(\mathcal{C}J)$ 、 $\mathcal{C}J\mathcal{C}$ と何度も言った。

ああ、この文字がテスという名前だと言いたいよね。なるほど。そういえば r の文字は h-r のところでも [t] だったな。それに、よく見るとこの表の小さいほうの文字列はどれも見出しになってる大きい文字から始まってる。英語で B が [bi:] というのと同じで、その文字の名前はそその音で始まるというわけね。分かりやすいわ。

その右がシャルと、ソル。これで1段目は終わりね。要するに一段目は t, k, sh, s って感じね。

IPAではふるえ音というのだが、要するにべらんめえ口調のラ行だ。レインのような大人しそうな顔でこの音を発音されると少し面食らう。

そして5段目に来た。ゾム、ジョック、ウィット。そして最後は紫苑が言った。

「レッシュ？」

㊦-㊦

最後になってようやく前の状況から音を予想することができた。5 段目は z, j, w, l だ。

紫苑は独自に転写法を作った。基本的に英語に合わせてアルファベットを使った。ヤ行を y, j のどちらにしようかと思ったが、ユンの文字が y に似ているので、y で転写した。そうすると j はジャ行になる。文字の形は S なのでむしろ s で転写したいが、そうも行くまい。

運の良いことに、アルファベットにいくつか似た字がある。しかも形が似ているだけでなく、英語と同じ音を持つものもある。

よく見るとこの字はすべて一筆書きだ。アルファベットでさえ 2 画のものがあるのに。これはすべて 1 画で書ける。合理的だ。

ただ、d, b のように、鏡文字が多いようだ。もっとも、鏡文字が多いからといって慣れれば混乱することはなさそうだ。d, b も中学で英語を習いたてのころは間違えるが、そのうち間違えなくなる。それと同じだろう。

なお、鏡文字になっていても音と文字とは関連性がないようだ。Ÿ, ʘ は引っくり返したただけだが、音は g, d でまるで異なる。

ただ、すべてが不对応というわけではないようだ。ɟ, ɓ は p, b で、有声と無声の対立になっている。多くある文字の対の中でこれだけが音の上でも関係している。数的に見て、p と b の関係は特に意味があるというよりは、単なる偶然という感じだなと思った。

転写して困ったのはルックとシャルだ。シャ行は sh とすると 2 文字になって転写しづらい。どうしよう。

あ、そうだ、ポルトガル語だとシャ行は x だったわね。ちょうどいま x は残ってるわ。じゃあ x をシャ行にしましょう。

ええと、アルファベットは 26 字で、これは下の……母音だろうなあ、これを加えても 25 字なんで、数は足りるわね。

a, i, u, o, e は母音に使うとして……残るは c, q か。べらんめえのラ行をどちらにするか……。まあ c でいいか。別に q でもいいけど、ルックのクってことで、c を使おっと。

頭の中で子音の転写を済ませる紫苑。だが、その転写は書かないでおいた。この文字が

ある以上、早くこの文字に慣れたほうがいいからだ。文字を持たない未開の文化に来たフィールドワークではないのだ。文字があるならそれを使うのが良い。

「ええと、上の表が子音なわけね。じゃあ下は母音ってことになるね。で、子音の表の中で何度も出てきてるからもう分かるけど、順に……」ここで一拍置いて指で文字を追う「ア、イ、オ、エ、ウ？」

ᄒᄐ, ᄒᄐᄐ

良さそうだ。なるほど、これで文字は分かった。何より書きやすい文字で良かった。数も少ないし、形も複雑でない。これくらいなら紫苑はその場ですべて覚えてしまう。

しかし、合理的な字だわ。金両基が中公新書の『ハングルの世界』で言ってたっけ。ハングルは「世界でもっとも合理的な文字」だって。でも、いま正にそれ以上に合理的な文字を見た気がするわ。

ハングルは子音+母音+子音の構造をしていて、密になりすぎる感がある。初学者には1文字1音のほうが分かりやすく、混雑した複合文字にはむしろ閉口する。読みづらいし覚えづらい。そしてPC入力もしづらい。まあ、時の王世宗（セジョン）もPCのことまでは考えられるはずもなかったのだろう。

もちろんハングルは人工文字である以上、確かに合理的なのは間違いない。だが、やはりこちらのほうが合理的だ。自然言語でここまで合理的な文字があるとは。

ん……待って。誰が自然言語って決めたの？そうよ、自然言語でも文字を持たなかったために、歴史的に誰かが、そう、アジア・アフリカの未開言語、アイヌ語やキリル文字のように、誰かが文字を与えたり作ったんだとしたら？

そう、ハングルのように、誰か言語学者なり為政者なりが作ったとしたら？そしたらこんな文字にもなるわよね。そう、その可能性もある。

しかし……言語学の色々な情報を見てきたが、こんな文字は見たことも聞いたこともない。異世界へ行きたいと願い続けている紫苑からすれば、ここが異世界ではないかという期待は十二分にある。あるが、常識で考えればまだ地球である可能性を捨てきれない。だが、いまはそんな検証ができる状況ではない。

まずは文字に慣れなくっちゃ。

紫苑は紙にᄒᄐᄐと書いた。これでシオンという名前のはず。もしこの文字が書いたまま

手が「～」という文字の軌跡を描くように、すーっと横に動いていく。

なるほど、この文字を日常使っていると、書くというジェスチャーひとつ取ってもこれだけの違いが出てくるのか。

紫苑は素直に ㊦ㄣ と書いた。どうも練習させたいらしい。

㊦ㄣ, ㄣㄞ eㄣ ㊦ㄣㄞ

レインは肯定的に述べた。ただ、肝心のレインの言葉が分からないのでは、いくら単語が書けても仕方がない。紫苑は試しに今レインが言った言葉を書いてみた。

音的にはヤッ、トゥウェットポフと聞こえた。どこで区切るのか分からないが、トゥウェットの部分は先と同じだとすると、こんな感じだろう。ㄣ- ㄣㄞ eㄣ ㊦ㄣㄞ。するとレインはㄣ- の後に, を入れた。なるほど、区切りはこれで表わすのか。カンマによく似ているわね。

しかし、ㄣㄞ eㄣ ㄣㄞㄥが「これは何ですか」で、ㄣㄞ eㄣ ㊦ㄣㄞが「これはパンです」だとすると、少なくとも ㄣㄞ というのが「何」に当たる語なのだろう。そして疑問文は英語のような倒置をしないということになる。

では、ㄣㄞ eㄣ とは何だろう。仮にこの文を This is what と考えると、前者が this で、「これ」、後者が is で繫辞……ということになるが、そう簡単に考えて良いものか……。仮にどちらかが繫辞としての動詞だとした場合、アラビア語の VSO のような語順の言語だとしたら、前者が繫辞になるはずだ。語順が分からない以上、何ともいえない……。でも、どちらかが「これ」だとは思う。しかし、「これ」が「これ」である保障をどう求めれば良いのか。

……そうか、「これ」以外を引き出させればいいのか。紫苑はにやっとしてサラッと書いてみせた。ㄣㄞ eㄣ ㄣㄞㄥ。そしてしきりに自分の胸に手を当てて、自分の名前を名乗っていると主張した。するとレインは ㊦ㄣ-, ㄣㄞ ㄣ-ㄥ eㄣ -ㄣ,, ㄣ-ㄣ ㄣㄞㄣ, ㄣㄞㄞ ㄣeㄣㄣ -ㄣ ㄣㄞㄥ...ㄣee, -ㄥ eㄣ ㄣㄞㄥㄞ と何か説明しながら、ㄣㄞ の下に -ㄥ と書き足した。

これはどういう意味だろう。ㄣㄞ より -ㄥ のほうが良いよということか、あるいはそちらでも良いよということか。いずれにせよ、光明が見えてきた。

紫苑は続けて -ㄥ eㄣ ㄣeㄣㄣ と書いた。

㊦ㄣee, ㄣee,, ㄣㄞㄣ ㄣㄞㄣ eㄣ ㄣeㄣㄣ,, ㄣㄞㄞ -ㄣㄣ h-ㄣ eㄣ -ㄥ ㄣ-ㄣ ㄣㄞㄞ c> ㄣㄞㄞ

レインは -ㄥ に×印を付けると、ㄣc と書いた。これが何を意味しているのだろう。しかし、

罰点がダメだという印であることは分かった。

状況から考えるに、紫苑だと -A で、レインだと Cc で、パンだと Ca になるが、それ以外は変わっていない。eC というものは変わっていない。やはりこれが繫辞なのだろうか。そうすると紫苑が書いたのだから -A は私という意味で、Cc はあなたということになるのだろうか。順当に考えればそうだ。だが、確証には全然届かない。そもそも繫辞のない言語などいくらでもあるのだ。先に調べるべきは代名詞の類だろう。

そこで試しに自分を指してアンと言ってみた。レインは頷く。次にレインを指差して、ティと言ってみた。レインは少し眉を顰めながら頷いた。あ、しまった。指をさすのが悪いのかもしれない。じゃなくて、ティと呼びかけるのが無礼なのかも……。参ったな、どっちだろう。

今度は手を胸に当ててアンと言ってみた。レインは頷く。やはりアンは私を表わすようだ。そういえばアンという音は彼女の言葉に何度か出てきた覚えがある。しかしティのほうはどうか。彼女は眉を顰めた。なぜだろう。指のさしかたが悪かったのか。かといってどうやって指せばいい？いくら同性とはいえ、胸に手を当てるわけにはいかないし。

ためしに紫苑はわざと間違えて自分の胸に手を置き、ティ？と聞いた。するとレインは首を振って ⁶Cee, Cee⁶ という。このテーテーというのはさっきから聞くが、どうもダメとか違うとか、そういうニュアンスの言葉のようだ。

しかも首を振るのが否定を表わすらしい。よかった。日本と同じだ。ギリシャだと首の振り方がおよそ日本と逆だが、こういう文化圏でなくて助かった。

レインは手の平を上にして紫苑のほうへ差し出すと、⁶Cc⁶ といった。紫苑がほしかったのは非言語のほうだ。なるほど、やはり Cc 自体は合っていたのか。問題は人の指し方。指差すのは良くないらしい。このようにするのが丁寧なのか。

紫苑はいま初めて理解したような顔で、レインに手を向けて Cc と言ったら、彼女はにこりとした。よし、人称代名詞が分かったわ。そうすると Ca は「これ」で間違いのないようね。

となると……確証はないけど eC っていうのは恐らく繫辞ね。be 動詞や etre 動詞や sein 動詞や「是」に当たるものみたい。一番近いのは「是」ね。いまのところ活用しないみたいだから。

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「ん？」

「私もレインもミン？ミンってなんのこと？若いって意味？」

次にレインは別の写真を見せてきた。街中の写真だ。中央に先ほどの男性と、レインの子供時代と思われる幼女がいた。

「あ、やっぱお父さんだったのね。てゆうか、レイン……お人形みたい」

写真には道行く人々が写っている。レインは一人ひとり指をさして、>cΛ だの Vc∩ だのと言っていく。数人過ぎたところで、紫苑はそれが男女のことだと気付いた。どうやら >cΛ が女で、Vc∩ が男らしい。

⑥∩∩a ∫-∩∩c∩ ∩a∩a e∩∩ ∩c∩ ∫e∩e⑥

するとレインは紙に絵を書き出した。一人はスカートを履いている女の子。>cΛ と書いてあるので間違いないだろう。吹き出しに ΛcΛ と書いてある。

横に男性の絵を書いて、吹き出しに -Λ と書く。こちらは Vc∩ と書いてあるので男性でいだろう。

「……吹き出しは何の意味？自分を言うときに Vc∩ は -Λ と言い、>cΛ は ΛcΛ というってこと？つまり、一人称の性差を説明したいのね？」

レインは女が男を指差す絵を描き、吹き出しに ∩∩a と書いた。逆に男が女を指す絵には ∩c と描いた。

「なるほど、二人称も男女によって異なるのね。つまり私は女だから、ΛcΛ と ∩∩a を使えということね。じゃあさっき -Λ と言わせたのは何でかしら……。女も場合によっては -Λ ということができる……ということかな」

なるほど……人称代名詞は分かったわ。じゃあ、次は……。

紫苑は座ったまま柱時計を指差した。

⑥∩a e∩ ∩cδ ⑥

⑥>- e∩ >e∩∩⑥

「ん？ダイエットって言った？」

時計はメルクというらしい。しかし……、トゥでなくディと言った。トゥは指示詞ではなかったのか？いや、待って、もしかして遠近の違いかもしれない。

試しに壁にかかった光っている紙を指差し、⑥∩a e∩ ∩cδ >- e∩ ∩cδ ∩a e∩ ∩cδ >- e∩ ∩cδ ねえ、∩aδ >-δ ∩aδ >-δ ⑥ とまくし立てた。

⑥eΛ (a, >-, >-t,, 4-Λ >- eC 9-9Λ⑥

レインはディ！と強調した。なるほど、遠くのもの「あれ」で、「あれ」はディなのか。そしてあの光っている紙はパプシュというらしい。それが何かは分からないが。

さて次はと思っていたら、レインが席を立った。質問攻めにあって疲れたのだろう。食器を片付けだした。

「待って。私も手伝うよ」

⑥>>δ (4a -l7 ΛoΛ JccΛ-δ ⑥

「手伝うって言ってるの。任せきりじゃ悪いから。台所、そっちね」

歩いていく紫苑。台所は日本でいうシステムキッチンのような感じで、近代化されてる。少なくともここは現代なのだろう。どこの国かは知らないが。ふつうに蛇口があるし、流しもある。コンロもある。電子レンジのような機械もある。コンセントもあり、電気が通っていることが分かる。

ただ、炊飯器はない。やはり米は常食としないのだろう。かといってパン焼き機も見当たらない。買うのか、オーブンでも使って本格的に焼くのだろうか。見回すと冷蔵庫もある。どこの国でも基本は同じようなものだと思った。

レインはトレイに乗ったものを食器洗い機に入れると、対応していない籠などをどけて、スイッチを入れた。簡単なものだ。これで食器洗いは終了。紫苑は手伝う暇もなかった。

⑥leeV⑥

レインが手を引っ張る。レーヴというのは「来て」などに当たる言葉だろうか。付いていくとそこは洗面所だった。風呂と分離していて、トイレとも分離している。西洋っぽくないなと思った。感覚としては日本に似ている。

洗面所の窓は開閉式で、開くと中にはコップと歯ブラシがあった。レインは新しいコップと歯ブラシを下ろすと、紫苑に手渡した。歯ブラシは日本で売っているようなものと若干違った。まず、ケースがないのだ。使われていない綺麗な歯ブラシが無造作に箱の中に数本溜まっていた。ふつう歯ブラシといえばプラスチックケースに入っていて、裏面は紙で、そこに能書きが書いてある。だが、ここにはそんなものはない。ケースを捨ててしまっているのだろうか。

「あの、これ……借りていいの？」

⑥C4a 4ol <leΛ CαCα, ʌcoΛe

まだ会ってから数時間だというのに、レインは随分紫苑に打ち解けてくれている。口調も随分緊張がほぐれている。良かった。

紫苑は歯を磨く。互いに目が合うと、何となくおかしくなって笑ってしまう。良かった、良い友達になれそうだ。

それにしても、レインの家族はどこにいるのだろう。人の気配が感じられない。それにさっきの男……誰だったんだろう。そもそもここは本当にレインの家なんだろうか。いや、それは間違いなさそうだ。立ち居振る舞いが明らかにここの住人だ。

もしかしてあの覆面が私をここに？ううん、あいつは私に驚いてたから、違うわね。多分……ワープっていうの？光を通してどこかにワープしたのかな、私。あの金髪に連れられて。意識はなかったけど、長く寝ていた気配はない。

恐らく意識が飛んでいたのは数分から数十分程度のことだろう。ここに来たときに、口の中がミルクの味がした。金髪に連れてこられる前に飲んだばかりだわ。それに、お腹も減ってなかった。

あと、長く寝てたら口の中が籠るはず。でもそれもなかった。金髪に連れられてすぐここに来たと見て間違いはない。時差が分からないから何ともいえないけど、数分で連れてこられる場所なんてどんなに急いだってウチからだ和白岡か久喜くらいなもの。でも白岡や久喜にこんな家が？

口を濯ぐと紫苑は居間に戻り、玄関へ向かった。玄関を開けようとするレインが飛んできた。

⑥-l- C4a Cα, ʌcoΛʘ C4a leeV leJ -Cα VecI C4a V-Λl 4a C-(C- ʌec -ʘʘ-r l->cr -lΛ-δ l->cr

よく分からないが、外へ出てはいけないと言っているようだ。しかも長々説明しているところと口調と顔つきからすると悪意は無いように見える。仕方ないので諦める。

そのままレインは紫苑を2階へ連れて行く。階段を上り、廊下を渡り、左手の部屋へ通される。そこは人が住んでいる気配のある部屋だった。家具があり、ふつうに誰かの部屋という感じだ。

書類がたくさんあり、デスクがあり、ベッドがある。クローゼットもある。カーテンは白く、シックな感じがする。全体的にカラーが黒系で、男の部屋という感じだ。

やはりレインには家族がいるようだ。だが、ここに連れてきてどうするのというのだろう。

レインはベッドに寄ると、シーツを剥いで、クローゼットから新しいシーツを出して敷く。まさか……この部屋をくれるというのか。じゃあこの住人はどうするの？

「あの……レイン、ご家族は？」

レインという言葉にだけかろうじて反応してこちらを向く。

“Cya uclic- <leA A-A -Ca >cl AaA I-< Ca eZ - Cya <ceA, ucA?, Ca eC eZ e ?-A Aa-A”

「ここ、誰かの部屋なんじゃないの？いまどこかに行ってるの？」

レインは分からないという顔で首を振り、ベッドをぱんぱんと叩いて紫苑を誘導した。誘われるがままに紫苑はベッドに座る。

“Cya yal <leA Ca >oc”

「え、寝ろってこと？でもまだ少し早くないかなあ」

しかし、とりあえず言われたままに横になってみる。

“e?d Cya uclic- >-?d <cl Ca? eC lcC <eAZel CcJ”

「え、何？違うの？寝ちゃまずいの？」

起き上がる紫苑。しかし制するレイン。

“?-JJa, ?-JJa,, Cya uclic- <leA A-A c> Ca? ol I-,, Cya laA-J c <c- -lC JeCe? AaA A- Cya A- -Ac CcAcAc”

「ええと……おやすみなさい、とりあえず」

するとレインはにこりとしてベッドから立ち上がり、uclic- といった。何度か聞いた単語だが、今のがおやすみなのだろうか。uclic- と試しに言ってみたら、彼女はにこりとした。多分……合ってる。レインはドアに寄ると、ノブのところの鍵を指差し、“Cya -? JeA ocZeC -Ca” と言った

どうやら物を指すときは指で差してもいいようだ。どうも鍵を指しているらしい。

“Ca eC oc? >- eC oc? Ca? >-d”

“co eC ?-JJa....-...Cya Je? I-A VeCycob> A-,, y-, JJa Ca, c> Ca?, Ca”

レインはトゥと強調した。ディかトゥか聞いたのだが、レインはトゥが良いと言った……のだと思う。なるほど、ディは遠称を表わすが、このように話し相手がその対象の近くにいと、近称のトゥを使うようだ。ふむふむ。

で……。えっと……。 a e c c d

oZec

a e c oZec d

c-

あれ？ヤーではなく、ティアと言ったぞ。そういえばさっきも何度か聞いた覚えがある。肯定しているムードだからヤーと同じかな。そうよ、肯定の語が 1 語しかない訳がないもんね。中国語だって是でもいいし、沒錯でも言い訳だし。ニュアンスが違うだけだよ、きっと。

で、鍵はコゼット、っと。あれ？でも鍵って日本語おかしいよね。鍵はキーのことをいうんであって、レインが指してるのはむしろ錠のほうじゃないの？日本人はどちらも鍵っていうけど、もしこの言葉で区別してたら、鍵はコゼットじゃないかもしれない。ああ、危ない。母語の干渉を受けるとこだったわ。よく確かめなくちゃ。

もう一度 c d c- といってレインは去った。部屋に取り残された紫苑。とりあえず寝よう。だがその前に、起き上がって鍵を閉める。摘みを捻るタイプの簡素な鍵だ。

ドアの横には電気のスイッチがある。紫苑と同じシーリングライトだ。電気のスイッチはオンオフ式でなく、レベルゲージになっている。DJ が使うサンプラーの摘みのようなもので、上下に摘みをスライドさせることによって照度が変わる仕組みだ。上にするほど明るくなる。この辺の感覚は日本と同じなようだ。

紫苑は電気を消す前に部屋を見回した。書類が山のようにあり、あまり綺麗ではない。掃除も行き届いていない。前までは人がいたという感じだ。書類を見ると、先ほどの文字がプリンタで刷られて整然と並んでいた。表音文字で書いたまま読むので、読めるといえば読めるが、意味は分からない。それにまだ知らない記号がいくつか見える。

なんだろう、この国は……。時計が壁にかかっているが、やはり居間のと同じ文字盤だ。先ほどの光る表もある。デスクの近くにあるが、これは何なのだろう。

ふと窓を見ると、その向こうにはベランダがある。カラカラと窓を開け、外に出てみる。「……うそ」

目下はこの家の庭だった。照明があり、かろうじて様子が見える。庭は結構な広さだ。その向こうに門があり、門を越えると道路なのだが……そこは人でごったがえしていた。

そういえば何やら音がするなと思っていたが、こんなに人が集まっていたとは。

通りの照明は明るく、たくさんの人が見える。彼らは歩いていた。どこに向かうというわけでもなく、行ったり来たりをしていた。統率も取れていないし、来ている服も人それぞれだ。これはまるで……お祭り？

そう、それは怒れる群集の行進ではなく、むしろお祭りだった。よく見ると屋台らしきものまで出ている。そうか、それでレインは外へ出すのを嫌がったのか。もし私が出ていたら必ず道に迷う。そのとき、ここの言葉が話せなかったらどうなる？夜道で言葉も知らない少女が外国で……。ロクな目には合わないだろう。レインはどうやら味方のようにだと改めて知った。

しかし、この街並み……明らかに久喜でも白岡でもないわね。まず電柱がない。電気が通ってる以上、電柱は必要だし、日本は、少なくとも私のところはそうだ。電柱はないけど電気は通っている。なら地下ケーブルがあるということになる。地下ケーブルは地震の多い日本には基本的に適さない。つまり――

「ここは……少なくとも日本ではない、か」

見える家々も明らかに日本のものではないし、アジアのものでもない。一番近いのは西洋だ。

だが、時差もなくどうやって西洋に？部屋の時計は10時前。紫苑の意識としても多分それくらいだろうと思っている。金髪に連れてこられたのが一瞬のことで時差がないとしたら……ここはどこだ？

西洋っぽくて時差がない。……オーストラリア？コリオリの力で試してみる？でも無理。渦の巻き方を見れば分かるっていても、蛇口の渦くらいじゃコリオリの力は有効には働かない。あれは海にできた大きな渦とか台風とか、そういうレベルでハッキリ効果が出てくるものだから。なので、ここでやってもしかたがない。となると……。

咄嗟に紫苑は空を見る。月は……ない。今日は月齢28だったはずだ。どうせ見えないか。

じゃあ星は？

星は見える……。今は11月の終わりの午後10時ごろだから、天頂にペルセウス、南東にシリウス、東にプロキオン、北東に北斗七星ね。

紫苑は異世界にいったときにも恐らく人類が活動していられる以上は地球と並行的な世

界になっているはずだと子供のころから考えていた。そこで同じ星座があるはずだと思い、どこに行っても位置を把握できるよう、88 天のすべてを覚えている。これは異世界でなくても地球のどこにいても使える能力だ。

「窓からだと……シリウスが見えないなあ。ここ、緯度が 36 より上なのかしら。……あ、カペラみつけ！」

窓から身を乗り出すと、東の高い方にカペラが見えた。

カペラはぎょしゃ座だから……うーん、北半球で間違いないよね。

「あれ……アルデバランかな。ちょっと南東の……。この窓、南向きっぽいな。カペラはみづらいわ……。ペテルギウスは……って、星の観察してる場合じゃないわ。もう十分」

なるほど、明らかに北半球だ。でも、逆に言えばここは地球。だってこの星が見えてるんだから。

でも待って。時差がなく、北半球で日本じゃない。中国か韓国？あるいはロシアの東端？いや、そんなに寒くないし、中国や韓国の街並みではない。どうなってるの？

「地球……に似た星。それがもう 1 個あるってこと……？そしたら確実に異世界ね。万々歳。でもどうなんだろう。宇宙にある地球に似た別の星とか？異世界は良くても異星人はやだなあ。でもそれはないか。地球じゃなければ私が生きてられるはずがない。少なくともこんな普通な状態で。地球じゃなきゃ温度も違うし、何もかも環境が異なる。私が生きられるはずがない。じゃあ、ここは別の地球ってことになるわね。でも……」

ぶつぶつ呟く紫苑。

「もしかしてふつうに日本にこういう場所があるのかもしれない。確かめないと」

どうにかレインから聞き出さねばなるまい。

「ちょっと……寒いかな」

紫苑は中へ戻る。窓に鍵をかけて照明を落とし、ベッドに入る。

「Uclc-……とか言ってたっけな……」

✕ ✕

朝日が眩しい。おかしいな、ベッドがこんなに眩しいなんて。

紫苑のベッドには窓からの光はこんなに差し込まない。そう、紫苑のベッドには。

バツと、紫苑は跳ね起きた。

そうだ、ここは私の家じゃなかったんだ。そうだ、私、気付いたら知らないところにいて。レインっていう女の子に会って。言葉が通じなくて……。それで……。

とりあえず伸びをして欠伸をする。髪に手櫛を入れる。直毛なのであまり寝癖は付かない。手櫛で大抵は事足りる。

……初めて外泊しちゃったな。

うわ、忘れてた。そういえばお母さんたち、昨日どうしたんだろ。帰ったら私がいなくて、ビックリしただろうな。警察には行ってないはずだけど……。いや、行くかな。

紫苑は異世界に行ったときのことを考えて、毎年毎年書置きを机の中に残していた。今年の分はこれから作るつもりだったが、内容が高校に入って以降のことなので、去年のものでも話の辻褄は合うだろう。書置きにはこう書いてある。無論、自筆だ。

「私が突然いなくなって驚いていることだと思います。挨拶もなくて、ごめんなさい。ちょっと出かける用事ができたの。悩みがあつて家出したんじゃないのよ。

安心して、悪いことしたり、自分を傷つけるようなことはしないから。お母さんたちは知らないけど、女の子の友達がいるの。その子に会いに行きます。そこで勉強したいことがあるの。どうしてもここじゃできないのよ。

大丈夫、お金の心配も無いし。いつ帰るかは分からないけど、遅ければ遅いほど居心地が良いってことだから安心して。安心してって言っても無理なのは分かるけど、勉強が終わったら無事戻ってくるから。

学校は休学したい。退学にするって言われても甘受します。事件性は無いので警察に届けないで、帰ってから恥ずかしいから。部屋はそのままにしておいてね。帰ったらたっぷりお説教されるから。

紫苑」

それでも親はまず間違いなく警察へ届出を出すだろう。その前に親は部屋を荒らし、荷物を探すだろう。

だが、親は紫苑がどれだけ服を持っているのかを管理していない。父親はもちろんのこ

と、母親も知らない。いくつか空のハンガーを余計に掛けておいているからそれを持っていったと思うだろう。

問題は制服がないことだ。制服のまま出て行ったのは不自然だ。しかし鞆が部屋にある以上、途中で誘拐されたのではなく、自分から出て行ったと分かるだろう。恐らく制服がないのではなく、制服もないと解釈されるだろう。勉強といった手前、辻褄が合わないわけではない。かなり苦しいが。

それでも親の立場で見れば警察に届出を出すだろう。まずは駅前の交番に行き、事情を説明するだろうな。かといってあそこは交番だからちゃんとした手続きはできまい。次に警官の指示で行くのはあそこを管轄してる久喜警察署。そこで家出人搜索願を出すだろう。

親は警察について何も知らないだろうからテレビなどで見る印象を抱いているだろうが、警官は基本的に使えない。いや、正直言えばまったく使えない。そもそも警察は事件性がないと動かない。書置きを見れば事件性が無いとして捜査はされない。まして私が成人だったら 100%相手にされない。未成年だからこそ、まだ多少相手にされるというものだ。

だが、それでも警察は捜してくれるわけではない。調書を書いて「何かあったらお知らせします」の一言。何かあってからじゃ遅いんだよ。そう主張すると「年間何人の行方不明者が出てると思ってるんだ。それを一々探せというのか」などと居直る。自転車の無灯火なんか一々注意している暇があったら行方不明者を探せというものだ。あるいはもっと大きな事件の犯人を捕まえてみろ。話はそれからだ。

私は未成年だから新宿辺りを夜中うろついていたら補導され、搜索願が出されていたら親に連絡が行く。それはまだ未成年だからだ。でも成人の場合、本人が拒めば、家族がどんなに困っていても警察は電話一本さえ強制させない。つまり、搜索願を出してたまたま見つかったとしても、搜索願が出てますよということしか伝えないわけだ。もちろん本人は搜索願が出されていることなど予測済みだから、こんなの何ら効果がない。要するに、警察に搜索願を出すのは無駄だということだ。

未成年の私でさえ、事件性がなければ絶対に動かない。いや、事件性があったとしてもまず動かない。成人の場合、仮に書置きがなくて刃物を持って消えたとしても、ふつうは動かない。「何か本人に事情があるんじゃないの？家に何か事情があるんじゃないの？行きそうなところ自分で探しに行きなさいよ」などと相談人のほうがジロリと見られるだけだ。

未成年の方はまだマシな扱いを受けるが、それでも探偵よろしく探してくれるということとは絶対はない。まして私は書置きを残しているし、鞆も部屋にある。この時点で事なかれな警察は動かない。

というわけで、仮に親が警察に行ったって無意味だ。それに、探偵を雇っても同じ。だって私は異世界にいるんだから。……本当にここが異世界だったらだけど。そうだ、今日はそれを確認するんだった。

紫苑はベランダに出る。昨日の群集はすっかり撤収して静かだ。いったい何だったのだろう。しかし、朝の空気が爽やかだ。胸いっぱい吸い込んで吐く。白岡よりずっと良い空気だ。澄んでいる。空は青い。雲は白い。

昨日より景色が遠くまで見える。遠くの景色まで見えるが、山らしきものが見えない。白んでいてわからないだけだろうか。日本の場合、関東平野でも大抵遠くには何かしらの山が見えるものだが……。

家屋の屋根が見渡せるが、やはり日本のどこかには思えない。長崎のハウステンボスとも違う。西洋造りな建物ではあるが、何かが違う。うーん……。

部屋に入ると空気が籠っているのが分かったので、窓を開けておいた。あれ、網戸がない。そうか、ないのか……。昨日は気付かなかった。カーテンを代わりに閉めておく。防犯的に大丈夫なのか少し心配だ。昨日の男のこともあるし……。しょうがない。部屋のドアを開けておこう。窓を閉め、鍵をかける。ドアの鍵を開けて廊下に出る、できるだけ静かに。

するとちょうどガチャッと向かいの部屋のドアが開いて、レインが起きてきた。お互いまだ若干寝ぼけ眼だ。

「あ、おはよう」

㊦ㄅㄅㄅㄅㄅㄅ, ㄅㄅㄅㄅ

ん？今のが朝の挨拶？真似してみよう。

㊦ㄅㄅㄅㄅㄅㄅ, ㄅㄅㄅㄅㄅ

自信がないので文末が尻上がりになってしまう。レインはしかしにこりと微笑んだ。洗面所で手と顔を洗って歯を磨くと、2人は台所へ行った。こういう所作はここでも同じなのだ。レインは紫苑を居間の椅子に座らせようとしたが、紫苑は手伝うといって付いて

いった。

“お、(や -1) 101 1001-8”

オウというのは感動詞だとして、テュはあなただから私、紫苑になるのね。で、ノンが私なので、レインから見たらレイン自身ね。で、アルクっていうのとシーナっていうのが分からない……。

さて、どう答えたものかしら。まあ、沈黙は金。余計なことは言うまい。で、笑顔も金。紫苑は微笑んでレインを台所へ連れて行く。とりあえず好意が伝われば良いとしよう。

レインは籠から昨日のパンを出し、ナイフやらを食器洗い機から取り出す。

“101 <-11 1-1c 1 1011....--”

レインは何か指示したようで、冷蔵庫を指したが、紫苑に言葉が通じないことを思い出し、アアと言葉を途中で止めた。

「何？何か取ってほしいの？」

するとレインは冷蔵庫に手を当て、 “100111e>1” といった。なるほど、それが冷蔵庫ね。

レインは中から卵とベーコンと玉ねぎとレタスを取り出すと、順に指差して 1-1c, <-1, 1011, 1-11 と説明した。

そしてフライパンを暖め、ベーコンを乗せる。油がフライパンに染み渡る。

なるほど、油はベーコンのもので十分ということね。

次に卵を落とす。

紫苑は野菜を取る。

「切って良い？サンドイッチでしょ？」

“>11 (や 1011 101 -11-., h-c (や 1e 1011 1a- 1e1e., 101 e1 1- >11 10- 1c 101 1eeV (や”

「え、ええと、今のは切り方の説明だよね？ジェスチャー入れてくれないと分からないよ」

まあ良いか、ダメなら止めるだろう。紫苑は野菜を切る。

“<c e1 1-11, -1c, 101 1e11 (c11- (や 111- (や 1e 1011 1a- >-1 (や -11-1 101 1001-”

「ん？スライスでいいの？玉ねぎのスライスもコカでいいの？っていうか今シオンって言った？」

レインは火を止め、皿に卵を乗せる。紫苑も切り終わり、細く切った玉ねぎをフライパ

ンに乗せ、余熱で少し焦がす。レインはその様子をじいっと見ている。少しして焦げ目が付くと、紫苑は玉ねぎをレタスの上に乗せた。

「運ぶね」といってレインの手から皿を取ると、居間へ向かう。レインはオレンジジュースを持ってやってきた。席に着くと、またお祈りをする。今度は聞こえた。 ㊦-l 7-Mce

アルカルテ？ア・ラ・カルトみたい。んなわけないか。それって私も言ったほうがいいのかな。でも宗教関係だったら勝手に信者でもない私がやって怒られたりしないかな……。

おずおずと真似してみる紫苑。 ㊦-l 7-Mce するとレインは ㊦leΛ, ʔʧa ʔ-Λ eʔ V-lʔe ʃ-㊦ と微笑んだ。

食事をしながら紫苑は昨日の単語を思い出していた。パンは ㊦㊦く などと。そこであることに気が付いた。

そういえば、レインの言った単語って全部第一音節にアクセントがあるわね。拘束アクセントなのかしら。第一音節ってことは、フィンランド語なんかと同じなわけか……。覚えるの楽だなあ。あ、紫苑って名前、第一音節が高くて良かったな。

㊦-ʔʃδ ㊦

「え、アチュ？」

㊦-lʔc....ʔʧa ʃccΛ- ʃcc ʔaaʃʔ ʔee, ʔʧa eΛ ʃeʃ -ʃʔ-, ʃʃΛ ʔʧa -lΛ- Vcl ʔa ʔ-Λ ʃcΛ,, ʃ--, ʃ--, ʃʃΛ ʔʃ -ʃ eʧʃ....㊦

きよろきよろ辺りを見回すレイン。すると立ち上がって冷蔵庫に行き、小瓶を持ってきた。砂糖と塩……に見える。レインはパンを千切り、砂糖と塩をかけ、皿にオレンジジュースに付け、それをレタスで巻いて食べた。

うわ、ここってこうやって食べるの？気が早いよ。混ぜるのは胃の中にしなさいって。しかしレインはそれを口に入れると顔を顰め、 ㊦eʃʔ ʧ-->㊦ と繰り返した。ヤーモ？どういうこと？何がしたいんだろう。私に何か伝えたいみたいだけど。

次に皿の上のパンを取ると、バターを塗り、食べた。そして晴れやかな顔でまた ㊦-ʔʃ*㊦ という。もしかして、おいしいとまずいを伝えたいの？

紫苑は塩の瓶を取り、オレンジジュースに入れる振りをして、やあも？と聞いた。するとレインは ㊦ʧ-, ʧ-->㊦, ʧ-->ʔ㊦ という。

なるほど、どうもヤーモがまずいで、アチュが美味しいようだ。つまり、レインは始め食事がおいしいかと聞いてきたのだ。うーん、体を張った演技ありがとう、

紫苑は本を開くと「ふ、4→5」と書いてみて、綴りの正しさを問うた。レインはマルを付ける。うわ、マルは日本と同じなんだ。バツも同じだったっけ。似てるなあ。

「レイン」パンを持つ ㊦-㊧ ㊨<㊩ ㊨< -㊧㊩㊦

あ、分かった。いま初めて長めの文が理解できた。おいしいパン、おいしいパンで当たりよって言ったんだ。ティアは肯定の言葉でしょ。

紫苑はパンを大きく千切り、もうひとつは小さく千切った。これで伝わるかどうか……。

၆၇၄၁ ခဏ ၁-၈ နာရီ

၆-၂၄....eVc၇ ၂e၇e၆

無理。形のないものは無理！

紫苑は大きなレタスの葉を取り、小さな破片を取る。交互に指差す。㊦-㊧ 大きい。㊨-㊩ 小さい㊦ 次に先ほどのパンを指して、㊦㊫ 大きい。㊫㊨ 小さい㊦ と言った。なんだかこちらが日本語を教えている気分だ。そう、そもそもここが日本でレインが日本に来ているなら、紫苑はレイン語を学ばず、むしろ日本語を教えただろう。

⑥ $\Gamma_a \in \mathcal{C} \ni \gamma - c$, $\forall -\Lambda \Gamma_a \in \mathcal{C} \ni \gamma - c$ ⑥そしてレタスを指差し、⑥ $\gamma \gamma \Gamma_a \Gamma_a$, $\Gamma_a \in \mathcal{C} \ni \gamma - \Lambda \gamma - c$,

繰り返しの中で紫苑は大きいがかいで小さいがリスだと知った。紙に書いて確認してもらう。

形容詞はやはり後置のようだ。大きいの基本語であるのは疑いないが、これでも後置ということは、フランス語とは違って純粹に形容詞は後置のようだ。また、いまのところ形容詞は活用していない。名詞に性別はないのだろうか。

2人は食事を進める。食べ終わると、昨日と同じ要領で片付ける。紫苑はすぐ歯を磨きにいった。レインもそうする。紫苑に合わせているのか、もともとそうなのか分からない。

居間に戻るとふたたび席に着く。時計を見ると——この時計が日本のものと同じならの話だが——いまは7時過ぎだ。健康的な時間だ。

レインはこの後どうするつもりだろう。見たところ家族はないが、年は紫苑と同じくらいだ。学生か、そうでなくば働いているはずだ。いずれにせよ、今日が休みでなければ出かけるのではないか。だが、急ぐ気配は見られない。

「あの……学校とか……ないの？」

⑥>>⑧⑥

「あ……ううん。なんでもない。いや、あるけど」

⑥-....⑥

何か言おうとしてレインは止めた。食事も終わったので座っていても黙っていると気まずい。気まずいという感覚は彼女にあるのだろうか。当然あるだろうな、人間だもん。

そうだ、今日はここが日本かどうか、そもそも地球かどうか調べるんだった。紫苑は本を開き、日本地図を描いて見せた。しかしレインは首を傾げる。これだけでは地図だということが理解できないのだろう。紫苑は韓国、中国と続けて書き、モンゴルや東南アジアを書き、南アジア……と続き、中東、ロシア、東欧、西欧と書き、グレートブリテン島などを加え、さらにはアイルランドやアイスランド、丁寧には南にはシチリア島なども加えて書いた。半島もすべて書いた。イベリア、イタリア、スカンジナビアはもちろんだ。

とりあえずユーラシアを書き終わったところでレインはそれが地図であることに気付いたらしく、⑥?-⑥-, ?-⑥-⑧⑥と聞いてきた。正しく伝わっているなら、カシャが地図ということになる。

紫苑は違和感を感じていた。レインの目線にだ。レインは驚いたような顔で見ている。

まるでそんな地図見たことないぞとばかりに。

紫苑は日本を指しながら「ジャパン」と繰り返した。多分、これが一番国際的な名だ。他の言語での読みもできるが、昨日通じなかった言語で読んでも仕方がないだろう。

「ねえレインは？レインはどこから来たの？ていうかここはどこなの？指差して」

レインの手を引き、人差し指を持ち、地図の上を周遊させる。するとレインは「ねえ、レイン、レイン、レイン」と言って紫苑の手から逃げる。そしてレインは奥に引っ込んでしまった。怒らせたかなと思ったころ、レインは大きな紙を持ってきた。それは世界地図だった。

……この世界の。

この瞬間、紫苑は自分が異世界に来たことを確信した。いや、確信に近くはあったのだが、これで確認作業はすべて終わった。そう、それは見たこともない世界の地図だった。地球と同じように大洋があり、陸地面積は少ない。でも、配列が違う。ところどころ似通った部分はあるものの、基本的に誰が見ても地球ではない。

仮に同じ夜空の星が見えようとも、紫苑が生存できる空気や温度や湿度や食物があろうとも、ここは少なくとも地球ではないのだ。太陽が同じくらい眩しくても、ここは白岡でも日本でも地球でもないのだ。

「来た……んだ。本当に。来てたんだ。あは、あはは……。凄い、叶っちゃった。10 年目にしようやく」

半ば呆然とする紫苑を心配そうに覗き込むレイン。

それにしても何のためにあの金髪は私をここに連れてきたんだろう。異世界に行ったらもっと混沌とした剣と魔法の生活が待ってると思ってたのに、今のところ私がしたのは食っちゃ寝だけ。

それに、帰るにはどうすればいいんだろう。異世界に来たいとは思っていたし、帰れない覚悟もある程度はあった。だが、召喚した人間とコンタクトが取れないとは思っていなかった。用があって召喚する以上、召喚士が傍にいたと思っていたのだが。

「ねえ、レインはあの金髪のことなんか知らないわよね」

「……」

「知ってるわけないか。あなたは襲われてただけだもんね。それにしてもあの男誰なの？

警察に言わなくていいの？警察くらいあるでしょ」

レインは首を傾げる。紫苑はため息ついて、「今いる所を教えて」とまた手を取る。レインは今度は素直に応じ、地図の中心より上の部分を指した。

ふうん、大陸の国か。島国でも半島でもないみたいね。しかもレインが指差してるのは国境線の範囲の中で考えるとだいぶ上の方ね。ってことはこの辺りは内陸になるわね。東は地続きで、西は何カ国か挟んで海か。この国の地図だからここが中心になるのは当然として、北緯はわりと上ね。

地球でいうとイタリアかフランスくらいかな。うん、よく似てる。この大陸が一番大きいみたいだし、まあユーラシアに当たるわけね。その西端の方だから、やっぱりイタリアかフランス……。この指の位置からすると内陸だから、ここは南仏辺りね。

この地図を見る限り、確かに小麦がメインでもおかしくないわね。さっきのオレンジジュースはパルプと種が入ってた。新鮮だったし……。果樹園があるようね。バターも上等だった。酪農も盛んか。そして一次産業の商品が新鮮なうちに入ってくる環境にある、と。

家の中に悪臭はないし、汚れてもいない。洗面所も近代化されている。トイレも昨日見たが、日本と同じで水洗で、洋式だった。流石に TOTO とは書いてないが。ともあれ、剣と魔法の世界でないことは確かだ。意外と現代の日本に近いのかもしれない。

「で、この国の名前は何ていうの？」

レインの指を地図に軽く押し付ける。

「国、国」

ᄒ--....>δ -ᄒaδ -ᄒa eᄒ -ᄒᄒ-Z-ᄒᄒᄒᄒ

「ごめん、何？っていうか、ト？ト？ここ、この国、ト？ト？」

ᄒ-ᄒᄒ-Z-ᄒᄒ, -ᄒᄒ-Z-ᄒᄒᄒᄒ

「アルバザード？」

レインは頷く。それ、国名なの？それともこの県？あるいは町？ていうか県なんてあるのかな……。するとレインは国境線をなぞり、ᄒ-ᄒᄒ-Z-ᄒᄒᄒᄒ といい、その後国境線付近に書かれたアルバザードの文字を指差す。

本当だ、アルバザードって書いてある。つまり、この国はアルバザード。そしてレインの指している地名は……-ᄒᄒ-。アルナ、これが地名ね。

「アルナ？」

レインは頷く。そして奥に引っ込み、地図帳を持ってくる。ページを開いて紫苑に見せる。それはアルバザードの拡大地図だった。そこにはアルナも乗っていた。県名か町名かは分からないが、とにかくここはアルナというらしい。紫苑は床を指しながら ㊦-ㄖㄏ-㊦ と聞く。するとレインは ㊦ㄥ-, -ㄚ eㄚ -ㄖㄏ-㊦ といった。さしずめ「そう、ここはアルナよ」といったところだろうか。そうすると「ここ」はアトゥということになる。

試してみよう。紫苑はカテゴリーと書かれたところを指差し、 ㊦-ㄚ eㄚ ㄱ-ㄚㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦ と聞く。すると ㊦ㄚ-㊦ という。多分、アトゥは「ここ」で良い気がしてきた。この国はという意味かもしれないし、別の機能語の類かもしれないが。

もう少し試してみよう。紫苑は世界地図全体を指でくるくる指し、 ㊦-ㄚ eㄚ ㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦ といった。すると ㊦-ㄚㄚ-ㄱㄱㄱㄱ ㊦ という。アトラス……それは世界という意味か、この星という意味か……。

しかし、アトゥは本当に場所を指すのだろうか。試しに紫苑は自分の本を指差し、 ㊦-ㄚ eㄚ ㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦ と聞いた。すると ㊦ㄚㄚ, ㄚㄚ, eㄚ -ㄚ,, ㄚ eㄚ ㄚㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦ という。さしずめ「ちがうちがう、エン・アトゥ。これはレイ」といったところか。とりあえず本はレイだろう。否定されてエン・アトゥといわれた。何のことか分からないが、やはり場所でない本にはコアは使えないようだ。逆にいえばコアはやはり場所を指すのではないか。

アトゥは国だけでなく街にも世界全体にも使えた。では海は？一番の大洋を指し、 ㊦-ㄚ eㄚ ㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦ というと、 ㊦ㄚ-ㄖㄱㄱㄱㄱ ㊦ という。ヴァルクというらしい。うん、やはりアトゥと言えるようだ。多分、多分だが、アトゥは「ここ」なのではないか。

㊦ㄚㄚㄱㄱㄱㄱ

突然「ねえ」と言われて驚いた。日本語と同じだからだ。何？いまのは呼びかけ？ここでも「ねえ」って言うんだ……？

㊦ㄚ eㄚ <ㄚ- ㄚ-ㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦

レインは紫苑の書いた地図を指す。「これはフィア・トゥアン？」どういう意味だろう。

㊦<ㄚ- ㄚ-ㄚ eㄚ ㄚㄱㄱㄱㄱ ㊦

区切り区切り紫苑は言ってみた。これが合っているかは分からない。

㊦ㄚㄚ ㄚㄚ eㄚ ㄚㄚㄱㄱㄱㄱ -㊦ と怪訝な顔をする。文法的に違っていただけか？内容が伝わらなかったのか？

㊦ㄚㄚㄚㄚㄱㄱㄱㄱ ㄚ eㄚ <ㄚ- ㄚㄚ-ㄚ, -ㄚㄚㄚ-ㄚ,, -ㄚㄚㄚㄚ-ㄚ, <ㄚ- ㄚㄚ-ㄚㄱㄱㄱㄱ

アトラスがフィア・ノアンで、地球がフィア・トゥアンだそう。フィアというのが共通しているので、フィアは世界とかそういう意味ではないか。

となるとノアンはレインから見て「私の」という意味で、トゥアンというのは「あなたの」という意味だろうか。そういえばノンとテュに少しずつ似ている。

「え……と、つまり、<c- ʔa-ʌ eʃ -ʔol-ʌδ なの？」

㊦ㄣ-, <c- ʌo-ʌ eʃ -ʔol-ʌ,, ʌee <c- ʔa-ʌ eʃ ʔoδ ㊦

どうも「私の世界はアトラスよ」と言っただけ。フィアは世界か地図かと思ったが、アトラスはどうもこの世界の名前のようなので、フィアが世界なのではないか。

所有代名詞は分かった。ʌoʌ の所有格が ʌoʌo のようだ。だが、一般名詞の所有はどう表現するのだろうか。紫苑の本と言いたいときは何とでもいいのだろうか。

試しに紫苑は ㊦ʔa eʃ lec ʌoʌδ ㊦ と本を指した。

すると、レインは ㊦ㄣ-, lec ʔa-ʌ㊦ と返した。

「あ、いや、人称代名詞に置き換えないでほしいのよね……。lec ʌoʌδ lec lecʌδ」

㊦ㄣ-, ʔa eʃ lec ʔa-ʌ,, eʌ lec ʌo-ʌ,, ʌ-ʌ- eʌ ʔʌa ʔeʌʌ ʔʌʌ) lec e ʌoʌ lec e ʌoʌ.....㊦

ん？いま、レイ・シオンでなく、レイ・エ・シオンと言わなかったか？

「レイン、lec ʌoʌδ lec e ʌoʌδ」

紫苑が何度か繰り返すと、レインはハッという顔になった。どうやらこちらの意図を理解したようだ。

㊦-ʌʌ-, ʔʌa ʌeʔ ʌ-ʌ ʌeʔʔolʔ> e ” e” ʌeʔe,, ʔ>, lec e ʌoʌ eʃ ʔc-,, lec e ʌoʌ, lec eeeee ʌoʌ㊦

「分かったわ、所有はエで表すのね」

㊦lec e ʌoʌ ㊦㊦

レインは紫苑が話す新しい語を掴み、それが紫苑の現在習得したいものだと考える癖がついてきたようだ。

㊦h-c, ʔʌa eʌ ʌ-ʌ eʌʃ e <c- ʔa-ʌ ʌeʔe,, ʔ-ʌʌ, ʌoʌ eʌ ʌeʔ <-ʌ ʔa, <-ʌ, eʌʌ ʔ ʌcʔʌ ʔa-ʌ, h-cZeʌ,, ʔ-ʌ ʌoʌ ʌeʔ ʌ-ʌ <c ʔʌ ʔʌa >cl ʌoʌ ʌccʌ- ʔʌa, ʌoʌ㊦

「ん？……次は何を練習しようか？とりあえずレインがゆっくり単語を区切って発音してくれるから助かるよ。独り言以外は……だけど。でも、ちゃんと私に教えてくれるつもりなんだね。ありがとう。ʌee」

「コッ」

あ、通じた。やっぱり呼びかけは「ねえ」でいいんだ。そしてその反応がト？つまり、「何？」なんだ。面白い。日本語や英語と同じノリだわ。コッと返すことの丁寧度は分からないが。
「コッ、（ヤ）>-cJ <-I -P>-,, JcΛ....ΛcΛ コ -し eYc

するとレインはまた奥へ引っ込んだ。今度はしばらくしてから戻ってきた。手には厚い本が2冊。1冊は少し埃を被っている。

「カ-,, Jlel <ccΛ- (Ya

「え、何コレ？」

分厚いハードカバーの本だ。中を見るとぎっしり文字が詰まっている。それはまるで辞書のような感じだ。なるほど、これは辞典ね。アルバザードの国語辞典か。背表紙を見ると、
>el YH, -P<-Z-PJ などと書いてある。見たことない3文字はあの壁の表に書いてある。

ん？それにしてもアルバザードと書いてあるっていうのはどういうこと？出版社の名前は？ていうか辞書の名前は？変わった辞書ね……。

レインはもう1冊の辞書を手渡した。少し埃を帯びている。同じように書いてあるが、
YalcJlel という文字が際立っていた。中を見ると、先のものより字が大きく、絵が多い。説明も短く、見やすい。これは……ラーナーズ用の国語辞典？あるいは……子供用？

レインはページを捲り、紫苑に差し出した。そこには人体の絵が載っていた。そしてページ毎に名前が付いていた。なるほど、これを教材にしろということか。これはいい。なるほど、目はcΛJで耳は(e>で……。

見入る紫苑にレインは「MeΛ cΛ」と言って絵の人体の指を指した。

「ん？レン・インって何？MeΛ cΛ eC コッ」

するとレインは人差し指を目のところに持っていった。そして本に向かって指を動かし、目線を描いた。どうもレン・インで「見る」とかそういう意味らしい。目がインスなので、近い感じがする。

てことは「見る」はインのほうだろう。じゃあレンは？

「MeΛ eC コッ」

「ΛcΛ MeC - (Ya Yal (Ya cΛ Ca....C< JeCe....δ

レインはうーんと唸って、立ち上がる。てくてくと歩き出し、「ΛcΛ laJcJ」という。私はルケス？歩くとかいう意味だろうか。

次にその場走りをして、 $\odot \Lambda \Lambda \text{ le } \langle \text{eJ} \odot$ という。レフエスは走るだろう。どちらもエスで終わっているが、何か関係があるのだろうか。

次にレインはお笑いの一人二役のコントのように、自分に向かって「Please」と言った。そして言われた側の役になり、今度は「Yes」と言い、一生懸命走っているフリをした。

えーと……。さっきはレフェスが走るで、今度はレフね。エスというのは何なのだろう。あるいはアスペクトで、継続を示すとか。今までの流れからすると後者っぽいなあ。

で、 μ_e というのは、どうもこのコントから察するに、命令なのだろう。 $\mu_e \Lambda$ というのを聞いて μ_e が出てきたわけだが、 μ_e と $\mu_e \Lambda$ の違いは何なのだろうか。

試しに言ってみよう。

$$\mathfrak{G}|\text{ec}\Lambda, \mu_e \text{ le} < \mathfrak{G}$$

するとレインはふたたび走り出した。

「ああ、なるほど、命令のようね」

$\phi_{\text{COA}}, \gamma_2 \mu_e \lambda - e \lambda \mu_e \Gamma - \mu_e \lambda \leq 6$

「レン・レフ？そっちのほうがいいのね？PeA le<」

するとレインはまた走り出す。小さな子供が公園で遊んでいるみたいな感じだ。

うーん、ごめんね、食後に走らせて。

で、歩くはla?eJだったわね。

6lecΛ, μeΛ la?eJ6

6 $\mu_{e\Lambda}$ 127r6

レン・ルックと訂正された。うん、やはり eJ は継続のアスペクトのようね。

 ${}^{\circ}\mu_{e\Lambda} \text{ la?}, \text{lec}\Lambda_{\circ}$

するとレインは歩き出した。なるほど、 $\mu e\Lambda$ は命令か。

⁶h33, ʌɔʌ ʌ- -ʌc,, ʌɔʌ <c-ʌɔ -, ɲeɹ, ʌɔʌ ʌ-ʌ -ʌ ʌɔ eɣɔɔ

レインはペンを取ると、書く真似をして、-ひと言った。どうやら「書く」はアシュトというらしい。

次にレインはペンを机に置き、 $\textcircled{6}$ - $\cup$ $\cup$ - $\cap$, $\cup$ - $\cup$ $\cup$ - $\cap\textcircled{6}$ と何度も繰り返しながらペンを取ろうとした。

そしてペンを握り、紙にペン先を付けると、今度は何度も $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{U}\text{C}$ $\textcircled{\text{L}}\text{C}$ と書いた。

次に書きながら $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{U}\text{C}$ $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{U}\text{C}$ と繰り返した。

どうもアシュテのバリエーションのようだが、動作との兼ね合いを考えると、主語に応じて活用しているというより、むしろ動作の段階に応じている。これは……アスペクト？

レインは書き終わってペンを離すと $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{U}\text{C}$ $\textcircled{\text{L}}\text{C}$ と書いた。つまりこれが完了？

そして書き終わった紙を指差し、 $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{U}\text{C}$ $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{C}$ と書いた。

つまり、今までの「書く」に対する 5 つのアスペクトということだろうか。中の 3 つは分かる。開始とその過程の経過と完了だ。だが最初と最後の 2 つは何だろう。

書く前ということは、書くようにすること……日本語学でいうところの将前相か。

では最後のは？書き終わったものを指差して $\textcircled{\text{L}}\text{-}\text{U}\text{C}$ とは何か。完了後ということは、その動作の影響が存続していることを指すということだろうか。段階としてはそれしか可能性がない。つまり、影響相とでもいうべきものか。

紫苑はレインがやったことをすべて再現してみた。すると 5 つの相についてすべてレインは頷いて肯定した。やはりこれは相のようだ。言語学をやっていなければ、そして異世界に行くことを想定して生きてこなかったらこうまでスムーズには理解できなかっただろう。勉強しておいて良かった。

$\textcircled{\text{L}}\text{C}\text{L}, \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$

レインは $\textcircled{\text{L}}\text{C}\text{L} = \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$ と書いた。このイコールっぽい記号は何だろう。上の線が短いんですけど……。

「これ、同じって意味？」

$\textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$

「うーん……」

紫苑は首をひねって考え、紙にこう書いた。

” $\textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} = \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$ ”

するとレインは嬉々として肯定した。なるほど、イコール記号のようだ。

となると、完了の $\textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$ は $\textcircled{\text{L}}\text{C}\text{L}$ でもいいということになる。

$\textcircled{\text{L}}\text{C}\text{L}, \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$

レインは $\textcircled{\text{L}}\text{C}\text{L} = \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C} = \textcircled{\text{L}}\text{C} \textcircled{\text{L}}\text{C}$ と書いた。どうも経過相と影響相——とでも言

おうか——は、同じ eJ で表せるようだ。

日本語のテイルと同じだな。「着ている」は今 put on している途中という意味にもなるし、wear した状態だということもできる。

満足した顔のレインは時計の絵を書いた。柱時計はいま 8 時。絵も 8 時を指している。レインは ⑥CaP⑥ といった。時計はメルクだから、これは「今」といいたいのだろうか。レインはしきりに柱時計と見比べているので、恐らくそうだろう。

次に 6 時と 10 時を書いて、⑥JeJ, Jcl⑥ と繰り返した。CaP が現在だとするなら、JeJ が過去で、Jcl が未来ではないかしら。

レインは立ち上がってパンを一切れ取ってくると、口に入れて ⑥ueA CaP⑥ と言った。なるほど、それが食べるね。紫苑は面白がって席を立ち、レインを引っ張る。台所でコップを取って蛇口から水を取り、飲む。⑥ueA CaPδ⑥

⑥y-, y-⑥

ふむ、食べると飲むは同じ単語なのね。混乱しそうだわ。

ところで、お水はまずくなかったな。むしろおいしい。お腹を壊すということはない……と期待する。

レインは紫苑を居間へ連れ戻す。そして先ほどの 8 時の絵を指して ⑥ueA CaP⑥ という。次に 6 時の絵を指して ⑥ueA JeJ⑥、最後に 10 時の絵を指して ⑥ueA Jcl⑥ と言う。

うーん、過去・現在・未来と時間が進んでいて、それらが順に JeJ, CaP, Jcl……そしていまこの時計に準えた「食べる」のバリエーションが ueA JeJ, ueA CaP, ueA Jcl。つまり、これらはテンスを表わすということになるわね。順に食べた、食べる、食べるだろう、みたいな感じなんだろうな。

未来形も独立した時制なのね。凄いなあ。英語も日本語も未来形なんて確立してないのに。

レインは紙に ueA JeJ = ueA-C と書いた。ふむ、過去形は動詞語尾の -C を使って表してもよいということか。確かに過去形はよく使うから、短く表せたほうがよさそうね。

あと、現在形は CaP のようだが、先ほどの歩くや走るの例を見ていると、どうも CaP をいちいちつけなくても現在の意味になるようだ。

「うん、テンスとアスペクトは分かったよ。英語に似てて助かったわ」

㊦ㄅㄆ, ㄱㄴ, ㄷㄹ ㄴ-ㄴ ㄱㄲ-ㄴ -ㄴㄴ

互いに少しも通じていない。通じているとすれば偶々同じことを考えているときだけだ。紫苑は大丈夫かなあと心配した。レインはまた一人芝居を始めた。

右を向いて ㊦ㄴㄴ ㄷㄴㄴ とする。左を向いて、地図を見ようとして、 ㊦-ㄴ, -ㄴ ㄴㄴ ㄷㄴㄴ と
言って顔を手で覆った。

なるほど、読めてきた。これは「見るな」の芝居だろう。禁止は ㄴㄴㄴ を動詞の前につける
ようだ。

㊦ㄲㄴ ㄷㄴㄴ ㄴ-ㄱㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴ, ㄅㄆㄴ ㄱㄴㄴ, ㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴ

レインは紫苑の本を取り、昨日書いた文字の表を指し、ㄴㄴㄴ, ㄱㄴㄴ, ㄴ-ㄴ, ㄅㄆㄴ という文字を歌詞にした歌を歌いだした。どうもこれは文字の覚え歌のようだ。面白い。聞いてみたところ、音域が狭く、1 オクターブ以内で収めている。また、4 文字ごとに 1 小節を取っており、計 5 小節で終わっている。綺麗に出来た歌だ。これは良いものを聞いた。

㊦ㄲㄴ ㄷㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴㄴㄴ

「いま、私はミクスしたって言いたいのか？つまり、ㄴㄴㄴㄴが「歌う」ね。うん、分かった」

レインは紫苑に手のひらを向け、 ㊦ㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴㄴ という。え、いまのを？ムリムリ、いま聞いたばかりだし。

「テー、テー。むり」

㊦ㄅㄆㄴ, ㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴ

「ソソって何？何か接続詞的なもの？そういえば何度も文頭で出てるよね。残りは……「あなたは歌うヴィル」……分かんないよ」

㊦ㄷㄹㄴ ㄴㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴ, ㄱ-ㄴㄴ

「いやあ、やっ？って言われても」

㊦ㄴ-ㄴ, ㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴ ㄴㄴㄴㄴ

どうということ？私がミクス・ヴィルで、レインがミクス・セン。テンスやアスペクトと同じ位置にヴィルとかが来ている。文法的には動詞にかかっているから、アルカのテンスやアスペクトは副詞なのだろう。で、ヴィルはテンスなどと同じ位置に来ているので、やはりこれも副詞と見るべきだろうか。

もうテンスやアスペクトは習ったし、肯定か否定の問題でもなさそう。そうだとしたら、他のモダリティになるわけだけど。私はミクス・ヴィルで、レインはミクス・セン。

待って、モダリティになるようなものが何がある？歌いたいと歌いたくないとか？そう

か、希望か。

「なるほど、ヤーヤー。希望ね。私は歌いたくないけど、あなたは歌いたいのね」

㊦-lA-δ JoΛ, >cγJ ㄥccㄥ㊦

「シートって何？」

㊦ΛoΛ >cγJ,, 4-l ㄥʔa ㄥeΛ >cγJ㊦

「レインが歌って、ヤン……これも文頭で多くでるわね、何かの順接かな。で、私に歌ってくれ、と。つまり、一緒に歌いましょうってこと？」

でも歌えない。歌を知らないから。しょうがない、こうしよう。紫苑は立ち上がり、㊦lo< ㄥccㄥ㊦と言って歩くと、レインも歩く。よし、間違いない。

ふうとため息をついたレインはきよろきよろして、パンを台所から千切って持ってきた。そして ㊦ㄥa eㄥ -ㄥㄥ㊦と言う。紫苑は頷く。レインはそれを地面に落とす。㊦ㄥa -ㄥ -ㄥㄥ㊦

なるほど、このパンは通時的に美味しいが、落としたせいで今現在はまずくなつたから、前はおいしかったと言いたいのか。-ㄥというのは動詞の過去形の語尾のようだが、単独で使うと繫辞の過去形にもなるようだ。

となると、繫辞と目されていた eㄥ は間違いなく繫辞か。繫辞は特別な存在で、eㄥ-ㄥのようにはならないのね。。

㊦Zoʔʔ, ㄥa ʔo< eㄥ 4-->o㊦

トゥ・ポフ？代名詞の「これ」は形容詞にもなって、前置して「この」になるのかも……？で、このパンはもうまずい、と。OK, OK。

㊦JoΛ, ΛoΛ ㄥeΛ ㄥcΛ ㄥa㊦

ソンが「だから」か「そして」か何かだとすると……、だから私はこれをシェン・リン。

レインは落としてないパンのひとかけを出し、㊦ㄥ-l ㄥa eㄥ -ㄥㄥ㊦と言った。

タルっていうのも接続詞かな？まずいパンとおいしいパンの対比。ってことは逆接かな。「しかし」が妥当。……でも「一方」かもしれない。

㊦JoΛ ΛoΛ ㄥeΛ l-l ㄥa㊦

ん？どういうこと？だから私はこれをシェン・ラン？

落としたまずいパンは食べる＋何かで、落ちてないおいしいパンは食べる＋何か。いずれにせよモダリティっばいよねえ。

なんだろう……希望、かな？でも希望はさっき出てきた。じゃあ意思？意思かも、食べよ

うとか。それとその意思がないことを指す時相詞とか。多分そうね。

ⒺⒸⒶμ, ⒸⒶ <elcⓉ Ⓣ Ⓐ-Λ lel JeΛ, Vcl, l-Λ, o μcΛ ㊟

レインは辞書の背表紙のⒶⓂという字を指して ⒺⒸⒶ cⓂⓉ Vcl,, ΛoΛ cⓂⓉ JeΛ㊟ と言った。
イスクとはどういう意味だろう。

ⒺlecΛ, cⓂⓉ el Ⓒoδ ㊟

Ⓔ--, ΛoΛ し-し -し ⒸeelVeⒸ Λ-㊟

レインは文字の表を書き出した。

Ⓒ Ⓣ

し Ⓜ

Λ >

V Ⓔ

< Ⓜ

l Ⓜ

Ⓐ 0

μ l

μ l

Z S

- c

o e

「これは……何の表？」

レインは Ⓔ-----, しししししししししし, dddddddddddⒸ㊟ と言った。あえて日本語にすると「あーー、しゅーー（息だけ）、つつつつと」という感じ。

レインは一文字ずつ指差しながら、アシュトと読む。左列の - の字としの字とⒸの字を順番に指差しながら。

そしてレインは今指差した 3 つの文字を、同じように順番に指差した。ただし、今度は右の列を。

目を追っていくと、それはcⓂⓉという3つの文字だった。

左列の - は右列では c になり、しは J になり、r は i になるようだ。左列で -hi になっているものは、右列に置き換えると cJi になる。何の遊びだろう。

「や、私はイスクの意味を聞いてるんだけど」

と言ったところで、ふと気づいた。

「ん？イスクはこの表ではアシュトに置き換わるわけよね。で、アシュトは書く。じゃあ、イスクは……なに、何か関係あるの？」

レインは頭を振って、本を取ってぱらぱらページをめくって読む振りをした。

「まさか……イスクは読むなの？えっ……この表ってそういう意味なの？左列の単語を右列に置き換えると意味が反対になるってこと？」

ᵒᶜʏᵃ -lᵃ- eᵝᵝ ᶜ cᵝᵝᵝ -Z ᶜʏᵃ ᵝcᵝ ᵝV- V-ᵝ -ᵝᵝ

レインは部屋に入っていく人の絵を描いた。

ᵒᶜᵃ eᶜ l-ᶜᵝ

次に出て行く人の絵を描く。

ᵒʏ-l ᶜᵃ eᶜ ᵝcᵝᵝ

そして表で l-ᶜ が ᵝcᵝ に変換できることを指で示した。

「入るが l-ᶜ で、出るが ᵝcᵝ ってことなのね。この表を使えば反対語が作れるんだ。すごい！」

なにそれ、そんな言語があるなんて。地球じゃ考えられないわ。ん？でもこの星にしてもこれって異常なことじゃないの？言語学的にはありえないことよ。こんな形態論を持った言語は人間の言語として聞いたことがない。星が違うとか、そういうのじゃ説明できないわ。この性質は人為的に作られたものとは思えない。

ただ、すべての概念に適応しているわけじゃないわね。大きいのは ᵝ-c でしょう？この表に乗っけると、小さいは ᶜc- になるはず。でも小さいは lcᵝ って言ってたもの。

レインはふたたび辞書の背表紙のᵝᵝᵝという字を指して ᵒᶜʏᵃ cᵝᵝ Vcl., ᵃᵝᵃ cᵝᵝ Jeᵃᵝ と言った。cᵝᵝ は分かるようになった。読む。ね。

あれ？でも Jeᵃᵝ が希望だとしたら「あなたは読みたくない。私は読みたい」になるな……。変だな。違うぞ。何か違和感がある。あれ？もしかして希望じゃないんじゃないの？

これは……可能と不可能なんじゃないか？つまり「あなたは読めない。私は読める」。そ

うだ、そうだ。希望じゃない、可能と不可能だ。じゃあさっきのは歌えると歌えないか。

そうすると l-Λ, μcΛ は希望と希望しない、という可能性も出てくるわね。落ちたまずいパンを食べたくない……意味が通る。無理はない。恐らくこれらは希望ね。なるほど、間違えてたわ。いや、その確証もないけれど。

㊦ㄣ-, ΛoΛ cJ J Vcl ㄥa, lecΛ㊦

紫苑は単語を細切れに話す。レインも聞き取らせるために区切って話す。そうでないと聞き取れない。いまだってギリギリようやっという感じだ。

㊦ㄥㄆa ㄌeΛ l-Λ ㄥa ㄓo<δ ㊦

㊦-....ㄣ-㊦ 別に本当は食べたくないが、授業だ。多分肯定を求めている。合わせよう。

㊦JoΛ, ㄥㄆa ㄌeΛ <leΛ ㄥa㊦

食べたいなら、「じゃあこれをシェン・フレン」ってどこ？これは……許可か可能かな。JeΛ が能力可能で、<leΛ が状況可能かもしれない。中国語にこの区別があるようにね。どちらか確かめてみよう。許可と状況可能を明確に分けるためには……。いや、ハッキリとは思いつかないわね。広義に解釈していけばどちらも同じような意味合いだし。じゃあ許可のほうで保留にしておこう。

さて、許可があるということは不許可もあるのではないか。l-Λ, μcΛ のように対でないものがあるので、音は推測できない。じゃあわざと許可されないことをやってみよう。紫苑は落ちたパンを借り、㊦ㄥa eㄥ ㄥoδ ㊦と地面に落とした。行為のことをトゥといえるか甚だ不安だが、いまは動詞の話をしているので通じるはずだ。

レインは察しよく ㊦ㄥㄆa >eㄥㄥ㊦㊦と答えてくれた。よし、落とすはメテね。じゃあ……。

紫苑は台所に行き、皿を取ってくる。そして少し怒られるかもしれない不安とともに、㊦ΛoΛ >eㄥ <leΛ h-ㄥδ ㊦と聞いた。首を振りながら、これは演技だと伝えつつ。

気持ちはレインに届いたようだ。レインは苦笑しながら ㊦ㄥee, h-o, ㄥㄆa >eㄥ leJ h-ㄥ㊦といった。ハオというのは分からないが、状況からするに「馬鹿ね」とか「しょうがないなあ」とか「何言ってるの」とか「当たり前じゃない」とか「当然よ」とか、そういった意味合いだろうか。絞込みはできない。

いずれにせよ皿を落としてはいけないと言われたようだ。そして不許可が紫苑の狙い通り、得られた。leJ というらしい。なるほど。

“h--, ʔa eʃ leʃe, ʃcoʌe

感心したようにレインは述べる。褒められたのだろうか。

レインは少し考えてから、窓を開けに行った。寒風が入ってきて寒い。

“ʔa ʌ- ʃoʃʃe

あなたはソルトをナしますか？んー、なんだろ。“ʃoʃʃ eʃ ʃʃe。するとレインは冷蔵庫からオレンジジュースを、冷凍庫から氷を取ってきた。

“-ʌe, ʃcoʃʃ-ʌee といってオレンジジュースを指す。語形と物から想像するに、「ジュース、オレンジジュース」といったのではないか。紫苑は冷蔵庫に行き、チラとレインを見る。勝手に開けていいものか迷う。

“ʔ-, leeʋ, ʔa ho> <ʌʌ ʃccʃʃe>ʃe

多分、冷蔵庫を開けていいよといったのだろう。ホムが開けるか。

紫苑は冷蔵庫を開け、ジュースを探す。あった、グレープジュースがあった。

“-ʌee

“ʔ-, -ʌe...ʃee-ʌee

なるほど、複合語の造りは容易なようね。要はオレンジがリシックで、ブドウがレブ。で、ジュースがアネ、か。

“h-c, ʃaʃa -ʌe eʃ ʃccʃʃ, ʃccʃe

んー、ジュースはディートって言いたいのかな。

“ʔ-ʌ, ʋeʃʃ eʃ ʃoʃʃe

氷を差し出すレイン。「そして氷はソルト」と言ったのね。

ジュースはちょこ冷たくて、氷は冷たい……と言いたいのかな？ディートはちょこ冷たいで、ソルトは冷たい、かな。

あ、そうか、もしかしたら冷蔵庫のディートテムクのディートもそうかもしれない。ってことは……。紫苑は冷凍庫を指し、“ʃoʃʃʃe>ʃe と聞いたらレインは喜んでヤーヤーと言った。

待って、じゃあ熱いは何？紫苑はコンロに近づき、火を付ける。遠巻きに指差して何かと聞くと、<-c だという。なるほど、火はファイか。ファイアに似てると覚えておこう。

“<-c eʃ ʃoʃʃe と首を振りながら聞く。この動作は2人の中で本当は答えを知ってて違うと思ってるけど、あえて聞くのよという意味で使われだしている。

ᄒh-ᄒ, ᄒee, ᄒ-c eᄒ h-ᄒᄒᄒ

またここでもハオだ。このような当たり前のことを聞いたシーンで出てくる。となると、当然とかそういう意味になるのだろう。

そして熱いは h-ᄒᄒᄒ だと。じゃあ、暖かいはなんだろう。

紫苑は見回して、ポットからお湯を出し、カップに入れる。

ᄒh-ᄒᄒᄒᄒ

ᄒᄒ-ᄒ

そして水を少し足し、ᄒᄒᄒᄒᄒ と聞くと、笑顔で ᄒ>eᄒᄒᄒ と言う。

なるほど、これで温度の表現は覚えたぞ。

レインは紫苑を居間に戻す。いや、だからここは寒いって。

ᄒᄒᄒᄒ ᄒ- ᄒᄒᄒᄒᄒᄒ

どうも「あなたは寒いをナしますか」と言いたいのではないか。この寒い部屋における「私」についてその寒さを語っているようだ。寒いと冷たいの違いはないのだろうか。

そもそもナという動詞はなんだろう。思う、感じる、触覚で反応するなどなど……。でも短いから基本語だろう。繋辞ではないから動詞だというのは分かる。うーむ、やはり思うや感じるの類か。あるいは好きか嫌いかといっているのかもしれない。

好きだとしたらこう試してみよう。紫苑はジュースを取って、ᄒᄒᄒᄒ ᄒ- -ᄒeᄒᄒᄒ と聞いた。レインは「は？」という顔をした。どうもナは好悪には関係ないらしい。じゃあ、やはり思うとか感じるの類か。

ᄒᄒᄒᄒ ᄒ- ᄒᄒᄒᄒᄒ ᄒecᄒᄒ

ᄒᄒ-, ᄒᄒᄒ ᄒ-ᄒ ᄒ- ᄒᄒᄒᄒᄒᄒ

タンというのはなんだろう。構文も同じで内容も同じ。主語が入れ替わっただけ。となると、「～も」という意味だろうか。それとも強調とか反復を表わすのだろうか。

ᄒᄒ-, ᄒᄒᄒ ᄒ- ᄒᄒᄒᄒᄒ

ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒeᄒᄒ ᄒc- ᄒe>ᄒᄒᄒᄒ

ん？デユ・ディアというのは何か。あ、デユに副詞が付いているのか。窓が空いてて寒いから、「閉めたらどう？」的なことを言っているのだろう。おそらくデユは閉めるで、ディアはなんというか……提案的な意味合いだろうか。

紫苑は窓を閉めた。レインは何も言わない。問題なかったようだ。おそらく ᄒc- は why

don't you の類だ。では主語を $\Lambda\alpha\Lambda$ にしたら shall I になるのだろうか。紫苑はまた窓を開ける。レインは寒そうな顔をする。

$\textcircled{\text{e}}\text{lec}\Lambda, \textcircled{\text{e}}\text{y}\alpha \Lambda- \textcircled{\text{e}}\text{y}\textcircled{\text{e}}\delta \textcircled{\text{e}}$

$\textcircled{\text{e}}\text{y}-\textcircled{\text{e}}$

$\textcircled{\text{e}}\text{y}\alpha$, でいいのかな……まあ、あなたに合わせて使ってみるよ。 $\textcircled{\text{e}}\text{y}\alpha, \Lambda\alpha\Lambda \textcircled{\text{e}}\text{y}\alpha \textcircled{\text{e}}\text{c}- \textcircled{\text{e}}\text{e}\textcircled{\text{e}}\textcircled{\text{e}}\delta \textcircled{\text{e}}$

$\textcircled{\text{e}}\text{y}-, \textcircled{\text{e}}\text{e}\textcircled{\text{e}}$

どうも良いようだ。紫苑は窓を閉める。うん、ディアは shall I にもなるらしい。便利だ。

$\textcircled{\text{e}}\text{y}\textcircled{\text{e}}\text{e}\textcircled{\text{e}}$

「セント？それがお礼の言葉なの？それは是非知りたいわね。さて、次は何かしら」

レインは台所に行き、コップを取ると $\textcircled{\text{e}}\text{y}-\textcircled{\text{e}}$ といった。カップとは別の語のようだ。そして水を流し、水流に向けて $\textcircled{\text{e}}\text{y}$ と言い、コップに水を汲んでその水を差し、また $\textcircled{\text{e}}\text{y}$ といった。なるほど、水流でも留まっても同じくエルが水なのね。お湯はどうなんだろう。

紫苑はポットを開けて湯気が立ち込める中お湯を指し、エル？と聞いたらレインは頷いた。どうもお湯と水の区別はないらしい。

$\textcircled{\text{e}}\text{y}\alpha\textcircled{\text{e}}, \textcircled{\text{e}}\text{y} \textcircled{\text{e}}- \textcircled{\text{e}}\text{y}-\textcircled{\text{e}}\textcircled{\text{e}}$

「ええと、「いま、水はコップをシャします」？。シャって何？」

レインは居間に移り、机の上の本を指し、 $\textcircled{\text{e}}\text{lec} \textcircled{\text{e}}- \textcircled{\text{e}}\text{e}\textcircled{\text{e}}$ という。もしかして、あるという動詞なのか。ああ、なるほど、シャは目的語にそのまま場所を取れるのか。便利だ。

「ヤーヤー」

するとレインは台所に戻り、水を捨てる。 $\textcircled{\text{e}}\text{e}\textcircled{\text{e}} \textcircled{\text{e}}\text{c} \textcircled{\text{e}}\text{y}-\textcircled{\text{e}}\textcircled{\text{e}}$ なるほどね、ミが「ない」で、水がコップにないという意味、か。

レインは再度居間に戻り、紫苑の本に絵を描く。水の入っていないコップといまの時刻、9時だ。そして人間の絵をデフォルメして描く。棒人間のようないい加減な絵だ。そして時計をいくつも描き、順に時間を進めていった。そして順に絵の人間をよたよたさせていき、手で喉を押さえさせ、日本の漫画の吹き出しとは少し違う、「＜」のような吹き出しの中に $\textcircled{\text{e}}\text{y}\textcircled{\text{e}}$ と書いた。未だに絵の中のコップは空だ。

$\textcircled{\text{e}}\text{lec}\Lambda, \textcircled{\text{e}}\alpha \textcircled{\text{e}}\text{e}\Lambda \textcircled{\text{e}}\text{y}-\textcircled{\text{e}}\text{y}\textcircled{\text{e}}\delta \textcircled{\text{e}}$

⑥Cee, eΛ Ca,, la⑥

ん？「エンこれ」って何だ。あ、前にもこんなことあったな。いまテーって言われたから……否定か？紫苑はパンを手にする。⑥lecΛ, Ca eC eΛ eleΛδ⑥

⑥y-, Ca le eleΛ C-I ㊦く⑥

なるほど、さしずめ「うん、これは机じゃない。しかしパンだ」といったところか。やはりデンは否定らしい。つまり先ほどの「これじゃない。ルーだよ」か。そうか、紫苑が人間を指したからだ。人間は「これ」じゃなくて「彼」だからトゥではなくルーなんだ。なるほど。

それと、le というのは何度か今までに出てきたが、今の解釈からいくと、「～でない」の意味ではないか。eΛ eC にあたるものだろう。

紫苑は紙に eΛ eC = le と書いたら、レインはヤーと言った。

⑥JoΛ, la leΛ I-Λ eμδ⑥ と最後の局面を指して言う。

⑥y-, y-Λ, c> CcγΛo⑥ と9時のシーンを指す ⑥la leΛ μcΛ eμ⑥

「ヤーヤー」

⑥C-I, c> γ-IZ-J⑥ と9時間後の6時のシーンを指す ⑥la leΛ I-Λ eμ,, la leΛ C-I eμ⑥

彼は水が飲みたいし、水をシェン・ファルする。意思の問題として飲みたいし、体の生理的な問題として水を飲む必要があるって言いたいのかな。つまり、ファルは必要とか義務を表わす副詞ってことかも。

⑥h-c, ΛoΛ -C C-Λ Ya-Λ OeΛ le ΛoΛ C-leJ - Cya,, leccΛ CcJo-⑥

レインは笑って拍手した。拍手はどういう意味なのだろう。日本と同じで褒め称えるときなどに使うのか？つまり……これでひと段落着いたということか？

レインはその後、表を描いた。紫苑はレインの表を元に、日本語を交えて表をノートに作った。

・テンス

過去	現在	未来	通時
----	----	----	----

-ㇿ/ㇿeㇿ	ㇿaㇿ	ㇿcl	無標
--------	-----	-----	----

・アспект

将前相	開始相	経過相	完了相	影響相
ㇿ-ㇿ	ㇿcㇿ	eㇿ/ㇿ-ㇿㇿ	cㇿ/ㇿㇿㇿ	eㇿ/ㇿ-

将前相	～しようとしている	行為の開始時点よりも前の時点
開始相	～し始める	行為の開始時点
経過相	～している	行為の開始時点と終了時点の間
完了相	～し終わった	行為の終了時点
影響相	～した後	行為の終了時点よりも後の時点

・法副詞

勧誘 ～しましょう	提案 ～したらどうですか	許可 ～してもよい	不許可 ～してはいけない
ʌccʌ	ʌc-	<leʌ	ʌeʌ

希望 ～したい	反希望 ～したくない	可能 ～できる	不可能 ～できない
ʌ-ʌ	ʌcʌ	ʌeʌ	ʌcl

命令 ～しろ	禁止 ～するな
ʌeʌ	ʌeʌ

レインは紫苑の文字を怪訝そうに見てきた。そりゃ 1 画の表音文字を使ってる人間からすれば何てごちゃごちゃした非合理的な文字を使うものかと映るでしょうねえ……。漢字は漢字で凄いのよ。横長じゃないから省エネなのよ。なんて言っても分からないでしょうけど。

それにしてもこの言語は合理的ね。活用も曲用もないし。屈折は過去形など、頻度の高いものに現れているだけ。人称代名詞と動詞の活用の呼応なんてものはないし。活用は意味を伝える上で必要なものしかない。かなり単純な言語だなあ。

なんにせよ学習しやすくてよかったわ。でも、異世界の言語ってこうなのかしら。これってアルバザード語なわけでしょ。辞書にもそう書いてあったし。他の国の言語はどうなんだろ。

「ねえ、レイン。アルバザードのほかの言葉って喋れるの？」

㊦㊧㊨㊩

「ムリ……だよ。私が喋ったときすっごく驚いてたもんね」

あのときのレインは異言語話者を見たのが初めてみたいな感じだった。覆面もそうよね。

「や、la meΛΛ elΛ leΛ-Λ」

「レナンって何？leΛ-Λ eΛ Cδ」

「leΛ-Λ....--， ov-....」

レインは紙に人を描き、ΛoΛ と描いた。そして横にもう一人描いて C4a と描いた。そしてその2人を丸で囲んで leΛ- と描いた。なるほど、we か。

で、レナが「私たち」だというのは分かった。今問うたのはレナンだが、彼女はレナを代わりに答えた。恐らくレナンは「私たちの」に相当するのだろう。語形も似ているし。

「JoΛ....lecΛ， elΛ Cα-Λ eΛ Cδ -μe-Z-μlelδ」

「Cα C-Λ eΛ C-， C-Λ Cα eΛ -μ-」

ええと、「それも肯定」っていうかティアは正しいって感じかな。「それも正しい……けど、それはアルカ」……アルカ？……-μ-δ」

「や」

「elΛ Cα-Λ eΛ -μ-δ」

「や， -μ-」

どうやらこの言語はアルカというらしい。では他の国はどうか。紫苑は上の 7eeCoc- という国を指した。

「elΛ e 7eeCoc- eΛ Cδ」

「-μ-」

「え、そうなんだ。じゃあ、elΛ e --....h4aaC eΛ Cδ」

「-μ-， cl 4cl -μ-」

「ん、じゃあねえ、もっと遠く行こうかな。elΛ e >eCe eΛ Cδ」

「JoΛ， -μ-」

「え……？本当にアルカってアルバザードの言葉って意味よねえ」

その後、どの国を指してもレインはアルカとしか言わなかった。そんなバカな……。世界中でアルカを使っているの？そんな……ありえない。エルドって本当に言語って意味よね？まさか……ありえない。ありえない。

英語だっていまは隆盛してるけど、中国語を駆逐することはできない。それに、英語がワールドワイドになったっていても山奥の村まで行き届くわけがない。

仮にしたとしても恐ろしいほど方言が生まれ、もはや英語でなくなる可能性がある。日本人には冠詞や数詞は理解されにくいから、日本人が英語を話すようになれば、恐らく冠詞や数詞の用法はいい加減になり、徐々になくなっていくだろう。

事実、英語は普及に伴ってドイツ語の持っているような格を失った。そういった言語の合理化はピジン・クリオールの際には必然だ。

待って……もし、ある国がアルカを喋っていて、ローマ帝国やモンゴル帝国以上の大きさ、すなわち世界中に広がるほどの大きさを持っていたとしたら、そしたらアルカが全世界に行くのも分かる。

それに、それだけ普及した結果としてアルカがどんどん言語として合理化されていったのもわかる。でも $\sim$ と $\sim$ のように合理化された単語ができるなんて考えられない。何か人為的なものを感じざるをえない。

人為的ということは……もしかしてアルカは人工言語？エスペラントのような？

そうだ、その手もあった。仮に世界が人工言語を採択したのだとしたら？いや……でも、おかしいな。地球じゃエスペラントは英語の代わりにはならない。

エスペラントが地球を征服するには優勢言語である英語を話す人間がその利便性を捨ててエスペラントを劣勢言語民のために選ばなければならない。

だが、そんな慈善事業を万人がやるはずがない。だからエスペラントは国際補助語にはなれても、国際語にはなれないのだ。

これはエスペラントだけではなく、すべての人工言語が抱える問題だ。もしアルカが人工言語だとしたら、世界に広まるはずがない。でも、この合理性は自然言語ではありえない。では……どうということ？

折衷案はどうかしら。つまり、アルカはもともと英語のような何らかの自然言語だったが、普及していく上で人工言語として合理的に改良された。これならありえる。発想自体はオグデンのベーシックイングリッシュと同じだわ。

でも、それを世界規模で行うにはその発想国の甚大な国力と、それを流布するための巨大メディアが必要だわ。今の地球にはない。いまだに第三国では電話線さえ引かれていない。日本とて、インターネットが山奥にまで有線で届いているわけではない。

だがこの世界では既にそれが実現されているというのだろうか。

㊦-, ㊦㊦㊦

㊦㊦㊦, ㊦㊦㊦ し-し ㊦-㊦ ㊦㊦㊦,, ㊦㊦㊦ -㊦㊦ ㊦㊦- ㊦ ㊦㊦㊦,, ㊦㊦㊦ ㊦㊦㊦ ㊦㊦ ㊦㊦㊦, ㊦㊦㊦ >-㊦, ㊦㊦㊦㊦㊦㊦

レインは紫苑の本に何やら表を書き出した。そこには -㊦, ㊦㊦, ㊦㊦, ㊦㊦, ㊦㊦, ㊦㊦ などが書いてあった。

㊦㊦㊦	-㊦>	㊦㊦>	㊦-㊦㊦	㊦-㊦	<㊦㊦	㊦㊦㊦	㊦	-㊦㊦-
㊦㊦>	㊦㊦	㊦㊦㊦-㊦	㊦㊦㊦-㊦	㊦㊦㊦-㊦	<㊦㊦-㊦	㊦㊦㊦-㊦	㊦㊦㊦-㊦	>㊦㊦
㊦㊦㊦㊦	㊦㊦	㊦㊦㊦㊦	㊦㊦㊦㊦	㊦㊦㊦㊦	<㊦㊦㊦	㊦㊦㊦㊦	㊦㊦㊦㊦	>㊦㊦

		-㊦㊦㊦-	㊦㊦㊦㊦-	㊦㊦㊦㊦-	㊦㊦㊦㊦-
㊦㊦㊦㊦㊦㊦㊦	㊦㊦>	-㊦	㊦㊦	<㊦㊦>:㊦㊦	㊦㊦
				<㊦㊦㊦:㊦-	
	㊦㊦㊦㊦			<㊦㊦>:㊦㊦	
				<㊦㊦㊦:㊦-	

「これは……代名詞の表？」

紫苑はじっくり分析した。まずは下の表だ。こちらのほうが知っている語が多い。アンが 1 人称でティが 2 人称なのは分かっている。彼がル㊦なので 3 人称、ということはエルは 4 人称となる。アルカには 4 人称までであるのか。その意味は察せないが。

ル㊦というのは 3 人称になるとようやく出てくる。そして 3 人称のル㊦がトゥ「これ」とディ「あれ」だ。となるとク㊦は有生でル㊦は無生ということだろう。

そしてトゥがフ㊦㊦と書いてあり、ディがフ㊦㊦㊦と書いてある。㊦㊦ と ㊦㊦㊦ のように、音が変換関係にあるようだ。ただし、語頭の く を除いてだが。となるとこれらは反対語なのだろう。

意味は……「これ」と「あれ」なので、近と遠だろうか。それはハッキリしないが。ただ、「これ」に対するのが「彼」なら、アルカには遠称の「彼」であるラーが存在すること

になる。これは実験してみよう。

紫苑は本に棒人間を描いて、 $\Lambda\omega\Lambda$ と言った。そして近くに棒人間をもう一人書いて、 ルウ ？と聞く。レインは肯う。

今度は遠くに棒人間を描き、今度はラーかと聞く。するとレインは予想通り肯った。よし、やはり遠近の問題のようだ。

アルカには「こ」「そ」「あ」ではなく、近いか遠いかの 2 つしかないのね。私にとってはややこしいな。物理的な指示ならともかく、代名詞は文脈指示なんかや心理的な距離まで表すので、語法を覚えるのは難しそうだ。まあ、何語をやっても日本語と違うかぎり常に起こる問題だから我慢するか。

で、下の表が $-\text{ㄱ}-\text{ㄷ}$ で上のが ㄷ ……。これはどういうことだろう。いや、上の右端に $-\text{ㄱ}-$ って書いてあるわね。つまり……これは別記ってこと？指示代名詞だけ多いから別記ってこと？ ㄷ は別記ってこと？そして $-\text{ㄱ}-$ が指示で、 ㄷ が代名詞でいいの？

いや待って……代名詞って言い方おかしいわ。トウとか形容詞として使ってたもんね。「このパン」みたいに。ってことは代形容詞……いや、あれは指示詞か。んー、トに至っては動詞にもできたしなあ。代名詞というのはダメね。何詞にでもなるんなら、単に代詞としましょう。じゃあ下の表は指示代詞で。

問題は上ねえ。トが無生で「何？」だから……アスムっていうのは疑問か。そうすると有生で疑問のネっていうのは「誰？」なわけね。紫苑は辞書をパラパラ捲った。すると誰だか知らない顔の人間が出てくる。厳格そうな風格のある男性だ。

$\text{ㄱ} \text{lec}\Lambda, \text{ㄷ} \text{a} \dots \text{ㄷ} \text{ee}, \text{ㄷ} \text{ee}, \text{ㄷ} \text{a} \text{ eㄷ} \text{ } \Lambda \text{e}\delta \text{ } \text{ㄷ}$

$\text{ㄷ} \text{a} \text{ eㄷ} \text{ } \text{ㄷ}- \text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{e}\mu, \text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{ㄷ}, \text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{ } \text{ㄷ} \text{a}\text{ㄷ}- \text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{e}\mu \text{ } \text{ㄷ}$

ええと、よく分からないけど、何か名前を言ったのね。肩書きとかいま説明したんでしよう？かえって分かりにくいのよね……。じゃあ……。

$\text{ㄷ} \text{lee}, \text{lec}\Lambda, \text{ㄷ} \text{a}\Lambda \text{ eㄷ} \text{ } \Lambda \text{e}\delta \text{ } \text{ㄷ}$

$\text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{a} \text{ eㄷ} \text{ } \text{ㄷ} \text{ㄷ} \text{a}\Lambda \text{ } \text{ㄷ}$

$\text{ㄷ} \text{ㄷ}-, \text{ㄷ} \text{a}\Lambda, \text{ㄷ} \text{a} \text{ eㄷ} \text{ } \Lambda \text{e}\delta \text{ } \text{ㄷ}$ ——という聞き方が丁寧かは分からないが、通じてはいるようだ。

$\text{ㄷ} \text{a}\Lambda \text{ eㄷ} \text{ } \text{lec}\Lambda, \text{lec}\Lambda \text{ } \text{ㄷ} \text{a}\text{ㄷ}- \text{ㄷ}$

「え、レインってユティアって苗字だったの？いや、ファーストネームの後に来るのが苗

字とは限らないけどさ……」

ただ、レインというのはファーストネームだろう。人名の配列はSVOなどの基本語順や、「～の～」という言い方の語順で大方決まる。日本語や中国語のように「AのB」、「A的B」という語順の言語の場合、ふつう苗字が先に来る。「A家のBさん」という意味が根底にあるからだ。

事実、上代の日本人はそのような名前を持っていたのではないか。山上憶良然り、柿本人麻呂然り。

逆に英語のような「B of A」の言語はJohn Smithのような語順を取る。スミス家のジョンという論理が根底にあるからだ。そしてアルカの場合、英語と同じ語順なので、レインはファーストネームだと十分予想ができる。

ただ、そもそも彼らが姓名を持てばの話だ。サダム＝フセインは名前と苗字ではない。フセインは彼の父の名だ。名に名を重ねているだけだ。だから厳密に言えばフセイン大統領というのはおかしい。そしてユティアというのがそうでないとは言い切れない。

さて、それはともかく、cJ/c は随分体系的ね。クムが有生なら l-Λ は人や動物を表すんでしょうね。ルニが無生なら f'al は物事という意味かしら。

レインは cl を指し、本に 5 人の人間を描いた。それらをすべて囲み、cl といった。なるほど、全員という意味か。そして 2 人だけ囲って Ve といった。つまりこれは部分だろう。なるほど、つまり、全体と部分ね。

次はシェカ。レインは一人だけを指差した。「一人」を表わす代詞ってこと？ありえるわね。そしてレインは他の人間にバツをつけた。つまり……特定の一人ってこと？

紫苑は首をやや傾けながらも頷いた。次はフィ。レインは目を瞑り、適当な一人を指差した。何が言いたいんだろう。誰か適当にってこととしか受け取れないけど……。つまり、任意の誰かであって特定ではないということ、かな？一応頷いておく。

次に、レインは台所からオレンジジュースとブドウジュースを持ってきた。

⑥ ʃcoΛ, ʃʒa ʃeΛ l-Λ Oeδ ⑥

勘が鋭くなってきた。これは分かる。どちらが飲みたいと言いたいのだろう。つまり、Oe はどちらかという選択を指すのだ。ただ、問題は 2 つからの選択なのか、3 つ以上からの選択なのかだ。between と among の違いに平行している。

紫苑は冷蔵庫を開け、飲み物を探した。おあつらえ向きにリンゴジュースらしき黄身がかった白いジュースを見つけた。それを取り出し、机に先のと合わせて3本乗せた。

⑥lecΛ, ʔʧa ʊeΛ ɪ-Λ 0eδ ㊦

⑥ʝ--, ʌɔΛ ɪ-ʊ ɪcʊɔɔ-ʌe㊦

通じた。どうやら3つ以上でもいいらしい。これで0eは選択で決定だ。

ところで、ラッシュというのは何だろう。

⑥ɪ-ʊ eʃ ʔɔδ ㊦

⑥--....>>....ʃc ʊeΛ ɪ-Λ ʔɔɔ,, ʝɔΛ ʔʧa ɪ-ʊ ʔɔɔ,, ɣ-ʌ, ʔʧa ʊeΛ ɪ-Λ -ʌe,, ʝɔΛ ʔʧa ɪ-ʊ -ʌe,, ɣ-ʌ, ʔʧa cʊʔ ɪ-Λ ɪec,, ʝɔΛ ʔʧa ɪ-ʊ ɪec㊦

「つまり……望むとか欲しいってこと？ ʌɔΛ ɪ-ʊ >- >eɪʔ....ʃc-δ」

⑥ɣ-, ʃc-, el ʃeʌʊ ʝeΛ ʝɔ-㊦

なるほど、そのようだ。あと、今は「そう、正しい。あなたはそう言える」のように言ったと思われるが、主語がʔʧaでなくelだった。

そのように言えるのは私だけでなくこの世の誰でもだから、四人称のelというのは総称のyouやtheyのような使い方をするのもかもしれない。

⑥h--, ʔʧa -ɪʌ- ʋ-l, ʊcɔʌ㊦

レインは代詞の表に戻ると、aを指差した。これは有生と無生の区別がないようだ。

⑥-, ʃee, ʔcʃ ʌɔΛ ʊ-ʊ -ʊ ʃ-ʊ ʔ-ɪ>㊦

すると本に文字を書き出す。

0, 1, ʌ, ʔ, 0, ʃ, ʃ, ʝ, Δ, ɪ

これは……何？ あ、辞書の表紙で見た字だ。レインは手を握り、ウーといった。次に指を1本立ててʔɔといい、2本立ててʃ-といった。そうか、これは数だ。ここでは人差し指から立てるらしい。始めのがゼロで、次が1か。おお、この辺りはアラビア数字と同じではないか。しかし後の字形は似ても似つかない。

数だと分かったが、読みが分からないのでレインの吐息を耳に入れていた。それによると0~9はa, ʔɔ, ʃ-, ʋc, ʋ-l, ɪcʌ, ʔcʊ, ʌɔɪ, ʃeʌ, ɪɔʊというらしい。4以降は規則的にɪʌʊの子音が順繰りに付いている。

十はʃɔɔで、11はʃɔɔʔɔ。日本語と数え方のシステムは同じようだ。

百はʃ-lで、千はʔɔʃ。

一万は JeΛ というらしい。千と区別しないと……。位取りは 4 桁ずつなので、日本語と同じようだ。

日本語と違い、一万というとき 7oJeΛ とは言わず、単に JeΛ と言うようだ。

「数に関しては日本語同じ数え方だから、私にはやさしいみたいね」

さて、そうすると代詞のウというのはゼロということになるわね。なるほど、何もないから有生も無生もないってことか。代詞としては nothing に当たるようね。

よし、これで代詞と数については覚えたわ。もう何でもござれね。

さて、時間は……10 時か。それにしても、あの字はなんなんだろう。

「ねえレイン」

⊙JoΛ, 7eJ eC 4ao4a-Λ,, J- (a....>-,, 4-, ʌcoΛ, cΛ⊙

レインは本に男の絵を 2 人描く。一人は筋肉モリモリでいかにも強そうだ。もう一人は背は同じだが貧弱そうだ。

⊙la eC VceΛ,, 4-Λ la eC cVΛ⊙

「ええと、これは強弱の話？強いがヴィエンで弱いがイーヴンってこと？」

レインの立場に立てば必要なことから教えるに決まっている。アルカにマッチョなという形容詞があるかどうか知らないが、それは基本語ではなかろう。強弱のほうが重要だ。

さて、仮にそうだとすると、ヴィエンというのは肉体的な強さを表わすようだが、他に物理的な衝撃の強さや精神的な強さなどは言えるのだろうか。

紫苑は ⊙Ca eC VceΛδ⊙ と予告してからバンと机を叩いてみた。予告があったのでレインは驚かず、⊙4-, VceΛ⊙ といった。物理的な力にも言えるようだし、どうもヴィエンは強い。確からしい。精神的な強さのほうは例示しにくいので止めておこう。

⊙Ca eC ʌelK,, (aʌ, (4a ʔ-lc) VceΛ eleΛ⊙

「え？」

レインは机を叩くと ⊙ΛcoΛ ʔ-lc) eleΛ⊙ といった。叩くはバッドのようだ。⊙4-Λ, (4a ʔ-l-ʔ VceΛ eleΛ⊙

「私が「強いな机」を叩いた——って言いたいのか？「強いな机」って何だろ……」

あ、違う違う。形容詞は後置だから机には付かない。付いているのはじゃあ……叩いたのほうか？あ、そうか強く叩いたと言いたいのだ。ということはヴィエンは副詞ということか。え、副詞でも形容詞と同形ってこと？英語にもそういうのあるけど、大抵は ly を付

けて区別するよね。

そうか、アルカの場合、統語で形容詞と副詞を区別するんだ。つまり、動詞の後に副詞を置くという統語情報で *ly* の代わりとしてるんだ。だから形容詞と同形でもいいんだ。いや、でも早計だ。ほかの副詞を知りたい。

紫苑は歩き出し、*ʔaʔa laʔeʔ* と言い、レインが頷くのを待ってから早足で歩き *ʔaʔa ʔaʔeʔ* と聞いた。

すると副詞の話をしているレインは紫苑に意図が伝わったという顔をしながら *ʔaʔa laʔeʔ ʔeʔ* と軽快に答えてくれた。なるほど、速いはタッシュね。ダッシュみたいと覚えそこ。

うん、やはり動詞の後に副詞が来るようね。

ʔeʔeʔ, ʔeʔeʔ ʔeʔ, ʔaʔa laʔeʔ ʔeʔ

レインはすぐに書いた。紫苑の予想通りの内容だった。動詞の後に書いたら一見目的語と区別付かなそうだけど、イントネーションで区別できる。副詞は弱く、目的語は強く発音されている。また、文脈や意味、及び動詞のコロケーションでも副詞か目的語かは判断できる。

紫苑はペンを回す。レインはチラと見てペンを指差し、*ʔeʔeʔ ʔeʔ - ʔaʔa* と言う。

「カズ？……あ、ペンのことかな。セフって何？」

レインはペンをくれと手を伸ばしている。あ、渡せってことね。あ、*ʔeʔeʔ* がなくても命令形になるのね。英語と同じだわ。

「ねえ、ア・ノンって何？- *ʔaʔa eʔ ʔeʔ*」

レインはペンを取り、紫苑のほうから自分のほうへ手で矢印を作りながらペンを移動させていく。*ʔeʔa eʔ - ʔaʔa, --, ʔeʔa ʔeʔ, ʔaʔa ʔeʔ ʔa - ʔeʔa* と言って今度は紫苑にペンを渡す。

ああ、つまり「私に」という意味ね。「渡す」という動詞が取る目的語はペンで、その終点がアルで表わされる、と。前置詞みたいなものか。

ʔaʔa ʔeʔ ʔa - ʔeʔa, eʔ, ʔeʔa >eʔ ʔa c ʔaʔa

ん……「私があなたにこれを渡す、は、あなたはこれを私イ、ミシュする」……。ミシュは渡すの対？じゃあ「受け取る」みたいな？

で、イは？*eʔ* の左辺と右辺が同じ内容を指してるんだから、「私はこれを貴方から受け取

る」というのが自然な解釈ね。となると、イは奪格を表わす前置詞か。

「ほかに前置詞はどんなのがあるの？」

⑥>>...?eJ, ΛoΛ し-し -し Cɔ eʧo,, ʧ-, Cəɕ

レインは紙に eJ C Λo-Λ e C lecΛ ʧa C- と書いた。私の名前はレイン=ユティアですといったところだろう。名前はエストらしい。そういえば先ほどもその単語は聞いたが、同じ文脈だった。恐らく名前がいいだろう。

そして Jol eJ C Λo-Λ e C ʧal lecΛ ʧa C- と書いた。Jɔ, ʧal とは何だろう。紫苑が首を捻るとレインはもっと文を簡単にした。

ΛoΛ e C lecΛ,, Jol ΛoΛ e C ʧal lecΛ,, ʧal lecΛ e C Jol ΛoΛ

これは……いまは前置詞の話をしている。となると、ソルは主語を表わす前置詞だといいたいのか。同じく、ユルは目的語を表わす前置詞だと。そして普段は省略されているということと、倒置可能であるということを知りたいのか。

⑥lecΛ, Jol ΛoΛ f-l-C ʧal eleΛ, C-δ ɕ

⑥C-, ʧa MeΛJ JeΛ Cəɕ

そう、そう言っているのよ……ね。なるほど。ソルやユルは主格や対格を表わすと見てよい。英語にはないな。ん？待って。主格の前置詞がソルだとすると……主格が節を取った場合はどうなるの？

⑥Jol ΛoΛ e C lecΛ e C ʧal C-δ ɕ

こういう言い方はできるのだろうか。レインはティアという。肯った。不承不承という感じではなくさも当たり前のように。良かった。

さて、問題はソルが「私がレインであるということ」という節を取れたことだ。この時点で英語のような前置詞と見るのは良くない。名詞句を取っていないからだ。

また、ソルは接続詞でもない。すると……この品詞は別途名前が必要だ。英語のような「前置詞」ではいけない。節を取るからだ。

紫苑は -, c, Jol, ʧal をまとめて4指で差しながら、⑥CəJe e C CɔJeδ ɕ と聞いた。複数Jeのはずだ。しかしレインは⑥Cee, Cee, ʧa MeΛJ <-l CəCa e C Cɔδ ɕ と修正した。

Cəの複数形はCəCaらしい。……へんなの。さっきはJeで複数だったのに。

⑥h-c, Cə e C ʧe-ɕ

「ペア？ペアっていうのね」

ペアは節も取れ、動詞の格を表わす。となると、格詞とでも呼ぶべきものだろう。

レインは絵を書いた。レインと紫苑の絵のようだ。それぞれの名前が書いてある。二人は机に座って、家の中にいる。家には矢印が引っ張ってあり、μ- と書いてある。柱時計は10時を指している。

そして $\text{lec}\Lambda \mu_e \Lambda \cup -\mu_- \cup \text{co}\Lambda \cap \Lambda \cap \text{el} \cap -\mu_- \subset \langle e\Lambda Z \rangle$ と書いた。いまは格詞を教えたいのだろう。⁶ $0_e e \cap \partial_e \delta \text{lec}\Lambda \subseteq$ レインは $\cup$, $\cap$, $\cap$, $\subset$ を指した。

「大体ね、分かるわ。レインは紫苑と辞書で……を使って？……家で、最後が分からない」

指で最後を指す。レインはその下に $c> -P>cV-10$ と書いた。ああ、時間か。10 といえ
 ここでは時間しかない。そして時間、アワーを表わす時間はアルミヴァというらしい。と
 いうことはイムというのは時点を表わすのだろう。

なるほど、オクは随伴格、コンは具格で、随伴者と道具は区別されているようだ。英語の前置詞より細かいな。数が多いのかもしれない……。カは場所格で、イムが時点格だろう。多分日常的によく使う格詞を挙げたに違いない。流石はレイン。

6. μ , γ_2 - λ - γ $\cup$ Z $\ni$ e - $c\lambda$, $\gamma_2\lambda$ $\gamma_2\gamma$ e c - μ c_6

レインは lecΛ し- μ-, しこλ ɸ-Λ し- μ-, JoΛ lecΛ / しこλ し- μ- と書いた。タンはやはり「も」の意味のようだ。ここでの新出は「/」なので、これの説明をしたいのだろう。意味は明白、アンドだろう。つまり連言だ。読みはっというらしい。

また、レインはオレンジジュースとリンゴジュースを持ってきて、*「Ya I-U Oeδ IcuC」-Z*
「cc」 と書く。ミークというのがリンゴのようだ。どっちが欲しいは分かるが、アズが不明だ。レインはオレンジとリンゴを交互に上げ下げし、*Oeδ* と聞いてくる。つまり……アズというのは選言か。

「やーやー」

そろそろ「分かった」という語がほしい。ヤーしか言えないのは微妙だ。

レインは/と-Zを指し、 $\mathbb{C}(\mathfrak{a} \mathfrak{a} \mathfrak{e} \mathfrak{f} - \mu)_{\mathbb{C}}$ といった。接続詞のことをアルキというのか。
 なるほど。

「ヤ—ヤ—……。 $\zeta_2 \mu$, $\wedge \zeta \wedge \mu \in \wedge \zeta \delta \in \wedge \zeta$ —」

6-, 142 μ eV - 11- c) 12 μ eV

分かったときはアルナというのか。

⑥39, ㏭㏭ し-し -し >- ㏭-㏭ e4o6

思い出したように言うレイン。レインはスカートを履いた髪の長い人間を描いた。女だということを強調しているようだ。ケットの下には猫の絵を描いた。ああ、猫はケットというのか。

そしてレインは ㏭㏭ Jeㄱ >c㏭, ㏭㏭ Jcc㏭- ㄱe㏭ と書いた。

シーナ？ なにかさっきも出てきた気がするが。

⑥Jcc㏭- e㏭ ㏭o㏭6

⑥-....oㄱ- ㏭㏭ Jcc㏭- >ccㄱ6 といってリングを見て明るい顔をする。

次に虫の絵を描いて、嫌そうな顔をして ⑥㏭-㏭ ㏭㏭ Jc㏭ ㄱaㄱo6 とする。虫がクポのようだが、依然掴めない。虫が……嫌いってこと？ じゃあシーナは好き？

⑥㏭ec㏭, ㏭4a Jcc㏭- ㏭cㄱㄱㄱ6

⑥4-6

⑥Jo㏭, ㏭4a Jcc㏭-....-....㏭cc㏭㏭㏭e>ㄱㄱ6

ちょっと好き嫌いのなさそうな語で試してみよう。

レインはうーんと首を捻って ⑥Sc㏭ㄱ Vcl6 といった。

「ジンス？」

⑥㏭㏭ e㏭ Jeㄱ ㏭-㏭ Jcc㏭- ㏭cc㏭㏭㏭e>ㄱ -Z6

「エン・セル？ ああ、知らないってことね」

そりゃそうよね。冷蔵庫が好きかなんて聞かれても判断しようがないわ。

となると、やはりこの語は好き嫌いを表わすみたいね。

⑥Jo㏭, ㏭4a Jcc㏭- ㏭o㏭ㄱ6

⑥4-, ㏭㏭ Jcc㏭- ㏭4a, しc㏭㏭6

えへへ、と照れる。レインは穏やかな顔で照れもせず見てくる。好きという意味におおよそ当たっているとしても、意味合いが全然違うのかもしれない。語法の違いが一語一答式の翻訳に壁を作る。

⑥Soㄱㄱ6 と言ってレインは先ほど書いた ㏭㏭ Jeㄱ >c㏭, ㏭㏭ Jcc㏭- ㄱe㏭ という文の下に、 ㏭㏭ Jeㄱ >c㏭ ㏭e Jcc㏭- ㄱe㏭ と書く。上のとイコールだと言いたいようだ。

ということは.....I know a woman と She likes cats を言い換えたものだから、I know a woman who likes cats って言いたいのかな。日本語からじゃ分からないけど、英語か

らなら分かりやすい。というか構文がまったく同じね。つまりこれは関係詞か。le は主格の関係詞、と。先行詞が物の場合はどうなのかな。

紫苑は $\Lambda\alpha\Lambda\ c\Lambda\ lec\ le\ \text{し-}\ ele\Lambda$ と書いて本を見た。 $\text{㊦c-}\delta\text{㊦}$ と聞くとレインは肯う。先行詞の有生無生に関わらず、主格は le で良いようだ。

レインは $\Lambda\alpha\Lambda\ Je\mu\ >c\Lambda,,\ Vc\gamma\ Jcc\Lambda-\Lambda\ la\ >c\Lambda$ と書き、 $\Lambda\alpha\Lambda\ Je\mu\ >c\Lambda\ le\ Vc\gamma\ Jcc\Lambda-$ と書いた。ははあ、これは対格の関係詞を説明したいのだろう。

だが待てよ、主格も対格も le ではないか。もしかして格に関係なく le を使うのだろうか。だとしたらそれはもはや関係詞ではない。中国語の「的」と同じだ。どうもアルカには関係詞はないのではないか。文法的に見ると、この le は接続詞と呼ぶべきだろう。

次にレインは $\Lambda\alpha\Lambda\ c\Lambda-\text{c}\ >c\Lambda,,\ \Lambda\alpha\Lambda\ <c\text{f}-\text{c}\ >cc\gamma\ -\ la$ と書き、 $\Lambda\alpha\Lambda\ c\Lambda-\text{c}\ >c\Lambda\ le\ \Lambda\alpha\Lambda\ <c\text{f}\ >cc\gamma$ と書いた。「私は女を知っている。私は彼女にリンゴを与える」を「私はリンゴを与える女を知っている」にしたってことね。

今回は与格 - の目的語である $>c\Lambda$ が先行詞に来ている。le は与格の関係詞の役目を果たしている。だが、主格や対格のときと同じく、le のままだ。やはりアルカに關係詞はないようだ。

面白いのは関係詞節中の動詞の時制が過去から現在になっている点だ。そこを指して念を押すように発音するとレインはティアと肯った。どうも書き間違いではないらしい。

従属節の時制は主節の時制との対比で行われるのではないか。リンゴをあげたときと女を見たときが同時な場合、従属節は現在形になるようだ。

では、もしリンゴをあげたのが見たときより前だったら？大過去はどう表現するのだろうか。

「レイン、今日って何ていうの？」

$\text{㊦c}\delta\text{㊦}$

「ええと……確か過去は ses とか言ってたわよね。「過去」を名詞として使えるかわからないけど……」

紫苑はこう書いた。

$\Lambda\alpha\Lambda\ c\Lambda\ >c\Lambda\ c\gamma\ (\alpha\mu,,\ \Lambda\alpha\Lambda\ <c\text{f}-\text{c}\ >cc\gamma\ -\ la\ c\gamma\ Je\gamma$ と、 $\Lambda\alpha\Lambda\ c\Lambda\ >c\Lambda\ le\ \Lambda\alpha\Lambda\ <c\text{f}-\text{c}\ >cc\gamma$ だ。

$\text{㊦c-}\delta\text{㊦}$

$\text{㊦c-}\text{㊦}$

なるほど、いまのところ仮説は正しそうだ。

レインは la eŋ >cΛ,, ΛɔΛ >cʌ-ŋ >ccŋ c la >cΛ,, la eŋ >cΛ le ΛɔΛ >cʌ-ŋ >ccŋ と書いた。

なるほど、「彼女は私がリンゴを受け取った女だ」か。奪格にも le は使えるようだ。

紫苑は試しに ʔa eŋ l-ʃ Λɔ-Λ le ΛɔΛ ʔ-ʌcŋ eleΛ と書いて、バンと机を叩いた。レインは ʔɥ-, ʔc-, ʔɥa eŋ leʌeʌ と書いた。どうも褒められたような空気だ。

さて、関係詞に当たる接続詞も分かったことだし、あとは何かな。あといくつか品詞があるのか分からないけど、まあ大詰めに近いよね。

それにしてもどの品詞も合理的にできてるわ。文字も簡単だし。

ただ……。紫苑は時計を見る。近寄って、文字を指す。

ʔh-ŋŋ eŋ ʔɔʃʌ

ふるえ音には慣れていないため、大げさに発音してしまう。

レインは ʔaʔa h-ŋŋ eŋ -ʃ>cV-ʌ と答えた。

ʔaʔa h-ŋŋ で「これらの文字」という意味か。やはりコソアドのような指示詞は前置されるらしい。

ところでアルミヴァってなんだろう？あ、さっき一時間を意味してた単語ね。

ʔla-Λ eŋ 1ʃ >cʃʌ

「るあん？」

ʔla ɔ la,, ʃɔΛ la-Λʌ

「彼と彼。で、ルアン？……つまり、la の複数形ね？で、彼らは……ええと、イチニ……12人のミール？え、これ、数じゃなくて人なの？」

ありえるか。英語でも月の名前には人名が含まれているではないか。July 然り、August 然り。

ʔlaʃe eŋ ʔɔ, ʔee, ʌeʃʌ

ʔeΛ laʃe ʔ-l la-Λ >cl ʔɥa eŋ >cΛʌ

「ん？「私が女」、「ルセでなくルアン？」……ええと、女言葉だとルセでなくルアンを使えってことかな。やっぱ laʃe はダメなのね」

なんだか色々やっかいだなあ……。英語でいうところの they が2種類あるようなものね。

ʔ-ʃ>cV- eŋ >cʃɔŋ le V-ʃ-ŋ ʔee>ʃ c> ŋ-V-ʃʌ

えと、アルミヴァはラヴァスのときテームスをヴァスしたミロクである、か。ああ分からない。

ヴァスとは何か聞くと、レインは2人の人間が剣を持って戦っている絵を描いた。多分、戦うという意味だろう。

ⒺⒸee>J eⒸ Ⓒoδ あ、違うか。戦ったんなら lae か。ネーネー？Ⓔ

Ⓔla eⒸ...Ⓒ-δ)- Vcl Jo<...l-cZ e lee>J...Ⓒa eⒸ lc< A-Ⓔ

レインは自信なさげに首を振る。しかしすぐにハッとして辞書を引き、テームスの項を見せる。そこには絵が出ていた。それは……何かの塊だった。おぞましい絵だった。角の生えた動物と人間のキメラのような生き物や、裸の女や、筋骨隆々な男やらがひとつの塊の中に身を半分埋めながら、犇めき合っていた。

「ルウって……言ったよね」

これ、生きてるの？え、この塊がテームス？何かを吸収してるの？この人たち、出ようとしてるように見える。でも逃げようというよりは、出発しようという感じがする。顔があまりに禍々しいからだ。この禍々しい塊と彼らは同化し、そしてなお分離しようとしている。それは出発を思わせた。これは……逃げようではなく、どこかへ向かおうという感じではないか。

これがテームス……これと戦ったのがアルミヴァ？そうか、これは架空……神話なんだ。ってことは。紫苑はアルミヴァを引く。するとやはり絵が出ていた。きっちり数は12人。皆様々な姿をして描かれている。新古典主義を思わせる描き口だ。紫苑の口に合う。誰が書いたのだろう。この世界の巨匠はどんな人たちなのだろう。俄然、興味が湧く。

つまり、この時計の文字は彼らを表わすシンボルマークだということなのね。そして彼らは神話上の神なんだわ。こちらは神聖に描かれているから恐らく神。そうか、ミロクというのは神なのね。

で、テームスというこの悪そうな塊が悪、と。正邪のハッキリした対立があるのね。アフラマズダとアーリマンの対立を持つゾロアスター教を髣髴させるわ。

ⒺlecΛ, eJⒸ la-Λ eⒸ Ⓒoδ Ⓔ

ⒺeJⒸ la-ΛⒸ ⒸcJJeⒺ

「ん？la-Λの所有格はla-ΛⒸっていうのね？彼らがルアンで、彼らのがルアント。うーん、規則性に乏しいなあ……」

レインは咳払いをし、指差しながら順に答えた。1時からだった。

⑥ JecAelJ, CccCei, 3ceA, AeM>eJ, 7leeVel, 7-lZ-J, V-M<-AC, V-MZ3A, Cc7A3, <eAZel, Ae6M-, 73A33Ce6

なるほど、1時から始めた訳が分かった。アルミヴァの12神は12人いて、当然1人目から数えていく。そうすると0番目のアルミヴァというのは存在しない。だから1時から始めたのだ。最後のコノーテという神は0時でもあるが、それ以前に12時なのだ。

紫苑は時計の文字をもう一度見た。そして本に書き写す。なんだろう、もはやこれは異世界に行きたい日記ではなくなっている。アルカの学習書、そして異世界の記録。私だけの異世界体験記録。そうだ、これはもう体験記なんだ、ひとつの書物なのだ。

「決めた。いまからこの本のタイトルは『紫苑の書』。私だけのアトラス旅行記」

⑥>>86

⑥C2, C2 eC lec e Cc3A6

レインは黙ってこくんと頷いた。

紫苑は紫苑の書にアルミヴァをまとめて書いた。

†	‡	ℓ	ℓ
JecAelJ	CccCei	3ceA	AeM>eJ
‡	C	†	ℓ
7leeVel	7-lZ-J	V-M<-AC	V-MZ3A
ℓ	ℓ	ℓ	?
Cc7A3	<eAZel	Ae6M-	73A33Ce

さて、そうするとあの壁にかかっている表の文字が気になってくる。あれも何かを象徴する文字なのだろうという予測が付く。

「なんだろう、あれ。昨日と光ってる文字変わってないし。たしかパプシュとかいってたな」

「-δ (c)uel -c -uec,, c-l (a e) eJ >cYa c (c)uel,, (ee, (a eJ --VcU cΛ,, γe- <-Λ c> Jcl,,
(ee, (a)u,, -Λuog

レインは席を立ち、パプシュに寄る。

「>>δ Z-l, (a le --VcU,, u> eJ >Yauec leC -uc -ca c> (c)uel eYodδ g

ぶつぶつ言うレイン。

「lecΛ, θ-θu eC (c)δ g

「-lJ -θc- Jel-l c θ-lC,, -, (ee, (a eC uc< u-lC (Yag

「>>δ g とレインの口真似をしてみる。

「<cJ, θ-JJod <cJ eC >elJel,, γcC e...lee, uc< >e,, --, MeΛJ -u (c) eYodδ g

レインは時計に寄った。今は11時前。レインは針を回しながら<cJ, <cJと繰り返した。そして一周回し、夜の11時にし、さらに回し、12時になったとき、γeJcθといった。1日といたいのか？違う、1日24時間だとしたら、2周目の11時で止めないとおかしい。これは……12時を境にしているということは、明日といたいのだろう。

今度は紫苑が回す。11時に戻してフィスといい、1周戻し、まだフィスという。そのまま左回転で0時まで戻し、その少し11時寄りのところでレインを見た。するとレインは「(c)uelg」と答えた。なるほど、昨日は(c)uelか。手した。これでいいということだろう。

レインはパプシュの光を指してフィスという。そうか、これが今日か。

なるほど、ということは、これはカレンダーか。

……え、グレゴリオ暦じゃないの？そうか、暦はグレゴリオとは限らないんだ……。

この暦、1週は7日ね。一月は35日。違う、上の段は色違い。ってことは多分これは曜日の文字。じゃあ一月は28日か。

色違いの赤い文字を指し、レインは「la-Λ eC Jod>,, θcC e lee>Jg」という。とりあえずソームというらしい。曜日を表わすのだろう。

「c l-Λγ, Vel>, e)V-, J-cC, (eeVe, feeZel, clV-, θ-MCg

うんうんと頷いてその場で覚える。なるほどそれがソームとやらの名前か。紫苑の書に書き留めておく。

Vel>	e/V-	J-cc	leeVe	eeZel	cIV-	3-PC

⑥Jcc> e' leδ ⑥

⑥lee>J⑥

⑥lee>J e' leδ ⑥

⑥Yalc-Λ e lee>J⑥

⑥>>...Yalc-Λ e' le⑥

⑥eΛ le lee' c>, Yalc-Λ e' -IJ el lcVl,, -...V-⑥

レインはscle という項を辞書で引く。そこには家系図が書いてあった。どうも家族という意味の語のようだ。中心が自分になっているようだ。その中にユリアンはあった。2 対になっている。図を見る限り、ユリアンというのは娘息子のことのようだ。つまりは子供。紫苑は親族名詞を覚えておいた。

ということはデームスはデームスの子供ということか。じゃああの絵にあった禍々しい同化しかけた者たちのことを指すんだ……。

では、ソームの下にある 28 の字は誰を指すのだろうか。

⑥JcΛ, la-Λ e' leδ ⑥

⑥la-Λ e' l-Λcc>, l-Λcc> e' >ec' l -lee⑥

⑥>ec e' cδ leδ ⑥

⑥c>, e' c->, J-->, >ec e'....-....⑥

レインは家系図を指し、la e' scle, 3c' e Jec> という。

⑥3c' e' cδ ⑥

⑥-->, >cc> e' V-Λ>, Me' c-Λ e' V-Λ>⑥

⑥Y-, Y-r⑥

⑥JcΛ, >cc> e' 3c' e V-Λ>⑥

「つまり種類ってことね。じゃあ家族はセイムの一種だと」

レインはソームのエルヴァを指す。⑥e/V- e' >ec e Jcc>, Y-Λ Jcc> e' 3c' e Jec>⑥

ソームもセイムの一種で、エルヴァはそのソームのメイだ。つまり、上位概念下位概念

みたいな感じ？でもそれはピットか。すると、さしずめメンバーとチームといった対立になるのだろうか。セイムがチームでメイがメンバー。一応いまのところはそうしておこう。矛盾はない。

⑥>>, JoΛ I-ΛCcj eC >ec e -ΛeC⑥

⑥4-,, C-I C4a MeΛJ -Λ >ec C -ΛeC⑥

「メイ・エ・アシェットじゃなくて、メイ・タシェット？何が違うの？」

⑥ol VeC cCea VeJCo, el 4ol eΛ ee C-I Ceu,, oV-....3>....<--I C -ΛCe o <--I e <le-⑥

「ん？」

⑥3>....leΛ- eΛ CcleJ eJc I eC 7cC c VeJCo Λ4-....,, oV-....oV-....eleΛ⑥

レインは机を指差す。

「エレン、机ね」

次に机の脚を指し、Z-> という。

「机の脚はザムというのね」

⑥4-Λ Cα eC Z-> C eleΛ⑥

「ザム・テレン？机の脚と言いたいのか？」

次にレインはスカートの裾を少し上げ、自分の脚を指して Z-> と言った。

「人の脚もザムなのね。てゆうか、脚きれいな、レイン。背ちいさいのに、脚長っ……」

⑥Cα eC Z-> e lecΛ,, Z-> eeeee lecΛ⑥

エの部分強調する。レインの脚と言いたいようだ。机の脚の場合はザム・テレン。

「了解。「の」にあたる言葉が、有生の場合はeで、無生の場合はrなのね」

紫苑の顔を見てレインはほっとした顔をする。そして椅子の脚を指して、⑥Jee Cα eC Z-> e 77c⑥ といった。

「あれ？無生なのにエを使うの？あれ……もしかして私……間違ってる？アニメシーの問題じゃないの？」

となるとほかの選択肢は……なんだろう。エレンはrで、レインとスキーはeになる。これらの共通点は？

「……そうか、音だ。エレンのように母音で始まる単語にはrを使うのだ。ははあ、子音一文字の単語って変わってるとは思ってたけど、そういうことなのね」

紫苑はにこっとして頷いた。レインに伝わったらしい。

㊦で、もともとアシェットの話だったよね。JαΛ -レeㄱ eㄱ ㄱㄹㄹㄹ

㊦Jec> le V-J-ㄱ ㄱee>J c> -ㄱㄹㄹㄹ

「え、じゃあこの人たちも神話のキャラなのね。なるほど、全部神話でできてるわけか」

レインは28人の名を読んでいった。頻繁に使うのか、略名らしきものまで教えてくれた。

紫苑は紫苑の書にそれを書いてまとめた。

ℜ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄱㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ
ㄹㄹㄹ-	ㄹㄹㄹ	ㄹㄹㄹ	ㄹㄹㄹ	ㄹㄹㄹ	ㄹㄹㄹ	ㄹㄹㄹ
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄱ-ㄹㄹㄹㄱ-	ㄹㄹㄹ-	ㄱ-ㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱ-ㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ
ㄱ-ㄹㄹㄹ	ㄹㄹㄹ-	ㄱ-ㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱ-ㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄱ-ㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹㄹㄹ
ㄱ-ㄹㄹㄹ	ㄱ-ㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹ	ㄱㄹㄹ	ㄱㄹㄹ	ㄱㄹㄹ	ㄱㄹㄹ
ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ	ㄣ
ㄱㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹㄹㄹ-	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹㄹㄹ
ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ	ㄱㄹㄹㄹ

なるほど、これはカレンダーだったのか。しかし昨日と今日は同じ日を指している。なぜだろう。故障したのかな。

グレゴリオ暦だと一月は 30 日くらいだから、毎月曜日日付がズレる。例えば 1 月 1 日が月曜の場合、2 月 1 日は月曜日にはならない。

一年は 365 日のようで、13 カ月分、つまり同じ表が 13 回続く。違うのはソームの上の文字、月を表わす文字だけ。月は ㊦ の文字で終わっている。

これは……曜日無しの特異月か。1年に2日だけ曜日のない日があるのか。ということは何年経ってもリディアの日は常にヴェルムの曜日ということになる。面白い。合理的だ。

けど、この世界は一年が 366 日なのかしら。テームスの日は閏年じゃないのかな。

同じ要領で、日はセルというらしい。

「で、結局テーマスの目は毎年あるの? |ecl, JpΛ Cα Jel eC....-....cl J-|Cδ |

「え、ええと……」

「へえ、面白い暦を使ってるんだねえ。あんまり曜日の意味がない気がするけど、多分、あるってことは有益なんでしょうね」

時計は11時を過ぎていた。随分勉強したものだ。紫苑ははあっと大きく息を吐いた。つられてレインもする。目が合って、あははと笑う。男だったら苦笑でもするところなのだろうか。男心はよく分からない。でも、自分はかなり男脳だと思う。かといってこの場面で苦笑する気にはならないが。

ලෙස, ඒවායේ පිටත පසුපසට

৬৮-৯৮৪৬

レインは箱の絵を描いて、中を ϕ 、外を Γ と書いた。なるほど、家の外を見てみた
いかということか。

64-6

၆၆၁, ၇၁၂ လက်ခံ

レインは紫苑の手を引いて玄関へ行く。紫苑は紫苑の書を手に持つ。玄関は日本家屋のように一段低くなっている。

そういえばレインは室内履きを履いている。スリッパのようなサンダルのような、そんな靴だ。

そして玄関には外履きらしき靴が置いてある。日本ともアメリカとも違う。日本は家の中では靴は履かない。アメリカは家でも靴なので、ふつう靴は玄関には置かない。服と似たような扱いだ。アルバザードはその折衷というか、どちらでもない。

GeX, hel, C42 CcP 1-2/6

レインは紫苑の足を見ってくる。紫苑は靴下しか履いていない。

6-9eA, A3A,, >>....f eC C4a Ccl la0- l eC >4aI - A3-A 3A 7-clcJ,, J3A, C4a f eA 4cl lc-lJ
 A3-A6

レインはサンダルを出してきた。これを履けということらしい。まあ、レインとはそんなに体格が変わらないし、足の大きさもみたところ同じくらいだ。サンダルなら大丈夫だろう。

紫苑はサンダルを履いた。サイズは問題ないが、サンダルでなければ入らないだろう。

レインは玄関を開けた。外は庭だった。ガーデニングはほとんどないが、かつてあった形跡がある。いまは庭は若干荒れ気味だ。レイン一人ではしょうがない。……誰か住んでいたのかしら。そう遠くない前に。

レインは左手をドアにかざす。いま、何をしたのだろうか。鍵は？あれ、そういえば鍵穴がない。左手の腕輪みたいのが何かしたの？あれが……鍵？インテリジェントキーみたいな？

左手には椅子とテーブルがあった。庭で本でも読みながら腰掛けたいものだ。テーブルの上には透明なボウルがあり、表面がキラキラ光っている。中には水が入っているようで、なぜか水面に鏡が浮かんでいて、それが光を反射している。あれは何だろう。

玄関までは数十歩。日本の住宅よりも広い。門は立派な造りで、アーチまで付いていた。アーチに至っては紫苑の背丈よりも遥かに高いところにある。学校の正門にもアーチがあるけど、あれと同じくらいの高さかな。

玄関を出て少し歩くとそこは通りに面していた。昨日の夜とは違って人っ子一人いない。ただ、道路があるだけ。民家もあるが、人通りは皆無だ、奇妙なくらい。ここが死んだ街であるかと思わせるくらい静かだ。

だが、空を見ると天気は良く、冬だというのに暖かい。時間がずれていなければ今は12月のはずで、寒いはずだ。ましてレインの地図からすると日本より緯度が高いはずなのだが。恐らく偏西風の影響だろう。西側には大洋だったし、ここは内陸で大陸の東側だ。まあ恐らく他の原因もさまざま関与しているだろうが。あと、空気が日本より湿っている気がする。過ごしやすいなあ。

レインが道を指して<αΛ< という。恐らく道路のことだろう。

ⓈⓂΛ, leΛ- laγeJ <αΛ<, Γc-δ Ⓢ

Ⓢγ-, Γc-Ⓢ

ⓈleΛ- laγeJ - Γδδ Ⓢ

ⓈΓee Γee, eΛ Γδ ΓeΓ ->, leΛ- γδμ ->δ eΓ Γc-Ⓢ

Ⓢγ-Ⓢ

Ⓢ-lΛ-Ⓢ

「うん、-lΛ-。了解したらアルナね。わかったわ。で、「どこに行く」はコル・アム、と」

ΓcJΓ Ⓢh>....la -lΛ-J μ-Λ eγδ....Ⓢ

「ジョル、ジョル ->δ」

「>>...<cJ, cl -le e' cJ >cl >elJel,, ジョル...ジョルδ」

「いや、私に聞かれても何言ってるんだか……」

「ジョルδ,, leλ- ジョル ジョルδ」

「ジョルδ e' cδδ」

「ジョル ジョル -l- e λc-l」

「カルテはシアルのアルカで大きいソクルなのね。-l- e' cδ」

レインは立ち止まると紫苑の書に 3 人の絵を描いた。背が順に高くなっている。一番高いのを指して「la e' ジョル -l-δ」という。なるほど、背が高いはジョルで、-l- は恐らく最高、ね。じゃあ……。

「ジョル la e' ジョル eλ -l-, 4-δ」

「h--λ, 4a JeJ l-λ -Veλ Je'e,, la e' ジョル -Veλ」

なるほど、最低は -Veλ というようだ。

「ジョル, λc-l e' cδδ」

「λc-l e' cV- -Jλ-δ」

「cV-δ」

「-...cV- e V-λγ e' >ccγ c lcJcγ c Jeeδ」

「ああ、オヴァは「例」のことね。つまりアルナみたいなところをシアルという、と。首都や街みたいなものかな」

「ジョル e' cδδ」

「3>>δ」

困った顔のレイン。

「あ、いいよいいよ。行けば分かるよね」

15 分ほど歩くと、4-, -la e' ジョルδとレインは言った。そこはあまりに広い公園だった。なるほど、ソクルは公園のことか。で、カルテは公園の一種。

それにしても大きな公園だ。公園というよりむしろひとつの街ではないかと思うほどだった。もっとも、電車が走っていたり車が走っていたりするわけではない。だが、あまりに広大だった。入り口がどこかも分らない。いつのまにかカルテに入ったという感じだ。

近くの立看板に地図が書いてある。紫苑は近付いて見てみる。

㊦cΛ, Cα eC μ- leΛ-Λ㊦

「レナン？私も家の仲間扱いなの？ありがとう」

レインが指差した家は地図上では見えないくらい小さかった。それだけカルテの大きさが伺い知れる。ウチの高校が何個入るんだろ……。何個どころじゃないかも。白岡ニュータウンがいくつ入りますかって話よね。

カルテには店舗が見える。普段店が構えられているだろうことが分かる。今日はどこも閉まっていて休みのようだ。

カレンダーからすると今日は新年なのではないか。リディアの月、リディアの日。これってカレンダーで1年の始めなのではないか。ということは正月に当たるのだろうか。

しかし日本の正月とは随分違うものだ。日本では店は休日が多いが、外で風揚げをしたりして遊ぶ。こんな廃墟のようになりはしない。

途中にはトイレがあった。日本と違って大きくて清潔感があるので一目では分からない。が、なぜか中には入れないようになっていた。今日はトイレまでお休みなのか？変なの。

2人はベンチに座る。天気が良い。見晴らしも良い。カルテとやらは木々が多く、中々良い自然環境だ。だが、通りに人がいないのが甚だ不思議だ。

「なんで誰もいないのかな。なんでって何ていうんだろ」

どうやって「なぜ」を知りたいかを伝えよう。いや、それはかなり難しいのではないかな。むしろこういう場合、相手に「なぜ」という言葉を出させる方法を考えて、それっぽいのが出たら検証するというやり方がいいだろう。

㊦ΛαΛ JccΛ- >ccγ㊦

㊦-, 4-δ ΛαΛ C-Λ Jα㊦

あれ、終わっちゃった。ソというのは代動詞だろうか。まあ文脈的にそうだろうな。でなきや賛成するとか、そういう感じだろう。

㊦lecΛ, ΛαΛ >cγJ l-Λ㊦

㊦-, 4-δ >cγJ Cδ ΛαΛ Ceμ l-Λ Cα,, Cα> leeV㊦

㊦-, Cee Cee, ΛαΛ Jeμ l-Λ -μγ-㊦

㊦>>...C4α Jeμ l-Λ Cα VeCδ㊦

ヴェットとは何だ？単語？文法？分からない。「なぜ」なんて言葉、いつ出すんだろう。ああ、ショッキングな言葉のほうが出るかも。突拍子もない意外な言葉だと咄嗟になんで

って言うかも。よし……インフォーマントとの関係は重要でも、しょうがない。レインを信じよう。

“Λ...ΛαΛ eΛ JccΛ- -μγ-ε

“eθθ -|- eJδ ε

“|- eJδ ρa eC ρoθ ρa eC ρoθ ΛoΛ l-Λ-ρ ρa,, ΛoΛ JccΛ- -μγ-,, ΛoΛ JccΛ- -μγ-ρε
するとレインはこちらの意思を汲み取ってくれた。

“-, ρYa Jo|J l-Λ ΛoΛ MeΛJ "eJ" cS "-|- " JeCe,, -|- cS eJδ ε

“>>δ cS eC ρoδ θcC e -Zδ……あ、ちがった、θcC ρ -Zδ ε

レインはリンゴとオレンジの絵を描いて、-Z と描き、どちらか片方選ぶ絵を描いた。しかし cS には片方かあるいは両方選ぶ絵を描いた。

なるほど、強選言と弱選言の違いか。論理的な言葉だ。地球だとフィンランド語がそういう言語だった気がする。

つまり、今レインはアラとエスのどちらが云々と言っていたのだろう。

アラというのは……ララかとも思ったが、何度か文頭で聞いたことがある。どうも、語気が荒いときに使うようだ。では、「なぜ」の候補としてはむしろエスのほうが。

“eJ eC ρoδ ε

“el ρol eJ c> el Jeμ l-Λ >-Λε

マンを知りたいときに使うもの。……これが why だとするならマンは理由……かな。よし、試してみよう。

“lecΛ, eJ ρYa JccΛ- >ccγδ ε

“>-Λ ρa eC -Λε

どうもその予測で良いらしい。実に異言語話者に優しい言葉だ。

でも本当にこれが「なぜ」でいいのだろうか。逆になぜか答えづらいものを聞いてみて試してみるか。

“eJ....--....ρYa eC >cΛδ ε

“>>....>-Λ γ--Λ Λo-Λ <cC-ρ - ΛoΛ ρal -μ>e l eC ρoγ oΛ eμγ -l -μ>e le l--l Λo-Λ <cC-ρ - ΛoΛ,, JoΛ ΛoΛ lcVI-ρ ρa ρoΛC ρcl hc>eZ o Λ-J-eZ OeΛ,, -lJoΛ ΛoΛ eC >cΛε

「……なんだか激しく答えが返ってきたけど……。eJ って「なぜ」でいいのかなあ。私なら、なんで女なのって聞かれてこんなに長くは答えられないな。もしかして文化の違いとか、アルバザード人って日本人より「なぜ」に対して真剣に回答するのもかも……」

「んー、ごめん、レイン。よく分からないわ」

んー、それにしても天気がいい。ここでウトウトしていると気分が晴れやかになる。そもそも念願の異世界に来て興奮冷めやらぬところだが。

しかし、それとは裏腹に悩みもある。着替えだ。いきなり制服のまま連れてこられたので、着替えがない。異世界用の鞆も持ってきていないので使える荷物が無い。これは困った。歯ブラシだ食事だトイレだけは運良くいただけたが、着替えはない。制服なので、ずっと着ていてもしばらくは大丈夫だなどと思うなかれ。私が心配してるのは、制服じゃなくて、下着のほう。

男がズボラで下着を 3 日変えなくとも、そこまで不潔には思わない。いや、男のトランクスの中は未知の世界なので、ハッキリと断言はできないが、少なくともそういうイメージがある。だが、女で 3 日というのはどうかしている。

日によって異なるが、女の下着は下り物で汚れやすい。中心部は 2 重になって補強されているものだ。だが、それではガードにならないため、下着を汚さないためにパンティーライナーを付ける。女が全員付けるわけではないが、紫苑は付けることにしている。

生理のときは無論ナプキンが手放せないが、生理が終わってもパンティーライナーは常に付けている。恐らく一月のうち、完全に下着だけで過ごすのは数日だろう。紫苑は生理周期が一定で、ほぼ必ず毎月一度来る。

初潮は中 1 のときだった。鈍痛を腹に抱えながら家に帰ってトイレに入ったら来た。洋式の便器が鮮血に染まったので、一瞬病気が切れ痔かと思って焦ったが、次の瞬間初潮だと気付いた。

あまりに突然だったが、学校で習っていたので、ああこれかという冷静な態度でいられた。母親に報告し、父親にも自分から言った。父親は淡白で、冷たくはないが、少し気まぐすうにしながら「おめでとう」と言った。

これから閉経するまで毎月苦しむことがおめでたいのかと不思議に思えた。しかし、そういう穿った見方をすることを見抜いていたからこそ父親の態度は素っ気なかったのかもしれないと思う。

それからというもの、毎月口座の引き落としのように正確に来る生理だが、紫苑は比較

的軽いほうで、2 日目でさえちょっと重苦しいなという程度だ。異世界に行くときに負担にならずにすんだと随分喜んだ覚えがある。

だが、それでも生理になれば血は出るし、そうでなくとも下り物で下着が汚れる。それを 3 日も履き続けるのは心理的に不可能だ。困ったなあ。とりあえずティッシュか何かをもらって挟んでおくしかないか。

けどまあ、レインも女の子だし、靴のことも気遣ってくれたから、その辺は多分気遣ってくれるんじゃないかなあ……どうだろう。最悪、洗濯と替えの下着さえあれば下着が汚れるのは我慢するんだけどなあ。

と、考えていたらトイレに行きたくなった。紫苑はトイレを指して ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ と言った。レインは笑って ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ と言った。

トイレはベークというのか。いや、トイレっていうのは分かってるのよ。言葉を知りたいんじゃないで、リアルに行きたいのよ。あ、そうか、日本語と違って「トイレに行く」イコール「トイレを使う」ではないから通じないのか。コロケーションの違いね。ってことは……。

$\text{ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ}$

$\text{ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ}$

正月はメルセルというらしい……が、そんなこと今はどうでもいい。

$\text{ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ}$

$\text{ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ}$

「はあ、 ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ね。いや、それはいいです！」

$\text{ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ ᄇᆞᆫ}$

セテがやっと分かった。確認だ。確認で使うのだ。だが、トイレ！

紫苑は立つと、歩きだした。レインも付き添う。速めに歩いて家へ戻る 2 人。レインは玄関で左手の腕輪をかざすと、中に入る。やはりあれが鍵のようだ。

中へ入ると紫苑はトイレへ向かった。思うにこの世界に来てから初めてだ。よく今までもったものだと自分で感心する。トイレは洋式だとは確認済みだが、紙が備え付けでなかった。その代わりウォッシュレットのようだ。使い方は絵で説明されているので分かる。

一旦外へ出て、ティッシュを探す。しかし無い。うろうろしているとレインが近づいて

くる。紫苑は鼻をかむしぐさをした。するとレインはああと言って 2 階に行き、ハンカチを持ってきた。

残念だけど違う。そして時間がない。紫苑の書の紙を取り、ぺらぺらさせながらハンカチを見せる。レインは材質が紙だと推測し、今度こそティッシュを持ってきた。木の箱に入ったもので、あまり使われた形跡がない。

㊦JeΛC㊦

㊦Cee, JeeMe㊦

どうも感謝の意が大きいときはセーレというらしい。いや、違うかもしれない。ティッシュ一枚で相手に大きく感謝しろとはいまい。食事まで何も言わずにくれたのだから。

恐らく、自分で頼んだか否かの差ではないか？自分で頼んだらセーレで、相手が勝手にしてくれたらセントとか……。一応矛盾はしないが、確証はない。いや、それよりトイレだ。

中に入って内側から鍵をかける。部屋と同じ、つまみ式だ。紫苑はスカートを捲くり、顎で挟んで下着を下ろしてライナーを見る。ほんのり黄色くなっていて、もう使えないなと分かる。

だが、丸めて捨てようにも、ゴミ箱がない。かといって、人の家でこんな失礼なものを捨てるのはどうかと……。紫苑は丸めてティッシュで包み、制服のポケットに入れた。非常に嫌な感じだ。

そして便座に腰を下ろす。和式でなくて良かった。まして夏場でなくて良かった。当たり前だが、風呂に入っていない状態でしかも暑いと、和式は自滅の場所となる。和式は構造上、しゃがむ前に股があつた空間に顔がきてしまう。

これが夏場で生理中だとかなりキツイ。自分でうっと思うし、前の女子が入った後でそう思うこともある。

どんなものかというのと……。そうね、女子トイレに入ったときの匂いを濃厚にしたものかな。

ましてその発信源が自分である以上、多少の嫌悪感を拭いきれない。

今は風呂に入っていないので若干きつい。わりと女子トイレ。生理でないのがせめてもの救いだ。予定日はまだ先だが、生理はストレスがかかると早まることもある。入試のとき、一度早まったことがあった。まして今回は異世界だ。いつ来てもおかしくない。

紫苑は客観的に見て文句なしに美少女だ。清潔で綺麗なイメージがある。だが、あくまで人間だ。臭いところは臭い。

排泄もするし、口内には無数の菌がいる。唾液の分泌が滞った朝起きは起床時口臭が起きる。空腹時も同様だ。アポクリン感染のせいで脇だって洗わなければ臭うし、性器の匂いも当然強い。

特に処女なので性器の洗いが雑で無頓着だ。そのため、こと性器のメンテナンスに関しては風俗嬢より酷いだろう。

美少女といわれる女子高生は特にこれらの事実を隠そうと、躍起になって匂いを消している。彼女らの通った道に残るのは日髪日風呂の清潔な匂いのみ。隠された脇や性器は匂いがかがれないし、幼児や被介護者ではないのだから排泄に誰も立ち会わない。

当然、皆が良い匂いだと勘違いする。特に男は。その辺が痴漢を増やしている気がするのだが、と紫苑は思う。

一方、紫苑は無駄なデオドラントが嫌いだ。人間は動物だ。見てくれが良い個体でも菌が繁殖すれば理論的にシビアに臭い。汗腺部、口内、性器、足など、美少女だろうが老人だろうが等しく臭い。

そして私はそれをムリに隠すのが嫌い。虚飾はイヤ。人間は動物。臭くて当然。それを気にしすぎる日本人がおかしいのよ。まあ、まったく気にしないのもどうかと思うけどね。

紫苑は用を足すと、ウォッシュレットを使い、少し乾かしてから立ち上がる。ライナーの代わりにティッシュを敷き、それからパンティーを履く。ボタンを押して水を流す。この辺りは日本と変わらないようだ。手を洗って外へ出る。

⑥ucɔʌ, ʌeʌ ʌccʃ h-ʌʌ⑥

⑥h-ʌʌδ⑥

⑥|eʌ- ʌeʌ-ʃ ʒɔ< ɔ <-ʒʌ ɔ ʌ-ʒʌ ʌeʌeδ⑥

⑥ɣ-⑥

⑥>- eʃ <--ʌ ʌeʌ⑥

⑥-ʌʌ-, ʌɔʌ, ʃaʌ, h-ʌʌ ʌeʌeδ⑥

⑥ɣ-, ʌaʌa, ʃʌa >-cʌcʌ) "ʌeʌe" ʃ-(ʃʃ- -ʌ) ʃeʌ⑥

⑥>>δ⑥

⑥VcΛJ-, lc h-μ, JcΛ daa⑥

「朝ごはんがファーストでお昼がハルシュで……ルーシュって？」

⑥<--し, h-μ, daa⑥

「ああ、ルーシュが夕飯ってことね」

⑥daa⑥ el lc h-μ⑥

⑥scδ⑥

レインは後ろを指し、lc と言った。前を指してJ-, 右を指して>c?, 左はl-Λ?, 上がh-lで下が>cl だという。なるほど、方向か。ルーシュは昼食の後ろというのはおかしいので、lcは空間だけでなく時間にも使えるということか。つまり、昼食の後がルーシュ。

⑥leΛ- leΛ Jcl daa⑥ c> cδ⑥

⑥eΛ c> c> c-l c>⑥

「いつ」はオムというらしい。

⑥4-Λ leΛ- leΛ daa⑥ c> daaJ, -lKc...leμ>eJ Vc-⑥

え、4時に夕飯？早くない？ヴィアって何？聞くとレインは時計の針をいじり、4時にしてleμ>eJ といった。そしてそこから少し時間をずらしてleμ>eJ Vc- といった。過去にしても未来にしてもどちらもVc-。つまり、aboutとかおよそに当たる語なのだろう。時間だけでなく基数にも使えるのだろうか。

⑥c> leμ>eJδ⑥

⑥>δ -, h--Λ, c4a lcJ daa⑥ el feeJ Jeceδ fee, lc daa⑥, el leΛ lale⑥ c> V-μZcΛ⑥

「え、何？」

⑥leΛ- leΛ lale⑥ c> V-μZcΛ Vc-⑥

あ、はあ！そうか、そうか。ルーシュが文字通り夕飯だというならドゥネッシュが夜ご飯か。どうも1日4食のようだ。3食という先入観のせいで誤解してしまった。

⑥<cJ, leΛ- leΛ lcc c4h h-μ >cl >elJel⑥

レインは手を洗って料理を始める。紫苑は何をすればいいのかわからないまま、手を洗い、できるだけ手伝った。冷蔵庫を開けて一々これは何だと説明してくれるので名詞ばかりが増えていく。

オレガノやマジョラムといった香辛料の類まで一々教えてくれた。l-el、->elc- というらしい。マジョラムを知っていても、紫苑は良いとか悪いという単語さえ知らない。

形のないものは基本的なものでも分からず、形のあるものは頻度が低くても入ってくる。机の上で学んできた語学とは余りにも違う。そりゃそうよね、フィールドワークなんだから。

当然紫苑は異世界に来ることを考慮してフィールドワークにも目を向けていた。フィールドワークに必要なのは何か。机上の言語学とは少し違う。まず、健康な体。特に胃腸。当地の食べ物で一々腹を壊したり倒れたりしてはいられない。

もっとも、紫苑は鉄の胃腸を持ってはいないが。胃が痛いとかそういうことはないが、緊張すると腹痛がするので、繊細なタイプなんだと思う。

あとは強靱な精神力。異世界などまったく情報ゼロの状態で行くのだから、どんな目に合うか分からない。フィールドワークの場合はそれより遥かに事前情報があるが、それでもストレスに耐えうる強靱な精神力がなければやっていられない。留学くらいの気持ちでいると痛い目を見る。

夏目漱石がおおよそ 100 年前にロンドンに留学したとき、彼も憂き目にあった。物価が高いので安アパートを借りて、本代に充当した。完璧主義の傾向があった彼は英語の個人レッスンを取っていたにもかかわらず、自分の英語力のなさ、特にリスニングとスピーキングを憂えた。実際の能力は羨ましいくらいなのだ。

さらに漱石はストレスのため、精神状態も崩れていた。滞在の最後のほうは世間との接触よりも個室での読書に耽っていたわけだから、あまり留学の意味をなさなかったのではないと思う。

無論、この留学経験が後の彼の文学に大きな影響を与えたことは間違いない。が、それでも本人が後にイギリスでの 2 年は人生で最も辛い 2 年だったと語っていることを考慮すれば、彼がどれだけの憂き目にあっていたかが分かる。

留学でこの有様だ。正直、フィールドワークはもっとキツイ。都会に行かないこともないが、未開の地に行くにはかなりの覚悟がいる。紫苑が自分で幸運だったと思うのは、ここが現代的だという点だ。その上、いまのところ言語を覚えるかなり理想的な環境が整っている。

フィールドワークで重要なもののうち、見逃しやすいものは歯だ。特に上顎門歯、つまりは上の前歯が重要だ。この歯が言語音の発音にかなり関与してくる。

“Λ-Λ-a”と笑う。嬉しいといったのだろうか。良かったといったのだろうか。何かを感じると言ったらしい。

“-, hel,, (a-, (a e(<ccΛ- (4a,, (4a >-l lc- Ve((-μ)- 7o77o (a”

レインが差し出してきたのは開いた辞書。そこには単語のリストが載っている。

「何これ？」

レインは首を傾げる。「何これ」は何度か言ったはずなのに、レインは反応しない。何度も同じやり取りをすれば、こちらの日本語も少しは通じるはずだ。

アトラスに来ているのでしょがないと思っているが、レインは一切日本語に妥協してくれない。ただの 1 語も覚えようとか聞き取ろうという気はない。むしろ、紫苑が日本語で話すのを嫌がっているかのようだ。

そりゃそうか、だって世界中がアルカだもんねえ。マジョリティであると同時にこの世界のスタンダード。恐らく正義とまで考えられてるんだろうな。現代のアメリカを見ればアルカが見える気がするもの。

“(a e(7oδ”

“Ve(e(- 7o<,, (4a >-l lc- -μ)- 7o77o (a”

語の……リストか？

“>-lδ”

レインは紙に人の顔を書いた。頭の中に脳を書き、Ve(という語を矢印付けて脳の中に入る。そしてそこに >-l と書く。次に脳内から Ve(が出ていく絵を描き、7el と書く。なるほど、覚えると忘れるか。つまり、これ使ってアルカ覚えてってことね。

ところで、ソフとは何だろう。形容詞のようだが……。名詞や動詞は形や動作が伴うことが多いので分かりやすいが、形容詞は難しい。性質や状態なので、目に見えるものが分かりやすい形でその性質を帯びていないと掴めない。

“JeΛ(, lecΛ,, ΛoΛ >-l 7cl (a(a Ve(”

“eΛ >-l 7cl (-(>-l <-Λ”

“>-l <-Λ。うん、ΛoΛ >-l <-Λ (a(a Ve(r”

“4-, -(e(r”

通じている……。今のはわりと難しい文じゃないの？いや、ただの第 3 文型といえばそれまでだけど、でも凄い。今朝までは全然喋れなかった言語なのに。机の上とはかどり方

が全然違うわ。フィールドワーク万歳。

昼食を終え、食器を片付け、歯を磨く。その後、レイン監修の元、単語リストの勉強になった。語形の短いものが多い。マジョラムなどは載っていない。どうも子供向けに作られたものか、あるいは異言語話者のために作られたものだろう。

世界中がアルカだというのは分かった。だが、それでも異言語がすべて消滅しているとは考えにくい。政治的・経済的な理由でアルカを世界中が採択したというのならまだ理解の範疇だ。

だが、仮にそれをしたとしてもメディアの届かない孤立した山村や、経済力のない第三国や、資源に乏しい土地などは放っておかれ、当地の言語が生き残るだろう。いや、先進国とて、家庭内や地方では当地の言語が残るはずだ。

日本で想像してみるといい。アメリカが超強行的な手段を取り、生きるか英語を学ぶかというような選択肢を迫ったとしよう。何だかんだいって日本人は従うだろうが、まず能力として中年以降には厳しい。

ピジン的に話せるようになったとしても、監視の行き届かない家庭内や山村部ではどうか。都市部の企業内では英語が喋られるかもしれないが、家庭や地方では日本語が残るだろう。

仮にその事情が何世代も続けば徐々に日本語は駆逐されるだろうが、山村部では日本語だけでの生活でも困らないため、日本語は残るだろう。日本でさえそうなのだから、第三国ではいわんやだ。

となるとアトラスだって世界にアルカしか言語がないわけがない。だからきっとこれは異言語話者のための単語リストなんだろうな。

単語リストには見出し語とその説明が書いてある。分かりやすく、多くの項目に挿絵がついている。

辞書本文を見てみる。こちらは英和辞典みたいな構成だ。しかし、この辞書は英語の辞書と違い、可算不可算といった情報や名詞動詞といった品詞情報が書かれていない。それらしき略記号が見当たらないのだ。フランス語のような性別マークも書かれていない。

習った感じ文法が単純だから、辞書に文法タグがあまり必要ないみたいね。

可算だ不可算だというのは書いてないが、その代わり OED のように単語に初出やら造語

者やら語源やらが書かれている。もちろん読めるわけではないが、年号らしき数字や全体的な書式が OED などに似通っているので、そうだと推測できる。

面白い辞書ね……。まあ、今は読めないからこっちの単語リストが優先ね。初級者向けの単語帳なのかな。辞書についてるなんて親切ね。

単語リストには語源欄などがない代わりに、学習者が理解しやすいように、絵などが描かれている。

⑥h-- , ΛαΛ Ιο Ιcl Ae Υcl <-Λ ΓαΓα <lec Γ-Ι ΓαΜε

独り言を言うレイン。こちらに言葉が向いていないことは視線とスピードと声量で分かる。

そういえばレインは話すときに必ずこちらの顔を見る。かといってアメリカ人と違って目は見てこない。鼻だか口だかの辺りをぼんやり見ている。相手の顔を見ずに話がちな日本人には目を見られるとかなり威圧的だが、このくらいならむしろ丁寧な感じがして好感を持てる。

ところで、単語っていくつくらいあるんだろ。ハルムの表をレインが書いてくれたが、あれと同じ順番で見出し語は載っている。やはりあの順序が文字の順序のようだ。

母音が最後に来ているのは紫苑には馴染めない。日本語の辞典はアから始まるからだ。けどまあ、子音から始まるといえば韓国語もそうだから、そんなに珍しいものでもないか。

紫苑は指で 1 ページ分数え、ページ数をかけた。1 ページ当たりの単語数は例文や説明や絵によって変わるが、概算すると少なく見積もっても 3000 語はある。

⑥ΓΥα >-Ι ΙeΛ clδ ε

⑥>>δ -, Υ-ε

⑥h-- , ΙαΛ Γα >cl Ι Γο-Ι, ΓΥα Ιδδ ε

⑥ΛαΛ eΛ -ΙΛ- ΓΥαε

ようやくアルカで分からないと言えた。Ι-ΙΛ- が目的語に人を取れるのかは知らないが。だがレインはふつうに会話を進めた。間違っていないようだ。

⑥ΛαΛ Ιο Γα >cl Ι cl Γο ΙelΓ olΓ- -VeΛε

レインはカレンダーを指し、1 カ月全部をぐるっと囲んで 7000 VeΓ とやった。

3000 語って VcΓeΛ VeΓ みたい。基数は前置されるということね。へえへえ、興味深いわ。

ほう。1 月で 3000 語というノルマか。あるいは予想か。面白いわね。

アルカの文法はだいぶ分かってきた。語順は SV0 で修飾は後置。メジャーな西洋語には見られないわね。フランス語でも **grand** なんかは前置だし……。

格詞に当たる前置詞があり、後置詞はない。両者が混在するフィンランド語などとは違う特徴ね。

近いといえばインドネシア語かしら。名詞や形容詞に格変化がないのも似ているわね。あっちは動詞に活用がないけど、アルカは過去形などが活用する。この点では若干インドネシア語とは異なるか。

アルカは修飾は後置なのに基数は前置なのね。そういえばインドネシア語は基数は前置するわね。で……確か序数になると後置だった。そうよ、統語で基数か序数か区別できる言語だった。英語みたいに **th** を付けなくてもいいんだわ。ってことはもしかして……。

᳕᳚ee, lec᳕, ᳕᳚ ᳕el᳚ e᳚ ᳕el᳚ ᳚᳚ e ᳚-᳕᳚ ᳚c-᳚᳚

᳚᳚-, ᳚c-᳚ と、感心した顔のレイン。

やはりそうだ。この月は一年の 1 番目の月かと聞いたのだ。そしてそれは正しい文法のようにだった。そうか、文法はインドネシア語に近いのね。街並みは南仏なんだけどなあ。

よし、折角レインが辞書を貸してくれたんだ。覚えなくっちゃ。

それにしてもたった 3000 語覚えるのに 1 月ですって？少女の柔らかい頭をなめてもらっちゃ困るわ。

紫苑は挑発に乗りやすい。もちろん、レインにそのつもりはないのだろうが。紫苑はカレンダーを指すと、明日のㄱを指し、᳚᳚000 Ve᳚᳚᳚ と豪語した。

レインはきょとんとして ᳕᳚᳚ e᳚᳚ ᳕᳕᳚ ᳚-᳚ ᳚cl cl Ve᳚ -᳚᳚-᳚ ᳚e᳚᳚ ᳚cl᳚-᳚᳚᳚ と、難色を示した。

おうおう、否定してるわね、その空気は。じゃあやってみせようじゃないの。たとえ日本語訳がなくても、私はやるわよ。そのくらいの意思がないと異世界なんて来れないわ！

紫苑は机に戻ると、辞書に見入った。レインはしばらくじっと見ていたが、やがてため息をついて 2 階へ去り、少しして本を持って戻ってきた。そして本を読みだす。自分の分のような。何を読んでいるのか少し気になる。

集中力の強さが紫苑の特徴でもある。真剣な顔をして語を理解して覚える。できるだけ日本語で理解せず、例文などからアルカで理解する。何語の学習でもそうだが、これが一

番良い方法だ。母語の干渉を避ける上では必然的なものだともいえる。

日本語で「犬」という言葉を覚えたとき、親が犬の定義を覚えてくれたわけではない。街やテレビや本で見る犬を犬と聞かされ、例示されただけだ。そして次に犬を見たときには自分から犬と言う。前に得たデータと照合し、類推した結果だ。

ときには間違えて猫を犬と呼ぶかもしれない。子供の中にはその間違いをするものが実際にいると言語学で知った。親が「あれは猫だよ」と否定すれば、類推に使うデータがより精密になり、次回は間違えないようになっていく。

犬の定義を聞かなくとも、あるいは dog などと間接的に置き換えられなくとも、犬という語を獲得することができる。人間はこうして母語を覚える。これは凄い能力だと思う。だからできるだけ紫苑はその方法を使っている。

もちろんその方法にも功罪はあるわけだから、プラスだけでなくマイナスもある。例えば知ったつもりがそうだ。

「すべからく」を「必ず」だと誤解している人間は多い。助長が本来は悪い意味でしか使わないことを知らない人間も多い。それは単に文脈で意味を理解しているからだ。特に前者のほうが実体が掴みにくい語で、その傾向が強い。

紫苑は時折どうしても理解できず、しかも今すぐ知りたいものについて、レインを呼んで意味を聞いた。それ以外は分からなければその単語のまま覚えることにした。形のない形容詞の類はそういったものが多い。

㇪- という語はよっぽど基本語らしく、説明を読んでも分からない。説明のほうが難しい語を使っているように思える。だがこの辞書の賢い点は、そういう語は素直に絵や例文に任せている点だ。

ただ、㇪- には絵がない。読んでいると形容詞の類のようだが、例文やコロケーションがたくさん載っているのもそのまま暗記し、コロケーションしている名詞に傾向を見つけ、どのような語かを考えることにした。

どうも、プラスの意味で使っていて、有生無生を問わず使えるようだ。時計が動いていればケアで、止まったりするとアーヴィッシュだそうだ。

他にも色々用例が出ていて、それを見るに、どうもケアというのは、誰かや何かがあるべき状態にあることを指すのではないかと考えた。

日本語にはピッタリ来る日常的な形容詞がない。赤いとか熱いなどはどちらの言語にもあるだろうし、意味の範囲もそんなに変わらない。だが、このような形容詞はそもそも存在したりしなかったりと差が激しいのが問題だ。

⑥ ㄅㄅㄌ, ㄱㄲㅏ ㅏㄷ ㄱㄷ ㅏㄷ ㄱㄷ>ㄱ ㄱ

「え？」気付いて見上げると、レインの顔が夕日で赤らんでいた。日が暮れかけていた。もうそんな時間か。読み耽ってしまった。

しかし今レインは何と言ったのだろう。夕飯食べようとか、そんな感じだろうか。

「あ、ええと、夕飯の時間かな？まだお腹すいてないけど。--....ㄱㄲㅏㄷ

⑥ ㄱ-, ㄷ> ㄴㅏㄷ ㄴㄷㄱㄱ ㄱㄲㅏㄷ

シェン・シートで「食べましょう」ね。

ふっと紫苑は笑った。実はこの辞書を見ていて分かったことなのだが、レインはどうも自分に女言葉を教えていたらしいのだ。

レインはさっきから「食べる」を ㄴㅏㄷ と言っているが、辞書の記述を見る限り、ㄴㅏㄷ は「飲む」という意味だ。「食べる」は ㄱㄲ。

ところが、女はどうやら ㄱㄲ を使わず、食べるも飲むも ㄴㅏㄷ を使うようなのだ。日本語で「食う」は男しか言わないのと少し似ている。

「言う」という基本語に関しても、男は ㄱㅏ で、女は ㄱㅏㄷ というらしい。

ほかにもこういうのは色々見つかった。レインは口癖のように ㄱㅏㄷ とか ㄷ> というが、どうも ㄷ> というのは ㄱㅏㄷ の語気を弱めたものらしい。接続詞ですらアルカは女言葉が存在するということだ。

「しかし」は ㄱ-ㄷ だが、女は ㄱㅏㄱ を使うことが多いらしい。同じくレインがよく言う ㄱ-ㄷ は、女言葉だと ㄱㅏㅏ とも言うようだ。

レインは ㄴㅏㄷ のことを ㄱㄲ とは言わないが、ㄱ-ㄷ と ㄱㅏㅏ はどちらも使っている。どうも接続詞は語気の強さに応じてどちらも使うようだ。

⑥ ㄱ-, ㄴㅏㄷ ㄴㄷㄱㄱ ㄱㄲㅏㄷ, ㄴㅏㄷ, ㄱㅏㄷ ㅏㄷ -ㄷ-ㄱ

⑥ >ㄱ ㄱㄲㅏ >-ㄴㅏㄷ ㄱ-ㄱ ㄱㅏㅏ, ㄱㅏ ㄱㅏㅏ> ㄱ -ㄷ-ㄱ ㅏㄱ ㄱㅏ-ㄱ

⑥ ㄱㅏㄷ ㄷ- ㄷ-ㄲ, ㄱㅏㄷ, ㄱㅏㄷ ㅏㄱ ㄴㅏㅏㅏ ㄱㅏㅏㅏㄱ

⑥ >>....ㄱ レインは少し面食らった顔で口を押さえる ⑥ ㄱㄲㅏ -ㄱ -ㄷ> ㄱ> ㄱㄲㅏ ㄱㅏㄷ ㄱㄷ -ㄱ>-ㄱ

「ん、早くて聞き取れなかった。ごめん、もいっかい。ええと、lee<δ lee<δ」

㊦ㄥㄣ- lee<, ㄥㄥ Ꞥeㄥㄥ Vcl >e ㄥa ㄥcㄥ -ㄣㄣ ㊦

レインは早口で言って、くすくす笑う。

……なんだろ。

㊦ㄥㄣ- ㄥㄥ -Ꞥ Vcl >cㄥa Ꞥec-Ꞥeㄥㄥ >cl ㄥa e> -ㄥㄣ -ㄥㄣ-㊦

わざとなのか、レインは早口で喋りながら席を立つ。

「むー」

うなりながら紫苑も台所に行く。レインは戸棚からラスクを出し、紅茶を入れる。なるほど、4食といっても夕飯は軽食なのね。3時のおやつみたいなものか。

しかし、紅茶の葉が多いわね。どこの銘柄か知らないけど。ここの風土だと地図を見た限り紅茶はあまり取れなそうだけど……輸入品かしら。

逆にコーヒーが全然見当たらないわね。ミルクもないし、豆どころかインスタントも見当たらない。カップに付いてるのは明らかに茶渋汚れだった。紅茶はかなり頻繁に飲むみたいね。ここの家だけの問題かもしれないけど。

ただ、不思議なのはレインの歯が白いこと。これだけ飲んでもステインが付かないのはよっぽどカルシウムを豊富に取っているのか……それだけじゃムリね。じゃあ歯医者に定期健診に行ってるのかな。あればの話だけど。でもまあ、あるでしょうね、この文化レベルなら。

レインに気付かれないうように彼女の口を見ていたのだが、紫苑と同じく虫歯がない。少なくとも治療の跡が見えない。

机に戻り、軽食を取る。ラスクを指す紫苑。

㊦-, ㄥa eㄥ ㄣㄣㄣㄣ

「オポ、ね。コカに比べればポップに音が似ているけど、有縁性は見られないか……」

㊦lee, ㄥㄥa >-ㄥ <-ㄥ ㄥ-ㄥ ㄥaㄥa clㄥㄥ ㊦

ㄥaㄥa は女言葉で「これら」という意味。男はㄥaㄥe と言う。3000語も覚えるのと聞いているようだ。

㊦ㄥ-ㄥㄥㄥ ㊦ と言って辞書を見る。このリストにも載っている。無形の語の説明文はㄣㄥ という語で始まる文を持つことが多い。意味的に「もし」のようだ。

面白いことに従属節が主節に先行すると、時制が主節との対照でなくなるようだ。対照

すべき主節がまだないから、対照のしようがなく、発話時と対照するという事だろう。
面白い、が、少し複雑だ。

「もし」で始まる説明が多いので、この辞書は COBUILD 英英辞典に似ているといえる。
あれと書き口がよく似ている。

あの方法は適切に利用すればかなり力を発揮する。紫苑のようにアルカの基本語さえ知らない場合、意味を定義されても分かるはずがない。だから絵を使うのだが、無形物の場合はどうしようもない。そこで、COBUILD 式の出番となる。

シャンというのはどうも真実のことを述べているようだ。ol lc ec >cl, 7a loJ ec >cl, JoA lc 7a u-A などと書いてある。

loJ というのは調べたところによると「自分」を指すらしい。つまり、「もしあなたが女で自分は女だといえ、あなたはシャンを言うことになる」という意味だ。

この状況から考えて、シャンは真実とか事実とか本当という意味だろう。そして本当ではなくむしろ真実なのだろうと思うのは次の例文による。

ol S-A ec Joop, JoA "S-A ec Joop" ec u-A. S-A を調べると、絵が出ていて、空のようだ。また、Joop は青。つまり「もし空が青いとき、「空が青い」はシャンだ」と言っている。これは客観的事実なので本当か嘘かではない。従ってシャンは本当ではなく真実と訳すべきだろう。

また、色が出てきたので調べてみたら、色は lc> というらしい。基本色が載っており、全部で 10 色のだ。<cJ, VeJ が白黒の 2 対で、h-J, Joop, lcc-, c>el が赤青緑黄の 4 対。そして leCce, 7--<, loK, leSe>>e< が茶桃灰紫の 4 対。英語の基本色と比べるとオレンジが抜けている。日本語より基本色は多い。

lecl, 7a ec lc lc>δ と机を指す。すると leCce と答える。うん、茶色か、確かに。
JoA, 7a ec lc lc>δ と紅茶を指す。すると意外にも leCce と答えた。え、赤じゃないの？いや、そうか。紅茶っていう字を考えるからダメなんだ。確かに紅茶は茶色い。

そうか、日本語は基本色が 4 色で、そこにプラスアルファがあるくらいだもんね。アルカよりずっと少ない。日本語は黒・白・赤・青の 4 色の中に色を収めようとする傾向がある。

赤松だって赤くはない。青黴だって青くはない。青空は青いけど、青蛙は青くない。白味噌は白くない。赤味噌も赤くない。4 色の中のどれにしていえば近いかという評価でし

かない。そこに押し込めようというのが日本語のやり方だ。

アルカもそのやり方を採用していると思う。それが自然で合理的だからだ。一々細かい色名で語るのは不便だ。

ただ、アルカの場合、基本色が 10 もあるというのが違いだ。レインが紅茶を茶色茶と呼んだのは細かく言ったわけではなく、日本人が紅茶と 4 色の中に押し込めたように、10 色の中に押し込めたに過ぎないだろう。

ではそのことをどう検証してみようか。よし、背理法で試してみよう。もしこれが間違ってるんだとしたら……。紫苑はオレンジジュースを出して、『カ ef コ Λc>δ 』と聞いた。するとレインは『c>el』と言った。

やはりな。オレンジという基本色はない。そこでオレンジを見せると黄色という。面白いものだ。続けてレインは『-, lcJc?Λc> (-Λ ef θ-JJo』という。パツソというのは何度も聞いたが、多分大丈夫的な意味だろう。つまり「オレンジ色でも大丈夫よ」という意味だろう。うんうん、こちらが厳密な色の指定だな。

面白い。ここの人たちは何でも 10 色で捉えるのだろう。日本人の場合、基本色が少ないので、4 色の範囲を超えて色名を指定することが日常的には多い。4 色に抑えようとするのは赤松などの複合語に留まりやすい。しかし 10 色もあればふつうは不自由しないだろうから、10 色の中だけに収めようとするのが可能だし簡単だ。基本色が多いということは、かえってふだんは細かい色の表現をしないのかもしれない。

随分ブランクを開けてしまった後、レインは再度『J--, (Ya >-l <-Λ l-Λ (aCa clδ 』と聞く。紫苑は『4-』と答えて食事を終え、片付ける。そしてまた辞書に集中した。

次にレインに呼ばれたときはもう日が暮れていて、いつの間にか部屋の明かりがついていた。時計を見るともう 7 時。そろそろ夕飯の支度をすべきだろうか。

そういえばトイレに行くのを忘れていた。紫苑はトイレに立つ。トイレから出ると、レインが目の前にいて、少し驚いた。

『Coδ lecΛ』

『ΛoΛ Λ- (Ya lcJ (a』

それは袋に入った下着だった。新品のようだ。レインはこれを使えとっているのか、すっと差し出してきた。

⑥ JeArc, JeArc ⑥

まさに渡りに船……というよりはレインが女同士気を利かせてくれたのだと思う。体型もそんなに変わらないので大丈夫だろう。

レインは紫苑の手を引き、洗濯機のところへ案内する。日本と同じで風呂の近くにある。水物は水物でまとめているのだろうか。台所などと近い。

レインは口頭と身振りで洗濯機の使い方を教えてくれた。紫苑はもう一度トイレに入り、下着を取り替えてから、履いていたほうを洗濯した。

レインも溜まっていたいくつかの服を洗濯機にかけた。洗濯機には乾燥機が付いているようだが、干す必要はないのだろうか。この時間に洗濯するくらいだ、恐らくその必要はないのだろう。

2人で晩食の支度をした。メルセルというのは正月で、やはり豪華なのだろうか。冷蔵庫にはかなり高価そうな食材がある。

レインの指揮でできあがったのはローストビーフの野菜盛り合わせ。そして具沢山のミネストローネ。どうやら紫苑が辞書に熱中している間にレインがこしらえたらしい。日本と違ってベーコンではなく生ハムを入れていたのが特徴的だった。

さらに鮪を出したかと思うとカルパッチョまで作りだした。紫苑はそこまで作ったことはない。ここはアルカどころか料理まで勉強させてくれるとこね。そしてバゲットを1本出し、バターを持ってきた。バターをつけるのか……。結構夜は豪勢なのね。いや、昨日はあんまり豪華じゃなかったから今日が特別なのかな。

8時ごろに夕飯となった。正直、レインのほうが料理が巧い。紫苑は敗北感を感じつつも、レインを素直に褒めた。言葉がろくに通じなくともレインは嬉しそうだった。

紫苑は料理を毎日のようにするが、メニューは簡単なもので、栄養のバランスを第一としている。簡単で安く栄養がある。これだけ。とっとと作って食べて勉強したいからだ。食べるのもさっさと食べてしまう。

だが今日は違った。ゆっくり味わって食べた。この味にはその価値がある。

食後は少し体を休ませるために歓談をした。といってもアルカができない以上、授業になる。紫苑は読んでいて疑問に思ったことを色々ぶつけた。レインは丁寧に対処してくれた。そしてまた辞書を使って勉強した。

夜というのは時間が早く経つもので、あっという間に寝る時間となってしまった。11 時くらいだろうか。レインは「Λαλ ε> ο>ο,, λο> λcλc- λccλε」と言った。寝たいようだ。紫苑も賛成して 2 階に行き、部屋に入った。

今朝入ったきり入っていない。同じ家にいたのに。中の様子はなんら変わっていない。当たり前だけど。でも、自分は変わった。一日でずいぶんアルカができるようになった。進歩だ。

カーテンを開ける。通りは嘘みたいに静かだ。だが、廃村でないことは家の明かりを見れば分かる。窓を開けて外へ出る。肌寒いけど、空気が良い。胸いっぱい吸い込む。

どうも、田舎ではないみたいね。田園は見えないし……それに家畜の強烈な匂いもしない。家畜が数キロ範囲にいれば空気が臭くなるから分かる。都会……なのだろうか。

「んー、それにしても、今日はよく勉強したなあ」

紫苑は部屋に入り、鍵をかけて照明を落とし、ベッドにもぐりこんだ。不思議なもので、レインといて生活していると寂しくないが、こうして 1 人になって暗い天井を見上げた瞬間、寂しくなる。

お母さん……どうしてるかな。心配でどうにかなっちゃってないかな。お父さんも。仕事休んだり止めたりしてないかな。そしたら困るな。あの 2 人、折角がんばって今の会社で築いた地位を失っちゃう、私のわがままのせいで。それはダメ。だから、私の書置きに忠実に動いてほしい。

でも……本当にそうされると私はあまり大事じゃないってことで、それはそれで寂しい。あの 2 人が取り乱すのを見てみたい一方で、迷惑をかけたくない自分がいる。

まいったな、だんだん鬱になってきた。頭の使いすぎかな。甘いものが足りないのかも。もしかしたらグルタミン酸不足かもね。醤油だっけ？海外出張のノイローゼの日本人に醤油を与えたら快方に向かうことがあるとかなんとか。どこまで本当か分からないけど、醤油中毒になってるってことは確かだと思う。

レインの料理はおいしい。でもはや 2 日にしてもう和食が恋しい。お米……食べてないな。パンはお腹がすぐすくよ、お母さん……。だからこの人たちは 4 食なのかな。

くすん、と、いつのまにか泣いていた。帰りたいわけではない。異世界は自分で望んだことだ。この上なく良い待遇だし、レインのことも好きだ。外人どころか異世界人なのに、初めてまともに友達になれそうだ。

でも、寂しいのは事実。紫苑はえんえんと声を出して泣いた。わざと派手に泣いた。で

も、レインに聞こえないように。なんでもない、これは誰でもかかる不安とホームシックだ。このストレスは速やかに発散すべきだ。だからわざと大げさに泣いて発散した。5分も泣くと疲れて眠ってしまった。

✕ 4

朝日というのは不思議だ。夜、鬱になっていても朝日のおかげで希望と活力が戻る。鬱病は朝悪化するものも多いが、紫苑の場合は夜に寂しさから鬱になるため、朝日は至上の薬だ。

目覚ましもないのに不思議と早く起きてしまう。時間は……6時だ。ベランダでストレッチをして外へ出て下へ行く。レインはもう起きていた。ちょうど歯を磨いていた。挨拶して入れ替わりで歯を磨く。

レインは紫苑より少しくせつ毛だ。朝は寝癖がついている。ふつうの寝癖だけでなく、静電気を帯びた下敷きを上から当てられたように髪が何本か上に立っているのが不思議だ。日本人にはまず見られない。レインは霧吹きで水らしきものをかけ、整髪する。

朝起きでもレインは可愛い。化粧もしていないから常にすっぴんだが、それでも可愛い。せいぜい顔がむくんでいるくらいか。羨ましい。紫苑は美少女という感じだが、愛玩っぽく可愛いといわれたことはない。

……いや、それは単に私の性格のせいかな……。

朝食は簡単で、シリアルだった。ようやくパン以外の穀物を食べた気がした。食後は一休みした。

Ⓢlee, lecΛ,, (ʔa le <el-Λδ Ⓢ

Ⓢ>....(ʔa ʔeΛJ JeΛ eʔɔJ -ʔʔ-,, (cΛʔ)-,, Jee (ee, ΛɔΛ eʔ <el-ΛⓈ

Ⓢʔ-, ΛɔΛ -|Λ-ʔ Ve,, (ʔa eʔ <el-Λ Jeʔe,, JɔΛ eJ (ʔa eΛ ʔɔʔ <elʔ-δ Ⓢ

Ⓢ>-Λ >elJelΛc-ΛⓈ

Ⓢ--....cʔ ɔ> (ʔa ʔɔʔ ʔcʔ <elʔ-δ Ⓢ

Ⓢʔee, (ʔa ʔ-J "cʔ"Ⓢ

Ⓢʔ-, JɔΛ ɔ> (ʔa ʔɔʔ <elʔ-δ Ⓢ

Ⓢʔ-ʔeJʔ,, (eʔ ΛɔΛ ʔɔʔ el< <elʔ- ʔa eΛ <eΛ >c| ΛɔΛ ʔ-ʔ ʔ-ʔ -ʔʔ- - (ʔaⓈ

Ⓢeʔδ ʔa le ʔeʔδ Ⓢ

「うーん、あの成績、かな？」...あの成績、かな？

「成績、かな？」...あの成績、かな？

「あ、あ、あの成績、かな？」

「あ、あ、あの成績、かな？」

「あ、あ、あの成績、かな？」

「あ、あ、あの成績、かな？」

するとレインは微笑んだ。紫苑は安心して辞書に戻った。

この日の天気は知らない。この日、世の中で何があったかもしれない。紫苑とレインはひたすらアルカの勉強をした。暇があればレインは本を読む。そして紫苑が聞けばアルカを教える。

時間が来れば人間は腹が減る。昼食を済ませ、夕食を済ませた。そして今日初めてレインが風呂にお湯を張った。風呂の入れ方も教わり、名詞も教わった。どうもアルバザードは風呂を好むらしい。シャワーもあるが、あまり使わないようだ。

風呂は日本のと比べて広く、浅い。やけに浅い。明らかに全身漬かることはできない。漬かるとすれば半分寝そべるような形になる。丸まってしゃがんで入る日本の風呂とは明らかに違う。

一番風呂というのはここでどのような意味を持つのか分からない。風呂を穢れを落とす場所と考えていけば、家主であるレインに譲るべきだ。だが、客を先に入れるのが向こうの礼儀だとしたら状況は逆だ。

レインをじっと見ていると、レインはさっさと自分で入ってしまった。紫苑を気にしている様子もない。多分、入りたい人間が勝手に入れということなのだろうか。特に順序など気にしないようだ。ここではどうやって風呂に入るのか知りたかったが、いくら女同士とはいえ、入って見るわけにはいかない。

レインが上がるのを待ち、紫苑も入る。紫苑は音を注意深く聞いていた。見れない以上、音で何をすべきか判断せざるをえない。音からすると、レインはシャワーを使っていなかった。ざあっと流す音がしたので体を洗って桶でお湯をかけて流したのだろう。当然というか、先に洗ってから入るようだ。

出てきたレインは服が変わっていた。バスローブでもなく、既に着替えを脱衣所ですま

せているようだ。そういえば彼女のパジャマ姿というのは見たことがない。レインは先ほどまでは昨日と同じ服で、シャツとブラウスとスカートと長い靴下を履いていた。だが、それは今回も同じだ。少しデザインや色が違うだけ。服にあまり頓着しないのだろうか。

ただ、昨日の服にしてもこれにしても、デザインが派手でない。そして制服のように丈夫そうだ。特に目立った汚れはないものの、1着を長く着る文化なのだろうか。

紫苑は交代で風呂に入った。脱ぐ前にレインが来て、シャンプーやリンスや石鹸などを説明した。そして手ぬぐいをくれた。脱衣所には鍵が付いていた。日本では考えられない。紫苑は鍵をかけ、服を脱いで中へ入る。なぜか知らないが、自分の家以外で裸になるのは凄く不安だ。いま紫苑は言い知れない不安を感じている。

借りた手ぬぐいを濡らして石鹸をつけ、体を洗う。髪も洗って桶で流す。風呂に入り、温まる。浅いかわりに足を伸ばしてくつろげる。それでもおよそ半身浴になってしまう。かえってこれは健康に良さそうだ。お湯は日本のものより遥かにぬるい。

レインは30分ほど入っていた。恐らく湯船には20分ほど漬かっていただろうから、半身浴をしていたと考えられる。半身浴はぬるめで20分ほどが効果的だからだ。紫苑もそれに倣い、外へ出た。

バスタオルを借りて拭き、使ったものは洗濯籠に入れておく。洗濯機があれば籠が近くにあるというのはどこでも同じなのだろうか。まあ、道具が同じならその周辺の道具の使い方も似てくるのは当然のことでしょうね。

着替えはないので制服をまた着る。レインは昨日も同じ服を着ていたので、ここでは同じ服でいても問題ないのかもしれない。でも、着替えたところを見ると、どうも風呂を境に着替えるようだ。いくら丈夫でも服は休めないと痛みが早く、着れなくなってしまう。

風呂から上がるとまた勉強し、その後、晩食を作って食べた。メルセルの祝いは終わったようで、昨日のような豪華さはなくなった。

食事中にレインは紫苑を見て、*“Cya ucM J-e,, (-l a -M -Ce c> 7eJCe* と言った。

食後、紫苑は辞書の暗記を終え、レインにテストしてもらった。その結果の凄まじさにレインは圧倒されていた。

紫苑は宣言どおり、3000語すべてを覚えた。日本語で理解できないものもなかにはあったが、それは用例などから使いどころだけを覚えておいた。何度もその語に出会ううちに、使いどころが具体的に決まるだろう。

2 日で 3000 語。日本語の対訳は無し。さすがの紫苑もこれは人生最大の努力だった。レインは拍手喝采で、異世界の人間はそんなに頭が良いのかと驚いていた。紫苑はキッパリと否定した。自分は特別だ、と。

しかしレインは嫌な顔ひとつせず、むしろ敬意をこめて凄いと言ってきた。紫苑はレイン自身、この芸当ができるのではないかと直感した。

思うにレインはかなり頭が良いのではないかと。短い付き合いだが、直感できる。見た目は可愛くておっとりして見えるが、かなり切れ者なのではないかと思う。

そして器は紫苑よりも大きいのではないかと。紫苑がどんなにしつこく聞いても怒りも嫌な顔もしないし、いつも協力的だ。怪しいくらいにこにこしているわけでもなく、かといって無愛想でもない。自然体だ。羨ましいとともに、紫苑はレインのことが好きだと改めて気付いた。昨日よりずっと好きになっている。

テストを終えともう 11 時になっていた。2 人は別れ別れになり、寝た。頭を使いすぎたせいか、精神的な疲労が大きかった。そういえば空手と剣道の訓練を怠っているな。そろそろやらないと……剣道は、ムリかな。竹刀があれば素振りだけでもできるんだけど。空手は別に制服でもいいか。でもスカートが……。スパッツがあればなあ……。あ、そうだ、あの覆面にパンツ見られたかも……。前蹴りしちゃったから。うう、やだなあ。余計なこと思いついちゃったよ……気持ち悪っ。

✕

昼食後、レインは外へ行こうと言い出した。今日のレインは面白い服を着ている。ワイシャツの上にベルのような形をしたケープを着ている。そしてスカートが面白い。前後 2 枚を紐で結び付けている。だが、2 枚は重なり合っているので歩いてスリットができてても下着が見えない構造だ。順に $\cup\text{-}\mathfrak{A}$, $\text{I--}\cup\text{-}$, $\text{I}\mathfrak{A}\text{Kc}$ というらしい。

どこに行くのと聞いたらまたカルテだという。メルセルの休みの影響でまだ店がやっていないようだ。紫苑はサンダルを借りて外へ出る。そういえば玄関は日本と違って押し戸なんだと初めて気付いた。

⑥-....lecΛ, cl....Λ- ∪cl ΛoΛ eC Z-I >cl ΛoΛ lecΛe∪ Cαδ ⑥

lecΛe∪ は動詞 lecΛ の影響相だ。lecΛ は「着る」という女言葉で、ふつうは $\cup\text{-}\mathfrak{e}$ と言うらしい。

実はこの単語、レインと同じスペルなのだ。気になって辞書で調べたところ、lecΛ というのは一般名詞で「儀式に使う神の道具」という意味らしい。それが彼女の名前の語源のようだ。

儀式に使う装身具を身に付けるという意味から、lecΛ が「着る」という意味になり、雅語として女言葉になったようだ。レインがくれた辞書は語源が細かく書いてあり、面白い。

Ⓔ>δ -, cl Λ- ㇏- ol cl ㇏a,, ㇏-l ㇏-㇏㇏ >cl cl し- ㇏㇏ ㇏- ㇏

カルテへと歩いていく。前回と違ってちらほらとだが、人が見える。会う人はチラッと紫苑を見て不思議そうな顔をするが、すぐに顔をそらした。

Ⓔ㇏-㇏㇏, l- Λ-㇏ ㇏a lecΛe㇏ ㇏-㇏ Z-l >-Λ >el㇏el Λ-㇏

Ⓔh--Λ㇏ 紫苑はこのハーンというのに慣れてきた。なるほどという深いゆっくりとした理解を得たときの言葉のようだ。基本的にレインが言った文脈に近い場面で用いることにしている。だからレインがたくさん喋ってくれないとデータがなくて困る。

レインは……どっちかというとおしゃべりではないようね。どっちかというとなんか大人しい感じ。てゆうか全体的に猫っぽい。

カルテに着くと、こないだのベンチを通り過ぎ、中心部へ進んでいく。本当に大きい公園だ。中にいると公園にいるという事実を忘れる。なのに人の気配がほとんどないのが奇妙だ。

中心部に着くと、大きな建物があつた。盛大な造りだが、ビルのように無機質ではなく、教会のように派手でもない。だが、住居ではない。教会よりは堅牢な感じがするし、装飾もそこまで派手ではない。なんだろう。

レインに連れられ、中に入る。壁に沿ってぐるっと長椅子が配置されていた。人が数人座って何かを待っている。だが受付などは一切ない。天井は派手というほどではない装飾がほどこされている。特殊な文化だ。

見回すと、奥へ通じるドアがある。人が順番にそこに入っていく。ドアから出てきた人は入り口を通して出て行く。

ⒺlecΛ, -㇏a e㇏ ->δ㇏ 囁く紫苑。ここは静かだ。皆、沈黙を保っている。待っているのは老若男女を問わず。別に病気には見えないし、共通点も……いや、服だ。服が皆変わっている。いまレインが着ているような服だ。道ですれ違った人はこんなもの着ていなかった。

これは宗教服だろうか。そうとしか説明がつかない。ここの宗教の教会なのではないか。

確か辞書によればアトラス全土を征服するのはアルティスという宗教だそう。他に宗教は認められていないという。そしてその教会はカルテの中心にあるカルテンだという。カルテンの中にはサリュというものがあるらしく、そこで祈りを捧げるという。

“-Ca eC 7-dCeΛδ”
“4-, ΛoΛ laΛ-J -Ca l-Λ- leμC”
“ΛoΛ C-Λ Jo C-<δ”
“ol C4a e> l-Λ V-lCe”
“V-lCe....-lC, C-μ-Λ C -μCcJδ”
“-C,, C4a C-μ <c >cμo7 7- <c- e Λ-Λδ”
“Cee”
“JoΛ C4a e> -C V-lCe VecI C4a KcJ Vcl VcΛl 7- -Ccl-J”
“....clθ-JJo”
“Ce μeΛJ Ca C-l Λ-J”
“4-, Λ-J”

そうこうしているうちにレインの番が回ってきた。レインは紫苑を連れて入る。一瞬周りがざわめく。2人で入るのは奇妙なようだ。

中は狭かった。せいぜい10畳くらいだ。中には石の祭壇がある。背は低い。レインは膝をついて肘を祭壇に乗せ、祈りだした。

“lecΛ, ΛoΛ μeΛJ -C Cδ”
“Cco, “ΛoΛ leμC Λ-Λ -l -μCe””
“eθδ el eΛ Cμ θelCδ”
“θelC....lala C4a JeμeJ Ca Vec -J,, 4-, C4a eΛ Cμ θelC l-Λ- e> V-lCe,, olC- -l7-, JoI Ca leμC eC θelC”

最高でも？それって「しいていえば」みたいな感じ？紫苑は言われたとおりに祈った。これで私も改宗者か。なんだか簡単だなあ。まあ、この世界でそうしなきゃ生きてけないんらしょうがないよね。レインを見てる限りそんな戒律が厳しそうじゃないし、まあ良いか。

そんなことよりどんな宗教が全世界に流布できたのかというのが気になる。アルティス教、研究意欲が湧くわー。

しばらくするとレインは祈りを終えて外に出る。紫苑も後続く。カルテンを出た。カルテンの中は光がよく通って眩しかった。あと、少し寒かった。それでも人がいた分、外よりは暖かかったが。

“-ᄃ, ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ-ᄃ

“ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃ

“--....ᄃᄃᄃ, ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ, ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ

“>>, ᄃᄃᄃᄃᄃᄃ

レインは中に戻り、紫苑は一人歩いて帰る。2度も来た道だから間違えようがない。ただ、制服でいるのが少し恥ずかしいくらいだ。

なんだか一気にアルカができるようになったなあ。レインはありがたい。インフォーマントは間違いを直すのが面倒で、伝われば良しとしてしまいがち。だけどレインは細かいミスも直してくれる。ありがたいわ。

家の門が見えてきた。そこで紫苑はふと立ち止まる。門前に誰かがいるのだ。男……。通りを歩く男とは違う。家の前を行ったり来たりと怪しい。誰だろう。知り合いならこそそそする必要はない。

紫苑は咄嗟に身を隠した。男は依然こそこそしている。背伸びして中を伺ったりしている。まさか、こないだの覆面？するとレインが後ろから追いついてきた。

“ᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ, ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ

“Zeᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ, ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ ᄃ

“ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃ

“>>....ᄃᄃᄃ ᄃ

“ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ....ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃᄃ

“ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ, ᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃᄃ

“ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃ

男は門に手をかけようとしたが、人が来たので止めて去った。数秒もしないうちに男の影は遠くなっていった。2人は時間差をおいてから中へ入り、鍵をかけた。

“ᄃᄃᄃᄃ, ᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃᄃ。

“ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃ ᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃᄃᄃᄃᄃ ᄃ

“ᄃᄃᄃᄃᄃᄃ

Ⓔeθθ eJθⒺ

Ⓔ>-Λ....I-cΛ <cΛ- c Γ->cl cYa cI ΛcΛ Γ-θ -I I-cΛ,, ΛcΛ MeΛJ -c cθ la >-Λ- laΛ-J c <c-
-Ic,, JcΛ la Jc -ΛJθ cee, I-cΛ <cJ <-Λ cYa, >-Λ cYa MeΛJ-c Vcl -μΓ- -c VeΛ cJⒺ

Ⓔ-IΛ-Γ c<- Vc-, JeΛc-Λc, lecΛ,, cYa AeΓc-c ΛcΛ JccΛ-Ⓔ

Ⓔ>>....c-I ca ec Z-I,, I- I-c c eYc <ceΛ leΛ- Jc μ-lIⒺ

Ⓔμ-lI....Ⓔ

辞書を引く。大切に価値のあるもの、しばしば高価。例えば金やダイヤモンド。つまりは宝や財宝の類か。

Ⓔ-cl, I- I-Λ-c cYa, lecΛⒺ

ⒺΛcΛθ eJθⒺ

Ⓔ>-Λ....ΛcΛ eΛ Jeμ....c-I >-Λ cYa ec -ΛΓ c I-Λc,, c-cΓ cYa μ- -ca c-c-c <cⒺ

ⒺOe+c, cccΛ, ce Ve>e> ΛcΛⒺ

ⒺθeΛc, c-I ca ec JeΛ c-ΛⒺ

ⒺY-....,, c> leΛ- Λ->c <-I,, θ-JJcθ eΛ ΛcΛ c-I leΛ- >cl cYa c-Λ ec -ΛΓ c I-Λc, cccΛⒺ

ⒺcYa....rⒺ

紫苑ははにかんだ。

2人で手分けして部屋中の鍵を確認し、その後はまたアルカを勉強した。夕食を取ってアルカ。晩食を取ってまたアルカ。今日は風呂に入らない。毎日は入らないようだ。レインはルフィらを脱がない。儀式的な服ではなく、日常でも着るようだ。

R ~

朝食後、紫苑は不思議に思ってレインに聞いた。

Ⓔc> cl Γcμ Γcc <elΓ-θⒺ

Ⓔ<cJⒺ

Ⓔeθθ JcΛ cYa Γcμ <-I V-lⒺ

Ⓔθ-JJc,, ΛcΛ MeΛJ >c- ca - cYa leΛ ΛcΛ Γcμ el< <elΓ- <Ic eΛ <eΛ >cl ΛcΛ c-c I-Λ -μΓ-
- cYaⒺ

ⒺeJ cYa ec l-S Jc- - ΛcΛθⒺ

ⒺΓcc, >cl cYa -IΓ-c ΛcΛ JccΛ-, c> ΛcΛ Λ-c Λ-Λ -IΓ <-I cYa leΛ -Ic<c--Λ,, c-I caμ, ΛcΛ

Λ- Λ-Λ ｼ ｲ-Λ ｼcl Λ-Λ ｼccΛ- ｲყа, ｼccΛ,, ΛcΛ Λ- ｲ-Λ ｼ ｾl -, ｲee, ｼccｼcc ｲყа

Ⓔh--Λ, ｼ-Λδ ΛcΛ Λ- Λ-a ｲclγ-, ΛcΛ ｲ-Λ ｼccΛ- ｲcl ｲყа, ｾccΛ

2 人は恥ずかしそうに微笑む。そしていつものようにアルカの授業が始まった。

昼食はパスタを食べた。ちゃんと茹でて作るのだ。それなりに手間がかかる。

Ⓔlee, ｼccΛ, ｲყа ｼcl ｲ-Λ <c- e Λ-Λδ

Ⓔeγδ --....ΛcΛ eΛ ｼeμ

Ⓔcl ｼ-, ｼcl e ｲყа ｾΛ-ｼ -ｲaδ ｲ- ｲ-, ｼ--c, -γ ｲყа ｾΛ-c -cδ

Ⓔ>δ ｲყа Λ- ｼcl ｾl - <c- Λc-Λδ ｾccΛ

Ⓔce, ｼel ｲ-cl, ｲcc

紫苑は苦笑する。強情だなあ、アルティス教徒は。

Ⓔh-c, -γ ｲყа ｾΛ-c -cl-ｼδ

Ⓔcclγ, ｼe >elx-c ΛcΛ -c,, ΛcΛ ｲ-Λ -c <el-Λ ｼ- <c- e Λ-Λ,, ΛcΛ -c ｾ-Z-Λ

Ⓔl-Z-Λγ ｲყа e ｲcl ｼ-cl δ

Ⓔ1γ

ⒺΛcΛ e ｲ 1γ....γ->cl, <elxc γcγ,, ｲ-cl ｲყа e ｲcl ｾ-Z-Λδ

Ⓔ-, ｲee, ｲee

そうだ、ここの学校は2歳から始まる3, 4, 5, 6 制なのだ。レインや自分の年だともう大学生だ。大学生は>-Λ--Λ だが、長いので>-Λ-と ｼc>-Λ-に分かれている。ちょうどレインと紫苑はこの>-Λ-の最終学年であるΛ-μe という学年に当たる。

ところで、アルカには組み数字という概念があるらしい。

単に1番2番といったら何番中の1番か分からない。そこで2対の中の1番、3対の中の1番という語がそれぞれにある。例えば2番中の1番と3番中の1番はまるで違う語になる。ある数の成員からなる集合において、その成員の番号を示したものが組み数字だ。

対になっている語は人名が多いようだ。例えば7の組み数字は曜日を表わすソームを使い、12の組み数字は時計のアルミヴァを使っている。これらは神話に出てくるので、ヴァアルテにとっては極めて便利で日常的なのだろう。紫苑の書にはこう書いておいた。

1:組が成立しないので無し

1/:JelC:elC,J--I
 2:-M-J-ΛJ:Jle-,eHe-,CMe-
 3:-Mcel:-Lle,<le-, -lcJ, lceM
 4:lcc<-:>cMyc, h-leJ, J-J-Λ, --le, -lJΛ
 5:V-ΛΛ:C0-M, -Mh-Λ, Λ-Mle, L-MC, laJΛ, >cM
 6:JΛ>:Vel>, eMV-, J-Cc, CeeVe, eeeZel, clV-, θ-MC
 7:ΛelC:>YaleC, -IS, laaM-, CaV-Λ, L-Λle, leeVe, VccΛe, cΛSe
 8:c<-Λ:<-c<-, θ-MΛ-, -Ccl-J, J-Vel, J-cΛ, >el>, leΛce, CcΛC, eMcΛC
 9:Jcl-L:<a-, Yaa, VcΛ, VΛ, CΛ, -VΛ, Z-Λ, heΛ, lΛ, Caa
 10:-lJc:-VelCJ, eMcΛ, CeeZeΛ, CaaΛ, <-cl-, ccMeJ, θ-lCJ, l->cΛ, l-ΛVe>, θMccJ, leVcΛ
 11:-M>cV-:JecΛelJ, CccCei, θceΛ, leM>eJ, JleeVel, J-lZ-J, V-M<-ΛC, V-MZΛ, CcJΛ, <eΛZel, le
 12:-, JΛΛC
 13:-ΛΛ:-ΛΛ, >CΛ, cMMe, M-ceΛ, SaleC, lelcc, VeJcΛ, <elΛ-, J--L, leΛ, elθcl-, >aCΛ, J-Λ-Λ
 14:lccZ-l:Yaa-, Λ-l>, eleVc, YeeOcL, Λ-lC-γ-, J-lJ-, e>cJ, cclel, -Λle, ->l, >-lJ-, CΛe, -lV-ΛΛ
 15:lccZ-
 16:>eCei:MaΛc-, Vcc<-, lccZ, <-l<-, cΛe-, hYaaOe, c>al, M-lΛM- (M-lΛ), YelΛθe, cclaa, el<, O-l
 17:-, cJcΛcJ, >eC, -MΛe
 18:l-ΛCJ:Mclc-, cVc, JlccZ, Ycl, <al>cc-, MYa, >el, M-lΛM-, Z-Λ-, θ--l, >cl<, <--V-, MaΛS, Je
 19:MeΛ, M-V-, a>CΛ-, lccΛe, MeleZΛ-, Sccl, lcΛ-, eJecΛe, eΛΛ-, -L, leeΛe, θcΛeΛ-, >-C, JΛΛΛ, J>
 20:ccM

知らない人にはとても面倒だが、慣れてしまえばかえって便利だ。何学校の何年生と言
 わなくても、スレアといえばアルバザードでは小学校の1年生だということが分かる

⑥ΛΛ C-Λ eC Λ-Mle, ΛΛ lΛ
 ⑥γ- γ-, leΛ,, SclJ, CYa eC Λ-Mle JeCe,, γ-Λ le >elΛ-C CYa -Caa,, l-l- eJ - M- ΛΛ-Λδ
 ⑥eΛ JeM
 ⑥-cl, la eC l- VcJδ
 ⑥Cee Cee, la VcJ -C....l-ΛC
 ⑥l-ΛCδ

紫苑は口を押さえた。そうか……やはり……。

⑥>δ⑥

気の毒な表情で問う紫苑。

⑥>->-、c> ΛoΛ -c lcδ,, 4-Λ 3-3-, l22μγ-, 2- 2o 2elc cceΛ l->-2c leΛ-Λ⑥

え、それってつい最近じゃない……。

⑥>>...3eΛc⑥

⑥3eΛcδ 3>...22le ec V-o⑥

⑥22le, lecΛ⑥

⑥2eΛc,, l22μγ- -c 4al<-Λ c -μc⑥

「ユルファン・タルト……。間の c は「～の」という意味だから、アルトのユルファンと
いう意味だよ。-μc……ん？」

紫苑は辞書を引いた。

「ねえ、レイン……-μc って……魔法だよ。……？」

⑥>δ⑥

⑥c42 μeΛ2c2 -μc 2eceδ⑥

⑥4-, l22μγ- -c 4al<-Λ c -μc⑥

紫苑は二重に驚いた。まず、娘のレインが父親のドウルガを呼び捨てにしたこと。仲が
悪そうには聞こえなかったが……。そして彼が魔法の研究者だということ。

⑥-μc2⑥

⑥4-....., -l- e2 c42 Λ- Λc2 2o-δ -cl, <c- c2-Λ 2c -μcδ⑥

「き……っ」

⑥2cδ⑥

キ、キター(°▽°)ー!

魔法の世界、キター!

「え、あなたの世界に魔法はないの？」

——だって!

⑥2c, 2c2 h-42 -μc 2- -c22 2- -c2l-2 2ece2⑥

“C, Cee, -, -し....>>....”

“MeΛ cΛΛ M-Λr”

“>>, 4-, -M C - (Ccl-J 7c7 >c7c7, C-l leΛ- -M Vcl Ca”

“パッソ！それで、Λe Jo JeΛJ 7--Λ Ca-ΛJ”

“4-....-cl >cl l- -C 4al<-Λ,, h-c 7c7Λ, C4a MeΛJ-C -し eΛ 7--Λ Ca-Λ C-l 84aJJa 8aaM<-
>-Λ C4a JeM >c- eJ C l--C,, 3-JJaδ Veccl Ca eC cCl”

名前を知っているなら名前を使うべきで、「あなたのお父さん」という言い方はこの場合失礼なようだ。不思議な文化だ。

そしてレインのお父さんなら魔法が使えたかもしれないらしい。

“h-c ΛoΛ lo J-CI-Λ C -Me- -M JeΛ C-l -M”

聞くや否やアルテアというのを調べる紫苑。どうも国の省庁のようで、その昔神々を呼び出した省庁のことらしい。そこで働く人間の幹部が C-leJ で、それを束ねるのが -M-leJ というそう。

つまり、アルテアというのは召喚省とでも呼ぶべきものか。そしてその役人、僧侶たちがタレスで、そのリーダーがアルタレス。

なるほどね。この人たちは魔法を使えるわけか。魔法学者のお父さんは役人でも何でもないので恐らく使いいのかも。

ということはこの世界では魔法は学問的なものでなく、職人芸的な天性に左右されるものなのかもしれない。努力でどうにかなるなら学者は恐らく魔法を使えるようになるはずだからだ。

魔法については色々聞きたいところだが、亡くなったばかりという父親のことを思い出させるのは良くないと思い、紫苑はその話題を終わらせた。

この世界に魔法があるかもしれないというだけでも、希望が持てる。

昼食後、レインは紫苑を買い物に誘った。外へ出る 2 人。通りには多くの人がいた。どうやらもう平日のようだ。制服にサンダルというこの格好はどう見えているのだろう。

レインは一旦カルテに入り、南下していった。南に大きな入り口があり、そこを出ると巨大なモールにぶつかった。そこは活気に溢れ、人でごった返していた。

といってもお祭り騒ぎは終わっていて、池袋の平日の雑踏くらいなものだが。人が多すぎて紫苑のことを一々見てくる人間は少ない。

まず、レインは服屋に入った。日本と違ってスーパーやデパートは見当たらず、小売店が目立つ。この服屋もそのひとつだ。レインは自分が着ているような服を紫苑に当ててサイズを測った。

「レイン、これ、いい？」

「はい、いいです。これ、いいですね。これ、いいですね。」

「はい、いいです。」

レインが買ったのはレインが着ていたような宗教的な服と、あと普段着であろうスカートやブラウスだった。ブラウスやらスカートやらは流石に自分でレインの出した選択肢の中から選ぶことにした。

日本と違って資本主義が発達していないのか、服のセンスがない。というか、どれも似たり寄ったりなのだ。ただし、すべてが丈夫そうだ。単に服に何を求めるかという文化の違いか。あるいは時代がそうしているのかもしれない。

そもそも第二次世界大戦中はレインが着ているような実用的な服ばかりだった。西洋では丈夫な革靴が履かれ、デザインはほとんど考慮されなかった。それが戦後になると女の間でお洒落に対する欲が突如蘇った。

その急速な欲求に答えてのし上がってきたのが例えばクリスチャン＝ディオールだ。コルク製の靴やストッキングに見せかけた黒いラインなどを使って消費者の心を揺さぶり、戦後の暗い雰囲気を吹き飛ばした。

その後、調子に乗り捲くった現代の日本では、冬なのに肩や脚を出すようなバカな女が増えた。寒いと言いつつ素足を晒す若い女たちを紫苑はあざける。じゃあズボン履きなさいよ、と。鳥肌だらけの脚を見てどこの良い男が食いつくというのかしらね。

アルバザードに戦火の様相は特に見当たらない。とても穏やかだ。機械による大量生産を行っていることは見て取れるし、資本主義なのも見て取れる。なのにこの服……非常に不思議だ。

服を買うと、レインは試着室で紫苑にラーサとサユとルフィを着せ、制服を折りたたんで自前の袋に入れ、店を出た。これで誰にも見られない。日本だったらコスプレ扱いだろうが、ここでは制服こそコスプレだというのだからおかしいものだ。

服の次は靴だ。レインは靴屋に行き、紫苑に合うサイズの靴を 4 足買った。室外履き 2

足と室内履きのサンダルとスリッパだ。

次にレインは食品を買いに行った。小売店ばかりなので肉、魚、野菜など、それぞれの店を回らなければならず、中々不便かと思いきや、そうでもなかった。面白いことにレインは大きなカートを押がして、小売店の品物を次々に入れて立ち去っていく。会計は良いのだろうかと思える。そういえば服も今着ているものは左手の例の腕輪を見せて支払ったようだが、それ以外はまだ支払っていない。

レインは店を見せながら品物とともに名詞をたくさん教えてくれた。使いそうもない名詞が増えていく。

ふと紫苑は人の列に気付いた。カートを手を持った人が数人、道の真ん中に列を作っている。あまりに幅が広い道なので中々気付かなかった。列の先頭にはカウンターがあり、そこでは皆左手の腕輪を見せている。

そうか、あそこが会計所なんだ。それにしても、みんな電子マネーを使うのね。進んでるわ。腕輪がない私には生きていけない社会ね。そうか、だからレインは一生懸命かくまってくれてるのか。でも、ここの国の貧困層やスラムの人間はどうしてるのかしら。

カートに物を詰めると、レインは中央レジらしきところに並ぶ。速やかに清算が済み、自前の籠に商品を入れて帰る。紫苑も持つのを手伝った。入ってきた入り口から出て、カルテに入る。もう日が暮れてきた。

⑥-3, 101 e1 (-a1 1el 1011)⑥

チーズを買い忘れたらしい。

⑥101 1e1- 101 1cc1 >e 1e-8 ⑥

⑥1ee, >cl 1a e1 1el1⑥

⑥1011 1a e1 1011 ⑥

⑥4-, cl (e11) 1e1 <c c> 1el> 1- 1a 1-l 1ea -1e-Z-11⑥

え、夜間外出禁止なの？なんで？

⑥>-1 1-11 ⑥

⑥h-11 1-11 (ee,, 1-1- <11 1-1e⑥

⑥h--1⑥

じゃあ随分治安は良いんだろうと思うが、先の覆面のこともあるし、複雑な心境だ。

⑥101 e1 1- 1-1 <11 c> >el1e1-11 ⑥

⑥>-Λ 0-cΛ,, >- -c --l⑥

⑥->lΛ-⑥

家に帰るとき、遠巻きに玄関を見た。男はいないようだ。

よし、大丈夫。

しかし、私のせいで警察に相談できないとなると、責任感じるなあ……。

帰って遅めの軽食を取り、アルカを学んだ。

晩食の前に風呂を入れた。ところがトイレから出てきたレインがやはり風呂に入らないと言い出した。理由を聞くと生理になったからという。とりあえずアルバザードでは同性間では生理を話しても禁忌ではないようだ。助かった。これでこちらも切り出せる。

⑥-, lecΛ,, cYa lecΛeJ <c c> ɔμcδ ⑥

⑥y-, ɔμc-εe, cα⑥

と言って出てきたのはナプキン。日本のものと少し見た目が異なる。

⑥μeΛ μeC - ΛɔΛ c> ɔcμ,, ɔl Jo-, ɔɔ> ΛɔΛ <cC <-Λ lα ɔcμ⑥

⑥y-, JeΛC,, h-c, cα eC Z-l⑥

⑥Z-lδ ⑥

⑥--.....ɔμc-εe ɔ- <c- Λɔ-Λ c-Λ,, c-l cα eC eΛ) - cα⑥

⑥h--Λ⑥

⑥<-), ɔμc-εe l eC >Ya l ZɔΛ ɔ- <c- Λɔ-Λ⑥

⑥cα e)J.....ɔμcZɔΛδ ⑥

⑥cYa c-Λ ccl cαɔ⑥

⑥y-, ɔcΛ ΛɔΛ eΛ Yɔl ɔcl cα⑥

そういつレインはタンポンを出した。日本のものと同じようだ。

⑥cYa l-ɔ el< JeCe⑥

念を押されるように聞かれる。レインは怪訝そうな顔をしている。

⑥eJ cYa μeΛJ cα ɔɔɔɔ eleC Jo-δ ⑥

⑥>cl.....>cl,, ɔ--c, ɔ>.....cYa eΛ Jo ɔcl >- JeCeδ ⑥

え、したことがないって何が？

⑥ΛɔΛ eΛ cɔ ɔclδ ⑥

⑥-l<c.....⑥ とレインは顔を赤らめる。

ああ、分かった。セックスか。

紫苑はカタカナが浮かんだ瞬間、耳が赤くなるのを感じた。

“4-, 131 e1 13 1cl,, 1-1 1a e1 13 1- 11113118 6

“4-,, 1c>ee1 1ea 1-1 1e1 13 1cl >- 131 --1- 11113116

そうなんだ。処女はタンポンは使わないのか。

“e118 6

“>cl 1a 1111 -cl 1c>11c16

ヒムディオは辞書で見た。処女膜のことだ。こちらでは性の歯と表現するのか、面白い。処女膜の実体が膣壁の狭まったギザギザであることを巧く表わしたメタファーになっている。確かに処女膜は膜になっていないとは聞いたことがある。

紫苑は中学のときからずっとナプキンしか使ったことがないので気持ちは分かる。タンポンを入れるのは恐怖心がある。もし処女膜が破れたら処女じゃなくなっちゃうの？そうしたら将来どんな様になんて言おうなんて心配して、本で処女膜とは何かと調べたものだ。

紫苑はネーミングからして処女膜は膜だと思っていたから、タンポンを入れれば処女でなくなるのではないかと怯えていた。しかし後にあれは膜ではないと知った。狭くて何も入ったことがないところに男性器が入るため、伸縮に慣れていない若い性器が伸びきれず、切れてしまい、出血するという仕組みを知った。

だが、それを知って逆に使う気をなくした。男性器がどのくらいの太さなのかは知らないし、材質も質感も分からない。タンポンが血が漏れないように出来ているならそれなりの太さがないとダメだろう。そうしたらもしかしてタンポンを入れるのを失敗したら処女膜を傷つけてしまうのではないかと恐れたからだ。

それに、後は精神的な問題だ。一番初めに自分の中に入るものは、一番好きな男でないとイヤだという気持ちの問題だ。だからアルバザードの感覚は理解できる。もしかしたら彼女たちの理由は違うかもしれないが。

“1->cl, 1c>ee1 131 >-11 1e1,, 131 1e1- e1 131 11113116

“h--1,, 1cl11 e1 >111 1e116

“1el 1-111, -116

「なるほど……」

紫苑はレインを置いて風呂に入り、アルカの復習をしながら湯船に漬かった。風呂を出

てから晩食を取り、その後また少しアルカをやる。その後、慣れてきた部屋で睡眠を取った。

火急的な進歩を見せるアルカには満足だが、あの男のことは気がかりだ。レインを狙っているのだとしたら、守らねばならない。

恐らくあの金髪がここに私を送り込んだのは、レインを守れってことなのかもね。それもいいかも。あの子、いい子だし。その価値はあるわ。私とも上手く共生してるしね。

Ｒ 幼

この日の昼、紫苑は一人で本を読んでいた。もちろんアルカの辞書だ。レインはというと、実はいま家にいない。やはり自分のせいで学業を怠らせるわけにはいかないということで紫苑は半ば強引にレインを学校へ追いやった。レインは外へ勝手に出ないことを条件に学校へ行った。

レインしか身寄りがない紫苑にとって異世界での生活は不安で寂しい。もし誰かが尋ねてきたらどうしよう。居留守を使うしかない。でも、郵便配達とかだったら応答したほうがいいだろう。でもいまのアルカ力でどうやって対応すればいい？

レインは賢い。余計なことは言わずにアルカを教えてくれる。Aという語を教えたいときはA以外はあえて簡単な語だけにし、未知の単語を 1 文中に複数混ぜない配慮をしてくれる。そのおかげで紫苑はどの単語に焦点が当たっているのかが分かるから学びやすい。

それに、レインのアルカはゆっくりで聞き取りやすい。もし事情を知らない第三者だったらどうか。もしアルバザードの人間でない、それどころかアトラスの人間でないとばれたら自分はどうなるのか。

左手の腕輪はアンスというらしく、金から電話から辞書から何からすべてを兼ねそろえた機械だそうだ。当然皆アンスを持っているわけだが、紫苑にはそれが無い。アンスは必ずしも腕輪型でないそうだが、ふつうは腕輪だそうだ。腕時計みたいなものだと思った。アンスはIDも兼ねているようなので、もしアンスがないと分かれば自分はどうなってしまうのだろうか。

でもまあ、誰も来ないよね。レイン自身、身寄り是他にないようなことを言っていた。紫苑は本を置いて席を立つ。トイレに行こうとしたところで下から物音がするのに気付いた。

いま……物音が聞こえたような……。下から？って……地下室の倉庫？そういえば始めの日以来行ってないな。何か倒れたのかな。不安を抱えている紫苑は万一のことを考えて忍び足で向かった。階段を軋ませないように注意しながら下りていく。

——！

部屋に下りた紫苑は思わず息を呑んだ。そこには見知らぬ男がいた。こないだ門前で見た男だ。そして恐らく背格好からしてあの覆面の男だ。

門前では遠巻きで分からなかったが、ここでは一度会っているので、分かる。背景がこないだと同じなので、記憶が鮮明にフラッシュバックする。間違いない。こいつだ。

男は何かを探しているようで、熱中している。紫苑は一瞬どう出ようか迷ったが、遅かった。男が突っ立っている紫苑に気付いたのだ。ところが驚いたのはむしろこの男だった。

♫0-♪♫ といって飛び上がる男。よほど心臓に来たらしい。

「そりゃこっちの台詞よ！アンタ！何やってんの！」

♫-♫- ♫e ♫a ♫ ♫o ♫

「何やってんのよ！？ひとんちで！」

——って、私が言えた台詞じゃないけど。

♫♫eo, >c♫-, >e♫ ♫-l ♫a e♫ ♫-♪♪o >-♫ ♫e ♫a ♫cl -♪♪-, h-♪♪-♫ le♫ la♫-♪ -♫a l-♫- ♫ac
le ♫ol ♫c♫♪-,, h-♪♫ ♫e lo♫ ♫o♪ lo♫ le♫ l-♫-♫ ♫e♫e♫ ♫ee, >c♫-♫♫

ほーう、私がアルカ話せないと思って色々言うわね。

なにになに、要するに狙いは私たちじゃなくて、「大切な何か」なわけね。

「今回は逃がさないわよ！」

♫-♪ h-♫ ♫e ♫a ♫cl ♫-♫ -♪♪- ♫e♫, h-♪♪-♫ >c♫ >c♫-♫ ♫e e♫ le♫ -♪ ♫a e♫ ♫ol,, o♪ ♫a,
le♫ ♫cl le♫ l-cZ -Z -♪♫e♫ -♪,, ♫-, -♪♫e♫ c♪♫ -♪♫e♫-♫♫

早いのと汚いのとで半分も聞き取れない。こんなのが初めて聞くアルカの男言葉だっていうのは何だかなあ。レインのアルカと比べて粗雑で荒くて汚らしい。

早口でよく聞き取れないが、探しているものがいかに重要か分からないだろなどというようなことを言っているようだ。

♫le♫ ♫ac ♫a,, ♫-♫ ♫e lcl♫ -♫,, ♫ol ♫a♫, le♫ el< ♫c♫ ♫e♫♫

と言ったが早いか男は突進してきた。男の予定ではこの突進はアルカを解さない紫苑にとって急なもののはずだった。

が、紫苑は ㊦h- α ㊦aμ, ㊦oΛ -㊦Λ- ㊦eΛ >c4a -μ㊦-㊦㊦ ㊦と叫んで、突進する男の顎を蹴り上げた。柔軟な紫苑の足はほぼ天を向く形までしなやかに伸びることができる。

綺麗に顎を打ち抜かれた男は口から血を吐いて悲鳴をあげながら、もんどりうって顎を押さえる。今は靴を履いていないので紫苑は咄嗟に上足底で蹴り上げた。靴があれば爪先で打ってやっても良かったところだ。

㊦㊦c ㊦o㊦ -㊦ ㊦a ㊦cl ㊦-㊦ -μ㊦-, 4-㊦㊦㊦

男言葉でハッタリをかましてみる。

あ、わりと男言葉、気持ちいいかも。

男は呻きながら紫苑の脚を取って転ばせようとした。

「甘い！」

紫苑は倒れざまに肘を突き出し、重力に任せて男の背中を突き下ろした。肘は男の腎臓の裏に入った。悲鳴を上げると、男は紫苑を掴んで振り回す。これには流石に勝てない。紫苑は床に倒された瞬間、反射的に股間を蹴り上げた。

㊦--㊦㊦㊦

男はこれは適わんとばかりに紫苑を突き放し、逃げようとした。

「逃がさないわよ！この泥棒！」

男の鞆を掴む紫苑。男はもはや紫苑に恐れをなしているようで、鞆を放すとほうほうの態で逃げていった。紫苑としては鞆が手に入れば情報になるかと思い、逃がすことにした。しかし、少し怪我をしてしまったようだ。

いつものように関節と筋肉と骨のメンテナンスをする。メンテナンスといっても、動かしてみても激痛がしないかを見るだけだ。痛みに応じて症状を探る。折れていれば分かるし、筋を痛めていればそれも分かる。だが今回は運良くほぼ無傷だった。

ただ、少し足首が痛い。しかし、これはいつものことだ。紫苑は若干足首に捻挫癖がある。捻挫して治らないうちに訓練することによって捻挫を何度も引き起こし、そのうち癖がついてしまうというものだ。おかげで自転車を漕いでいて信号待ちのたびに左足を地面につけるとズキッとするときがある。

無傷といってもあくまで格闘家にとってであるから、擦り傷や打ち身などはカウントしない。

しかし、数時間して帰ってきたレインは紫苑の傷にすぐに気付いて慌てた。自分がいな

紫苑は事の経緯を話すと、男の残した鞆を見せた。まだ中は見えていない。レインと見ようと思ったからだ。

64-, -1J ΛαΛ VceΛe<C-C c 1-6

紫苑はレインを見る。

63- 64

၆၂- $\mu_{e\lambda} - C_{\infty} \lambda^{-1} q_{ac} \in V_{\partial L}$, q_{-} , $q_{+} \in Z_{\partial L}$, q_{e-} , $q_{e+} \in \mu_{e\lambda} - C_{\infty} \lambda^{-1} q_{ac} - IC$, $C_{-1} \lambda_{\partial L}$
 $S_{ac\lambda} - C_{\infty} V_{\partial L} \cap \partial_{\infty} e \cap \partial_{\infty} \lambda^{-1} \in \mu_{e\lambda} - C_{\infty}$

$$\Lambda \supseteq \Lambda - \Gamma_2 \Gamma_2^* \in V_{\text{DLM}}, \quad \Gamma - \Gamma \Lambda \supseteq cI \in \mathcal{E} - \mathcal{J}_{\mathcal{G}}$$

139

⑥VcΛJ-, J- (a, ΛoΛ 2e- <-Λ (4a⑥

レインが薬を持ってきて紫苑の傷を手当してくれた。別に自分でやるのに……っていつでも背中とかは難しいか。

それにしてもレインって可愛いなあ。気が利くし甲斐甲斐しいし、頭も良い。そして優しい。ついでにレインは腕の傷まで手当してくれた。2日に1度くらいしか風呂に入らないのに、ここまで近付くとレインの甘い体臭が鼻をつく。嫌な感じはしない。自分が男だったらこの時点でもう惚れているかもしれない。

こういうとき、男の子ってどうするんだろ。何を思うんだろ。上からレインの唇を見て、綺麗だなとかキスしたいなとか思っているのかな。そう思いながら我慢してるのかな。

それとも、こういう雰囲気ときは肩を抱いてまっすぐ見て、キスするのかな。女としてはその気があって雰囲気さえ整っていれば全然問題ないんだけど、意外と男の子って奥手なところあるからなあ……なんて知識は全部受け売りだけど。……いや、リアルに。

でもほんと、こういうとき男の子ってどうするんだろう。気になる。お兄ちゃんでもいればよかった。

男は匂いに弱いっていうから、レインのこの体臭を嗅いでやっぱりむらむらくるのかな。私は不快でないとは思わないけど、男の子にはぐっとくるのかもしれない。

私もそんな匂い出してるのかな。……ないな。

むしろ格闘のせいで汗臭そうでヤだな……。そういえばクラスの子たちは私のことをどう見てたんだろ……。

でも不思議だな。私自身女なのに、こういう子を見てると守らなくちゃって思う。不思議ね。母性本能っていえるのかな。それとも私が男っぽいだけ？そんなに意識したことないんだけどなあ。むしろ女らしいほうだと思ってたけど。

⑥3-JJb,, eΛ Λ- >c4a 4-cδ ⑥

⑥3-JJb, JeΛCr⑥

しかし……父親の同僚がわざわざ盗みにねえ。しかも父親の死後に……。何を盗りに来たんだろ。

あいつ、若かったな。せいぜい30くらいかな。レインのお父さんよりずっと下だと思うんだけど。そうすると後輩ってことになるのかな。謎だ、謎すぎる。

⑥-, lecΛ,, ΛαΛ Ια ςΨα ραμ <-Ι <el>- c> ρeμς ς-Λ⑥
 ⑥eθμ ραΛ ραΙ ςΨαδ ⑥
 ⑥h-α, ΛαΛ υ- <-Λ -α Ι-Λ- V-Λα -α α υe υαΙυ υ-V⑥
 ⑥ceee, α eς Ι->cς⑥
 ⑥θ-υυα, θ-υυα,, ΛαΛ ΛαΙ Ι- eς υceΛ υeςeδ ⑥
 ⑥γ-, υ-> ςΨα,, ς-Ι....⑥
 ⑥μeΛ υ-μ ΛαΛ, lecΛ,, α -Λα V-Λα ςΨα -υ,, -ΙΛ-δ ⑥
 ⑥γ-....υeΛς, υααΛ⑥

そして暫し語らった後、晩食を作り、アルカの勉強をして寝た。

℞へ

靴の所持品から分かったネブラ＝ブルーナという男を撃退した後、2日間は何事も起こらなかった。紫苑はレインを学校に行かせ、家で番をした。ネブラは紫苑を怖がっているのだろうか、あるいは警察を怖がっているのだろうか。昨日一昨日は姿を見せなかった。

もう来ないだろうと思い始めた今日、ベランダからネブラの姿が見えた。向こうからは死角になっているらしく、こちらに気付いていない。門前ではなく、隅のほうで様子を伺っている。服は変えたようだが背格好は覚えているので通用しない。ほんと、懲りないわね……。目を置いて警察が動かないと踏んだのかしら。悪知恵が働くもんだわね。

ネブラは今日はあまりうろつかず、去っていった。紫苑が警察を警戒しているのだろうか。ネブラが去っても念のため、しばらく様子を見ていたが、もう来ないと知って紫苑は下に下りた。

居間で本を読み、アトラスでの日常生活を営むうちに、レインが帰ってきた。レインは学生服を着ている。制服は日本のものとは違い、ブレザーでもセーラー服でもなく、アルティス教徒の服に似ている。

レインはアルナ大学というところに通っているらしい。日本でいうところの東大に当たる権威だそう。しかもレインはそこで首席というのだから驚いた。自分も首席だが、せいぜい田圃の中にある偏差値70行かない程度の高校の首席だ。

その上彼女は美人で性格も良いのでさぞやもてるだろうと思ったが、本人曰く——リスニングが間違っていなければ——そうでもないらしい。人付き合いが苦手、友人もいな

いそうだ。紫苑はますます親近感を感じた。

流石に制服から普段着には着替えるようだ。また、外から帰ると室内履きのサンダルに変える。日本の家庭は靴は共有しないが、スリッパは共有する家がある。

だが、アルバザードでは室内履きも室外履きと同じく個人のものらしく、共有するのは気持ちが悪いそうだ。日本人からすれば気持ちが悪いといわれれば不服だが、下着や歯ブラシを共有すると考えれば気持ちが悪い。多分、日本人にとってのその気持ち悪さと同じ種類なんだろうな。

面白いことに、アルバザードでは傘まで共有しないらしい。室内室外に関わらず、家族とは物を共有しないようだ。だから皿やスプーンやフォークも同じ。日本ではあまり考えられない。

日本では洗ってしまえば禊をしたことになり、穢れはリセットされたことになる。水に流すという言葉はその感覚を表わしている。ところがアルバザードでは水で洗ってもリセットはされないようだ。

だから区別のつかない同じ皿でも、洗ってしまっておけば次回は何れを使っても同じという気分にはならないようだ。同じ種類の皿が家族分あるのではなく、違う種類の皿が家族分あるのだ。日本人には信じがたい。が、日本人も箸は個別な家庭が多い。それが皿にまで波及していると考えれば良い。無論コップも同様だ。

なお、フライパンなどの調理具は合理性の問題だろうか、流石に共有するようだ。でないと人数分の回数作らねばならない。

ちなみに紫苑の皿はレインの母のものだそうだ。面白いのは共有しない理由だ。穢れと思っているのではないそうで、大皿に乗せた料理は皆で取り分けるし、レインは紫苑の食べかけを平気で食べる。穢れとは思っていないようだ。単に個人の物は個人の物という考えが強いのだろう。

⑥lecΛ, Λeεμ- laΛ-Γ >eε

⑥4a| -Γa2ε

⑥Γee, <μe> δ-Γε,, 4-Λ Γ- 2εΓ a, leeV-Γε

⑥-ΓΓ-ε

レインはネブラが来たと知って不安げになった。紫苑はそこで策を練った。そうだ、お

びき寄せよう。

“lee, lecΛ,, leΛ- 7eθl ㄥccʃ ʌeʃʃ- Vɔl leΛ- 74ɔ ʌ-ʌʌ- leeVeʊ -ʃa, ʏaəʊ ʇ- ʇ-ʃ -ʃaᄁ

おお、今の長文、最高新記録の長さじゃない？

“eʃ, ʇ->cʃᄁ

“ə-ʊʊɔ --ʌ,, ʌccʌ ʌɔʌ V-ʊʃ ʏeʌ ʇ-ᄁ

“ʊ-> ʃʏa ʃ-ʇ...leʌ ʇ->c,, ʃʏa ʊɔ <-ʌ ɔʇ ʇ- ʌʌ- ʏɔʏʊ <cᄁᄁ

“ʃee, Vcʇʇ-ʌ,, ɔʇ ʇ- ʃʇʇ ʏɔʇ-, ʊɔʌ ʇ- ʌʌ-ʃ -ʃa ʏɔʏʊ ʌa c> ʏeʊ ʌɔʌʌᄁᄁ

“>>...-c ʃʏa V-ʊʃʃʇʇ ʌɔʌ ʏɔʏʊ >ccʃ, ㄥccʌᄁ

複雑な喜びを見せるレイン。

“ʌccʌ, leʌ- ʏeʃ ʇ-ʌ ʇ- ʏacʊ ʃɔ ʏeʃeᄁᄁ

“ʏ-, ʃ-> ʃʏaᄁ

そして手筈を整えた。レインはいつも通り学校へ行く。紫苑はその後、カルテへ散歩しにいった振りをして戻って家を観察する。警察が動いていないと分かっている以上、彼が怖いのは紫苑だけのはずだから、鬼の居ぬ間に忍び込むはずだ。

✕ ✕

計画を立てた翌日、ネブラは罠に引っかからなかった。紫苑を警戒してのことなのか、あるいは単に下見に来なかったただけなのか。

今日も手筈通り 2 人は家を出て、紫苑は死角から倉庫へ通じる家の裏の階段を見張った。先日、紫苑は居間にいた。玄関から入るにはアンズが必要だし、居間を通らねばならない。他の進入経路はというと、ここしかないそう。前回、恐らく男はここから入ったのだらう。

紫苑はそこを見張った。日本でいえば 12 月の 10 日ほどだろうか。寒くなってきた。昼間だからまだ大丈夫なようなものだ。しかしネブラというやつは仕事もせずに何をしているのだらう。

しかし夏でなくて良かった。こんな叢にいたら虫にどれだけ食われることか。アルバザードにも虫くらいいるだらう。

そうこうしているうちに 2 時間が経ち、昨日と同じく監視の辛さを感じた。トイレに行きたいのだ。そう、2 人いれば交代できても、1 人だと無理だ。生理的欲求の中でこればか

りは譲れない。

参ったな、すぐ行って戻ってきてる間に来ても困るし……。ここは叢だけど、もう子供じゃないし……。うう、昨日は膀胱炎になるかと思ったわよ。見張りって目は痛いしさ。肩も凝るのよね、変な姿勢だから。服も汚れるし……。

そんなことを思っていたところに、がさっと物音が聞こえた。何度かこの音はあったが、野良猫だったりしてがっかりさせられた。だが、今回は違う。潜むような音だ。

間違いない、ネブラだ。もう鞆は持っていない。よくもまあ顔と名前が割れてるのに来られるものだ。手には何かを持っている。ピッキングか？ネブラは幾分もたつきながらも鍵を開け、そーっと中に入ってしまった。

紫苑はさらにそーっとその後をつけた。ネブラはドアの閉まる音を嫌って閉めなかった。これは好都合で、紫苑は後ろから気付かれずに尾行することができた。こっそり見ると、ネブラは何かを探しているようだ。そしてしばらくすると息を飲む声と、含み笑いが聞こえた。

物音が聞こえる。鞆がないのでポケットからだろうか、何かを出している。そしてその何かを使って何かをしているようだ。暗くてよく分からない。恐らく、盗んだものを仕舞っているのだろう。

さて、逃走経路だが、家の中のほうが捕まえやすい。外にいかれると迷惑だ。紫苑は勢い良くドアを閉めた。飛び上がるネブラ。『ΛeJ』と叫んでくる。

『h-α, -Λ,, JααΛαYαΛ, ΛeEJ- EΛααΛ-r』震え音に力を込めて名指しした。

チッと舌打ちして男は逃げようとする。鼻から戦う意欲はないようだ。紫苑は、アルバザード人は気に食わないと舌打ちするんだなと観察していた。

『h--, -Λ YααJ Cc eK -Λ....』手を広げる紫苑。

『....δ』一瞬緊張を解くネブラ。

『....Ce-lr』叫ぶと同時に紫苑は走り出す。

『EeoT』ネブラは白い長い袋を持って逃げる。

『h-α Cc eK Vcl -Λ >-Λ -Λ JαJcJ leJCl-C,, Y-Λ Cc JcJ <cl l-Λ- JαZeC α>c Y-J』

威勢よく言い放ち、男を居間に追い立てる。玄関には鍵がかかっている所以で開けるには数秒かかる。このインターバルがあれば十分……と思ったら、居間にはなんとレインがいた。

ᄒ0-α 0-ᄒr ᄒe, ᄒe, ᄒo ᄒo ᄒo eJ Joᄒ ᄒ4-ᄒᄒ

突然のことに慌てるレイン。そこにネブラが来て、レインを肩で吹き飛ばしていく。

ᄒhcJ, 4-crᄒ

レインは倒れ、尻餅をつく。

ᄒ0ec, ᄒe, V-cr ᄒ...lecᄒ, ᄒe ᄒ-l -ᄒa,, -ᄒ ᄒec V-ᄒ l-rᄒ

叫びながらレインの横を走り去る。

ᄒ0, 0eeec, ᄒcoᄒ, -ᄒJ-Jr ᄒ4a eᄒ 4aᄒJ Jeᄒerᄒ

紫苑の背中に声を投げかけるレイン。

ネブラを追って玄関へ走る。レインがいたため、当然玄関は開いていた。男は一瞬で外へ飛び出すと、走り去っていく。当然紫苑も男の脚には適わない。だが、向こうは荷物を持っている。長い獲物だ。これで差は縮まった。

男が通りに出たところで紫苑は追いつき、後ろ襟を取って引っ張ると同時に前足を脚にかけ、前に転ばせた。その刹那、白い袋を奪う。ネブラは倒れ、転がって跳ね起きる。するとナイフを取り出し、なにやら罵倒したが、言葉になっていない。

紫苑は白い袋を掴んだ瞬間、中が棒であるということが分かった。慣れた手つきでしゅるっと袋を剥くと、棒を引っ張り出して構えた。通りにいる人間がみな息を飲んで注目する。紫苑は面を打つ振りをし、大きく踏み込む。男はとっさに避けようと後ずさるが、紫苑はもう一步踏み込んで素早く小手を打った。進歩のない男……。

強かに打たれてネブラはナイフを落とす。だが、今回は相手のすぐに後ろに下がったのと、こちらの踏み込みが間に合わなかったため、2撃目は入れられなかった。ネブラは逃げかと思ったが、まっすぐ向かってきた。

紫苑は咄嗟に突きを喉元に入れた。面・胴・小手は本気で向かってくる相手には大して効果がない。獲物が真剣や木刀ならまだしも、この棒では大打撃になりづらい。そしてその気になれば腕で容易にガードされる。

ところが突きは無理だ。避けられもしないし、取れもしない。見事に胸の上を突かれたネブラは声にならない悲鳴を上げた。ところが反射的に棒を掴んで倒れこみ、ネブラはその棒を力づくで引っ張った。

うそっ！加減したとはいえ、突きを食らって動けるなんて！よっぽどこれがほしいのね。

紫苑は手を伸ばし、左手で柄を取り、右手でできるだけ先のほうを持った。この状態で

相手の力に沿って振り回すと容易にネブラは転んだ。そして相手の手が捻られる方向に棒を回転させると、容易に手から棒がすり抜けた。

紫苑はもはや棒は邪魔だと思い、遠くに投げ捨てた。男は声がでないらしく、何か言いたげに棒を見た。カランカランと石の地面を転がるはずだったその棒は、しかし、見事に地面に突き刺さった。かと思いきや、爆音を立て、真っ赤な光を一面に発した。

これには紫苑も驚いた。一瞬、棒が奇跡的に地雷を踏んだのかと思ったほどだ。群集も目を丸くし、誰も声を立てない。

ネブラは半狂乱になって棒に向かって走る。ところが紫苑はそれを許さない。ステップインして頸部にハイキックを入れる。本気で打った。

素人のネブラはハイを入れられ、その場に沈んだ。しかし姿勢が紫苑に向いていなかったため、横から入れるはずのハイはむしろ相手の首正面を打った。想定外の出来事のせいで紫苑は右の足首に鋭い痛みを覚えた。

紫苑は即座に腕ひしぎにし、絡めとった。このまま腕の一本でもダメにしてやろうかと思ったころ、群集が騒ぎ出した。まずい、警察かなと思ったところにレインがかけつけた。

“LcΛr”と叫ぶレイン。

紫苑は男の腕を離すと、首の後ろを思い切り踵で踏みつけ、止めを刺した。これで暫くは動けまい。そして素早く棒と袋を回収すると、先を走るレインに追いつく。レインは運動能力はあまり高くないようだ。家に走りかえる2人。何とか逃げおおせたかな。

“lecΛ, leΛ- eC θ-JJδ Λ-cΛ laΛ- Jcl leΛ- JeCeδ”

“laC, l-cΛ laΛ- Jcl leΛ- >-Λ ?-ΛΛ ?-eΛ <αΛC”

なにそれ、街のいたるところにカメラが設置されてるっていうの？新宿の歌舞伎町じゃあるまいし。

やがてレインの言葉通り、警察が来た。レインは紫苑を階段の下に隠した。調べられればどこに隠れても同じことだから、入れないことが肝要だとレインは言った。

紫苑が盗み見たところ、警官は2人。制服は日本のものと違う。むしろ軍隊に近い気がする。アルティス教の服というよりは完全に戦闘用にできた服だ。これが警官なのか……。ごつい自衛隊でも来たのかと思ったわ。

“CeΛ ?-ΛΛ, -lJ V-ΛΛ-C Aeεμ- εdaaΛ- laΛ-J -Ca,, Cc Jeμ <c αΛ Caδ”

“αΛ Cδ”

⑥ ɔλ ɪ-z ɪe v-ʌʌ-ŋ ʌeʔeʔ-, ɔ-ʌ-ʔ cʌ-ŋ ɪa ɪe< ɔɔ ŋc, ɪecʌ ɣaʌŋ⑥
 ⑥- ɣ-, ʌɔʌ ʌ-ŋ ve> - veʔeʌ,, ʌɔ> ʌɔʌ eɪ<-ŋ ɪɣa,, ɔɔʌ ɪ- >cʌ ɔecŋ ʌɔʌ⑥
 ⑥ɔa, ŋc eŋ ɔ-ʌʌɔɔ⑥
 ⑥ɣ-, ʌɔʌ eɪ<-ŋcɔ ɪ-, ɪ-ŋ-ŋ - ʔ- ɔʌŋ ɔaɔc ʔ-ʌ ɪeʌŋɪ-ŋ⑥
 ⑥ɔʌ ɪa >c -ŋa ɔɔɔ⑥
 ⑥h-ɔ⑥
 ⑥h--ʌ, >ɔʌ -ʌ eʌ ʌ- -ʌʌ -ɪŋ -ŋa,, ŋ-ɪ ve ɔ-eʌ >- <ɔʌŋ ŋeʔ-ŋ ŋc veʌɪcɔ "ʌcɔʌ", ŋa ɪe
 ɔʌ - >- veʔeʌ⑥
 ⑥ʌcɔʌɔ heɪ, ʌɔʌ ʔeʌʌ-ŋ "ɪ-ɪ ʌcɔʌ" >cɪ ʌɔʌ eŋ....ʌ--ʔ⑥
 ⑥- ɣ-, ɪɔɔc,, ŋc eŋ ɪ-ŋcʌ ŋeʔeʌ,, ŋc ŋcɪ -ŋŋ-, ɣaʌŋ⑥
 ⑥ʌeʌŋ-ʌŋ, ʌ-cʌʌ-ʌ⑥
 ⑥-ŋŋ-, ŋ-ɪ ŋc ʌ->ŋ ɪ-ʌ ʌ-ɪ, ɣ-ɔ⑥
 ⑥ʌ-ʌ,, ʌɔ>, <-ŋɔ, ʌ-cʌʌ-ʌ⑥

警官は帰っていった。良かった……。少し様子を見てからこそこそ動き出す紫苑。

⑥ɔ-ʌʌ, ɪ- ɪeeʌcɔ -ŋa⑥
 ⑥ŋɣa eŋ -ʌ - <ce, ɪecʌ⑥
 褒めたつもりだったが、レインはムツとした顔になり、⑥ʌɔʌ eʌ eŋɪ ɪ-ɪ- ŋɣa ɪɔ ʌɔʌ ʔeʌʌ-ŋ
 <ce ŋcʌ <cʌʌ- ʌeʔeʌ⑥ と怒ってきた。「嘘が巧いね」はたとえどんな意味で言おうとここで
 は罵倒になるらしい。
 ⑥v....v-ʌŋ-ʌŋ, ɪecʌ,, ʌɔʌ eʌ eʌʌ-ŋ ŋa⑥
 ⑥ʌcɔʌ, ŋɣa ʔeʌ >-ɪ ŋa ɪeʌ <ce eŋ -ɪveʌ v- ɪɔŋ -ʔŋcʌ, -ɪc, -ŋɔɪ-ʌ⑥
 ⑥-ʌ, v-ʌŋ-ʌŋ,, ɔɔʌ ʌɔʌ ʔeʌʌ-ŋ -ʌ ŋa⑥
 ⑥ɔv-....ŋɣa ʌŋ-ʌcɔ eʌʌ ɪ-⑥
 ⑥-ʌ, -ʌ,, -ɪʌ-⑥

嘘は絶対悪。それなら「流暢に追い出したね」が良い、か。難しいなあ。

それにしてもレインでも怒るんだ……。でも、悪く言われても怒らない人間のほうがストレスを溜め込んであるときとんでもないことをするものだから、このくらいの大人しさがちょうどいいかもしれない。

⑥h-c....ʌcɔʌ, ʌeʔeʔ- e<ŋ-ŋ ŋa ʌɔʌ hɔŋ ʌeŋe⑥

しても、もし私がレインを守るためにここに連れてこられたんだとしたら、これでお役御免ということだろうか。レインにとってもいるだけ負担ではないのか。両親の遺産で食いつないでいるようだが、収入がない以上、私がいると困るんじゃないか……。

✕ ♪

朝、レインが紫苑の部屋に入ってきて、アンスを見せてきた。アンスから飛び出す光のスクリーン。信じられないことに、空中にテレビ画面が移った。それは動く新聞だった。

昨日の事件のことが載っていた。ネブラが捕まったと書いてある。動機は不明らしい。容疑はよく分からないが、住居不法侵入に当たるものだろう。盗まれたものは特にないと被害者のレインが語ったと書いてある。聞いていなかった部分でそんな説明をしていたのだろうか。

気になるのは次の記事だ。目撃者の証言ではネブラは謎の少女に倒され、その後警官に捕まった。その後、少女はレインを追ったが、レインはどうにか逃げ切ったとある。なるほど、そういうシナリオにしたのか。

また、現場には杖があり、その杖は地面に刺さるとヴィルを発したとある。ヴィルというのは辞書で見た覚えがある。アトラスにはヴィードという力が流れていて、それはユノ・ヴィル・ノア・アルマの4種に分かれるという。アルマは他の3者を合わせたトリニティの概念だそうで、至上の力だそうだ。

ユノは体力や生命力などに関わるもので、青い光を持つそうだ。紫苑は霊力と名付けた。

ヴィルは魔法を使ったり神と交信するための赤い光だそうだ。これは魔力と名付けた。

ノアは身体能力を活性化させるものだそうで、運動などに関わるらしい。これは気力と名付けた。

しかしレインに言わせればこういう記事は召喚省を挑発したいだけのゴシップ記事で、偶に出てくるでまかせだそうだ。

紫苑が本当に光ったというと、レインはうーんと唸って考え込んでしまった。真剣そうなので紫苑は見間違いかもしれないとお茶を濁しておいた。いずれにせよ、この問題はもう解決したのだから良い。

Ⓜh-c, lecΛ,, ΛσΛ Ισ Λ-Λ ΙαΛ-Γ -Γa Ι-Λ- V-Λσ ΓΨa c Aeεμ-, Λσ> ΛσΛ ΓσσΓeJ <-J e Λ-Λ,, Λσ> Γaμ, ΛσΛ eJ ΛeΓ JeΓeεδ Ⓜ

“lee, lee? 7c7, 777 777 777 777, 777 777 777 777, 777 777, 777 777- 777 777,
777 777 777 777- 777 777 777 777, 777...777 777 777
“777, 777 777 777 777, 777 777 777 777, 777 777 777 777- 777 777 777 777
“777 777 777 777- 777 777, 777 777, 777 777
そう言ってレインは微笑んだ。

7 7

“777, 777 777- 777- 777 777 777 777

レインがカレンダーを指して言う。そうだ、今日で約1月経ったんだ。

アトラス全土で使っている暦はメル暦というらしい。アシェットのメルという使徒が作った暦で、今はメル 367 年だそうだ。この暦は月が変わっても曜日がずれないし、月の日数も変わらない。だからカレンダーを捲る必要はない。ああやって壁掛けの紙 1 枚で十分で、月が変われば7が7になればいい。年末くらいしか特に変化はないそうだ。

しかし早いものだ。ネブラの一件から何も変化はなし。ひたすら紫苑はアルカの勉強をしているだけだ。まだレインのゆっくりアルカでないと付いていけないし、単語力も乏しい。日常会話でも支障をきたすことがある。

外に行くことも少ないし、レイン以外の人と会うこともない。働くわけでも学校に行っているわけでもないのでストレスを感じざるをえない。

だが、異世界での穏やかな生活には憧れていたもので、これはこれで良い。レインも紫苑がいると寂しくないようで、うまく共生できている。

7 7

さらに1月が経った。日本では1月の終わりだろうか。1月が28日なので、徐々に月がずれていく。新年が明けて、親はどんな気持ちだろう。

紫苑はアルカに慣れてきた。本を読めるようになってきた。レインは紫苑の薦めで学校に通っている。家事全般は紫苑がすべてやっている。掃除から洗濯から何かからだ。何もしないのではいづらいということで紫苑から言い出したことだ。

しかし、買い物だけはできない。アンスがないからだ。しょうがないので暇なときはカ

ルテに行ったりして気分転換をした。レインもそろそろ紫苑が外に出るのを認めてくれた。

そんな生活だ。毎日家で本を読んだりして、家事をして料理をして、レインの帰りを待つ生活。ここでの生活も悪くない。いい友人にも会えた。ただ、異世界に連れてこられた以上、何かすることがあるんじゃないかと思う。

私は何でここに来たんだろう。

〜 R

さらに1月が経った。日本では2月の終わりだ。レインは今さらになって風邪を引いた。朝起きたらとても具合が悪そうで、紫苑は食事の支度をしたがほとんど食べられないというので、消化のいいスープを出した。カモミールティーが飲みたいというので作った。

レインは具合が悪そうで、動くのもやっとだった。手を額に当てる紫苑。この身振りはアルバザードでも同じなようで、手を近づけたらレインはおでこを寄せてきた。

熱い……かなり熱があるわね。

2階に連れて行き、レインの部屋のベッドに寝かせた。薬箱を持ってきて熱を測った。日本の熱計りに比べて卵型をしている。どう使うのだろう。レインに手渡すと、耳に入れた。耳……で計るのか。

⑥C4a UeA 1-A 9c(-8 6

薬は飲むものだと辞書のコロケーションで確認済みだ。

⑥h-o, AaA UeA Pca,, (-I AaA lo A-A UcP Ca6

憎まれ口が叩けるならまだ大丈夫ねと少し安心した。が、レインはその後、薬を飲もうとしなかった。どうも熱は下げるものではないし、薬も飲まないものだと決めているらしい。

フランス人などは風邪を熱で判断し、熱があればアスピリンで下げて治った気になる。一方日本人は抗生剤信仰がいまだにある。病気や薬に対する国民の反応はそれぞれで、やはりアルバザードにはアルバザードの考えがあるようだ。

風呂もそうだ。日本では風邪を引いたら風呂には入らない。が、西洋では温めの湯に漬かるほうが良いとされる。アルバザードではどちらなのか気になる。

だが、本当に気になるのはレインの病状だ。風邪にしてはかなり酷い。吐いてしまうので紫苑は袋を持ってきて吐かせた。熱いというので悪いとは思ったが胸元を開き、冷たす

ぎない氷嚢を頭に載せた。

しばらくすると今度は寒いという。汗が冷えてきたようだ。紫苑はレインを起こし、着替えを渡した。だが、レインは動けない。かなりの重症だ。でも医者には行かないという。凄いい根性だ。

⑥レインは大人しく腕を上げる。紫苑はパジャマを脱がせ、その下の薄いシャツも脱がせる。学校に行くつもりだったのだろうか、ブラジャーを付けていた。フロントホックなので、前から付けるものだ。これがあると苦しいだろう。

紫苑は背中を向けさせて外した。フロントホックになっていたもので、背中からだを取りにくかった。かといって前からだと……気まずいし。

そして新しいのを着せ、シャツも着せる。その上に新しいパジャマを着せた。レインははあはあと息が荒い。こうしているだけで相当体力を消耗するようだ。医者に行くどころかいま自分の手足を動かすことさえろくに適わないようだ。

朝よりも症状が悪化している。これはインフルエンザじゃないのか。アトラスのウィルスは知らないが、症状は良く似ている。感染から発症までが異様に早く、症状が酷いのが特徴で、この時期に流行る病気だから、インフルエンザで間違いないと思うのだが……。

そういえば紫苑が地球を離れたころ、新型インフルエンザで何十万人が死ぬだの感染するだのと聞いたが、いまごろ地元はどうなっているのだろうか。親が心配だ。

⑥レインは、紫苑の背中を脱がし、冷えた汗を拭いた。ズボンはかなり濡れている。見ないようにしていたが、パンティが目に入る。これは……さすがに……。

⑥紫苑はレインのズボンを脱がし、冷えた汗を拭いた。ズボンはかなり濡れている。見ないようにしていたが、パンティが目に入る。これは……さすがに……。

紫苑はレインのズボンを脱がし、冷えた汗を拭いた。ズボンはかなり濡れている。見ないようにしていたが、パンティが目に入る。これは……さすがに……。

⑥紫苑は、レインのズボンを脱がし、冷えた汗を拭いた。ズボンはかなり濡れている。見ないようにしていたが、パンティが目に入る。これは……さすがに……。

⑥紫苑は、レインのズボンを脱がし、冷えた汗を拭いた。ズボンはかなり濡れている。見ないようにしていたが、パンティが目に入る。これは……さすがに……。

⑥紫苑は、レインのズボンを脱がし、冷えた汗を拭いた。ズボンはかなり濡れている。見ないようにしていたが、パンティが目に入る。これは……さすがに……。

布団をかぶせ、手を入れ、膝を曲げて脚をくの字に立たせる。見ないようにして、下着を下ろす。

脱がせて、タオルで拭き、やはり見えないように履かせた。履かせるほうがずっと難しかった。特に最後の局面はかなりの力がいる。腰を持ち上げなければならないからだ。介

[㊦]ㄴᆞᆫ...㉔ 레인은泣きそうな掠れ声で話しかける。よほど苦しいらしい [㊧]ㄱᆞᆫ ႁᆞᆫᆯ, ㄹᆞ
ᆺᆡ ႁᆞᆫ ႁᆞᆫ -...㉕

6. $\Lambda \otimes \Lambda$ is isomorphic to $\Lambda \oplus \Lambda$.

突然うっというってレインはまた吐いた。食べてもいないのにどこにそんなに残っているのだろうと思った。吐瀉物はほとんど消化されているので、胃炎で消化不良ということはなさそうだ。もはや胃酸が多い。

ここでもママはママで、パパはパパらしい。紫苑まで泣けてきて、一緒に泣いてしまった。そうよね、両親がいなくて一人だったんだもんね……。

紫苑は下に下り、手洗い嗽をよくして感染を予防した。そして細心の注意を払って昼食を作り、食べた。

結局、レインは晩食も取れなかった。それでも菓を飲まないレイン。じゃあ菓なんか買わなくてもいいんじゃないかと思った。それともこの菓は買ったものでなく越中富山の菓売り式なのか。

ただ、一度4時に見に行ったときレインがたまたま起きて、うつろな声で紫苑にいった。

^၆အလှူ လုပ်ငန်း ဇယား, အလှူ, အလှူ လုပ်ငန်း ဇယား

とも、ネブラのことが片付いた後で良かった。

〜 ◆

ようやく二人とも風邪が抜けた。レインは症状が重く、途中から紫苑の看病に回ったため長引いてしまったが、流石に10日もすれば良くなった。

だが、二人とも満足に食べていなかったのも、げっそり痩せてしまった。もともと細身なので、あまり痩せるとかえって可愛くなくなってしまう。しかしそこは女というか、ここ数日の食事であっさり元に戻った。

レインは今日から学校に戻るそう。元の生活に戻り、朝食を食べる。そのとき、ふとレインがこんなことをいった。

Ⓔe<- >olJ 1 JooC ol 7e V-l-, VecI >olJ 9 Jel Ⓞ

紫苑は少し考えてからその意味に気づき、思わずパンを噴出して笑ってしまった。嘔飯物ならぬ嘔パン物だ。

聞けばどうもアルカのユーモアのひとつらしく、意味は「風邪は医者にかかれば一週間で治るが、そうでないと7日かかる」だそう。

巧く皮肉ってるなあと思うとともに、アトラスの科学力でも未だにウィルスは倒せないのだなと知った。

〜 ♪

そろそろ暖かくなってきた。レインが新しい服を買ってくれた。モールにももう慣れた。自分で買い物をしたことはないが。店の位置も大体覚えた。してもらってばかりで悪いと思う紫苑だが、レインはこの生活が幸せだという。それに紫苑がいないと家事が困るのだとわざと大げさにいう。異世界の人間の優しさや気遣いのしかたがだんだん分かってきた。

紫苑の書にはたくさんの情報が載った。始めはアルカの授業のノートでしかなかったが、徐々に日記になってきた。そして間違いをレインに直してもらおう。まだ間違えるところは多い。文法自体は単純なのでまず間違えないが、語法が一番間違える。

日本語で「大きな失敗」というところを *Me? 7-c* とはいえず、*Me? CcΛ* という。この *CcΛ*

という強調は極めてよく使われる。日本語や英語だと何らかの具体的な形容詞を使って **big mistake** などというが、アルカの場合、程度が甚大であるという **ㄱㄹ** を頻繁に使う。

大きいのような基本語はふつう極めて多義語で、様々な意味に使われる。辞書の記載も長く、1語で1ページにも及ぶのが普通だ。ところがアルカの場合、基本語の使用範囲が狭く、コロケーションが少ない。ㄱ-ㄷ は純粹にサイズが大きいものしか指さないのだ。

これは極めて論理的であると同時に、味気ないことでもある。抽象度が高い語には抽象度の高い **ㄱㄹ** をという考えなのだろう。

ふつうは抽象度が高い語をできるだけ具体的にするために感覚的で分かりやすい具体的な形容詞をつける。大きなミスもその例だ。人に優しい言い方だ。ところがアルカはそれをしない。まるで機械のような言語だ。

ただ、多少のメタファーはするようだ。例えば「大きい声」は **ㄴㄷ ㄱ-ㄷ** という。これは大きい動物のほう大きい声を出すことが多いというところから来ているメタファーのようだ。

また、句動詞の類がなく、**get up** のように簡単な語を組み合わせで難しい語を表現することが少ない。

abandon は **give up** と言い換えられるが、アルカでは **ㄴㄷㄹ-** という。句動詞にはしない。**get off, get away, get on, get along with** など、アルカではすべて別々の1語で表わす。

get on, get off だけを取っても **ㄱ-, ㄱㄹ** を使う。そしてこれらには「乗せる」「降ろす」以外の意味はない。なんて語彙が豊富な言語だろうと皮肉りたくもなる。

要するに、1語1意なのだ。問題は1語1意の1意が日本語の対訳と重ならないことだ。例えば **ㄱㄹ** のように、乱雑した状態や興奮した状態などというような長い定義をしなければ言い表せないものもある。だが、面白いことに **ㄱㄹ** 自体は **ㄱㄹ** の意味1つしか持たず、多義にはならない。多義だとすれば日本語に訳したときに多義的に見えるだけだ。

もっとも、副詞を使ってより細かく表現することはできるようだ。例えば「切る」は **ㄱㄷ** しかないものの、「切り倒す」「切り離す」「切り落とす」などは副詞を使って結果や方向を指示することで細かく表わす。この点は英語と似ているといえる。しかしあくまで様態としての副詞を付けただけであり、そこから別の意味の句動詞として独立することはない。

英語の **put back** は元のところへ置くという原義からして、元へ返すとか後退させるという意味を持つ。この時点では **back** は副詞として機能しているといって良いだろう。だが、口語の「酒を浴びるように飲む」という意味になると、飛躍している。こういう飛躍がア

ルカにはほとんど見られない。

また、1 語の担う意味が狭いのも特徴的だ。元へ返すは *ae* というが、後退するは *U-P* といい、別の語だ。加えて、*U-c* が基本的にサイズの大きさしか問題にしないということは既に述べたとおりだ。

もしアルカで受験することになったら、単語帳は発売されても熟語帳は売れないだろうなと思った。1 つの概念を狭く 1 つの語に押し付けるからだ。

あ へ

日本では 4 月になったころだ。本当なら今日から高校 3 年生、受験生だ。私は日本で進級できたのかな。休校だとどうなんだろう。やっぱり退学かな。よくても留年かしら。それにしても、暖かくなったなあ。あれから風邪も引いてないし、アルカも快調。

紫苑はベランダに出て空気を吸っていたところ、あることに気付いた。そういえば……花粉症が今年はでないわね。なんでだろ、ディーゼルが少ないのかな。それとも花粉が少ないのかな。

車……そういえばここに来て一度も車を見たことがない。どの家にもガレージ 1 つさえない。どうなっているのだろう。見た乗り物といえば自転車と籠。籠よ、籠。地球より発達したアンスを持ちながら、籠が走ってるのよ、街中を。

自転車は異様に多い。中国かと思うほど。道は広く、歩道と自転車道に分かれている。左右の端が歩行者用だ。間には日本だと車が走るが、ここでは自転車だけだ。端と端の行き来はというと、横断歩道はない。じゃあどうするのかというと、歩道橋を渡る。歩道橋は一定感覚で点在している。また、何個かに 1 個はエレベーター付だ。

電気を使っているのだが、電柱は見当たらない。一方、発電はどうしているのかと聞いたら非常に興味深い答えが返ってきた。できるだけ自然の力を利用しているらしい。アルバザードでは日本より風が強いので風力発電ができる。また、太陽発電もできる。そして人間にも発電させているそうだ。実は紫苑も発電に貢献しているという。

電気というのはそもそも水車でも風力でも何でもいいが、何らかの力を電気に変えるシステムを作ってしまうと生み出すことができる。運動エネルギーや熱エネルギーがあれば転用して電気を作れる。

なんとアルバザードの道の下には発電機があるらしく、その上を人が通ることによって

発電するそうだ。通勤や通学で絶対通る道に発電機を仕掛けておく。毎日たくさんの人が通る道には重みが与えられ、その結果、たくさんのエネルギーが与えられる。それをアルバザードは電力に変えているというのだ。素晴らしいと紫苑は感心した。生きて歩くことが星への貢献になるんだ。

in Z_4

もうそろそろ昼は暖かい時期だ。カルテのベンチが過ごしやすくなってきた。うつらうつらしかけたころ、突然近くにいた鳥がぱっと飛び去った。ハッと目を上げると、前方から男が走ってくる。男は後ろをチラチラ見ながら全速力で駆けてくる。

$$^{\circ}0_{\text{ecr}} \mu_{\text{e}} - 12 - \Lambda, \quad 4_{\text{a}} \Lambda 2 \Gamma_{\text{e}}$$

やがて、数人の男たちが走ってくる。辺りをきょろきょろして誰かを探している。誰かは明白だが。

⁶⁴ 4-, la le<-C ʔɔɰ >-6 と言って右を指す。男たちは礼も言わずに走っていった。

⁶Aee, |-cΛ |eeVc?, lYqJJaa6

⁶JeePe(cJ, Y_aΛ) r c -l)c? -Ar₆

『>>...eJ C4a el<-CeJ l-clδ 』

『J--、Ca eC AeJ』

『AeJδ Aee、C eC 3-l -Z...δ 』

『O--、-J> ue3 --』

『MeA e> M-A,, l-l- C4a lo Ae -lJ-C C4aδ 』

『V-AC, V-AC,,

しかし実は紫苑は嬉しかった。初めてレイン以外のまともな話者と話した。男の言葉はレインのものより違っている。話し方からして既に違うのだ。しかも男は紫苑がネイティブでないことに気付いていないようだ。嬉しい。

『3-JJor JJal c> CaM, -A eA A- >c4a -Ac,, 4-A JJal Cc』

『h-o, Aal eA A- -Ac,, C-l...eJδ 』

『>-A Cc le< Jcl c CaM oJ -A』

『eJ d 』

すると男は指を差した。その方角を見ると、先ほどの男たちが駆け寄ってくるのが見えた。

しまった、ばれたか。

『Cc lo C-A l-cl JJ V-A a - Cc <cA Cc AeJ-C -Aδ 』

『eC-r』と言うが早いか、紫苑は立ち上がった。

『3-JJor』咄嗟にぐいと男が紫苑の手を引っ張る。細身なわりに凄い力だ。流石は男。格闘をやっている紫苑からすれば羨ましいことこの上ない。

ところが紫苑は男の手を振りほどく。

『Cee, Me le<, l->cr』

『A-JJ <cl>o-r Aal le< Vcl C-l ol C4a CleJ C-J Aa-A, l4aJJJa』

すると男は口笛を吹く。

『O--、-l- la Aee>e l-lJ le Ccl V-JA le< JeA C-l cAr』

『M-<- Aal eA lecAeJ <-V- cS lc-lJ c> <cJ』

2人は凄い速さで男たちをまいた。

男に連れられ、どこか知らない道へ出る。追っ手が来ないことを確認し、2人は地面にしゃがみこむ。

“Oec, 4aΛ, Cc le< JeΛ U-Λ C-U 7o7,, h-c, Cc -ΛU ΛoJ leU Coδ -θ, -Λ 7a U-< eJ C e
ΛoJ J- Ccδ 。”

“θ-JJο,, ΛoΛ eC UcoΛ,, 4-Λ....δ 。”

“eC -Me, -Me -I(ee>J 。”

どうもここではシオンというのは普通の名前らしい。アルシェは少しも驚かなかった。
レインが驚いたのは急に光の中から出てきて本物のアルティス教祖のシオンという少女だ
と思ったからだろう。

“h-c, Ae7C e C4a eC Coδ 。”

“h-h, Ae7C eC Ae7C >-Λ a Λo7 Ca 。”

“U>- 7 JoΛ MeΛ MeΛJ Ca CcJ lel C4a JoC <c eVcleδ 。”

するとアルシェは真面目な顔で “Ceo 。” と答えた。目を見てきて。澄んだ目だ。嘘は言っ
ていないように思える。

立ち上がるアルシェ。紫苑もつられる。紫苑は少し首を引いて彼を見た。身長は 172cm
くらいか。体重は中肉で……60kg くらいかな、スリムな感じね。

年は……聞くのって失礼なのかしら。でも、25 くらいでしょうね。8 つ上くらいか……。
私が地球から来たなんて知ったらどう思うのかな。

“Λ-- 。” 呼びかけるアルシェ。「ねえ」と「なあ」については日本語と本当に同じだなあと驚
く。もっとも、アルカでは感動詞の一部が - の系列と e の系列に分かれているようだから、
理屈立った偶然ではあるのだが。

“Cc Jeμ Ue >-Λ- lel lecΛ 4aC-δ 。”

“eθ....δ 。” ビクツとする紫苑。レインの知り合いだったのか？

“Cc Jeμδ JoΛ >cμ 7a -> la μ- 。”

“--....ΛoΛ eΛ Jeμ,, la eC Aeδ 。”

“-, Cee,, <oΛ Λ-V,, 7el Ca 。”

そういつてアルシェは去ろうとした。

“-, V-C,, C4a Co <-Λ laδ 。”

“>>δ leΛ Cc Jeμ laδ 。”

“Cee, Cco ΛoΛ MeΛJ U-< -Λo Ca-Λ - Λ-cΛ ol C4a eC eVcle 。”

“-,, θ-JJο --,, -Λ le eVcle 。”

“U> eJ C4a -7C I-Λ la....lecΛ U-Vδ la >cΛ 。”

⑥-Λ 7a >0- - Cc,, Ca, eC, Ae7C,, 8ccV-, 4aΛ7 8ccΛ6

そう言ってアルシェは微笑むと、雑踏の中に消えていった。

少ししてから紫苑も通りに出る。もうアルシェの姿はない。知り合いだったのかな。どうなんだろう。レインに聞かないと。名前は聞いたし、顔も特徴も覚えてたし、大丈夫。

紫苑はチラッと住所を見た。電灯に住所が書いてある。といっても通りの名前が書いてあるだけだ。

だが、アルナの住所は至って簡単だ。アルナは円形都市だ。中心にカルテがあり、放射状に 12 本の道がある。それぞれアルミヴァの名が冠されている。うち、四方の道が大路になっていて、巨大な長さで広さを誇っている。

アルミヴァ通りは一本が余りに長いので、それぞれを横に結ぶ小道がある。小道といっても国道より広いのだが。この小道は 2 つのアルミヴァ通りの間に 28 本あり、ランティス通りと呼ばれている。カルテに近いほうからリディア通りと言われる。

アルバザードはアルナだけでなく、すべての都市がこの形でできているそう。上空から見ると雪の結晶に見えるそう。この街造りは時の為政者のミロク＝ユティアという人物が為したものだそうで、奇しくも苗字がレインと同じだ。

ミロクという男は今から何十年か前に世界的な大改革を行い、腐敗した政治を崩し、今の体制を整えたそう。彼はまだ亡くなっていないが、為政者は娘のアルテナに移ったらしい。メル 350 年のことだそうで、そのとき彼女はわずか 10 歳だったという。

そして現在はアルテナの治世になってからもう 17 年だ。つまり、レインはちょうどアルテナの時代に生まれたということになる。

そもそもアルバザードという国は元は神の国だったそう。信じられないことに学校でもそう教えているらしい。アルティス教の教義なのだろう。

原始、世界にはアルマが集中して集まっていたそう。それが大きくなりすぎたため、爆発を防ぐために相反する力を持った elC, J--I という男女の神が生まれた。

ところがサールは子を望まないエルトを騙し、ユーマという娘を作る。怒ったエルトはサールを捨て、傷心のサールは山から投身自殺する。

その千切れた体からアルミヴァのうちの 6 人が生まれた。エルトはサールの死を知り、ショックを受ける。そして塔を築いて頂上で孤独に死ぬ。それをヴァルゾンが千切り、そ

これから6人の残りのアルミヴァが生まれた。彼らはePC, J--Pという一族名を名乗った。

こうして神はエルトとサールの2派がいたが、一方ユーマの存在のせいで世界が歪み、悪魔テームスが生まれた。神々は悪魔テームスを滅ぼすために共闘した。これがヴァステという戦いだそうだ。

その後、反目しあった神々は戦争を始める。これがラヴァスというそうだ。

ラヴァスの後、神々はアトラスを去り、独自の世界を天と地に作った。一方、生き残ったユーマは子を産み、子は近親婚を繰り返し、徐々にヴィードを失っていった。これがユーマの一族で、いまの人類だそうだ。

ユーマの一族は力が弱かったので神にアレフというヴィルから作り出すエネルギーを提供することによって神の力を借りた。彼らは召喚士と呼ばれ、やがて実権を握った。

召喚士は王になると、エルト派のドゥルガとサール派のヴィーネに分かれて戦った。これをカコという。このとき、ラシェットという精鋭組織が編成された。この時点で戦いはアルシェという団体とソーンという団体のものになっていた。

カコが終わった後もラシェットは互いに争いを止めず、長きに渡って争いは続けられた。そして第4期4代のラシェットが設立されたころ、神々がかつて封印したテームスが復活した。

ラシェットのリーダーはルシーラで、その使徒はハルマという。また、このときのラシェットは特別にアシェットと呼ばれた。

アシェットのアルシェとソーンのルシーラは和解し、テームスと共闘した。その結果、テームスを倒すことに成功し、世に平和が訪れたそうだ。このアシェットの構成員をランティスといい、いまでもカレンダーで使われている。

その後、神と人間の交流はほとんどなくなったが、前述のシオンという名の少女がアルティス教を起し、神と人間の架け橋になった。アルティスは随分迫害されたが、長い年月をかけて広まっていた。

一方、世界では魔法の衰退とともに産業革命が起こり、科学の発達も起こった。今から何十年か前のアルバザードは現代の日本のようにすさんでいたそうだ。それを改革したの

がイルミロクという名の政党の長であるミロク＝ユティアだった。

イルミロクは野党であったが、与党の腐敗をきっかけに選挙で大勝利。ミロクはその日から早速革命を起こした。それは凄惨な革命だったそうだ。民衆は裏切られる形となったが、ミロクは革命を断行。イルミロクはアルティスの団体だったため、アルティスはこれをきっかけに世界全土に完全に根強く広まった。

ミロク革命と呼ばれるこの出来事はメル 320 年に起こったそうだ。その後は革命の血の歴史で、ようやく落ち着いたのが 350 年のアルテナの治世からだそうだ。

もともとアルバザードは王国で、アルバ家が統べていた。ところが 300 年にアルファウスという男がアルバ 17 世を無血開城させ、王制を事実上、廃止した。王は形だけとなり、実権は副王である彼が握った。

副王はアステルと呼ばれるようになり、いまではこれが実権を握っている。ミロクもちろんアステルだったし、いまでは娘のアルテナがアステルだ。

なお、アルカは紫苑の予想通り、人工言語だった。アシェットが神と人間を繋ぐために作った言語だそうで、元は神の世界やアルバザードで話されていた言語を改良したものらしい。

アルティスではアルカは神の母語とされる。だからレインは日本語に対して好意を抱かなかったのだ。

ただ、アルカとアルティスが全土に完全に根付いたのは最近のことで、メル 330 年のことだそうだ。ミロクと敵対していたイグレスタという共産圏を滅亡させ、南半球の第三国を押さえたのがこの年だそうで、このころを以ってアルカとアルティスの流布としているようだ。

この雪の結晶の街もミロク革命の産物だそうだ。京都の碁盤の目よりも分かりやすい。紫苑はレインの家の通りの名を知っていたので簡単に帰ることができた。住所さえ知っていれば迷うことはない街だ。

家に帰ったときはまだ誰もいなかった。暫く待つと、レインが帰ってきた。紫苑はいまあったできごとをレインに伝えた。ところがアルシェ＝アルテムスという男については聞いたこともないそうだ。やはり見ず知らずの他人だったのか。

レイン＝ユティアという名前は珍しいのかと聞いたら、世界には何人もいるだろうが、

アルナに同姓同名がいるかどうかは分からないという。恐らくこのレインのことだとしたら、いったい彼は何の用があったのだろう。

ネブラのこともあり、レインは怯えた。しまった、余計なことを言わなきゃ良かったな。でも、アルシェはネブラとは全然雰囲気違った。いや、格好良いというだけではなく、そんな悪人には見えなかった。それに悪人ならネブラのようにこそこそ徘徊するだろうし、人に家を尋ねて回ったりはしない、といったらレインは納得した。

ト

翌日、同じ時間に同じベンチにいったみたが、アルシェの姿はなかった。昨日の男たちが怖いので物陰から暫く見ていたが来ない。来るわけないか、向こうもあの男たちが怖いはず。しかし、なんで逃げてたんだろう。いったい誰に追われてたんだろう。

レインのことが気になる。ネブラのこともあったし、あの光る謎の杖のこともある。アルシェがそれに関わっていないという保障はない。関わっているなら何か情報がほしい。だが、アルシェは来なかった。

紫苑は残念がった。折角インフォーマントになりそうな男の話者を見つけたというのに、という向学心からの下心も随分関与していたことだが。

41

アルシェに会ってから 3 週間ほどが経った。紫苑はそろそろアルシェのことを忘れかけていた。紫苑は相変わらずの生活をしていた。いくら頭が良くても、また今後アルカが巧くなったとしても、紫苑は学校にも就職にも就けない。アンスがないからだ。

アンスは I D も兼ねている。生まれると国から権利が支給され、電機屋で好きなタイプのアンスを買う。人気なのは腕時計のように手首につけるタイプだが、懐中式もあるし、ボール型もあるらしい。誰が買うんだと首を捻っていたが、案外アルバザードというのはリベラルな点があるようで、そういう穿った物が好きな人間を寛容するらしい。

アルバザードには戸籍があるそう。日本にも戸籍はあるので一見当たり前に見えるが、実は世界的に見れば戸籍がある国は珍しい。かつて日本は大陸を参考に庚午年籍を作った。これが歴史的な戸籍の始まりだ。その習慣が未だに続いている。だが、世界的に見れば珍

しいことには変わりはない。だからアルバザードに戸籍があったのは驚きだった。

紫苑は当然アルバザードの戸籍を持っていないため、入学も就職もできない。かといってアルカが喋れないことには何にもならないので、アルカの勉強だけは怠らない。今日も昼は外に出て本を読んでいた。

読んでいるのは -ccclc という聖書。紫苑は『幻想話集アティーリ』と名付けた。レインがヴァルテとして読んでおけと渡した本だ。神話であると同時にアトラスの歴史書でもあるらしい。

アンティスは『幻想話集アティーリ』の影響を多大に受けている。アルカはアンティスの影響を受けている。したがって、『幻想話集アティーリ』を読むことによってアルカの知識と理解が深まるそうだ。

カルテに入って最初のベンチは便利なのだが、アルシェの一件以来座っていない。あのとき逃げた男たちに見つかりたくないので始めの何日か避けているうちに、別のベンチに慣れてしまった。

花粉症もなく、天気も穏やかで過ごしやすい。日本だといまは 4 月の終わりごろだが、春がこんなに心地良いとは思わなかった。

昼になると、少し頭に熱がこもるくらいだ。今日は特に暖かい。帽子はいらないにせよ、木陰に入りたいところだ。

区切りのいいところまで読むと、紫苑は本を閉じた。影が短く北に伸びる。昼か……。帰って食べよう。

アルバザードは飽食を嫌うらしいが、それでも世界的に見れば様々な食材が集まる国だそうだ。だがそれはレストランなどの話であって、一般家庭では日本ほどたくさんの種類を食べないらしい。

そういえば日本は和洋中と何でも食べる。輸入に頼りきっているとはいえ、かなり幸せな食生活といえるだろう。輸入という観点ではアルバザードもそうで、近郊農業である程度自給している物以外は輸入に頼っているらしい。

今日は何にしようかなと思って歩く。材料はある。だが、レシピが思い浮かばない。飽食というか、たくさんの種類を食べることに慣れた紫苑の舌には、毎日変わり映えのしないメニューというのはいただけない。

そうだ、モールに行って本屋でメニューを探そう。

円形都市アルナは東西南北に4本の大路があるが、同時にアルナ全体を東西南北の4区に分けることもできる。北区は学校や企業が並ぶ区域で、レインもこちらに行っている。南区は商業地域で、例のモールがある。東西は住宅街で、西は集合住宅地で、東は一戸建てになっている。

驚いたことに、アルバザードでは大家族が原則らしい。核家族、ましてレインのような一人暮らしはまず考えられないそうだ。

なお、言うまでもないが一戸建てのほうが裕福だそうだ。しかもレインの家はカルテに近い一等地。つまりレインはお嬢様だったわけだ。

カルテを南に抜け、モールに入る。本屋は何度かレインと行ったので分かる。モールにはいつも人がいる。

メル暦はグレゴリオ暦と違って平日と休日の区別がない。祭日はもちろんあるが、特定の曜日が休みということがない。いつも平日で、各個人は好きな曜日を休みにするそうだ。学生であろうと社会人であろうと1週間のうち、どこか2日を休みにする。

例えばヴェルムとエルヴァと休みを決めると、その周期で暫くは動くそうだ。レインも無論、例外ではない。

面白いことに、共通の休みがないので、自分が休んでいる間も仕事や授業は進むそうだ。日本では考えられないことだが、優等生も勤勉な学生も休み、その間に授業が進むことは気にしないそうだ。休んで自分の時間を得るほうが大事だそうで、遅れた分は後日、学校の端末からアンスにデータをダウンロードして済ますそうだ。

会社員も仕事がどんなに忙しかろうが休みは取るし、休日に仕事はしない。休日に仕事をさせることは法律で禁じられているそうだ。夜間外出禁止なので、会社員の朝は早く、夕方には帰る。夜明けに起きて夕方には帰る生活だ。サービス残業も手当で残業もない。

例外はメルセルと、その約半年後のディアセルという祭日の前後だけだそうだ。この前後は夜間外出禁止が解かれ、一気に仕事や勉強をして貯めておき、祭りに備えるそうだ。

平日という概念がないので、毎日誰かしらが休みなわけだ。だからモールはいつも老若男女問わずたくさんの人が見られる。特に夜間外出禁止のアルバザードでは昼の時間帯はとて混む。

紫苑は本屋に向かって歩いていた。すると突然 64a7f6 と後ろから声をかけられた。方

向と距離からして明らかに自分に向けられた声なので、紫苑はえっと振り向く。それは忘れかけていたアルシェだった。

“-, (4a....-Mue l4aJJoaa”

“4-, (4a >-leJ -Λ JccΛ-, ucΛ 4aΛγδ ”

“4-,ucΛ, (c-,, h-c, (4a (o -Caδ ”

“--....-Λ lo ΛoJ 7a >o- Ca (l....-Λ 4acJ lecΛ 4aCc- 4aΛγ ”

“eγδ (4a Jo l-lδ ”

驚いた。3週間も経つのになんて探していたなんて……。

“lee lee, -Λ 4ac (cc >e la c> (oUel >-Λ -Λ -(Voγγ- ”

“h--Λ, -lΛ- ”

そうか、流石に探し続けるはずはないか。

“h-c, JoI (cδ ”

“JoI -Λ....δ ”

アルシェは察しが悪いなという苦笑を浮かべ、 “4-, (c (o -Caδ ” と言った。察しではなく、アルカの能力が低いだけだ。察しの良さでなら、日本人が負けるわけがない。

“-, 4-4-4-, ΛoΛ 7oPeJ lec-Ce l-Λ- Scγ Λ-Λ UeΛ (o c> h-M ”

“h--Λ,, JoΛ (c 7ac J-(h-M 4-δ JoΛ -ΛJe 7ac Ucc (h-M ”

え……それは、ナンパなのか……？

たじろぐ紫苑。レインのことは知らないと言ったはずだし、彼も人探しで忙しいのでは。それに食事をするほどの知り合いではない。

“eJ....7oγγo ΛoΛ 7aJ Λ-Λ eΛ JeP lecΛ l-V ”

“J--....c ” と言ってにこりと微笑むアルシェ。

やはりナンパだろうか。こういう男は遠慮したい。優しいしカッコいいので始めは幸せだが、後できっと裏切るに決まってる。

捨てられれば女は弱い。泣き寝入りするしかない。それが嫌なら法にでも泣きつくしかないが、法の金銭的な制裁なんてたかが知れている。

ましてここは異世界。訴えることもできないだろう。そんな目には会いたくないし、傷つきたくない。

紫苑の胸から恐怖心と嫌悪感と警戒心の……そして少し好奇心の混ざった感情が沸き起こった。

だが、アルシェは紫苑の目を見つめ、胸の内を見透かすように、真剣な顔で言った。

“>cl, -Λ ʔac l-ʔ h-μ ɔʔ ʔc >-Λ -Λ ʔɔɔʔ l-ʔ - ʔe le laΛ-ʔ cʔ eΛ -μʔ-Z-μʔ ʔel, ʔ-, ʔel -cl, eΛ laʔc-, eΛ >eʔe, ʔ- ʔ-l <ʔΛ”

ビクッとする紫苑。思わずアルシェを見る。外人だとばれている……。恐らく声をかけられる前から、つまり、あのときからばれていたのではないか。流石に異世界とは言わな
いが……。でも。紫苑は体勢を立て直した。でも、だから何だ。外国から来たことに何ら
問題はない。

アルバザードは人種のるつぼだ。世界最強の国だから、世界中から人が集まる。歴史的
に見て白人と黄色人種ばかりで、その混血がほとんどだが、それでもかなりの国から来て
いる。紫苑だって怪しいわけでは……。

いや、違う……。外国人が怪しいわけではない国なのに、この人はあえてそのことに触
れているんだ……。

“ΛɔΛ eʔ ʔɔɔ- -l -μʔ- eʔɔʔ”

“ʔee, ʔee, -ʔʔ ʔcΛ, ʔaΛʔ,, ʔɔ>ɔ....”

“ʔɔ>ɔʔ”

“ʔcΛʔ, -Λ eʔ elʔʔaʔ<-Λ ʔɔΛ -Λ ʔeμ -μʔ- ʔ-ʔcʔ,, ʔ-l -μʔ- ʔccʔ eʔ -ʔ -Λ eΛ ʔeμ,, ʔɔΛ
-Λ Λ- ʔɔ - ʔc, ʔaΛʔ”

言語学者で方言をやっているが、紫苑のが特殊だから気になる……。ねえ。どこまで本当
なんだか。でも、最低でも外人だということはばれている。じゃああえて聞いてみよう。

“ʔcʔ ʔ -μʔ-Z-μʔ ʔccʔ ʔ->cl >cΛ - h-μʔ”

“>>...ʔa μeʔʔ ΛɔʔΛ,, ʔ-l ɔΛ ΛɔʔΛ -Λʔ....ʔ-”

“>>....”

“h--Λ, ʔc ʔcl Λ-Veμ ɔΛ ʔcl ʔ-ʔ ʔ-ʔʔɔ, -Λ ʔ-ʔ <ccΛ- ʔaΛʔ...ʔeʔeΛ -Λʔ”

ドキッとした。アンスを持っていないことまで知られている。どうということ？混乱して
きた。こんな男にレインは狙われているっていうの？どうしよう。危ないんじゃないの？
このままじゃいつレインのところに辿り着くか分からない。参ったな……。

“Λ- Λ-l,, -Λ eʔ ʔɔʔ- ʔccʔeʔ”

“ʔccʔeʔ eʔ ʔʔa ʔeμ....-ʔ”

しまった……。

アルシェはしかしわりと平然な顔を保っている。

⑥-Λ ˌɔɔɔ ɪ-ʃ - ʃc ɥaɪ ʃcʌɔɔ ɔ ɪecʌ ɥaʃc-⑥

⑥....ɔʃ ⑥

⑥ɔ, ʌeʃʃ ɪ -ʌ ʃa ʃ-< -ɪ ʃcʊe⑥

⑥....ʃ-ʃʊɔ⑥

アルシェは紫苑をすぐ近くの明るい店に連れて行った。状況ではこの男は危険かもしれないと思っているのだが、直感的に危険ではないと思う自分がいる。

それは何となくだが、観察すれば根拠が見える。人が来ればさりげなく紫苑が波に飲まれないように道を作ってくれたり、わざわざ見晴らしの良い、明るく綺麗で、かつ何かあったら逃げやすい入り口付近の席を選んでくれたり。口で言わなくてもその辺りの配慮で、この男が危険ではないのではないかと感じてしまう。

紫苑はカルボナーラとカルパッチョを頼み、後はアルシェに任せた。アルシェはアラビアータとプロシュートピザとムール貝を頼んだ。こうしているとデートのような会食だ。年は8つほど上だろうが、あまり気にならない。

日本だと社会人と女子高生が付き合っている絵になるのでエンコーと揶揄されかねないが、ここだとあまりそういうイメージが湧かない。

紫苑は水を飲んだ。フランスと違ってアルバザードの水は軟水が多い。しかも豊富だ。水はタダで出てくる。軟水が多いので、料理も西洋料理とはところどころで異なる。

⑥eʊ ʃɥa ʃeɥ-ʃ ʌeʃʃ ɪeʌ-ʌʃ ⑥

⑥ɔʋ- ʃa, ʃcɔʌ ɥaʌʌ,, ʃc ʃa -ʃ -ʃ ʃɥa ʃeɥ-ʃ ʌeʃʃ ɪeʌ-ʌ⑥

⑥-, ʃee....., ʃ-ɪ ʃa -ʃc- ʃce ʌɔʌ ɪaʌ-ʊ c ʃe ʃ-ʌ ʃaʌ ʌɔʃ⑥

⑥>>....ʃcʌʌ, ʃeʃ ʃa⑥ といってアンスを付けるアルシェ。彼のも腕時計と同じ位置だ。

空中に出たのはネブラのゴシップ記事。そこにはレインのことが書いてある。謎の少女のことも……。

⑥cl <cʃ-ʃ ʃa ʃclʊ ʃcʊ ʃ-ɪ -ʌ >-ʌ -ʌ ɥacʃeʊ ɪa ʌel ɪecʌ ɥaʃc-,, c> -ʌ cʌ-ʃ ʃa ɥ-ʃ ɪ->, -ʌ ʌ-ʃ Z-ɪ - ʃa, ” ʃe ɪ-Z” ,, ɥ-ʌ ʃc ʃa, -ʌ -ʃʃ-ʃ ʃc ʃ- ʃ-dʃe,, -ɥʃ- ʃccl -ʃ Z-ɪ,, <-ʃ -ʌ eʌ ʃeɥ-ʃ ʃa -ɥʃ-,, ʃɔʌ -ʌ ɪɔʃ ʃɔɪ ɪa ɪ-Z eʃ ” ʃe ɪ-Z” ,, ɥ-ʌ ɪɔʃ, ʃ->cl, ɪa ɪ-Z eʃ ɔʌ - ɪecʌ ɥaʃc- ɔ Zɔʌ ɪ eʃ <-ɥ ɥaʌ <-cʌ,, ʃɔʌ -ʌ ɥacʃ-ʃ ʃcʃ ʃc ʃ-ʌ,, ɥ-ʌ c> ʃeʊ....⑥

アルシェはぱっと両手を横に広げた。

⑥-ɪʌ-, -ɪʌ-⑥

なるほど、あの記事からあたりを付けられたわけか。納得。

“J-- α -J> V-l,, Cya eC 7ol- -Z Mecld -Mue lYajJoa”

“7ol-, -Λ eC”

“C-JΛ-fδ ”

“o7Yal< e laaM- Yalc- lYajJoa, -Λ eC 7o7 AefM- fdaaΛ-”

驚いた。ネブラとドゥルガの同僚？じゃあ魔法学者じゃないの。でもそれじゃ味方の証拠にはならない。

“C-I AefM- V-Λl-C >cV- e laaM- lYajJoa cea lecΛ Yalc-”

“M-7 Ca, Ca eC loC AelC,, ol Cc <cΛ -Λ, JoΛ -Λ VcΛ- -I7 Cccl”

食事に手を付ける 2 人。アルシェは優しげな顔を崩さない。常時の顔という感じだ。作り笑えばくはない。

“δ-JJo, ΛoΛ 9co CYa - lecΛ”

“JeeMecCJ, CcoΛ Yal7”

“h-c....C eC J-I7 Cc-lδ ”

“-Λδ -....-Λ eC /f”

“leΛ”

“Y-Λ....C eC”

“19”

“19δ JoΛ CYa le l-Z,, -, leΛ leΛ,, CclJ 7aC CYa eC l-Z C-I -Λ Λ- Cc eC >-Λ-”

アルシェはなるほどという顔で言った。

少なくとも群集には私は中学生くらいに見えていたということか……。そんな……。日本人は子供っぽくからっていつでもそれはあんまりよ。

でもちゃんとアルシェには年相応に見えていたらしい。

食事を終えるまで、歓談となった。まだ完全に信じたわけではないが、何となく疑いはもう持っていない。

アルシェはアルナ大を出て、魔法研究所に入ったそう。つまりレインの先輩だそう。魔法研究所といっても魔法にはアルカが使われる。その関係でアルシェは言語学者でもあるそう。

この世界にはアルカしかないので、日本だったら方言学者とでもいうべき存在が言語学

者と言われるのだなと思った。

日本人の男と違って会話が途切れない。自分のことを適度に話し、こちらの当たり障りのないことを聞いてくる。興味深く聞き、こちらの顔を常に見てくる。感情も豊かで、身振りも多い。話していて飽きない。

食事を終わると外へ出て、アルシェを家へ案内した。そしてそこがカルテからほとんど離れていないところだと知るや否や、アルシェは笑い出した。灯台下暗しだったのだろう。

“h-h-, -Λ 4acC-(eJ 4al> 7-eΛ l-9r”

“Ca eC -V-C C -M7-δ”

“4-, h-” と笑うアルシェ。

面白い慣用句だ。「俺はおでこに上げといた眼鏡を探してたのかよ！」という意味のようだが、なるほど面白い。灯台下暗しに当たる言葉なのだろう。

“J--., lecΛ 4aΛ7 C- M-δ”

“Cee, C- <el7-., 1- 7olC Jcl Cc eΛ <cl”

“JolΛ -Λ V-C -C la -Ca -l7-lC la 7olC”

“9-JJ, 1-C <leΛ”

“CcaΛ, -Λ JeΛC CcΛ Cc., Cc eC l-S o AccC., 4-Λ Cc >-leJ Ca lel el C-M <ol Jol el”

“...-Me”

“>>δ”

“C-1 Λol C-M >cJ7 C4a”

“...JeΛC-ΛC”

アルシェに紫苑は微笑み、門柱に寄りかかった。一人だけ待たせるわけには行かない。春の夕方前で良かった、寒くない。2人は無言でレインの帰宅を待った。

しばらくすると、遠くからレインの影が見えた。徒歩だ。レインはアルシェを見ると途中で歩くのをゆっくりにし、徐々に近寄ってきた。

“CcaΛ d”

“lecΛ, JolΛ”

レインはアルシェを見る。 “la eC...”

アルシェは右腕を曲げて胸の前に持っていき、少し状態を傾けてお辞儀する。ナーシャという男から女への挨拶だそうで、辞書などで見たことがある。いかにもこのまま Shall we

dance?とでもいいそうな格好だ。

私にはしなかったのにな……。ちょっとムツとした。

⑥-Me, -Me -llee>J⑥

レインはスカートの裾を持ち、膝をちょこっと曲げてカーツィをした。これはルーフという行為だそうで、女から男への挨拶らしい。アルバザードの人間はこれらを日常的に行うそうで、映画の中の行為ではないらしい。

⑥lecΛ, lecΛ ʏaʕc- <ceΛ ʕʏa ʏeʏ >c- Λ-, ʕc eʕ ʕoδ⑥

ʕc eʕ ʕo だと失礼ではなく、単に役職が何かを聞いているだけだ。アルシェはドウルガの同僚だったと伝え、話したいことがあるのでレインを探していたと伝えた。

紫苑はネブラの記事のせいで自分から足が付いたと謝ったが、レインは気にしなかった。それよりレインはネブラのこともあり、父の同僚と聞いて一瞬引いた。だが、紫苑が後ろからこくと頷くと ⑥ʏooʕ ʏccʕ ʔoʕ ʏ-⑥ と言って案内した。

レインは紫苑にアルシェを任せ、居間に座らせておき、紅茶と菓子を用意した。アルシェは ⑥ʏeΛʕ-Λʕ⑥ と言って遠慮なく食べる。日本人なら遠慮して飲まなかったりすることもあるのに、アルバザードの人間は直情的だ。

⑥ʏ-- , ʕʏa oʕʕ ʔ-Λ ʕo - ΛoΛ, ʔʏaʏʏoδ⑥

⑥ʕcʕ, ʏeʕʏ- ʕʏʔʔʔ- ʏoʕʕ-ʕ⑥

ʏcoΛ o lecΛ:Λcʕ ⑥eʔʔ⑥

⑥ʕa eʕ ʏaʔ, ʕclʏ, ʔa eΛ ʏoʕʕ-ʕ ʕ-ʔ ʏeʕ-ʕ ʏa⑥

レインは絶句する。紫苑は詰め寄る。

ネブラが殺されたですって！？

⑥ʏeʕ-ʕ ʏaʔ oΛ ʏeʔ⑥

⑥ʏ--....⑥

⑥ʕ-ʔ....ʔ- ʕ-ʕ ʏaʕʕ- ʏeʕeʔ⑥

⑥ʕ-, ʔoʕ ʏaʕʕ-, ʕ-ʔ ʔ- ʏeʕ-ʕ ʏa⑥

⑥-ʕʔ⑥

⑥ʏoʕʕ>-cΛ ʕcl-ʕ ʕoʕʕʕ ʔ- <cΛ ʏeʕʏ- ʏc ʕcl, h-o, ʔcʔʔ ʕcʕ⑥

⑥aʔ....ʔ⑥

突然レインが吐きそうになった。紫苑は背中をさする。

⑥V-ΛC, lecΛ 4aΛγ,, C-I Ca eC MaI,, I- JeC-C 4a ueε
 ⑥C-I, Ca eC ɔΛ - lecΛ >c-Λδ ε
 ⑥h-ɔ, I- JeC-C 4a >-Λ I- JeM-C AeγC l- M-γ,, 4-Λ Ca AeγC eC ɔΛ - ZɔΛ le Cc Ccl, 4aΛγ,,
 γclJ, JɔI eΛ Cc C-I γ--Λ Cccl lel laaMγ- l4aJɔa ε
 lecΛ ⑥>- ZɔΛ eC Cɔδ 4-Λ Ae JɔC AeεM-δ ε
 -Mue:M-Λ- ⑥JɔI -Mue-ε

「は？」思わず日本語の発音で喋ってしまった。

召喚省がネブラを刺し殺した？何で？国の機関なんでしょ？あの杖が何だっていうの？

ueɔΛ ⑥C4a 4ɔΛ eVcC -Mue- leu feeγ -Z -lCδ ε
 -Mue ⑥-Λ ɔγΛ- JeΛ CcJe u-M Vcl Ca,, C-I Ca eC MaIε

馬鹿馬鹿しい。ねえ、レイン。振り返る紫苑。

ところがレインは震えている。よほど怖かったのだろうか。いや……違うようだ。

⑥l4aJɔa.....JcΛl uecC C4a eC Cc-, u> la JeC-C 4a -Mue- >cl JeM-C AeγC l- M-γ ɔΛ >-
 ZɔΛ le laaMγ- Ccl-Cε

⑥-ue

⑥JɔΛ >- ZɔΛ eC u-<....ε

ueɔΛ:>ɔZ ⑥eC u-< Cɔδ ε

lecΛ ⑥ueɔΛ, ΛɔΛ JɔI-J C4a cJγ -ccclC JeCε,, C4a eΛ u-γl ueδ ε

え、アティーリに出てきた杖？なんで神話が急に……。

首を傾げる紫苑を無視してレインは真剣な顔でアルシェに言った。

⑥V-Mue....-ueδ ε

⑥γ->cl....ε

え？ヴァルデって……魔杖ヴァルデ？それって、アルミ ヴアの竜王ティクノが悪魔最高の魔導師ヴァルテを倒したときの杖でしょ。

確かその後ティクノの息子であるサールの王アルデスに渡り、その後アルディアでアルデスからランティスのリディアに渡されたという杖。

でも、神話ではリディアの死後、ヴァルデはアルデスの元に戻されたって話じゃなかったっけ。まさか、いい大人まで混じってそんな荒唐無稽な話をしてるんじゃないでしょうね。

「>- eC ヽ-Λ....V-μleδ ㊤

ところが2人は真剣だ。

「ol eVcC, JoΛ eJ Aeεμ- l-∪-C CcΛ)- Caδ Y-Λ eJ Aeεμ- JeC-C Ya Yal -μCe-δ ㊤

「C-l....C-l....eJ laaμY- Ccl-C V-μle -Jδ ㊤

当然の疑問だ。なぜ一介の研究者が神話に出てくる杖を手に入れていたのか。ましてそれがなぜふつうの一軒家の倉庫に置いてあったのか。俄かには信じがたい。そして、もしそれが本当だったら恐れ多い。

だって……だって私、あれでネブラに刺し面しちやったのよ！？

小手も打ちちゃったわよ！ていうか道に投げたし！

神話上の殲滅武具ヴァストリアである魔杖ヴァルデを竹刀代わりにしちやった……。

や、やばい。敬虔なこの国のこと、私まで殺されないでしょうね……。

紫苑は一人、別な心配をしていた。

lecΛ ㊤eJ -μCe- l-∪ V-μle....㊤

「Ca eC h-∩ >-Λ l-Je eC -μCe-㊤

「-μCe- C∩ l-Λ JoJoJo V-μleδ ㊤

「lecΛ YaΛ), Cc Ceμ ∪cl Cce -J -μC-leJ Caμ lel <eΛZel -lJ--l eC eVcle Cel -μCcJ CaΛ JoJo㊤

「l- >eZeJ Ca -l -∪el....㊤

「JoJ la, l-∪ V-μle㊤

2人は黙った。召喚省の長官であるフェンゼル＝アルサールが腐敗してて、そいつがヴァルデをほしがってると……。ふうん、でも何でだろ。

∪ccΛ ㊤<eΛZel ∪-V Je< <-Λ V-μle -l -μleJ J--μ >-Λ la eC -μC-leJ JeCeδ ㊤

すると2人はまた黙ってしまった。

おいおい、杖、神様に返さないの？

lecΛ ㊤l- l-Λ- Cδδ ㊤

-μle ㊤l- JeC Jocl -μCeΛ- la- JoJoJo V-μle, e> -∪Ceμ J->㊤

lecΛ ㊤-μCeΓ㊤

レインはヒステリックな叫びを上げた。初めて聞いた。

lecΛ ㊤Jo <-Λ -μCeΛ- la-∫ h-cZeΛΓ --∫Γ -l h-cZeΛΓ㊤

-μle ㊤∪-> Cc㊤

6) Cl_2 , I_2 and Br_2 are added to the solution of H_2O and H_2O_2 in the presence of H^+ ions. The reaction is as follows:

なるほど、フェンゼルの部下にハイン＝アルテームスがいて、その部下にドゥルガがいた。そしてアルシェはハインの息子、か。だから事情を知っていたわけだ。

[illegible]

レインは沈痛な面持ちだ。何かを察しているのだろうか。フェンゼルは計画を隠して部下に杖を探させた。そしてドゥルガが杖を見つけたという。

聞きながらレインは泣いていた。思わず紫苑も泣いた。泣きながらレインの肩を抱いた。……父が殺されていたなんて、知りたくなかったろう。

⑥ Jol eJ lecA eA $\text{V-}\lambda\lambda\text{-C}$ Y_2 $\text{V-}\lambda\delta$ ⑥

lecA ၏ ငါး လေး- လေး နှစ်

$\textcircled{6} \text{el}^{\circ} \text{f}^{\circ} \text{ : } -\langle \text{e}^{\circ} \rangle -\Lambda \text{ h-c}\Lambda \text{ } \mathcal{J} \text{e}^{\circ} \text{ } \vee -\Lambda \text{ } \langle \text{e}\Lambda \text{Zel} \text{ , } \vee -\Lambda \text{ } \vee -\Lambda \text{ } -\mu^{\circ} \text{e}\Lambda - \text{Ia- } \mathcal{I} \text{ } \mathcal{I} \text{e}^{\circ} \text{ } \vee -\mu^{\circ} \text{e} \text{ , } \text{ } \vee -\Lambda \text{ } \mathcal{J} \text{ } -\text{I} \text{ : } \text{h-c}\Lambda$
 $\vee \text{ce}\mu^{\circ} \text{ } -\Lambda \text{ } \text{Ia}\Lambda - \text{ } -\text{Ia} \text{ } \vee -\Lambda \text{ } \text{Ia} \text{ } \mathcal{I} \vee \mathcal{I} \vee \Lambda \mathcal{I} \vee \text{e}\Lambda \text{ } \mathcal{J} \text{e}^{\mu} \text{ } -\Lambda \text{ } \text{e} \text{ } \langle \text{e}\Lambda \text{Zel} \text{ } \textcircled{6}$

“-|-, ->-,, ɔʌ ʌʌ <cʃ <-ʌ v-ɥe - ʃa,, ɔ> >ca ɔʌʌ h-cʌ ʌʌʌʌʌ ʌeʃ <eʌZel
<ccʌ- ʌʌʌʌʌ- ʃ-ʌ....ʃ

“ʌeeʌeʃʌ, ʌecʌ ʌʌʌ,, ʃ-| -ʌ ʃcl ʌeʃ -|ʃ,, ɔʌ ʃaʌ, -ʌ >cʌ vcl ʃa

“ʌeʃ -|ʃ

“h-cʌ ʌʌ, ʌe v-ʌʌʌ- -|ʃ ʌ- -ʃʌ-ʌ ʃcl v-ɥe,, ʌ-ʌ ʌʌ ʃa ʃ-ʌ, ɔʌ ʌʌʌʌʌ- ʌʌʌʌʌ
ʌ-ʌ-ʃ ʃeʌ

ʌccʌ “ʃa eʃ ʌ-ʌ ʌeʃ

ʌecʌ “ʌ,, ʌ <eʌZel ʌ-ʌ ʌcl ʃa ʌ- ʌeʌ-, ɔ> ʌeʌ- v-ʌʌ vcl >cʌ ʌ-, -cl

ʌccʌ “h--ʌ

-ʌe “ʌa eʃ ʃc-, ɔʌ -ʌʌe ʌ-ʌ h-ʌ ʃa v-ʌʌʌ- ʌ- ʌ-ʌe,, ʃ-| -ʌ eʌ ʌeʌ ʃa eʃ ʃʌ cʃ ʃa
ʌ- ->

ʌccʌ “ʃ-| ʃʌ ʌʌʌ >ʌ- ʌeʃ

-ʌe “ʌ-, ʌ- ʌeʃʃ-ʃ v-ɥe -ʃa -Z - ʌeʌʌ-, ɔʌ ʌʌ ʃa v-ʌʌʌ-, -....

ʌecʌ “ʌ-ʌʌ,, ʌʌ ʌcʌ <-ʌ ʃʌ -ʌʌ ʌʌʌʌʌ- ʌeʃʃ-ʃ -cl ʃa

レインは席を立った。時計を見る。夕飯より少し早い。まだ外出は許される。

ʌecʌ “ʌccʌ, ʌʌ ʃeʌ c ʃaʌ ʌʌʌʌ -ʌe ʌʌʌʌʌ <ʌ eʌ <eʌ

ʌccʌ “h-ʌʌ h-ʌ, ʌʌʌʌ ʌʌ ʃ-ʌʌ

ʌecʌ “ʃ-|, ʃa eʃ ʌ->c

ʌccʌ “ʌʌʌʌ ʌʌ ʌʌʌʌʌ ʃʌ >-ʌ ʌʌ eʃ v-ʌʌ-ʌ ʃa-ʌ, ʌ-ʌ ʌʌ eʃ vclʃ e ʌecʌʌ ʌ- vclʌ

ʌe >eʌʌ-ʃ ʌʌ -| -ʃʌ-ʌ ʃ-ʌ ʌ-ʌ ʃa,, ʌ-, ʌ- ʌʌ ʌʌ ʌ-ʌ- ʌʌʌ ʌʌ v-ʌʌ ʃʌ, ʌecʌʌ

“ʌeʌʃ-ʌʃ, ʌccʌ “と言った瞬間、レインはハッと口を押さえてアルシエを見る。

アルシエは驚いて目を丸くしていた。

しまった……異世界から来たこと、ばれちゃった……。

-ʌe “ʃc....-|ʃ<c--ʌ

ʌccʌ:ʌ-ʌ cʌʌ “.....-cl....

“-, -ʌ

“ʃa eʃ vcl - ʃa ʌeʃʌ

“ʃc-, ʃ-| >cʌ ʌcʌʌ ʃ-ʌʌ-ʌ ʃcʌʌ

すると、はあ……とため息をついて、紫苑は言い放った。

「あのね、証拠って言っても日本語話すくらいしかないじゃないのよ。それでも分からんなら制服見せたげましょうか？襟んとこに学校の名前も書いてあるしさ、ここじゃ使わない数字やらも書いてあるから。アトラスはアルカしか喋らないんでしょ。だったらそんな文字見ただけで十分よね。でも一番の証拠はこうして流暢にネイティブな日本語を話してることだと思うわよ。だって考えてもみて。私にも母語があるのよ。あなた言語学者でしょ。この母語がアトラスにないことくらい、分かるんじゃないの？って、全部の言語知ってるわけないか。それはさておき、私はあの金髪にここに連れてこられたの。いきなりね。多分、レインを守れってことなんだわ。ここに来てずっと勉強して本読んでばっかだったわ。なんで自分がここに来たのかほんと謎だった。でもね、いまようやく分かったわ。私はこの日のためにここに来たのよ。レインを守るために。そして多分、あなたたちの国を、世界を救うためにね。そのフェンゼルって悪徳高官がヴァルデを使ってアルテナさんを倒して後釜狙ってるんでしょ。その計画を知ったレインのお父さんは殺されちゃったのよね。で、お父さんの上司のハインさんが、あなたのお父さんで、ハインさんはフェンゼルの計画を知らない振りをしていて動けないから息子のあなたを代わりにここによこしたのね。あなたの役目はヴァルデを回収してハインさんに渡すこと。でも、ドウルガさんは役人だったからその家は隠されてて、見つけるのが難しかった。多分、役所じゃドウルガ＝ユティアという名前さえ名乗ってなかったんでしょね。で、ようやく見つけてヴァルデを貰えそうになったけど、もうひとつアトラスに降り立った謎のヴァストリアが見つからない限りは動けない。なぜならもうひとつがフェンゼルに渡ればヴァルデがあっても勝てないかもしれないから。いいえ、いまヴァルデがあってもきっと互角なんでしょね。でなきゃ今からでも攻めればいい。もしもうひとつがフェンゼルに渡れば確実に負ける。でも逆に先にこっちが取れば必ず勝てる。だからもうひとつのありかを知りたい。そしてもうひとつを見つけたのもドウルガさん。彼はヴァルデとそれを隠した。でも一気にまとめて隠しはしない。だから片方はここじゃないもうひとつの隠れ家とやらにあるらしいのね。で、レインしかその場所を知らないのよ、今からそこに行こうってってことなんでしょ。ちなみにネブラもタレスね。大方レインの家を偶々先に見つけたもんだから、フェンゼルの計画を乗っ取ろうとしたんでしょけど、私にやられて捕まった。それがフェンゼルにばれて殺された。どう？そんなところでしょう？っていってもあなたたちは分からないでしょうね。だってこれ、日本語だもん！」

最後はヒステリックに叫んでいた。何ヶ月も続いていた母語を喋れないストレスがふー

$$\mathbb{G} \gamma - \mathbb{L} \mu - \gamma, \quad \mathbb{L} \mathbb{C} \mathbb{O} \Lambda \quad \mathbb{C} \mathbb{C} \quad - | \mathbb{C} \langle \mathbb{C} - \mathbb{G}$$

⁶ γ - $e e S_{\mu}$, $l e e V \cup c c C V-l -f_2$, $\gamma p \cup c c C V-l \gamma p \gamma p$ $l q_6$

[illegible]

心なしかそこだけ周りより埃が少ない。ここに何か置かれていたことは分かる。大きさからして箱だろうが、中身は分からない。何があったのだろうか。レインはドゥルガが重要書類をまとめて処分したのではないかと言った。

レインがそのときいなければ書置きなりして逃げればいいし、アンスで通信すればいい。いや、アンスはダメだ。傍受の危険性がある。では書置きは。紙だと人に見られるかも？ そりゃレインにしか読めない暗号があればいいけど、そんなのがないんなら最低限他人に先に読まれる危険を冒してでもそれくらいするべきよ。

要するに、絡まれて逃げてたところ、偶々見つけた私に頼ったのが出会いだ、と。

“-I (Yā MēΛJ-ŋ ūe ɔŋeŋ ŋeŋŋɔ c) >-e

“Y-Y-, ŋa ŋeŋŋ, ŋ-I ŋccŋ, I-Je eŋ Vcŋŋ

“>>...θ-JJɔ,, ŋ-I....ŋYā MēΛJc) <ce - ŋɔŋ,, ɔŋŋ- -Veŋ, ŋYā MēΛJc) Jeŋ,, ŋYā V-Jŋŋ-ŋ <ɔa Vc) Jeŋŋŋ

“eJ ŋc ŋɔ JJ-θ ŋ

“ŋYā eŋ Vceŋ cŋ <cŋ ŋcŋ,, ŋYā -J Jeŋ -, >-...YāVelθ ŋɔŋ ŋ-ŋ -J Jeŋ ŋa,, JJŋ ŋɔŋ ScŋJ Jeŋ ŋYā -J Jeŋ YāVel ŋ-V,, ŋc-θ ŋYā ŋcl Vc>e Vceŋ,, ŋɔŋ ScŋJ Jeŋ ŋa V-J J-θ ŋa-ŋ,, Y-ŋ ŋŋ->ɔ> ŋa-ŋ,, ŋa eŋ e YāVel Jeŋŋŋŋ

“h-h-, ŋc eŋ ŋcŋŋ-, ŋcŋŋ,, Y-, ŋc eŋ ŋc-, JJŋ I-Je ŋecŋ -ŋŋ

“>>...JJŋ ŋYā cŋŋŋ-ŋ ŋɔJ ŋe eVcŋŋ ɔŋŋ- -Veŋ c) >- Jeŋŋŋŋ

アルシエは含み笑いをする。一度手合わせしたいものだ。

そのとき、ふとアルシエが何かに気付いたように目を細めた。

“ŋɔ c) JJŋŋŋ ŋ

“ŋecŋ Yāŋŋ, -ŋJe ŋeeV <ɔŋŋ -ŋa c) ŋaJŋ

“>-ŋŋŋ ŋ

“ŋc ŋɔ ŋ-ŋ ŋaaJY- ŋYāJJɔa Jc ŋe Vɔŋŋ -ŋaθ ŋ

“....ŋ

“I- ŋŋ ŋ-ŋeJ,, ŋaŋ, I- ŋcl-ŋ ŋ- Vɔŋŋ ɔV- Je>-J ŋe ŋ-ŋ ŋe Vɔŋŋ ɔŋeŋ ŋa VeJY -I -ŋJe, eŋ ŋɔ JJ-θ ŋ

“Y-, ŋɔŋ ŋ-> ŋYā,, ŋ-I a Vɔŋŋ ŋ-ŋ -ŋaŋ

“ŋe- -ŋ eŋ I-, JJŋ -ŋ ŋeŋŋŋ-ŋ ŋaŋ Vɔŋŋ - >cŋŋ ɔ ŋeθ,, JJŋ ŋYāJJɔa ŋ-ŋ JJŋ JJ-, -ŋ ŋ-Jŋŋ

“-ŋc, ŋeŋ- Yāc <-I ŋa -ŋa J-ŋ J-ŋ Jeŋŋŋŋŋ

“Y-ŋ

ŋcŋŋ:>ɔZ “ŋ-I ŋeŋ- JJJ <-I V-ŋ J-ŋeeŋ Jeŋŋŋŋŋ

-JJŋ “<eŋZel Jc< JeJ Jcl ŋa J- ŋ-I J- e J-ŋeeŋ,, ɔŋ Vɔŋŋ ŋ- -ŋa, JJŋ I-Je J-ŋ Jcl ŋa c) -ŋJe >c -ŋaŋ

ŋcŋŋ “h--ŋ, ŋ-I ŋa eŋ θ-JJɔ ɔŋ J- e J-ŋeeŋ ŋ-ŋ

3人は頷いた。そうだ、やはりこの家には何かあるに違いない。完全にあら捜ししてからでないと安心して出発できない。いない間にフェンゼルの手下に荒らされるのは目に見えている。なら先に見つけておかねばならない。

lecΛ ⑥う> ④a μ- -> -lΛol <cJδ lYajJaj⑥
-μe ⑥ol ④e <leΛ u->θ, -Λ μ- l-u -④a l-Λ- V-Λo ④e >-Λ ④e e④ >cΛ -l- l e④ cVΛ,,
h-o h-o, ④ e④ VceΛ, uoΛ⑥

uoΛ ⑥④a eΛ ④eJ uμ - ΛoΛ, -μe⑥

⑥ee, -Λ h-④c④ ④o ④,, <oΛ <c u -Λ,, JoΛ, lecΛδ⑥

レインはじっとアルシェを眺めた後、愛想笑いをして、紫苑に耳打ちした。

⑥>....uoΛ④ ΛoΛ Λ- Λ-l ol Jo④- VceΛ V-Λo <-Λ leΛ-,, ④e④ uel Jo >-Λ-, ΛoΛ <leΛ <leΛ Vc④
u->θ ④a μ- μ-④ uel> eYaj...δ⑥

え……それは大丈夫でしょ。別に夜になったからって襲ってこないでしょ。そんなまどろっこしいことするくらいなら始めから襲ってきてると思うし。

⑥ΛoΛ Λ- ④a e④ θ-JJo,, la Y-Λl el< leΛ-⑥

⑥lcΛ-, Jo④> <c <μe>eΛ -④a Jeμ la uclc-④ -④a, uo> <c >eZ <-Λ ④->cl leΛ- e> e④⑥

⑥--....じゃあ、夜だけどっか行ってもらう？⑥

-μe ⑥h-c, leΛ -Λ lel Vc④ u->θ leJ -④a o④ ④e lel >cΛ Jo-> Λ-⑥

lecΛ ⑥-θ....④e, ④eo,, ΛoΛ....⑥

⑥ol④- -VeΛ, -Λ leeV V-Λ c> ④aμ,, Y-Λ u ④a, -Λ Jo④④ Jeeμ -④a >eJ <ec⑥

そう言うときアルシェは一旦家から出て行った。

そして近所へのアピールを終えてから、彼は手はずどおり静かに戻ってきた。

⑥>ca Yol eZ e ④--Λ Λo-Λ le u eZ e Λ-Λ c ④aμ⑥

そういつてレインはアルシェを自分の母の部屋に案内した。

2人は部屋を片付け、住める状況にしている。紫苑も率先して手伝った。とりあえず、先にこの家をすべて荒さがししないことには。

⑥④-l -μe, leΛ- V-Λl Jo④ Yaj <eΛZelδ ol leΛ- u- -④a la <cl⑥

⑥<eΛZel Λ- Ve> -l -μ④eΛ- la-,, JoΛ l- θ-④eJ >cΛ u -Λo,, JoΛ Λ-cΛ le Jo④- l--④,, ④-l -Λ

Λ-l ④Λ ④e >-Λ u eΛ④eΛ le④μ- V-Λl Jo④ -cl ④e⑥

⑥Y-, JeΛ④-Λ④⑥

どうもアルシェは信用できそうだ。それに一応この家には各部屋に鍵もあるし、いざというときは自分がレインを守れば良い。また、念のためヴァルデは自分で持っておこう。

アルシェを信用していないわけではないが、会って間もない男の突拍子もない話をすべて真に受けるわけにはいかない。信じてはあげたいんだけど……。

そうそう、だってヴァルデだってあんな作り話しなくとも私たちを襲って奪えば良いだけだしね、アルシェはネブラと違って強いんだし。それに盗むならさっきの倉庫の時点で盗めるはず。

でも、一応ということがあるので用心はしておこう。暫くは監視が必要だ。

それにしても、レインと私の心配している内容って異なるみたいね。私は文字通り身の危険を心配しているけど、彼女は違う意味で身の危険を心配しているみたい。

紫苑はレインにアイコンタクトをし、アルシェを部屋に一人残し、外にレインを呼び出した。

「lecΛ, ΛoΛ eΛ u-μ t-, c-l cΛ le >eμ, ΛoΛ μeΛu >e,, uoΛ leΛ- ucxc- ucc c uo uo u- uel c> <c u, <-u, uo uo V-μle」

「uo uo V-μle o ucΛδ u- 1 >u cδ」

「y-, uc u t- e c μe c l, ΛoΛ V-Λo u- < cΛ o V-μle,, y-Λ leΛ- yac <-l ue>-u uo u c-c- -μe u- eZ e laaμy- l yau uo」

レインは頷く。了承を得ると、アルシェの部屋へ戻る。レインは新しいシーツを持ってくるために一旦外へ出た。2人きりになると、アルシェはにこりと微笑んだ。

「uoΛ cΛ >ol u c-l uel c c u-μ >eμ >c yΛ -Λδ」

ドキッとした。すべて見透かされていたのか。

「y-u uo, -Λ eΛ Λ- μec- cδ so,, cΛ e c h-o >-Λ c u e e c >cΛ u-> o t-Λ c,, c-c u-Λ e c V c u」

「ΛoΛ eΛ e u u cΛ c u.....」

μ-Λ-「lecΛ, yal V-μle ho c, uol c c V-Λo u- <, -uδ >- μ u c c -c ol-u, -l c c--Λ」

「....-u」

レインがシーツを持ってきた。その後、部屋の片付けを行い、住める状態にした。次は晩食だ。

アルシェは器用らしく、自分は居候だからといって料理を作った。男の料理は豪勢で、味もボリュームもかなりのものだった。まるでレストランのようだ。

食事中、レインとアルシェは大学の話で盛り上がっていた。どうもサミフェからシミフェに上がるには日本でいう大学受験のようなものをするらしく、レインは今年が受験だそうだと。

日本でも同じ大学の出はそれだけで仲良くなれるというのが、それはアルバザードでも同じらしい。レインとアルシェはたちどころに仲良くなった。

アルシェには人を惹きつける魅力がある。屈託のない笑顔や、打算のない態度。それでいて時折見せる見透かしたような言葉。そしてなによりその美貌。女を騙すことくらいお手の物だろう。そうと知りつつ騙されたいと思う女も中にはいるだろう。

だが、それとヴァルデとは話が別だ。アルシェが紫苑たちの体を狙うことはまずありえなさそうだが、紫苑の中の女の部分が万が一の恐怖を捨てきれない。だが、逆にいえばその程度だ。

問題はヴァルデだ。彼の荒唐無稽な話がどこまで本当か。ネブラの話が本当だとしたら、彼が第2のネブラでない証拠はない。いや、考えればいくらでも悪い発想など出てくる。

有罪にしようと思えばアルシェだろうと神だろうと有罪になるだろう。だが、それでは発展性がない。様子を見つつ、信じるころは信じる。卑怯かもしれないが、これが一番確実で安心だ。

そしてアルシェはこちらの気持ちを知ってか、その方法を受け入れているようだ。

手筈通り、これからはレインと寝ることにした。レインを自分の部屋に呼び、ヴァルデと一緒に寝た。ベッドは日本でいうところのダブルより少し狭いくらいがふつうの大きさのようで、小柄なレインと紫苑が寝るには十分だった。寝相が悪くなければだが。そして幸運なことに、寝相が良く、寝言も言わなかった。少なくともレインについては。

ヴァルデは2人の間に挟んでおいた。アルシェが横の部屋で何をしているのかとか、言ったことのどれだけが本当なのか、もし敵になったら勝てるのか、これからカテゴリーに行ってしまうのか。そんなことを考えると中々寝付けなかった。

レインも寝られないらしいが、アルシェのことはそんなに疑っていないようだ。本当は紫苑もそうだ。でも、レインの安全を考えると最悪の事態を考えておきたい。

しかしレインはやはり寂しいのか、布団の中で手を握ってきた。紫苑の左手はヴァルデを握っていた。そこに覆いかぶせるように弱々しい手を差し出してきた。『clg-JJc』と紫苑は静かに言った。

その後、カテージユの隠れ家について少し話しているうちにレインは眠くなって寝てしまった。

9 4

レインがお嬢様なので 3 人所帯だったとはいえ、この家が広いのは分かる。部屋の数が多いのも隠し場所が多いのも分かる。だが、書類と本の多さには閉口した。結局家の中をあら捜しするのに 1 週間もかかってしまった。

男の力を借りて力仕事を任せても 1 週間だ。家具も動かしたし、書類もすべて目を通した。おかげでアルカがまた上手くなってしまった。だが、1 週間探して得られた結果はゼロ。だが、ゼロということはフェンゼルにも何も知られないということだから、ゼロであったことが逆に 1 つの情報となる。これでいいのだ。

もうひとつ良かったのはアルシェへの疑惑が消えたこと。1 週間も共同作業を四六時中繰り返していると流石に信頼できるようになってくる。買い物のときもそうだ。誰か 1 人は家を守らないといけませんが、レインや紫苑では危険なので、アルシェが担当した。

そこでヴァルデをどうするかが当然問題になった。フェンゼルの手下がアルナをうろついているそうだから、のこのこ外に持っていったらフェンゼルの手下に見つかって盗られるかもしれない。

だから家に置いておくしかない。また、レインしかカテージユの隠れ家の場所を知らないで、レインを一人で外に出すわけにはいかない。そこでアルシェにヴァルデを任せて食料調達に 2 人で行った。

この間に逃げようと思えばアルシェはいくらでもヴァルデを盗んで逃げることはできた。だがそんなことはしなかった。最低限ヴァルデとレインが目的でないということは分かった。

そうすると彼に嘘をつく利点は特にない。本当にハインとやらの息子で、ドゥルガの味方なのだろう。そしてフェンゼルの敵で、こちらを味方に付けたいのだろう。

この日、3 人は早く起きて、カテージユへ向けて出発した。準備は昨日までにしておいた。ヴァルデはもちろん持っていく。ここに置いておいたら盗られるに決まっている。ヴァルデは一番腕力のあるアルシェに持ってもらうことにした。剣道の腕前のある紫苑が持った

ほうが強いのかもしれないが、それは言わぬが華だ。

アルシェは神話のヴァストリアを携帯することに非常に大きな価値を置いているようで、傍から見ても嬉しそうだった。レインでさえ真剣に羨ましそうな目で見ていた。2人とも凄い信仰心だ。レインが紫苑ほどアルシェを疑わなかったのは大学より何より宗教を通じてのことなのかもしれない。

3人は家を出る。玄関に鍵をかけるレイン。他の部屋にもかなり厳重に鍵をかけておいた。こんな防犯、子供だましにしかならないけど……。

まず、徒歩で駅へ向かった。駅は街の至る所に規則的にある。だがそのすべてが地下鉄だ。地上を走る電車はない。駅は車道寄りに存在するので車からはもちろん、駐車場を通って徒歩や自転車でも行くことができる。

紫苑はレインに連れられ、東区の最寄の駅へ下りていく。

電車は定期券や切符を購入して乗る。切符は前払いだ。改札は自動。バスやタクシーに比べると短時間で遠くまで行くことができ、料金も遥かに割安だ。

定期券を持っていれば区間内の移動は自由であるという点は日本と同じなようだ。

日本と違ってアルナの電車は原則としてすべて各駅停車だ。急行や準急などといった概念はない。日本でいえば山手線は各駅なのでアルナと同じだ。ただ、アルナの外へ出る場合、遠距離なので特急が存在する。

駅の名前はその駅が存在する場所の名前で、住所がそのまま駅名になる。

電車の内装はバスや飛行機と同じで、2個ずつ並んだ席がすべて前を向いている。日本のように横並びではない。飲食は自由でトイレも付いている。席は回転させて向き合うこともできる。仲間同士で電車に乗るときは席を回転させて会話を楽しむ。今はそんな雰囲気ではないが。

席はふつう指定席ではなく、自由席だ。ただし、指定席を買うこともできる。立ち乗りはふつう生じない。そんなに混むことがないためだ。

レインは紫苑の切符も買った。定期がアンスにあれば切符は要らないのだが、仕方がない。アルバザードの地下鉄は長い。ひたすら長い。鈍行でどこまでも行く。アルナを抜けるまでに1時間ほどかかった。

乗客は少なかった。日本と比べればの話だが。アルバザードではどのくらいが混雑なの

か紫苑には分からない。アルナを抜けると南アルナに入った。ここも円形都市だ。そこを抜けたところに少し大きいターミナル駅があり、3人はそこで降りた。

特急があるが、レインは鈍行で行こうと言った。特急だと車内で日本と同じように切符確認があるらしい。そのとき防犯上の目的で切符の購入者と乗客が同一人物かどうかきちんとチェックするらしい。

チェックにはアンスを使う。切符を買った人物のIDと乗客のIDが一致しなければならない。したがってアンスのない紫苑は特急に乗れないということだ。なんだか私、重荷だな……。

もともと、紫苑は鈍行で行くというレインに反対していた。その上、理由を中々言わないレインにしつこく理由を聞いてしまった。見かねたアルシェがこそと車内で呼び出して理由を告げた。紫苑はそうと知ってレインに悪いと思うと同時に、ときには言わない優しさがこの国にもあるんだと感じた。

そうして3人は鈍行に乗った。南アルナからさらに南へ。アルシェは呑気なもので、一度鈍行でゆっくり車窓から景色見ながら旅行したかったんだよなどと言っている。アルバザードの電車は地下鉄だが、都市と都市の間の山村部や平野部などでは地下鉄にする必要がないので地上を走るようになっている。

ℓccΛ ℘ℓee, (Y_a eℓ ℓccℓ - ℓccℓ ℓeℓeℓ ℘

-ℓℓe ℘>>ℓ ℘

℘>ca ccℓ -S- e ℓccℓ cc ℓaℓℓ-℘

℘>>....ℓccℓ eℓ ℓ0 ccℓℓℓ-ℓ ℘

℘....ℓcc- -℘

℘Y-ℓ ℓaℓℓ- eℓ ℓℓ0 ccℓℓℓ-ℓ ℓ-℘

℘ℓ.....ℓcc-, -℘

紫苑は何も言わずに微笑んだ。

窓の外へ目をやった。南仏のような穏やかな景色が見える。カテゴリーは南端にあるからアルナより随分暑いのだろうか。ヴァカンス地として有名らしい。夏は海で遊び、冬は暖を取るそうだ。

南アルナを抜けると完全にアルナ地方を抜ける。アルナの南はルークス。昔はアルナの周りであることでアルバザード屈指の商業地区だったらしく、人口が多いことからこの名

が付いたそう。日本でいうところの京都に対する大阪だ。

ルークス地方に入る前に電車はまた地下へ潜っていった。ここでまた乗換えだ。ルークスを抜けるため、ルークスの南まで鈍行で行く。そろそろ尻が痛い。

ルークスの次はイルケアだ。アルナやカテゴリーやその他の都市に繋がる交通網を昔から務めてきた地方で、「すべて行く」という語源から来ているそう。といってもルークスとあまり変わり映えがないように思える。

レイン曰く、300年以上前のアルディアの時代には地方独特の色が残っていたが、その後のレイユの時代に起こった近代化の中でそうした都市固有の特色というものはどんどん失われていったそう。

そういえば日本もそうね。京都はテレビで見る限り古都のイメージだけど、新幹線で駅に降りると東京と何が違うのって疑問に思うくらいだから。

しかもミロク革命の都市計画で建造物などが壊されたり輸送されたりして、都市の特色はさらに失われてしまったそう。ただ、ミロクは都市の特色を活かしたかったようで、都市計画を全うした後は、都市固有の特色の保持に力を入れたという。

これは興味深い二重性だ。古都と近代化が作った文化を破壊しながらも、古都の特色だけは最低限生き残らせようとしたわけか。

日本でいうなら、京都の街を整然とした碁盤の目に戻すために、偶々邪魔だった歴史的な建物を壊したり、大きなビルを壊したりするということに当たるのだろう。そして整然とした現代の平安京を古都の復元として建てるのだろう。

なるほど、日本でいうところのそれをミロクという人はやってのけたということね。言ってみればこれもルネサンスの一種か。破壊と新古典主義的な再生を持つタイプのルネサンスだわ。

日が傾いてきたので今日はイルケアで宿を取ることにした。中央イルケアの南側にある商業地区で降り、モールに入る。

どこも円形都市の造りは同じで、気味が悪いくらいだ。アルナとの差が分からない。確かに景観は少し違うし、空気も売り物も人も少しずつ違う。だが、紫苑にはその違いが分からない。量産された街にしか見えない。

しかしレインとアルシェは半分観光気分なのか、中央イルケアで降りたのは初めてだと

か、やはり調味料の種類が豊富だなどと話していた。2人は気が合うようだ。というより、自分が話についていけないだけかもしれないが。

ホテルは商業地区にある。一々IDをチェックされないところに泊まることにした。ID確認があるかどうかはホテルの規模を見れば分かるそう。紫苑は2人に頼るしかない。泊まったホテルは予想よりずっと綺麗で、一応観光客相手のものらしかった。

イルケアは交通要所だったのでホテルが多いらしい。イルケアに来るというより、ここを中継する人間で賑わった都市だそう。

だからイルケアの人間は他人を異邦人と見がちで、一期一会の出会いと割り切ってざっくばらんに対応してくるような商魂たくましい連中だ、とアルシェは言う。

そのせいか、ホテル側としても一々客のIDを取らないところが多いらしい。腰掛都市だという自覚があるらしい。なるほど、イルケアで降りたのはそういう理由もあるのか。もう1都市くらい頑張れば行けるのではないかと思ったが、やっぱり私のアンスの問題か……。

ホテルは2室取った。シングルとダブル。シングル3室にするには個別にアンスで払わねばならないが、紫苑にはできない。だからダブルを取った。そうすればアンスはレインの払い分だけで済むからだ。

ホテルのベッドは固く、布団は薄かった。どこでもホテルというのはこういうものなのだろうか。レインの家に慣れた紫苑には寝づらかったが、レインにとってはもっと寝づらかっただろう。

9 ヲ

イルケアで寝泊りした翌日、3人はまた鈍行で旅を続けた。イルケアの次はワッカという丘陵都市に入った。日本と比べれば微弱なものの、地震があるらしく、火山も噴くことがあるらしい。

また、火山灰で出来た地層があり、アルナと比べて平地が少なく、全体的にアルナより円形都市にしづらい土地だそう。ミロクもここの都市計画には苦労したという。

ワッカを抜けるとようやくカテゴリーに入った。だが隠れ家に行くにはさらに時間がかかるため、その日は中央カテゴリーで1泊した。そしてその翌日、つまり今日、3人は隠れ家へ向けて宿を発った。

ここからはレインの案内になる。中央カテゴリーを出ると南東カテゴリーまで電車で行った。南東カテゴリーを出ると、もう円形都市はない。辺りは田園が広がるだけだ。ここからは電車では行けない。鉄道はあるが、隠れ家には流石に通じていない。

そこで南東カテゴリーの商業地区で車を借り、アルシェが運転することにした。円形都市は円周部分が道路になっていて車が走れる。しかし住宅街には入れない。

だから籠や人力車がまだ生きている。家のベランダから見ても車がなかったり、庭にガレージがないのはこのためだ。交通事故といえば自転車くらいなものだそうで、随分安心して歩ける街なのだなと紫苑は感心した。もっとも、不便ではあるが。

だが、一度ここでの生活に慣れてしまうと日本は怖くて歩けない。なぜ人が歩く真横を車が人を殺せる速度で走っているのか理解に苦しむ。

子供や老人にとってはまして脅威であるにも関わらず、家の前でさえ車が走れるという状況を日本人はおかしいと思わないのだろうかという気さえしてくる。ありえない話だが、仮にレインが日本に来たら、さぞや驚くことだろう。

レンタカーで田園風景をバックにしながら 3 人は隠れ家へ進んだ。その隠れ家はカテゴリーの南端、少し突き出た小さな半島のほとんど岬ともいえる場所の近くにひっそり建っていた。2 人に言わせると気付くようで気付かない場所だそうだ。

ここまで来ると道も交通法も関係ない。そこらに車を止めて家に近寄る。当然、鍵がかかっている。アルナの家と違って小さく、入り口は 1 つしかない。鍵は例のアンスによる認証キーで、レインがアンスをかざすと簡単に開いた。ドアを開くレイン。

と、そのとき ㊦㊧㊨㊩㊪㊫ という男の怒声が聞こえた。

振り返る紫苑。そこには 3 人の男がいた。一様に腕を伸ばしている。その手の先には銃が握られている。固まる紫苑。横目でアルシェとレインを見る。想定外という顔だ。どうやらつけられていたようね……。

男の 1 人がアンスで連絡を取る。鍵を開けさせ、こちらを捕まえたと報告している。話し相手の声が聞こえてくる。こちらの人数と名前を聞いている。

lecΛ ㊦㊧ e㊦...㊩㊪

-㊩㊪㊫ ㊦㊧-, <eΛZel ㊦㊪ ㊦㊧ ㊦㊪㊫ ㊦㊩,, -c, ㊦㊪㊫ ㊦㊩㊪>㊩㊪ -㊦ ㊦㊩㊪㊫

㊦㊪㊫ ㊦㊪㊫, leΛ- ㊦㊩㊪㊫ >㊩-, ㊦㊪㊫ e h-cΛ ㊦㊪㊫㊪㊫㊫㊫

Vc㊩:- <eΛZel ㊦㊩㊪㊫ eΛ ㊩㊩㊫ la㊩㊫ / e㊦ ㊦㊪,, ㊩㊩㊫ e㊦ la㊦ lecΛ ㊩㊪㊫-, lecΛ ㊩㊪㊫-, ㊦㊩㊫ -㊦㊪㊫

eΛ Jeμ εμe- ο (μe- eλ Aeε

<eΛZel ε....μe Ioε

Vcγ ε--....-cl, IaJe eλ Ue οAeΛ IaaμΥ- YaC-,, JoΛ -ΛJe Co <-I IaJe Vcδ ε

<eΛZel εCa eλ / V-JCμc- hoC Uel -Λ Ucμ,, JoΛ -Λ ε-J IaJeε

その声にビクッとしたのはむしろ 3 人の男だった。一瞬顔を見合わせる。チャンスだ。
紫苑は咄嗟にレインとアルシェを家の中に突き飛ばし、中に入ってドアを閉めた。

ドアから離れ、ノブに手を伸ばして鍵をかける。刹那、銃声が響き、弾が数発ドアを貫通して奥の壁に突き刺さる。ドアの前に立って悠長に鍵をかけていたらアウトだったところだ。

というか、初めて銃声を生で聞いた。テレビの刑事物とまるで違うではないか。アルバザードでは銃が禁止なので、2 人も初めて聞いたに違いない。しかしドアを突き抜けるとは……。紫苑は露骨に死の恐怖を感じた。

-μe εC Co ε

UcoΛ ε-ΛJo V-J I-JeIε

IecΛ εh-μ ε <cΛ I-cΛ Cl Uel -J ε

UcoΛ εOec, CoJe cΛ-C -γ I-Je CcleJ Uelδ I-J I--CeJ -CeJ >-Υ,, <-γ I-Je Λ-C Λcγ c> <eΛZel eγJ "μe Jeλ IaJe cl",,, JoΛ....ε

-μe εJoΛ Ca eγJ I-Je eλ Υcμ,, h-ο h-ο, I-Je eλ Υcμ >-Λ I-Je eλ J-CI-Λ C -μCe-ε

IecΛ εCo ε

-μe εIecΛ, I-Je eλ J-CI-Λ >-Λ <eΛZel YoJ Vcl Λ-cΛ cδ εeγ cZ V-c >-Λ Ia -μ -Λo μ-U >cΛUε

IecΛ εY-, heIε

銃声が止んだ。ドアを叩く音がある。そして怒号。やはり素人だ。アルバザードでは銃は禁止されている。所詮役人が銃を与えられたところでろくに使いはしまい。

だが、ネブラよりはずっと手ごわいだろう。何せ相手は銃だ。だが、あの驚いた様子だと、できれば人を殺すことまではしたくないようだ。所詮勉強しかできない木っ端役人といったところか。

ドアを蹴る音が聞こえる。じきに突破されるだろう。

εIecΛ, Ca μ- Cl AeγC<οΛCδ ε

εY-, γo Ice μ-ε

“μελ σελ,, -μυε, ρε >εμ εVο -ρατ”

“υα, λεε>ετ”

アルシェはドアの横でヴァルデを構える。レインは紫苑の手を引いて奥にある裏道を案内する。ここから外に出られるようだ。流石、役人の家ね。

“θ-υυο, υολ ρα μελ λεγ ρ-λ - γ- ι->-”

“-υτ...ρ-ι ιιιυ”

“λελ- ε ρ V-λς-λ ρα-λ, ιεα”

紫苑はレインを軽く突き飛ばし、玄関へ戻る。ドアの壁は薄い。大声で言っでは聞こえてしまう。紫苑はアルシェに飛びついて、肩に手を置いてひょいっと浮かび上がり、耳に言葉を突き刺した。

“ε ραμ, -λ μρ ρ ρ μ- V-μ λεγ<οα ρ ιε,, γ-λ -λ V-λλ υι ι-υε γομ υου,, -ι<ε, -λ -μ V-λ >ελλV-λλ,, υολ ρε >εμ ηο> ο>ε ε> -λ V-λλ ι-υε, >εμ V-λλ γρ ι-υε, θ-υυο”

“ρ-ι...ρα ε ρ ι->ε ραγ-,, υοι -λ -μ V-λ >ελλV-λλ”

“υεα ρ-α ρ, ρ-ι <ολ ε> Vε γ αεε ρ ε> ραμ -υ, -μυε -ιρε>υ,, γερρ-, -λυε υε >ετ”

“...-ρ(ε, --, λεε>ε”

“-ιγααγτ”

するとアルシェはふっと笑った。

紫苑は走って裏道を抜け、家の裏手へ回る。壁伝いに歩いて玄関へ回る。男たち 3 人が玄関を突破しようとしている。2 人は銃を手に持ち、ドアを蹴っている。突破は時間の問題だ。もう 1 人はアンスで状況を伝えているが、右手には銃を持っている。もう発砲した以上、撃つことにためらいはないだろう。

この距離からでは後ろからの奇襲は難しい。だが、別の手段もちゃんと考えてある。ここは岬で、地形は既に確認済みだ。

紫苑は足元の漬物石ほどの大きさの石に目をつけ、持ち上げた。思ったより重い。こんなに重いものか。そして鞆の中身をひっくり返して中に石を詰め、肩に背負う。そして周りを見回す。

2 階のベランダを支える柱がある。これだ。運が良い。最悪ロッククライミングになると予想していたからだ。だが、風向明美な以上、ベランダはあるだろうと予測していたので、かなり良い勝負だった。

紫苑は柱によじ登り、ベランダまで上がる。小学校のとき登り棒をして以来の体勢だ。いや、正確には、1 度本屋に熱中しすぎて 10 時過ぎまで外にいたとき、さも部屋で勉強していたと見せかけるために自分の家のベランダから忍び込んだとき以来だ。確かあのときも鞆を背負っていたな……。

屋根の上に着くと、音を立てないように男の頭上に行く。ドアの前に集まる男たち。石は 3 個詰めてある。非常に肩が痛い。実質的なチャンスは 1 回。というより、ほんの数秒。これでダメならかなり危ういわ。

男たちは頭上の紫苑には気付かない。連絡係りがリーダーだろう、一番邪魔だが距離が遠くて落とせない。狙えるのは目下の男 2 人だ。その中でも動きの少ないほうに狙いを定め、タイミングを見計らう。

異世界の人間なので身元も分からないし、殺してもばれないだろうが、目覚めが悪すぎる。親も娘が異世界で人を殺してきたと知ったらどう思うだろう。だから小さ目の石を、できるだけ腕を伸ばして距離を短くしてから落とした。

石はあっという間にアトラスに引っ張られていき、男の頭上に落ちた。悲鳴を上げる間もなく崩れる男。これで死んだらアトラスのせいになろう……。

一瞬、隣の男は何が起こったのか分からず、周りを見回した。チャンスだ。紫苑は続きざまに石を落とした。今度は男の肩に当たった。男は悲鳴を上げて地面に崩れた。するとアンスで連絡していた男が屋根の上の紫苑に気付いて怒声を上げた。

が、その刹那アルシェが飛び出てきて、瞬時にミドルに回し蹴りを加えた。アルシェのキック力は紫苑のとは比べ物にならず、男は降ろしていた銃をあげる間もなく吹っ飛んでいった。男は銃を離さない。アルシェは即座に倒れこむ男に追い討ちをかけ、右手を踏み潰した。指の骨が折れたか、男は悲鳴をあげる。

アルシェは地面に落ちた銃を持つ。ところが肩をやられた男が既に銃を持ってアルシェを狙っていた。

「危ない！」

紫苑は叫んで咄嗟に屋根から飛び降りた。足から男の背中めがけて飛び降りた。自分も骨折するかもしれないが、確実にアルシェは救えるだろう。

紫苑の足は男の背中に当たり、男は前方に倒れていった。紫苑の足は背中から離れ、体勢を崩して前方に倒れかけた。ところが空中で咄嗟に男の肩にしがみついたため、男の背

中に覆いかぶさる形で前方に倒れる形となった。男をクッションにできたため、一瞬呼吸ができなくなったが、紫苑はほぼ無傷で済んだ。が、男は動かない。

……死んだ……かな？まあ……国が懸かってるんだし、向こうもこっちを殺そうとしたし、しょうがないか。1人生きてれば情報は聞けるしね。

『さあ』

玄関から飛び出してきたのはレインだった。

『lecΛ, c eΛ leγc-c Λc』

『V-Λc-Λc, c-l ΛcΛ Λ-l-c cΛ c4ar....c -μe, h-c』

-μe:Λ-γ『4- 4-, 4aΛ』

アルシェは倒した男の服を漁って刃物などがないか調べていた。

『さあ, c c-l c-f j->-』

『-』

紫苑もポケットを漁る。2人ともまだ意識があるようで、ううと呻き声をあげている。頭から血を流し、髪に血がこびりついている。紫苑は罪悪感を覚えた。

いや、こんなことより早く介抱しなくちゃ……ほんとに死んじゃうよ。できれば死んでほしくない。でも救急車なんて呼べる状態じゃないし……どうしよう。

ふと頭の傷を見ていて紫苑はあることに気がついた。3人とも男だという先入観があったが、頭から血を流しているのは女だった。よく見ると髪も長く、胸もあり、ご丁寧に化粧までしている。苦しそうだが、美人でしかも若い。髪は黒く、東洋的な顔をしている。なのでまだ10台に見えてしまうが、役人である以上、そんなに若くはないはずだ。

もう一人の地面に突っ伏したほうは確実に男だった。ポケットに手を入れるのが憚られたが、そうも言っていられない。ポケットには書類だの何だのしかなく、刃物といえば護身用の小さなナイフがある程度に過ぎなかった。本当にただの木っ端役人だったようだ。

女のほうも手帳やらハンカチやらしか出てこず、防弾チョッキも着込んでいなかった。ほとんど武装とは呼べない状態だ。女の手帳の中からは写真が出てきた。茶色い髪をした若い男の写真だ。恋人だろう。

アルシェと紫苑は3人のアンスを外すと、1つ残して地面に叩きつけ、踏みつけて壊した。それから3人を担いで家の中に入れた。中から鍵をかけ、ロープで柱に縛り付ける。

女が1人と男が2人。男については紫苑が倒したほうが短髪で、アルシェが倒したほう

が長髪だ。長髪が一番怪我が浅い。女はかなり息が荒くなっている。一番怪我が酷いので、
とりあえず止血を施した。

短髪は顔が砕け、口は切れ、歯が何本か折れていた。まともに話せる状態ではない。アルシエは椅子に座って長髪に聞いた。

「> cJe J-J- -Aeδ」

「...」

「c c l- Jeeμ, JbA -A Jec V-A cJe cl JbA <lb>, -A -J> >e,, >δ」

すると木っ端役人はビクッとして、ぼそぼそ話し始めた。

「> c-cAel」

「laaμ- YaAc- -A A J leL -μla JeeAc-,, > cJe Jeμ- eAc l-A l--δ」

「VcAcAel」

「-δ」

「J- Ya<J- l--c, JbA Je>-J AeAc」

「JbA > cJe J-J- μ- e YaAc-δ」

「> c-cAel」

「-<c, c J-J- μ- e YaAc- c> -Ae leeV -Aa JbA」

「Ac-」

「JbA cJe Jec -Ae h--J <eAZel Jb>, h--J -A l--c, > c -> cJe V-Ac- -Aeδ」

「> c-cAel, J- μ- c -μA-」

「JbA AJe Yel, h-α cJe l-A- cδ」

「V-μle c le V-JAc-」

「le e c δ」

「eA Jeμ」

「JbA <eAZelδ」

「Ac」

もうひとつのヴァストリアが何なのかは誰も知らないのか……。

「<eAZel lYaJJba JAc l-cZ -μleJ JAc A J c<l- V-μle c -l hAc,, JbA a Jeμ A e c c

Ac laaμ- YaAc-」

「h--A」

男は泣いてすがる。恐怖で唇が震えている。女も意識があるらしく、顔を上げて涙ながらに泣きついた。

$$- \mu_e \otimes 0_{ec}, \langle e | \Lambda | z \rangle \mu_e \otimes h - \mu_e \otimes - \langle a, \langle -, \mu_e \rangle - \langle - \langle a, \gamma \rangle \rangle \delta_{\otimes} \\ V_C \rangle \otimes 4 - \otimes$$

アルシエは女を無視し「-Аде Јс >el,, ҃аc Ыcc҃ V-l e҃уcЈс」と言った。紫苑は苦い顔をして従った。

しかしレインは泣き出して動かなくなってしまった。アルシェはレインの肩を抱いて説得したが、レインは見捨てるのは嫌だといって聞かなかった。紫苑はレインの腕をぐいと引っ張って無理やり立たせた。そしてアンスを取り上げた。

⑥I-I- ④a ③o ①oΛ, ①coΛr MeΛ Je< ①ar⑥

⑥④a e③ ①cc③,, ①oΛ ①-μ ④a ⑦e⑦I <-Λ leVΛ->o <ccΛ- ①a....-μ①cΛ ->-ΛZe⑥

手帳を見ながら言う紫苑。アーディン＝アマンゼ、か。年は19歳。うそ、学生だったの？もしかしたら彼女は役人でさえないのかも……。

⑥①coΛ, Me③r ③e Je③ ①a-Λr⑥

⑥①oΛ MeΛ① >o- ①a - ④a le① ①oΛ V-Λo ④a, le③Λ,, leeV, -μ①e⑥

紫苑とアルシェはレインに家の案内をさせようとしたが、レインは動かない。強情だ。レインをここに置いておけば3人を逃がしてしまうかもしれない。少なくともアーディンだけは逃がしてしまいそうだ。それでは計画が丸つぶれだ。

それにレインがいなくとも2人の男が縄を解いてしまうかもしれない。こちらも誰かを縛るなんて経験は初めてだから、結びが甘いかもしれない。しかし紫苑かアルシェかのどちらかが見張りをしていると時間が足りない。

するとアルシェは⑥①coΛ, Me le③ VceΛ le③Λ -I eZ Je I-Λ- V-μ① ①a Se③ eZ⑥ と言って男が持っていた護身用のナイフを取り出した。

①coΛ ⑥①e③, -μ①e, ③c....⑥

無言でアルシェは長髪の足を引っ張ると、力いっぱい足首の裏側を切りつけた。絶叫する男。すぐにアルシェはもう片方の足首を取ると、力づくでアキレス腱を切断する。また絶叫が響く。

レインが半狂乱になってアルシェを止めようとするのを紫苑は抱きかかえて止めた。この3人を逃がすわけにはいかない。歩けなければ縄が解けても大丈夫だ。

⑥③eΛ③-Λ③, ③c Λ-⑦ ④-c ③cΛ⑦- ⑦o⑦,, ③eΛ③-Λ③⑥

アルシェは出血多量で死なないように、すぐに止血を施した。

次に短髪に近寄るアルシェ。短髪は恐怖で足をばたつかせ、逃げようとする。アルシェは顔や胴を蹴られて中々近寄れない。すると微笑を浮かべて⑥①-c-⑥ いい、脚を取って伸ばし、膝の関節を踏みつけた。

膝の皿が割れ、男は絶叫した。片方の足も取り、同じく膝を踏みつけて割る。これで短髪も動けない。アルシェがアーディンに近寄るとレインは紫苑をふりほどいてアルシェに

体当たりする。

Ⓔcɾ ʔa eʃ ʔe-ʃ >eɥ ʃel ʃc ʃcl ʃc>ʃ laaʃɾⒺ

アルシエは Ⓔʃ-c-, ɔa, -ɥʃe, -ʌʃe ʃɥe ʃ-< h-ɥʃ- ʌ-ʃcⒺ と言い、額に指先を当てる。そしてレインを押しつけ、拒絶するアーディンの脚を取る。女の力なので抗えない。すぐに脚を取られ、長髪同様、両足のアキレス腱を切られる。

金切り声をあげて女は血を噴出す。その間、紫苑は「しょうがない、しょうがない」と日本語でずっと言い聞かせていた。

レインは泣く気力も失って呆然とした。アルシエと紫苑はレインを無理やり引っ張って行く。これで 3 人は動けないし、連絡も取れない。部屋を案内させるが、レインは嫌々と首を振るばかりだ。

Ⓔlecʌ, >- -ʃ ʃ-c-, leʌ- ʃɔʃ ʃ-< l-ʌ- ʋ-ʌɔ ʃɥa ɔ ʔa ʃ-lⒺ

Ⓔeɔɾ ʃeɔɾ leʌ- ʃɔʃ ʃeʌ <cɾⒺ

Ⓔhɜʃɔ <c eʃ ʃɔʃⒺ

Ⓔ<c eʃ <cɾ ɔʋ- —Ⓔ

「うるさい！」

口ごたえするレインにイラついた紫苑は、思わずレインの頬を殴ってしまった。

「ひっ」と小さな悲鳴を上げてレインが頬を押さえる。

Ⓔ-....-l- ʃc ʃɔ -ʌ, ʃcɔʌɾ -ʌ cʌʌ ʃ-ʃʃ - ʃc >-ʌ ʃc -ʃ>cʃ -l -ʌɾ -l- ʃc eʃ ʋ->, h-cZeʌɾⒺ

「ごちゃごちゃ言うな！誰を守るために心を鬼にしていると思ってるんだ、このバカ女！」

ⒺhcʃɾⒺ

ビクッとしてレインは頭を手で覆う。

「少しはこっちの気も考えろ！優しいだけじゃ生きてけないのよ。戦ったらどっちかが負けるんだ。それが摂理なのよ。いやなら負けなさい。負けて頭割られて足を切られなさい。あのアーディンみたいに。恋人にも会えずに足切られて頭割られて陵辱されればいいんだわ！でもあたしはアンタを絶対そんな目にはあわせないから！」

紫苑は頭をかばうレインの腕を力づくで外すと、右手で顔を殴った。

アルシエは戸惑った顔で二人を見ている。

日本語の分からないレインは訳が分からず、呆然として、急に大人しくなった。真っ赤に腫れた頬を手で押さえるレイン。すんすん鼻を鳴らしながら、レインはぼそぼそと部屋

を説明しだした。

ドゥルガという人は向学心がよほど強かったようで、ここにも蔵書や書類がたくさんある。まずはヴァストリアらしきものがないかを探したが、家具やら小物やらしかなく、殲滅武具と呼べるものはなさそうだ。まあ、そんなすぐに分かったところには置かないか……。

3人は飲まず食わずで部屋を調べ、探せるところは探した。すると、四角い鍵付きの箱が出てきた。箱は頑丈で、鍵も頑丈そうだ。鍵はナンバーロックになっていた。箱はドゥルガの部屋のベッドの下に置いてあった。

ベッドをどかせてみると、箱のあったところの下に埃がたまっていた。周りの床と同様に。ということはこれがアルナの家で見たミッシングポイントにあったもののなのだろう。レインは番号を知らないという。紫苑は箱を開ける係りを名乗り出た。後は書類に目を通すだけだが、2人のほうが明らかに早いからだ。

書類の束を持って居間へ行くと、縛られたままの男たちがいた。レインはふたたび鎮痛な面持ちになった。アーディンは苦しそうで、肩で息をしている。

私が石を頭に落としたから……。もし私がもっと軽い石を落としてれば。もし私が肩を狙ってれば……。ううん、そしたら咄嗟に銃で撃たれてたにちがいない。やらなきゃ死んでいたのは私のほう。

紫苑はぶるっと震えた。これが戦い……。一応、剣と魔法の世界には違いない。でもそうか、戦いとはこういうものなのか。勝っても負けても……。傷つく。空手とはまるで違うんだ……。

レインは首を静かに振った。

“Lccl, MeA YaaJ l- -J lalaC

“eJ...f ...-L,, C-l Acl Jc Jcl

するとレインは奥に引っ込み、台所から肉切包丁を持ってきた。アーディンはそれを見てビクッと震える。

牛刀……。レインは紫苑にそっと渡す。紫苑は近寄ってアーディンに包丁を渡す。

“Cya -J <leA lalaC, -JlcA

するとアーディンは手が震えて包丁を取り落としてしまう。紫苑は拾って渡す。

“JelC-Ac,, C-l leA- Jcl Vcl leVA->c <ccA- Cya,, Y-A Cya Vcl V-l,, Jcl...lecA l-J lalaC

アーディンは助けてと泣き叫び、恋人の名前を何度も呼んだ。

6042 eC S-I-A6

lecA 6C4a Jo L- $\angle$ LeI V-1C66

アーディンは震えて包丁を落とした。アルシェが肩越しに言う。

ビクッと震える紫苑。包丁を持つ。アーディンの胸に包丁を向ける。どうせ放っておいても彼女は死ぬ。でも、苦しんでやつれて苦しみぬいて死ぬんだ。可哀想に。私が石を頭にぶつけたせいで。

それならいっそ私が楽にしてあげないと……あげないといけないの？なんで私が人を殺さないといけないの？私の責任なの？私はレインを守っただけ。それと自分の身も。なんで私が悪者なの。なんで私が責任を取らされるの？

紫苑は一步後ずさった。アルシエはため息をつく。

$$\mathbb{C}_{ee}, -\Lambda \cup V_{cl}, \cup \Lambda \text{ lec} \Lambda \delta \mathbb{C}$$
$$|e c \Lambda^6 \Lambda \Lambda \dots \Lambda - V e \rangle, \quad \Lambda \Lambda \quad J e \quad \mu c \Lambda \quad \Lambda e \quad - |6$$

$-\mu_e \otimes (-) \otimes V \otimes \mu \otimes \lambda \otimes \lambda - \delta - V \otimes \lambda \otimes - \otimes \otimes e \otimes \otimes \otimes \otimes \mu \otimes$

アルシエは半分レインを試すような口調で言った。意地の悪い言葉だ

[illegible][illegible]

紫苑もレインも何も言えなかった。アルシエはダンと書類をテーブルに置き、さっさと席について書類に目を通し始めた。そのまま3人は寝ずに書類に目を通した。

アーディンたちは時折呻いたり水をくれなどと言ったが、アルシエは相手にしなかった。その代わり、自分も一滴も水を飲まなかったし、一口も食べなかった。彼も彼なりに心を

鬼にしているのだろう。

フェンゼルらに父を殺されたレインが一番復讐に燃えるべきなのに、レインは一番彼らのことを気遣っていた。紫苑もアーディンに石を落とした手前、彼女のことは特に気がかりだった。アーディンは夜が更けるにつれ、だんだん元気がなくなっていった。

⑨ 4

結局徹夜で朝を迎えることになった。朝日が差し込み、アーディンを照らす。3人とも大人しい。寝ているのかあるいは……。アルシェは机を下からダンと蹴り上げた。驚く5人。アーディンたちはハッと目を覚ました。

⑥㉓-JJ㉓, CcJe cl KcJeJ⑥

酷い、起こすことないじゃないの。

一向に開かない鍵をいじりながら紫苑はアルシェを睨んだ。

⑥J㉓Λ, -ΛJe Jac UccC <--U⑥

え？

⑥㉓ -ΛJe J-J Ue V㉓U, J㉓Λ -ΛJe JeJl leVΛ->㉓ <ccΛ- -JlcΛ U-ΛC-, J㉓Λ CcJe cl Jac Jac-l-l-
l-Λ- <l㉓e> V㉓Jc⑥

アルシェは意外にも朝食にしようと言った。そしてレインと紫苑に仕事を任せ、一人包丁を持って台所へ行った。そして少しすると乾パンや水などの食料を持ってきた。基本的に缶詰の非常食だ。アルシェは皿やボウルに食事をよそり、全員に配った。

ところがアーディンは虫の息で、食べるどころではなかった。

⑥Cc eJ <Je> - V㉓Jc >-Λ -Λ Jac-C Jac>C Ccd cΛ....h--....⑥

アルシェは抱き起こして水を口に入れるが、咽て吐いてしまう。

⑥Dec, VcJ Je, CcJe C-Λ eJ --VcU,, J㉓Λ Uc> Ya㉓ J㉓Λ Ca <--U⑥

男たち2人はガツガツと食べた。

Ucc㉓⑥-JUe, Ca-Λ eC Jac-l-J- cΛ,, CYa Jc JacΛ-δ⑥

⑥Cee, C㉓, Jac-l- CaJ Jac-l,, laJe Vc Ccl VcU,, Y-Λ CcJe C- eC >cΛ,, J㉓Λ -Λ e-J l-⑥

⑥CeC....CYa eC Jac-l-J-, J㉓Λ CYa UcJ Jac-l- l- Λ-⑥

⑥....Je Jac V-l,, Y-Λ Je -ΛJe C-e JacC⑥

⑥....-U⑥

食事が終わるとまた作業に戻ったが流石に眠い。交代制で寝ながら作業することにした。1 度に寝るのは 1 人で、4 時間交代で起きる。起きている 2 人は鍵開けと書類整理に従事するという条件だ。

最初にレインを寝かせ、次に紫苑。そしてアルシェの順だ。アルシェが寝ているときは一番恐怖を感じた。目の前の 3 人が行動するならそのときだからだ。紫苑は作業よりもむしろ監視に力を注いだ。こういうとき、やはり女は弱い存在だと思う。

夜になるが、誰も食事をしない。フェンゼルのメールでは明日の朝には帰れとあった。もう時間がない。部屋にはアーディンの呻き声ばかりがこだまする。地獄の底、アルカでいうならラティアから聞こえてくる怨嗟の苦悶が一日中耳を突き刺した。

紫苑は地獄の釜の底から聞こえるような苦悶のせいで、ひどい胃痛になった。喉は胃酸で焼けて吐き気がするし、食欲もない。息は胃の腐ったような匂いだし、トイレに行くとか下痢になる。我ながら最悪だと思った。

地球じゃこんな目に会ったことなんてなかったのに……。

㊦ ㊦

日付が変わってからはまた 3 人とも徹夜を始めた。

2 時ごろになったころ、アーディンの容態が急変した。痙攣を起こし、泡を吹き始めた。2 人の男は必死に命乞いをするが、アルシェは聞き入れない。アーディンはもはや命乞いさえできない状態で、ビクビクと体を震わせている。死に近いのは分かった。

だが、まだドゥルガの残した情報は見つかっていない。いま人を呼ぶわけにはいかない。逆に、いま楽にしてやるのも遅すぎる。いま殺すならもっと早くに殺してやるべきだ。いま殺しても何にもならない。紫苑はそう自分に言い聞かせた。

レインは憔悴した顔でアーディンと書類を見比べる。そして鍵のかかった箱を恨めしそうに。

lecΛ ㊦lee. leΛ- ho> lc- (a ㊦V Vol ㊦cδ ㊦a)㊦ ㊦㊦㊦㊦ δelδ ㊦-Λ ㊦e㊦ lc- leVΛ->㊦ <ccΛ- -㊦lcΛ,,
Λ㊦Λ e㊦ ㊦-Λ-,, la V㊦㊦㊦e㊦ ㊦-Λ㊦㊦

しかしそれは最終手段だ。もし箱の中身がそれで壊れたらどうする？最も安全な方法で開けなければならない。そんなことはレインも知っているはず。だから紫苑は無視した。アルシェも同様に無視した。

レインは小さな声で吐き捨てるように ㊦lee>J㊦ と呟いた。

そして 4 時に差し掛かったころ、アーディンは静かになった。暫く静かすぎて誰も気付かなかったが、ふと紫苑を見ると、アーディンの体はピクリともしなくなっていた。先ほどから時折痙攣を繰り返していたのだが。

紫苑の胸中に突然後悔と自責の念と言いがたい恐怖が浮かびあがった。

——死んだの？

私の落とした石で頭を割られて……2 日も苦しんで……そして死んだの？

私が……殺したの？

胃が痛い。お腹が痛い。頭がくらくらする……。

直接止めを刺したわけではない。だが、死因は明らかだった。レインとアルシェは紫苑の真っ青になった顔を見て苦々しい顔をする。2 人の捕虜も同じだ。誰もアーディンを殺したくなかったのだ。

アルシェは立ち上がり、アーディンの体を揺さぶる。しかし反応はない。脈を取るアルシェ。そして首を振る。

ガタっと思わず立ち上がる紫苑。一斉に 8 個の目が注がれる。

目が……人の目が……怖い。そんな目で私を見ないで……。

私……人殺しになってしまった……。

㊦Jec-Λr h-cZeΛr (c, lee>Jr㊦

男が苦々しく言い放った。

「わ……わた……ち、ちがうの。私はただレインを……」

㊦(c ʔa Jcl ” ΛɔΛ Vɔʔc ʔcΛ” c> (c Vɔʔc, lee>J,, lcVʔɔ (ccl -lleʔcʔ ʔa >-Λ (a ʔ-hcr㊦

「……あ……うう」

-ʔe ㊦lee>J....δ ʔ-, -Λʔe ec lee>J, (cl ʔcɔΛ ɔ lecΛ㊦

アルシェは紫苑の肩に手を置いて、座らせた。紫苑は手が震えて作業ができない。唇まで震え、歯がガチガチいう。急に背中が怖くなった。誰かが背中に立っているのではないかという恐怖が浮かぶ。

私が殺した……明らかに、私が殺した。人を……殺してしまった……。もう戻れない。異世界に行きたいなんて何であんなに簡単に軽薄に思ってしまったんだろう。剣と魔法にほど遠いこの世界でさえ、この有様だ。

私にはどれだけの覚悟があったんだろう。ただ勉強して訓練して、心のどこかでは来るはずもないと思ってた不安を掻き消すために訓練して……そして……ただひたすらに意味もなく願った。

何で願ったんだろう。何も目的なんてなかったくせに。人よりちょっと頭が良くて可愛いからそれで疎外されて迫害された。そんな子供時代を送った。お母さんたちは忙しくて兄弟もいない。

だから本だけが友達で、空想ばかりしてた。そしてこんな嫌な世の中は嫌だと思った。誰か私を必要としてくれる優しい世界がほしかった。だから異世界を望んだ。自分のすべてをリセットしてくれる世界を。

そんなことを私が無責任に願ったばかりに、私は一人の人間を殺してしまった。石を落としたとき、こんな深刻なことになるなんて考えなかった。あのときはただ夢中で、相手が死んでもしょうがないって思って落とした。死んだら死んだでいいやなんて……。

あのときと同じ、異世界を望んだときと。後でどうにかなるだろうなんて甘い考え……。そのとき深く考えもしないで出した結論が、人を殺したんだ……。私、なんてバカなんだろう。なんて考えの浅い人間だろう。

紫苑はいつの間にか泣いていた。空腹とストレスでますます胃が痛い。内臓が腐ったんじゃないかと思うくらい吐き気がする。するとレインが肩を寄せて抱きしめてきた。

၆၆၁၁...၆

レインは何と言おうか考えているようだ。

⁶Ce- C₄ eA lal-C lal c> >, Jol lal JeC-C C lal., Ce lel lal lal hcl

$${}^{\circledast}\text{lec}\Lambda\dots\text{lec}\Lambda{}^{\circledast}$$

紫苑はレインに抱かれながら泣いた。アルシェは怒った目で黙々と書類に目を通していった。彼の怒りはフェンゼルに向いているのだろう。男のアルシェは悲しむではなく、怒ることですトレスを解消しようとしていた。

6 時になった。書類はすべて目を通し終えた。結局ドゥルガの研究資料ばかりで、今回の事件に関する情報はなかった。皆の目は箱に集まる。だがまだ箱は空かない。ナンバーロックの桁数は 5。パターン数は 10 万。当然、2 日では開かない。

そのとき、フェンゼルから長髪のアンスにメールが入った。メールには「状況報告せよ」とあった。アルシェはここまでだと立ち上がった。

紫苑も頷いて立ち上がる。何をどう言い訳しようとすぐにばれる。フェンゼルは恐らく既にこちらに手下を派遣しているだろう。そもそも 2 日間も途中経過を報告しないこと自体が不自然だ。

アルシェは 3 人分の荷物を取りにいった。戻ると彼は机の上の銃を手にした。にわかに怯える捕虜たち。だが、アルシェが狙ったのは箱だった。

銃声が響く。銃は鍵に当たって跳ね返った。跳弾は壁に当たって転がった。箱は銃の勢いで吹き飛んでいった。中身が精密機器ならこの衝撃でダメかもしれない。が、この箱を絶対に動かないように固定して撃つのは難しい。

鍵は破壊され、箱の端がぐにっと曲がって隙間が開いた。アルシェは捕虜を見た。

Ⓔ <eΛZel -l7oC Ve -(a,, JoΛ laJe -l7 Jcl CcJeⒺ

ⒺⒺ

Ⓔ -Λ Λ-....Λ-Λ....θeΛC-ΛC -l -μlcΛ ->-ΛZe....., l-lcoV-Ⓔ

Ⓔ Cc laC lc> -l -μ l-lcoV- <ccΛ- l-, lee>JrⒺ

Ⓔ ...Λ-> CcⒺ

そしてアルシェは家を出た。2 人も後に続く。

外にはアルシェが借りた車があったが、その少し遠くにもう 1 台の車が止まっているのが見えた。恐らく捕虜のものだろう。近寄るアルシェ。長髪がリーダー格らしいから、車を借りたのも恐らく彼だろう。彼のアンスをかざすと鍵が開いた。

ΛcoΛ ⒺleΛ- 4ol eΛ >- ->o C-l CαδⒺ

Ⓔ4-, -Λ 4ol μcJ -ΛJ e ΛcoJ c CαμⒺ

そしてアルシェは車を飛ばす。

アンスを使うと所在が警察にばれる。フェンゼルが派遣した連中が到着するのはすぐだろう。そうすると自分たちはアーディン殺しの犯人として指名手配されることになる。そうするとフェンゼルにとっては好都合で、警察が動いてくれる。もしこのときアンスを使っていれば所在がばれてしまう。

でも長髪のアンスを使ったところでそれは同じことではないか。だがアルシェはアルシェのアンスが最後に使われたのがレンタカー店であることにしておきたいという。なるほど、それもそうだ。

捕虜はレインのことはともかく、アルシェと紫苑のことは知らない。名前は聞こえても、

素性は分からない。アルシェと言われてもどのアルシェか分からない。アルシェはタレスではないから、アルシェ＝アルテームスだとばれるまでに時間がかかる。つまりハインの息子だとばれるまでに時間がかかる。

アルシェはレインと同じ時間にアンスを使っている。電車やホテルがそうだ。警察はまずレインを指名手配するだろう。そうするとレインのアンスの履歴が調べられる。同行者がいたことは捕虜の証言で分かるが、それが誰かは分からない。

そこでレインがアンスを使ったのと同時刻にアンスを使った人間を調べる。電車の場合、腐るほどいるが、ホテル、しかも 2 日分となれば容易にアルシェのアンスが共通点として浮上する。

いまアルシェのアンスを使うと、それだけレインとの共通点が増え、見つかりやすくなる。長髪のアンスを使うことにより、アルシェとレインの共通点が見つかるのを遅らせることができる。

いずれアルシェ＝アルテームスがハインの息子だと分かったとしても、それは警察が知る情報だ。フェンゼルが知るのは警察がアルシェの名を出した後だ。その時点でようやくフェンゼルはハインの裏切りを知る。当然、ハインは危ない。

Ⓔlee -μe, ϕa ρeγc-ϕ μ-λ ϕa Veμl - h-cλ lϕaυυaδ Ⓔ

Ⓔγ-, υcaλ,, >o-Ⓔ

Ⓔo>δδ Ⓔ

Ⓔγ- λeγμ-, μ-υ l-Ⓔ

Ⓔυa lϕaυυa ρeγc-ϕ ϑe< - ϕaδ Ⓔ

Ⓔλec,, Vcλυ-, ϕcυe >cμ ϕ-ε γoVⒺ

え、ハインさんからメールが帰ってこない？隠れ家でメールをした段階で？それって届いてないだけ？不安になる紫苑。

アルシェは車を飛ばす。紫苑とレインは箱を開く。中には手紙が入っていた。良かった、電子機器じゃないみたい。でも……ヴァストリアでもなかったみたいね。家の中はあら捜ししたのに……。いったいどこに何を……。

それはレインに当てたドゥルガの遺書だった。レインはアルシェにも聞こえるように読み上げた。

Ⓔϕa eγυ ϕc υc> >o- V-υϕμc- γo υel ϕc cυγ ϕa heγ c> ϕaμ, lecλ,, -λ V-λc ϕc >-λ -λ

VopC-C,, h-c, Me C-< V-JCPC- -IC lel V-Mle 7-eA Ca M-, 4-A Cc, laC, Me Je< Ca - h-cA
-ICee>J lYaJJba lel h-UC -AC I eC >ec C -Mce- I-A- JolJ la JeC <eAZel e>c, V-Ao -MceA-
la-, -3, Cc el< <-I - Ae)M- C -IJC- ol I->c,, lecA, V-AC-AC,, -A Ccc- U-I Cc 7- CO--Ya,,
laaMY- YaCc-6

「え……？」

-Me 6h-M6

読み終わったレインでさえ、6eM6 と言った。中にもう何もないのか聞いたら、アルシアの隠れ家の地図とその家の鍵しかないと言う。これは……この遺書は何の意味を成すのか？

なぜもう既にレインがもうひとつのヴァストリアを手に入れたことになっているんだ？なぜヴァルデがカテゴリーの隠れ家に置かれていると書いてあるんだ？実際にはアルナにあったにも関わらず……。

さらに、事件の概要を予めこちらが知っているような口調。指示として理解できたのはもうひとつのヴァストリアとヴァルデをハインに渡せということだけ。そしてフェンゼルを倒せということだけ。事件の概要は書いていない。アルシェが話さなかったらどうする気だったのだろう。

色々推察してみたが、この遺書が何の意味を成すのか分からなかった。あれだけ苦労して得たものはこれだけ……。3人、特にアルシェは怒りの色を隠せなかった。一方、紫苑は虚しくなった。こんなもののためにアーディンを死なせたのか……。

南東カテゴリーの付近の林道で車を止め、3人は車を降りる。そこから徒歩で街に入る。ハインからの連絡はない。アルシェは嫌がりながらもアンスを使い、電話をかける。ところが出ない。どうなってるんだと苛立つアルシェ。

UcoA 6Ca eC VclKpAl Uel leA- 4ol C-Ub3 7o77o -AJ e <clAc-, AoA 4ol Ca,, JoA leA- cl Ccl
>cYa -AJ,, CaM leA- Je< U-< M-U V-l eAZ 4al V-Mle - h-cA lYaJJba,, leA- Ccl 7o CcJ
C-I leA- 3M-J <-I Ca VeMl 7o77o Ca hoC, -ICc V-Mle,, h-cA lYaJJba V-JC Vcl -cl <eAZel
7o77o Uec V-Mle,, C-I leA- Jc Zc7o -IC6

-Me 64-, -A U-> Cc6

紫苑が長髪のアンスで特急の切符を買おうとしたとき、レインが 6cAr6 と叫んで道の脇に2人を連れていった。なんとそこにはニュースが流れており、召喚省の役人であるハイ

ン＝アルテームスが同僚のネブラ＝ブルーナの殺害容疑で逮捕されたと言っている。

-Mue 6VclL-llr eeor >- <oc) h-cl >-l 7-hc <ce eelr 6

怒鳴るアルシェ。無理もない。フェンゼルはハインの裏切りを知っていたようだ。いつどのように知ったのかは分からないが、対応が早すぎる。恐らくもともと知っていたとしか考えられない。

Uccl 6Me< lcl, -Mue,, Jcl (aM, leL- J->e> <-l -lcl 6

-Mue 64-, (aM h-cl <oc) Ya,, 4-l MeJ e <eAZel la7cl le7M- e 7-eeS,, Jcl <eAZel JeM Jcl V-l -l lcl la,, (-c), ->cl -l Mc3-c l- <Me> >- M-6

lecL 6Jcl lcl eL hcl (eL (Ya (-l e> l-l- e l-cl-l JeLee 6

-Mue 64-, cl Ucl le laL-c c <c- -lcl 6

lecL 6...laM, leL- 7cl Ucl eL -M- (eL -lcl-6

-Mue 6l-l- cl 6

lecL 6>cl h-cl lYaJcl <oc) Ya,, (-l leL- cl V-Mle,, 4-l leL- JeM V-JMc- -l >cl / M-, Jcl -lcl l- 7->cl -lcl-, (-> cl le leL- Jcl l- < eL Je< V-Mle cl -lcl - h-cl lYaJcl le 3cl Jcl Ya - h-cl- c> le Jel,, Jee (Ya MeAJ <-l cl - la -lcl 6

なるほど、流石はアルナ大の首席。レインの作戦が良さそうだ。アルシェも頷く。今は体勢を整える以外に方法はない。紫苑とアルシェは短気すぎだ。一応長髪のアンスを使い、人数分の切符をアルシアまで買う。

それからまた鈍行で来た道をゆっくり帰っていった。イルケアに差し掛かるころには日が暮れそうになっていた。夜に外出禁止違反で警察に捕まると終わりだ。電車には乗り続けていなければならない。その間は当然駅から出られない。当然、食料は購入できない。しかたがないので一旦3人はイルケアで降りた。

その後、紫苑は長髪のアンスを受け取り、1人で食料品を大量に買い込み、ありったけ鞆に詰め込んだ。紫苑だけ顔が割れても誰だか分からないからだ。国が控えているアンス使用者の画像を出すこともできないので指名手配しづらい。アンスがない人間だからこそできる手段だ。

次に、アルシェの顔を隠せる帽子を買い、レインの顔を変えるための化粧を買った。そして駅で合流した。電車の中で化粧をするレイン。かなり厚くしたのでパッと見たら誰だか分からない。心配なのはむしろアルシェのほうだ。

レインは……すっぴんのほうが可愛いと思う。髪型も変えたらどうだといって紫苑は自分の髪紐——といっても、もともとレインの物を拝借したのだが——を貸そうとした。だが、レインはゴムならあると言ってさっさと結わいた。流石は女の子、ちゃんと持ってるんだなあ。

車内で夜を迎えた。人は少なくなっている。ニュースをずっと見ている 3 人。すると遂にニュースでレインとアルシェと謎の少女、つまり自分が指名手配されたと知った。

容疑は召喚省の役人、アーディン＝アマンゼ殺害及び、その同僚 2 名の拉致監禁・傷害致傷だ。

2 人の画像が出ているが、アンスに登録されたものなので、現在の画像とはあまり似ていない。パスポートの写真のようだと理解すれば紫苑には分かりやすかった。これなら化粧でも十分ごまかせるわね。

そして……私の写真は当然出ていない、と。殺害……の犯人は私なんだけど。

そう思った瞬間、改めてハッとした。そうか、自分は人殺し以前に犯罪者だったのだと。

9 月

結局鈍行を乗り継いでアルシアに着いたのは出発から 2 日後のことだった。3 人は北アルシアの最北端で降りた。ここからは歩きだ。車は借りられないし、タクシーも無論ダメ。ヒッチハイクでは隠れ家まで行けるわけがないし、今は指名手配の身だ。公共の自転車も使えるが、それもアンスがないとダメだ。

しかも、ここからはレインと 2 人きりになる。誰か 1 人が街に残ってハインの裁判がいつ行われるかを観察しなければならない。ニュースは街の中なら流れているのでアンスがなくても見れる。それにハインは召喚省の役人だから、その殺人記事を記者が逃すはずがない。

だがこれは大変な役だ。アルシアでも夜は出歩きが禁じられている。当然街の中にいては捕まってしまう。そこで昼は街にいてニュースを観察し、夜になる前に街を出て、郊外で野宿しなければならない。その役はアルシェにしかできない。それにアルシェも自分の父親のことだから気になってしかたがないだろう。

しかし、ここから歩いていくのは大変だな。レインの話だと車でも 2 時間はかかるという。アンスがあれば地図が見れるので徒歩での最短距離が分かるのだが、アンスを使おう

ものならすぐに居場所がばれてしまう。街を歩くだけでアンスの I D をスキャンされるので、もう電源は 3 つとも落としてある。

あとは買い込んだ食糧が持つかどうかの持久戦だ。恐らくこのアンスは買い物にはもう使えないだろう。警察が止めているはずだ。そう、危険を冒そうと車どころか電車さえ乗れないのだ。だからいまのうちに帰りの分の切符は買っておいた。無論、鈍行だ。

しかし歩くとなると……。紫苑は難色を示した。車で郊外を 80km で走ったとして、2 時間あれば 150km 以上行ける。時速 5km で歩いたとしても 30 時間はかかる。ほぼ一日中歩いても 2 日はかかる。

すると 3 人の横を日本でいう高校生くらいの少女 2 人が通りかかった。そして一時的に自転車を道に止めておく。ここは一時駐車可能な場所だ。少女らはどこかへと歩いていく。

-M_e 6>>6

lecΛ 60ecΛ, -M_e6

-M_e 6C-I C_a eC VclC_oΛ6

lecΛ 6JeΛC_oΛI_r6

ぷっと笑ってしまう紫苑。じろっと見てくるレイン。……ごめん。

-M_e 6-> eΛ Λ-I_u C_oΛ C-I C_c >-Λ C_c eC <c>, 4aΛ₇6

レインはうっと唸って黙った。言い返せないようだ。アルシエは慣れた手つきで公共自転車の認証システムを破壊する。これでアンスによる受信も送信もできなくなった。もはやこの公共自転車は誰が借りたかしか分からない。つまりあの名も知らぬ少女たちだ。少なくとも彼女たちが借りたということしか国は把握できない。

lecΛ 6I-I- eJ C₄ Je_μ _μC_χo> e 4->e_μ lec>, 4->e e> _μC_χ ol el _μC_χ 7a₇c,, C-I....eJ C_a le _μC_χδ 6

-M_e 6-Λ lo C_c -J> C_oΛ C_a lecΛ,, 4-, 7eC_c-, 0ec, C_oΛ, C_c C-Λ,, V-l, 4aΛ₇r6

C_oΛ o lecΛ 6-, -I_r6

紫苑とレインは自転車に跨ると、文字通り逃げ去っていった。自転車で滑走して外へ出る。振り返るとアルシエの姿は既になかった。逃げ足が速いなあ。でもこれで助かった。自転車だと体力が消耗しづらい。そして遥かに早く着く。

北アルシアを抜けると急に郊外になった。アルシアは森と泉の地方だ。歴史的に有名な地方で、カコ時代にはアルシアの 11 魔将という魔法に長けた将軍が集まり、独立勢力を

築いた。また、彼らはそれまで散在していた魔法を体系付けたことでも有名だ。

ところが昼すぎになるとレインがばてた。しょうがないので一休みして昼食を取った。本当にこういうときはコンタクトを付けたり常備薬を飲んだりしていなくて良かったと切に思う。そして今日が生理でなくて良かったと思う。でも、レインはどうなんだろう……。

၆၇၆၆, ၁-၂၂၁, ၂၆၆၆

昼食後、少し休んでからまた自転車を漕ぐ。まさか異世界に来て自転車を漕ぐことになろうとは。それにしてもあまりに遠い距離でなくて良かった。カテゴリーからだったら危うくツール・ド・フランスだ。

そうこうしているうちに日が暮れかけた。街だともう少しで逮捕される時間だ。それでも2人は漕ぐ。夜外に出る想定がされていないので、自転車にはライトなど付いていない。

かといってこんな林の中で野宿などできようか。レインはかなり疲れているようだが、状況が分かっているので決して弱音は吐かない。レインは我慢強く、自分が辛い局面で弱音を吐かない。

隠れ家はもう 1 時間ほどだと言う。だが太陽はそこまで待ってくれそうにない。残り 30 分の距離でも森に迷えば辿りつけなくなる。むしろ迷ってしまい、かえって遠くに行ってしまうそうだ。紫苑は倍速で飛ばした。レインは必死に付いてくる。

しかし目は暮れてしまった。しょうがないのでゆっくり道を進む。ペースはほとんど歩

きに近い。いや、もはや歩いたほうが速い。自転車から降りて歩く 2 人。カラカラと車輪の音が響く。木々のざわめきが不気味に聞こえる。道なりに進んでいるので辛うじて迷わないですんでいるが、ここで迷えば終わりだ。なにせアンスが使えない。

降りて 1 時間ほど歩くと、ようやく隠れ家に着いた。そこは小さなコテージだった。入り口には当然鍵がかかっている。レインはアンスをいま使えない。が、ここは小さなコテージなので、アンスによる認証キーを採用していない。ふつうの鍵だ。そしてその鍵はドゥルガの残した箱の中に入っていた。

レインは鍵を開けると中へ入った。紫苑も続く。中は映画に出てくるような山小屋といった感じだった。暖炉があり、テーブルがあり、木の椅子があり、といった感じだ。調度品はなく、家具が最低限あるだけだ。食料の蓄えがあるといいのだが。

“lecΛ, ʔʔa eΛ laΛ- ʌcl -ʔa ʌeʔeδ ʔ

“h-ʔʔ

“ʔʔa ʌʔ ʌe ʋʌʌ ʌ- -ʔaδ ʔ

“eΛ ʌeʔ,, ʋʌʌ ʔaʌ ʌccʔʔ

疲れているにもかかわらず、まずはこの家に何かないかを探し始めた。明かりをつけてからの 2 時間は結局飲まず食わず休まずであら捜しをした。

特にこれといったものは見つからなかったが、非常食が見つかったのはありがたかった。残念なことに水はなかったが、なにせ森と泉の地方。外に出ればいくらでも水はあるそうだ。日本と違ってそこらの泉は未だに飲料水として使えるそうだ。

あら捜しをしていて、紫苑はあることに気付いた。床にくすんだ粒が落ちているのだ。しかもそのほとんどは水分を失って乾いていて、屑のようになっている。しかもこの粒はたくさん落ちている。粒が落ちている上には花瓶が置いてあり、中には枯れた枝と葉が入っていた。

これは……花の欠片？花って散って粒になるっけ？ならないよねえ……。匂いを嗅いでみるが埃っぽいだけだ。しかし、このような粒はどこかで見覚えがある。

紫苑は枝を取り、葉も見てみる。葉は元はかなり厚く頑丈だったのではないかと思われた。しかも葉の形状からしてアルシアには珍しそうな植生だ。

アルシアの植生は先ほどから嫌というほど見てきたが、葉からするとこれはむしろもっと南のほうに存在するタイプだ。そしてこの粒……どこかで見たことがある。

「lecΛ, ɔ> ʔʧa -ʔʧ-ʧ ʔeeʃ ʌaaʃʧ- ʌʧaʃʧaaδ ㊦

「ʌaaʃʧ-δ --....ʃ- 1 ʌelʧ e ʃ->-ʔʧ ʌeʌ-ʌ ㊦

そうよね、最後に会ったのはレインと出会った1月前。つまり11月くらい。それより前にドゥルガはヴァストリアを見つけているわけだから、ここに来たとしたら9,10月ごろ…。となるとこれは秋の花。そしてこの粒、この葉。これはもしかしたら……。

「lecΛ, cʌ,, ʔʧa ʌɔ ʧa eʧ ʧɔ ㊦

「>>....ʌɔʌ eʌ ʃeʃ,, ʌe >ccʌ-δ ㊦

「ʌɔʌ ʌɔ ʧa eʧ -ʌcʃcʌ ㊦

「-, ʧ-ʧ-ʧ-, -ʌcʃcʌ ㊦

そう、レインも同意したとおり、これは金木犀だ。どこかで見たなと思ったら、私の高校の近くに咲いてるんだ。秋に上福岡を歩いたとき、金木犀がたくさん咲いてた。それに、駅の近くの地面には「市の花キンモクセイ」って書いてあった気がする。

けど、金木犀はある程度暖かくないと咲かないだろう。この辺りに金木犀は咲きそうもない。

「lecΛ, ʌʧaʃʧaa ʃccʌ-ʧ ʧa >ccʌ-δ ㊦

「ʧ-, -ʧc ʧcʌʧ- eʌʧɔ ʃ- ʧcɔ ʧa >ccʌ- - ʌ-ʧcʧ c> -ʌcʃ ㊦

「ʃɔʌ ʧa eʧʃ ʃ- ʌaʌ-ʧ -ʧa c> -ʌcʃ ʧɔʌ ㊦

「h--ʔ -ʌʧc, ʃ- ʌaʌ-ʧ -ʧa c> ʋc- ʋɔʃʧ,, ʃɔʌ ʧa eʧʃ.... ㊦

「ʃ- ʃ-ʧ-ʧ ʋ-ʃʧʃc- ʃe -ʧa, -ʌʃc- ㊦

レインは紫苑に頷いた。そう、ドゥルガは去年の秋、ここに来ていたのだ。死の直前だったのだろう。

しかしここには何ら今回の事件の手がかりがない。アルナにはヴァルデがあり、カテゴリーには遺書があった。だが、ここには何一つない。ということは彼は事が発覚してからここには来ていないということだ。

呑気に花を飾る余裕があるということは、事件発覚の前だろう。そしてこの後に彼が殺されているならば……それはアルシアにヴァストリアがあったと見て良いのではないか。その可能性が極めて高い。

ここには何もなかった。遅い晩食を取る2人。そしてコテージのベッドで2人は寄り添うようにして寝転んだ。ここなら誰も来ない。でも不安で仕方がない。家の鍵はかけたが、

本気で侵入する気の人間にとっては大した障害にはならない。

ベッドの中で、紫苑はレインの頭を撫でた。するとレインは今まで張り詰めていた糸が切れてしまったようで、泣きじゃくってしまった。

そして紫苑のことを気遣ってきた。アーディンの件は自分のせいだといって聞かない。一方、自分を守ってくれた紫苑に感謝しているとも言ってきた。紫苑がこの先の人生でアーディンのことを気にするたび、自分も一緒に苦しむから、許してくれと泣いた。

紫苑はレインが愛おしくなって抱きしめた。

ⒺΛαΛ 1--θ ρΨα, lecΛ,, λclhc ΛαΛ ε-λ-ρ ρΨα 7- 7-ρeeδε

Ⓔh-α,, 7ααρ, ρΨα λclhc ΛαΛ -ρ e>cλ - ρΨα <ceΛ ρΨα V-Λα eΛZ ΛαΛ λccΛ-ε

そう言ってレインも抱きついてきた。一日中走って汗をかいただろうに、太陽の匂いと乳臭い匂いの混じった香りが感じられる。少しも不快ではない。

後はとにかくアルシェの連絡を待つのみだ。アンスの電源を入れると居場所が分かってしまうため、連絡はこの隠れ家の住所に手紙を速達で送ることになっている。

ハインの裁判が行われる日に護送が行われる。そこしか狙いどころはない。ハインの護送は決定即日に行われるわけではない。そこにはタイムラグがある。ニュースで裁判が行われる日時が放送されるほうが先だ。そのラグは 1 日以上は最低でもある。速達が届き次第、即座にアルシェと落ち合う手筈だ。

一応ここには避難という目的の他に情報収集という目的もあったのだが、今回も大した資料は見つからなかった。あわよくばもうひとつのヴァストリアがあることを期待したのだが、やはりなかった。

しかしながら、ドウルガがアルシアでヴァストリアを見つけたのではないかというのは有意義な情報だろう。

とにかく今はアルシェの連絡を待つしかない。紫苑はヴァルデを握った。これをハインに渡せるかどうかはすべてだ。

ハインはアルシェの話によると魔導師だ。それはフェンゼルもアルテナも同じで、彼らは魔法の能力を持っているそうだ。無論、アルディアの時代ほど強力ではないそうだが、それでも現代に生き残る希少な魔導師らしい。

ヴァルデは確かに強力なヴァストリアだが、魔導師でなければ使いこなせない。ただ持

っているだけでは意味がないのだ。

アルシェは残念ながら父から魔法の力を遺伝しなかったという。運が悪かったといっていた。となるとヴァルデを渡す相手はハインしかない。

厳密に言えばアルテナでも良いのだが、アルテナに事情を話して信用させて接見するという企画を成功させるのは事実上、不可能だ。誰がそんな話を信じるかということだ。かえって刺客だと思われかねない。

まして、アルテナにその用件で接見するにはフェンゼルのいる召喚省を通さないわけにはいかない。だったらハインに渡すほうがよっぽど可能性がある。

しかしチャンスは一瞬。護送中のハインの車を襲い、ハインにヴァルデを渡す。そしてハインの魔法の力で周りを蹴散らし、その勢いでフェンゼルを叩く。

もうひとつのヴァストリアはドゥルガが見つけたそうだが、しかしそれはどこにもなかった。確かに紫苑たちはそれを持っていないが、それはフェンゼルとて同じだ。

となるといまはヴァルデがある分、こちらのほうが有利だ。すべての隠れ家にもうひとつのヴァストリアがないと確認できた以上、後はハインにヴァルデを渡せさえすれば、すべて解決する。

㍻ ㍻

結局アルシェからの連絡は 2 週間以上なく、紫苑とレインは不安に感じたまま時を過ごした。食料はかなりの非常食が蓄えてあったし、水はいくらでも沸いている。ただ、桶に水を汲みに泉へ行くなんて体験は初めてだったし、冷たい泉で体を洗うのも初めてだった。というか家の外で裸になるなんていつ以来だろう。

恐らくドゥルガはここを拠点にヴァストリアを探していたのだろう。食料が多めに蓄えてあった。毎日同じようなものばかりで栄養の偏りが気になるが、仕方がない。パンというか小麦粉原料のものが多いのだが、小麦粉は必須アミノ酸のリジンが少ない。リジンは魚や大豆で補給できるのだが、そんなものはない。

レインが少し頬が元に戻ったねといってきた。アーディンの一件以来、やつれていたらしい。こっちにきて体重計なんて乗ったことがないから分からなかったけど、随分痩せていたらしい。

でも 2 週間が過ぎたころになるとだいぶマシになってきた。食事もちょうんと取れるよう

になったし、悪夢も見なくなった。

しかし、不安はいつも付きまとう。アルシェは何かあるまで連絡してこない。でも逆に指名手配されているんだから捕まってしまうと連絡が取れない。いま音信不通なのは既に捕まってしまうからと考えると不安で仕方がない。戦地に赴いた夫の帰りを待つ妻のような気分だ。彼氏の一人もできたことないけど。

このコテージは静かすぎて誰も来ない。林道に面しておらず、林の中の小道にあるから尚更だ。動物の影以外、見たことがない。郵便ポストは分かりやすいように林道沿いに置いてある。ここでアルシェの手紙が来てないかどうか毎日4回確かめに行く。

この日の朝、紫苑はいつものようにポストを開けにいった。細いポールの上に箱がくっついたタイプのポストだ。箱の手前にはスリットが横に入っていて、ここに手紙を差し込むタイプになっている。もちろん、取っ手を開けて入れることもできるが、鍵が取っ手にかかっている開かない。

紫苑は鍵を開けると中を見る。何かが入っていたことはない。だが、今日は違った。白い封筒が入っていた。紫苑は一瞬でアルシェだと確信した。そうでなかったらどうしてくれよう、このぬか喜びを。

急いで手紙を取る。封筒に差出人の名前はない。住所は手書きだ。

ポストに鍵をかけ、走ってコテージに戻ると、ちょうど料理していたレインにでくわした。息を切らしながら手紙を掲げる紫苑。レインは料理を止めて手紙に駆け寄った。居間の机で手紙を開ける。

やはり、アルシェからの手紙だった。そこには興奮した字でハインの裁判が明日の午後に行われると書いてあった。護送は午前中に行われる。護送ルートは知っている。

この手紙はルージュの朝に着くだろうから、そこから例の自転車で来てくれ。遅くても夕方には北アルシアに着くだろう。それを超えて街に自転車や徒歩で入ると捕まる。夜は電車に乗るしかない。睡眠はそこで交代で取る。乗り過ごさないためだ。アルナに明日の朝までに着かなければならないが、そのためには今日の夜には電車に乗らなければ鈍行なので間に合わない。だから遅れずに北アルシアの前回別れた駅に夕方までに着てくれ。

——とのことだった。

手紙を読んだレインは

>-Λ 4->e6 といい皿に朝食をよそった。

時間がない。多分北アルシアに着くまで今日の食事はこれしかないだろう。レインは多めによそった。朝からそんなに食べれるかとも思ったが、無理に食べた。

身支度をして、部屋を片付け、家に鍵をかけて出た。盗んだ自転車は家の中に隠しておいたのを引っ張り出してきた。メンテナンスしたかったのだが空気ポンプもないのでどうしようもなかった。タイヤがパンクすればその時点で終わりだ。

幸運だったのは待っていた 2 週間の間に紫苑もレインも生理が来たことだ。もう終わっているのていまが一番 1 月で動きやすい時期だ。ついでに機嫌も良い。気分も上向きだ。

自転車に跨ると、レインの案内でひたすら漕いで北アルシアへと向かった。朝で良かった。夜だったら右も左も分からない。

そのまま漕いだが、流石に疲れた。途中で休憩を入れ、食べないだろうと思っていた昼食を取った。やはり休憩を挟まないと辛い。いくら急げと言われても。

幸運にもタイヤはパンクしなかった。ところが不運にも、雨が降ってきた。

6eJ7 7cCr 6

レインが手の平を上にして雨だという。フランスっぽい風土のわりに、フランス人と違って雨の確認は手の甲でなく手の平でするのか。日本と同じね。

アルシアには当然のことながら、雨が多い。2 週間の間にかなりの雨が降っていた。といっても日本のような大降りではなく、しとしとと長く暖かい雨が降るのが特徴だ。この特徴はアルバザードの大部分で同じだそうだ。

雨はしとしと降ってきた。日本の冷たい強い雨だと、自転車を漕いでいて顔に雨粒が当たって痛いくらいで前も見えない。だが、この雨は生ぬるい霧のような、しとしとしたものだった。霧をそのまま雨にしたような感じだ。

だが、やがて夕方に近づくにつれて、小雨も本降りになってきた。もちろん、傘などない。重荷になるから置いてきた。2 人は黙って直進する。

約束の夕方には北アルシアに入った。アルシアの街中にも当然雨が降っていた。人通りは極めて少ない。随分久しぶりに戻ってきた気がした。アルナという感じはしない。初めて都市ごとに違いがあるのだなと実感した。

駅の近くの柱に男が寄りかかっていた。傘はない。アルシェだ。軒下で雨宿りをしてい

る。アルシェはこちらに気付き、驚いた顔で手招きした。手の平を上に向けて指をくいくいと手前に小刻みに曲げる動作で、日本のジェスチャーとは異なる。

⑥>c<cc>-、4aΛ7 eJ7⑥ アルシェはからかって笑ってきた ⑥-l- ʃo -ʃ ʃoʌ - ʃcʊeδ eΛ ʃol-ʃ eJΛδ ⑥

紫苑は長々持ち続けてきたヴァルデをアルシェに渡す。これが一番の荷物だった。レインと合わせて4本の腕にローテーションを組ませたにもかかわらず、腕が棒のようだ。

ʌcɔΛ ⑥leΛ- eΛ >elʌeJ eJΛ >cl ʃa ʌcl ʃ-ʃ⑥

lecΛ ⑥ʃeʃ cʊʃ ʃ-ʃ ʃ-ʌ, leΛ- eJʃ-ʃ ʃa ʃcΛ Λʃ-⑥

-ʃʌe ⑥ʃ->e> ʌ-J ʃ-ʃ Vecl ʃcʊe ʃcl e<-⑥

ʌcɔΛ ⑥h-o, leΛ- eΛ ʃcl ʃ-ʃ -ʃc,, ʃ--ʃ ʃa eJ >-ʃ eVeJ eΛʃo ʌc<, ɔʃʃ- leΛ- >elʌeJ ʃ-ʃ -ʃc⑥

-ʃʌe ⑥-ʌ>-,, ʃ-cʃ -ʌʃe ʃol Vcl -ʌʃ,, ʃeΛʃ-ʌʃ ʃ-l -ʌʃe ʃ-a Vcl ʃ-ʃ ʃ->⑥

ʌcɔΛ ⑥clʃ-Jʃo, eJʃ ʃ -ʃʃ-Z-ʃʌ ʌoʌ eJʃ e ʃ-l ʌo-ʌ eʃ >elʃ ʃcΛ⑥

スカートを絞ると水がじゅっと出てくる。レインも絞る。できるだけ絞って水気を取る。アルシェは遠慮していたが、見かねてレインと紫苑の服を絞った。もう下着も透けて見えているし、この際ごちゃごちゃ言っている暇はない。

2人はなすがままにされた。それにしても男の力は凄い。絞りきれなかった水がジョーっと出てくる。随分体が軽くなった気がした。

lecΛ ⑥--,, h-cZeΛ, ʌclhc ʌoΛ,, ʌoΛ eVeJʃe>eJ Λ-Λ,, h-cZeΛ⑥

女は体を冷やすなというのが戒律のひとつだそう。レインは祈っている。

アルシェは2人を促して駅へ降りていった。駅の中は随分暖かく感じた。日本でいうといまは5月の終わりごろだ。気候的にも暖かく、このくらいの雨なら風邪は引かないだろう。

電車に乗ると、3人は2グループに分かれた。指名手配中の犯人は3人のグループだ。3人で固まっていると嫌疑をかけられやすい。アルシェは隣の車両に移った。彼は徹夜をする気らしい。

そうか、寝過ごさないように交代とはレインと紫苑の体調を気遣ってということなのか。それに、それなら隣の車両のアルシェが万一寝てしまった場合にも対応できる。

席につくとやはり座席は濡れた。尻が気持ち悪いが文句を言っていられない。乗客が濡

“や、あ、うさあ、やあ あ、いかに あんなー だい さんー え ああうー あんなー だい さんあ

いかに ああ “だい”、 だい さんあ

紫苑はただお辞儀をした。

“だい”、 ああ、 -あ えん さんあ だい さんあ “-あ

ティクノは 40 がらみのひげを生やした渋い感じの男だ。中肉中背で、アルシェよりは細くない。渋いおじさんだ。嫌いじゃない。

うさあ “-あ、 ああ -ん さんあ

-あ “--、 >- -ん さんあ

“-<...うさ さんあ

“や-

“h-c えん さん >えん いかに -さんあ

“あ えん さん -あえん、 えん さんあ “> えん いかに h-c うさ、 やあ ああ、 -あえん あん -う ああえん -<、
うさあ

“うさ -あ えん -う -うさ

“えん、 うさ、 さんえん あん さん えん-う、 さんあ

“うさ -い さん / >ん さん、 さん さん >ん、 うさ えん いかに えん、 さんあ、 ああ、

指で案内するティクノに “えん-あ” と言い、紫苑とレインは洗面所へ向かう。

「ねえ、レイン。あの人けっこうイイ感じじゃない？ 渋いオジサマって感じで。声すっごく低くて渋いよね。うちのお父さんみたい。落ち着いてるし。アルシェとか声高いよね。私、低い声でアルカ聞いたの初めて」

“h3うさ

“...、 さん えん あん さんあ さんあ

“あ、 さん -うん さん - あん さんあ “や、 えん、 あん えん あ-

“...あ

2 人は手や顔を洗い、ドライヤーで髪と服を乾かしてから髪型を整え、戻る。

するとアルシェとティクノは窓の外を見ていた。

“いかに さんあ

“えん <あん、 -> さんえん h-c うさ -ん さん >- <あん

“-、 - h-c- さん、 さん、 えん えん えん -さんあ

さんあ “-えん えん、 うさ -あ えん さん >-ん、 さん >ん V-ん -> さん >- <あん、 えん -あ えん あ ->、

ジョー -1 -2 <カコ ジョー S-16

-ムー 64-8 カ eC -9-16

ココ 6-11-6

その後、紫苑とレインはソファで雑魚寝の状態では眠を取った。アルシェはヴァルデを持ちながらティクノと何か話していた。これからの計画のことを話しているのだろう。2人とも、表情が頑なで、しかも若干不安げだった。

起きたのは10時だった。ソファは電車のシートよりずっと寝やすい。アルシェが行くぞと言って2人を起こした。真剣な面持ちだ。緊張しているらしい。こちら甘えてはいられない。負担になってはいけない。

いや、負担にならないのはレインの目指すところだ。紫苑はむしろ戦士として戦わなければならない。アルシェは優しい声でレインを起こしたが、紫苑については戦友を叩き起こすように肩を叩いた。期待されているということだろう。

……少しは女として扱ってほしいんですけど。へこむんですが。

3人はティクノの家を後にする。紫苑とレインは短い時間だが世話になった礼をいうと、ティクノはにこりと微笑んで、6>CM V-15 カ 7-1, 4a176 と言った。紫苑がヴァルデを掲げて6-174a176 と言ってレインの肩を抱くと、ティクノは手を叩いて笑った。

6Dec, -ムー, V-176 c7 >e ジョー17 -16e -, 176c- 1a-16

何だか嬉しかった。

マンションを出て、向かいのネブラ通りに行き、コノーテ通り近くまで行く。ここは企業が多く、会社員が多く歩いているが、暇を持て余した休日の学生も多い。物陰に隠れる3人。そして合図を待つ。通りは静かだ。

ハインのニュースは国民全体が知っているが、多くの国民は今日裁判がどこかで行われて何かの判決が出るのだろうくらいにしか思っていないだろうとアルシェは笑う。

政府高官の私怨による殺人など、センセーショナルなだけで、政治そのものが変わるわけではない。1級ゴシップとしての価値しか国民にはないのだ。その場限りのお祭り騒ぎ。その後のことまでは憂慮しない。少しはしても良いだろうに。

-ムー:1-1 6カ eC VclK511 >-1 cl 451 h-c1 JeC-1 Ae64- >-1 1a V-1-e e>cJ 1-, Ce- cl 451 1a ジョー ジョー 1-1- 1el <e1Zel <CM, ジョー cl 1- 151 V-5 - カ Ve17 1-6

確かに……。国民なんてそんなものだろう。アルシェは銃を取り出した。アーディンたちの持っていたものではない。フルオート式のもので、リボルバータイプではない。かなりごつく、アーディンたちのが玩具に見える。サイレンサーは付いていない。

「-|- 〇a e〇r〇

-〇ue 〇yel ol 〇c 〇cl c〇〇 〇-〇〇

〇c〇〇 〇e〇〇 -〇〇〇

-〇ue 〇e 〇c〇〇,, 〇c〇-〇 〇a〇

lec〇 〇e〇 |- 〇cl yel -〇 <c〇 -〇e-Z-〇〇 le〇 〇a〇〇

-〇ue 〇〇c >〇Z <〇〇〇 <c -| -〇〇〇 e >e〇, 〇a〇〇,, 〇cc〇, -〇 yel V-〇 hol〇 〇 ->〇 〇〇〇〇 |-〇- 〇cl 〇a 〇〇〇 h-c〇)-〇

〇c〇〇 〇h-c, 〇〇a 〇cl 1 yel h〇〇〇〇

〇y-, >-〇 -〇 〇e〇 〇c〇e e〇 〇ol 〇a〇

顔く 2 人。なんだ、アルシェは銃の心得があったのか……。

アルシェは詳しい説明をしてきた。これはハンドガンとしては最強クラスのものだとか、どこの軍隊が実際に採用しているだとか、本当はスナイパーライフルが良かったが接近するので仕方がないとか。

また、反動が大きいので女じゃ手首をおかしくするとか……銃に興味のない紫苑にはさっぱりだった。

そうして待つこと 1 時間強。遂に花火の音が上がった。通りにいた人たちが一斉に空を見上げる。この花火は周りの注意を引く合図にもなっている。花火の音は 4 発。これは 4 台目の車がターゲットだという合図だそう。まず、護衛車が先導する。

lec〇 〇〇a〇-〇....〇

-〇ue 〇-〇〇e....〇

微かにアルシェの声が震えている。

もう一台車が通る。

〇c〇〇 〇<le-....〇

自分の声も震えている。

また一台。

lec〇 〇-〇c〇....〇

そして最後の一台が来た。

-Mue 64-A, UceP laA-7r6

アルシェは飛び出した。紫苑とレインも後に続く。ヴァルデを持つは紫苑。

アルシェは狙いを定めて 4 代目の車を撃った。明らかにそれは他の車とは違う護送車だった。右前輪を撃たれて護送車がバランスを崩す。アルシェは走りながら立て続けに撃つ。みるみるタイヤはパンクしていき、護送車は急ブレーキをかけた。巧いなあ。

-Mue 6-Ur feeJ eC 39A-Ar -AJe Y-AI V-A ->3, V-JC V-A 1-r6

アルシェは運転席に乗り込もうと走りこむ。紫苑は護送車の後ろに周り、金属製のバーを上を押し上げ、鍵を外す。問型の棒を上を押し上げるとくるっと棒が回転して鍵が外れるあのタイプだ。

Uc3A 6h-cA lYaUJaAr6

ドアを引き開ける紫苑。その中にはアルシェの面影のある 50 がらみの男がいた。ひげを生やし、やつれてはいるものの、目には力がある。

まちがいない、この人だ。

6lYaUJaAr A3A Je< laA- V-Mle - C4Ar6

大声で怒鳴ったとき、ふいに突き飛ばされ、視界から驚いた顔のハインが消える。何だと思ったらレインだった。レインが抱きついてきたのだ。そしてそれに前後して聞こえる銃声。そうか、撃たれたのか。

一瞬痛みがあるのかないのか分からない。撃たれたのかもしれないという認識のほうが早かった。地面を転がって少ししてから無傷であることを知る。

危なかった。ここには後ろの護衛車に撃たれる。レインは紫苑を通りに引っ張っていった。

なるほど、通りには通行人がいる。皆何事かと歩みを止めている。こちらに行けば警察としては銃は撃てまい。レインの判断通り、警察は発砲を止めた。アルシェも合流する。

6Uc3Ar Je<c7 V-Mle - h-cA76

6V-ArC A3A Me7c7 >-A 1-cA Yel-C leA-,, C-1 lYaUJa U- laC >- ->3r -A cA-C, -A cA-C M-A 1- 33A 3aJe cAUr 4-A V-Mle, A3A CleJ U-1 M-Ar6

lecA 6Ca eC 4eC....6

えっと振り向くと、辺りには警察官ではない人間が長い銃を構えて集まってきた。これは……。

-ル^⑥ヴ^⑥ル-^⑥、^⑥え^⑥ ^⑥Λ^⑥-^⑥c^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ ^⑥V^⑥--^⑥Λ^⑥ℓ^⑥

ℓ^⑥c^⑥Λ^⑥ ^⑥ヴ^⑥ル-^⑥Λ^⑥ℓ^⑥

-ル^⑥え^⑥ℓ^⑥eo, ^⑥ℓ^⑥a^⑥ ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥eℓ^⑥ ^⑥e^⑥ <^⑥e^⑥Λ^⑥Z^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ℓ^⑥-^⑥ ^⑥ℓ^⑥oℓ^⑥o-^⑥ℓ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥o^⑥ ^⑥ℓ^⑥ ^⑥-^⑥Λ^⑥ℓ^⑥e^⑥ℓ^⑥

アルシエは地団駄を踏む。

軍隊はじりじりと銃を構えて紫苑たちを囲む。通りにいた人間は蜘蛛の子を散らすように逃げていってしまった。

万事休す。計画はすべて読まれていた。これは……罠だったのだ。

兵士がハインを車から引きずり出す。もうこの車は動けない。他の車に乗せるのだろうか。

そう思ったとき、テーベという白い法衣を着た男が護送車の後ろにあった車から出てきた。

男はひげをはやし、金色のくせ毛をしていた。目は青く、背が高く、細い。どことなく邪悪な顔をしていた。年齢はハインと同じくらいだろうか。まさかこいつが……。

^⑥<^⑥e^⑥Λ^⑥Z^⑥e^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥

アルシエが憎々しげに言い放った。やはりそうか。

フェンゼルはふんと鼻で笑うと、兵士をかいくぐって紫苑に近寄った。

<^⑥e^⑥Λ^⑥Z^⑥e^⑥ℓ^⑥ ℓ^⑥c^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥ℓ^⑥c^⑥-^⑥ o^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ue^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥ee>^⑥ℓ^⑥ o^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥Z^⑥ ^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥o^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥o^⑥ℓ^⑥

間違いない。カテゴリーで聞いたあの声だ。

ℓ^⑥c^⑥o^⑥Λ^⑥ ^⑥e^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥Z^⑥, >^⑥-^⑥Λ^⑥-^⑥ℓ^⑥

-^⑥ℓ^⑥ue^⑥ ^⑥ℓ^⑥e^⑥o^⑥ℓ^⑥o^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥ ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥V^⑥c^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥

フェンゼルは鼻で笑う。

^⑥ℓ^⑥o^⑥Λ^⑥ ^⑥-^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥c^⑥ℓ^⑥, ^⑥-, ^⑥ℓ^⑥ee, ^⑥ℓ^⑥-^⑥ ^⑥ℓ^⑥a, ^⑥-^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥o^⑥ℓ^⑥o^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥ <^⑥c^⑥c^⑥Λ^⑥-^⑥ ^⑥ℓ^⑥c...ℓ^⑥c^⑥o^⑥Λ^⑥ℓ^⑥c^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥

——嫌な奴！

<^⑥e^⑥Λ^⑥Z^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥-^⑥Λ^⑥ ^⑥e^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥c^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥Λ^⑥-^⑥ℓ^⑥ c^⑥ ^⑥ℓ^⑥o^⑥e^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ℓ^⑥, ^⑥-^⑥Λ^⑥ ^⑥e^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥ -^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥ ^⑥Z^⑥o^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥o^⑥ℓ^⑥, ^⑥ℓ^⑥e^⑥ℓ^⑥c^⑥-, ^⑥ℓ^⑥e^⑥ ^⑥ℓ^⑥e^⑥<^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥e^⑥-^⑥

ℓ^⑥c^⑥Λ^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥e^⑥Λ^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥e^⑥-^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥c^⑥ℓ^⑥o^⑥ℓ^⑥ ^⑥ℓ^⑥-^⑥Λ^⑥ ^⑥ℓ^⑥e^⑥ℓ^⑥ ^⑥-^⑥ℓ^⑥ℓ^⑥e^⑥Λ^⑥-^⑥ ^⑥ℓ^⑥a^⑥-^⑥ℓ^⑥ ^⑥

レインが大声で叫ぶ。フェンゼルは笑って首を振る。

「-| (c 7aJ (3δ 4aΛ), --, -Pce6

ふん、誰が信用するもんか。

しかしもはやフェンゼルもここまで表立って動けばアルテナの目が行かないはずがない。こいつにとってもここが勝負時なのだ。

Λc3Λ 6--Λ-r6

6J-c-, 73Λ -Λ C-Λ V-Λ Cα Λc -Λ 731J laJe JeC CcJe6

フェンゼルは手を上げる。紫苑は目を瞑った。

ここまでだ。アーディンを殺した報いだろうか。自分は蜂の巣みたいに穴だらけになって全身から血を噴出し、見知らぬ地面でのた打ち回って数分後には死ぬのか。

あと 100 秒もすれば私の命は消えているのか。そしてレインもアルシェも。

なんてこと……レインを守れなかったなんて……何のために私は異世界からやってきたのよ。レインを守るためでしょ……。

そうよ、レインを守ってヴァルデを守ってヴァストリアを見つけてハインさんに渡してフェンゼルを倒し、アルテナさんを助けてアルバザードを救うこと、世界の警察であるアルバザードを救って、ひいては世界を救うこと、そのために来たんじゃないの！？

「っ冗談じゃないわっ！こんなところで死んでたまるか！」

いきなりの異言語にフェンゼルを含めた全員がピタッと止まる。

6-Λ eC Λc3Λr -Λ laΛ-J -Cα c <c- -|C l-Λ- V-Λ3 Cα <c-r6

紫苑はヴァルデを地面に突き刺し、怒鳴りつけた。

その刹那、フェンゼルは 67eCC-r6 と叫び、同時にヴァルデが赤く光った。

銃声が響く。3 人どころかその百倍も殺せそうなほどの弾雨が降り注ぐ。

5 秒ほど撃ち続けて銃声が止んだとき、紫苑たち 3 人は地面に立ったままだった。私は…
…立ったまま死んだのか……？

そんな考えが頭に浮かぶということは、少なくとも弾は脳を貫通しなかったらしい。と思ったが、よくよく感じてみると、体のどこも痛くない。死ぬということはこんなに容易いのかと一瞬期待してしまったほどだ。

紫苑が目を開けると、怯えた顔の兵士がそこにいた。フェンゼルまで驚いた顔でこちらを見ている。分からないのは 3 人だ。なぜ自分たちは死ななかったのか。

lecΛ ⑥ucαλθ leΛ-....>eueJ 4a <-μ h-μ l eC....Λαλ b....Vcμ⑥

ucαλ ⑥h-μθ⑥

lecΛ ⑥c> ueJ, C4a μεΛJ-⑦ V-μle -⑦ <-μ c> C4a θcθc⑦ Ca -l -⑦o ue⑦e⑥

-μue ⑥4-, Jαλ -λ ueμ-⑦ Ca e⑦ uc-λ V-μle ⑦αλ Ccl> VeμJ⑥

<eλZel:>αZ ⑥eJθ Ca e⑦ Vcluc-λr ⑦e⑦⑦-, CcJc, ⑧el, ⑧elr⑥

ふたたび銃声が響く。しかし、いくら撃とうと弾雨は赤い光を通過できない。

<eλZel ⑥Vcluc-λ,, -μ⑦-λ hαC 4αl ueλ V-μler Ccr Jαl Cc e⑦ 4αl λeθ⑥

フェンゼルは後ずさる。

「だから言ってるでしょう。異世界から来た紫苑だって！」

⑥Cαθ -d- Cc ⑦αJ Cα elλr Ca e⑦ uc -μ⑦eλθ⑥

⑥-λ e⑦ ucαλ,, -λ ⑦α >α- Ca - Cc, <eλZel⑥

⑥ucαλ....c <c- -l⑦θ Jαλ Jαl Cc e⑦ 4αl ucαλ ->-λZeθ⑥

シオン＝アマンゼ……また神話上の人物と誤解された。でも今回は無理もないか。

フェンゼルは ⑥⑦eαr⑥ と怒鳴ると、胸の前で印を組んだ。

<eλZel ⑥lee>e λelJ le V-λe⑦ αα <cλ Ccl Vcμ Ccλ⑦-, le Ccl ->cμ lel λ-cZ cc<- α Λαc λ-c

lel λ-cZ >e⑦e,, Cc με <c⑦ Ve Vcμ e ΛαJ -l -λ....⑥

ucαλ ⑥lecλ, l- ⑦αJ Cαθ⑥

lecΛ ⑥-μ⑦eλ....>- e⑦ -μ⑦eλ l-λ- -μ -μ⑦,, 4-λ Ca e⑦ -μ⑦eλ e....⑥

<eλZel ⑥Jαλ ⑦e⑦⑦-, λee>e e dαα⑦ lel dαα⑦cc⑦e⑦⑥

フェンゼルが叫ぶと同時に辺り一体地面が光りだした。

地面が割れ、真紅の光が漏れ出る。

h-cλ ⑥ucαλ ->-λZer με -μ⑦ ⑦αλ leμ⑦ >c⑦- α V-μler⑥

ハインは叫ぶと、白い光のドームを作った。あれも魔法か。

ucαλ ⑥-l -μ⑦e, -l -μleJ, -l V-μ⑦e⑦ -θ -l lee>J >el⑦c- le >elλ-⑦ -λ -Ca, e⑦ uc-<-l e Ca

Veμλr Cc με -l⑦ -λr⑥

我ながら何て呪文だと呆れた。だが、その効果は絶大だった。

フェンゼルの魔法で地面から真紅の光が噴き溢れ、天にまで昇っていく。辺りの建物や兵士たちはすべて飲み込まれ、車も天に昇っていく。そして光の中で跡形もなく消えてしまった。真紅の光はすべてを飲み込み、天に昇り、やがて収縮して真紅の月のようになって

て空に消えた。

しかし紫苑たちとハインは被害を免れた。これが『幻想話集アティーリ』で読んだ皇女ルーキーテの最後の魔法「ルーキーテ」か。まさか魔法が実在するなんて。

＜eΛZel ⑥eJ....-r/- eJ....c eC....c eC c, ccaΛ ->-ΛZe....⑥

ccaΛ ⑥-Λ eΛ 7a ccl ΛcJ eC ccaΛ ->-ΛZe C-I cca, ccaΛr⑥

紫苑は願った。

どう願うのか、どう魔法を使うのか。こんなことになるならアルシェから聞いておけば良かった。でも、ドゥルガの書類を整理していて魔法学者としての言葉を読んだことがある。

それによると、とにかくアルカという神の母語を使って呪文を唱え、魔力を増幅させることが肝要だと。仮に口が動かずアルカで唱えられない場合は心で思っても良いという。そして、魔導師ならば、それさえできれば魔法が使えると。

そうか、私は魔導師だったんだ。だからこの世界に呼ばれたんだ。やっと分かった。どうして始めにヴァルデを使ったときに魔法が出なかったのか。神の母語で願わなかったからだ。一重にこれしかない。アルカを勉強して良かった。

⑥MeC, V-Mle lel ZcΛ e >cM7,, >cM <cC VcM Cccl l-Λ- V-Λc lecΛ c -Ccl-Jr⑥

ヴァルデが赤く光る。フェンゼルは逃げようと走り出す。

⑥-Λ 4aaJ --c- cC el< -Λ, lee>Jr⑥

紫苑が叫んだ瞬間、ぶわっと体から青と緑の光が出た。それらは赤の光と混ざり合うと、白の光となった。

lecΛ ⑥-M>-r⑥

その瞬間、白い光はフェンゼルを包みこみ、急速に収縮していった。フェンゼルは咄嗟に魔法でガードしたようだが、光が消えると瀕死の状態で道に横たわっていた。

駆け寄る紫苑らとハイン。フェンゼルは虫の息だが、意識がある。

h-cΛ ⑥ccaΛ la-r MeC JeC la, -l7 >e <c- -ΛCeJr⑥

ハインは感涙で泣きながら紫苑の脚にすがる。アルシェとレインまで感涙して紫苑を見つめる。しかし紫苑は首を振ると、ヴァルデをハインに手渡した。

⑥-Λ 7a >c- Ca,, -Λ le ccaΛ ->-ΛZe,, cca, ccaΛ lel >-Λ- cCeΛ -lC<c-,, h-cΛ l4aaJ7aa,

カ eカ ヲカ ヲ ヲカ e カ <c-, ヲカ カ カカ) し< カ cカ -カカ-, カ eカ l-Z -l -l) -カカ-
>-カ カ -カ, カ--カ, -カ カカ., >cカ e) ヲカ- cカ -l<c--カ, lカカカ h-cカ -l<ee>カ

ハインはしばし迷ったが、紫苑から杖を受け取ると ⑥>cカカカ-カカ, lカカカ-⑥ と言い、深々とナーシャをした。アルシェはアンスを付け、少し引いて全体を録画する。

ハインはヴァルデを掲げると、フェンゼルの心臓にヴァルデを深々と突き刺した。フェンゼルはくぐもった悲鳴を上げ、暫く痙攣し、やがて絶命した。その刹那、魔杖ヴァルデは赤い光を放ち終えた。

後には破壊された街が残った。

ルーキーテの威力は凄まじかった。中心部は霧散して消えた車や人ばかりで跡さえない。周辺部では半分体を失ったまま生きている学生の少女や、スーツを着たまの誰かの腕が転がっている。

建物はナイフで縦に切られたケーキみたいに綺麗に削られていた。とにかく通行人が多かったため、死体や怪我人が多い。霧散した死体まで合わせると一体何人が命を落としたのだろうか。

やがて通報によって救急車や警察の応援が来る。

⑥Oecr カカカ clカ-カカカ

ティクノが群集を掻き分けてやってくる。アルシェはティクノに状況を説明しだした。紫苑は怪我人の様子を見ている。魔法で治せないのかと聞いたら回復魔法は高等だし、現代の魔導師の魔法では恐らく効き目はないという。そうか、ふつうの異世界ファンタジーとは違うのか……。

紫苑の脳裏をまた悪夢がよぎる。

学生の少女が 2 人搬送されている。日本でいうと女子中生と女子高生だろう。女子中生のほうは下半身を失い、血を噴出していた。右足は腿まで奪われ、左足は足首から先がなかった。左手は無事だが、右手は手が丸ごとなかった。生きられるかどうかは半々だろう。

死ぬのだとしても数日苦しんで死ぬのだろう。しかし生き永らえたところでこれから地獄の日々が待っている。

女子高生の少女は右半身がただれていた。髪の毛は焼け焦げ、焦げた頭皮が見えていた。もう二度と髪は生えないだろう。顔は頬の辺りからただれ、耳は千切れかかってぶら下が

っていた。

服は半分焼けて吹き飛んでいたが、手も脚も胸も腹も焼け焦げていた。わき腹から臓器が漏れないように必死に手で押さえて泣き叫んでいる。胸の肉は剥ぎ取られ、肋骨が見えている。右の乳房は右半分が挟れていて、乳首もない。脚はところどころ骨が露出している。

もし私たちがこの道を選ばなければ……。この人たちは死なずにすんだんじゃないのか。

バラバラになった彼氏の死体を集める若い女の姿が見える。男の死体は四肢に別れて散らばっていた。女はもう腕が片方なかった。

その横では母親の死体を揺さぶる少年の姿があった。母親が咄嗟に子供を抱きかかえて倒れたらしく、子供は軽症で済んでいる。

群集は半分他人事のように惨事を眺めていた。がやがやと騒音が聞こえる。紫苑はふと上を見上げると、思わず「危ない！」と叫んだ。群衆の上に削れたビルの鉄骨が縦に落ちてきたのだ。轟音とともに群集の中に落ちる鉄骨。群集は悲鳴を上げてその場から逃げていく。

「なんてバカな……せっかく拾った命を……」

潰されたのは若い会社員の女だった。首が千切れて転がっている。手足は関節駆動域を遥かに超えた方向に曲がっている。血がじわーっと地面に広がる。また、鉄骨に脚を踏まれた少女が泣き叫んでいる。日本の小学生くらいの少女だ。

運動神経が鈍い女というものは危険に近づかないかぎり死亡率が低い、ひとたび危険に襲われればここまで不運かつ弱いものなのか。男はさっと避けるのに、女は逃げられない。

男が少女を助けようと引っ張るが、少女は痛いと言き叫ぶ。そうこうしているうちに別の男が「*Get up*」と天を指した。また一本、鉄骨が落ちてきたのだ。少女を助けていた男は咄嗟に逃げ出し、逃げられない少女の顔が鉄骨に飲み込まれていくのが見えた。

最後の顔を紫苑は直に見てしまった。絶望と意外感をたたえた不思議そうな表情だった。コンマ秒以下の未来に自分が潰されて死ぬなどということは少しも予想していない顔だった。お兄ちゃんは何で私の足を引っ張ってくれないの？という意外な顔だった……。

鉄骨の下にじわっと血が広がっていく。どちらかというと、血よりも涙に見えた。

「*Get up*」

フェンゼルの死体を睨みつける紫苑。こいつばかり楽に死にやがって！もっと苦しめて殺してやれば良かった。邪悪な考えばかりが浮かぶ。憎しみとはこうやって生まれていくものなのか。

たった 1 発の魔法でこの惨事か。いや、魔法でなくとも同じことだ。地球でも日本のような平和ボケした国の外ではこれと同じことが行われている。魔法が爆弾になっただけだ。

私は今までどんな目で海外のニュースを見ていた？遠くの国の出来事？いつまでも解決しない宗教問題？共産主義の哀れな結末？それとも単に入試に出るかもしれない時事ネタ？

ふざけるな。ふざけるな！紫苑はいままでの自分を呪った。そして地面に跪いた。

もう……疲れた。

少なくともこれで世界が救われた。彼らは犠牲になったが、こうしなければアルテナを狙うフェンゼルはもっと大きな抗争を繰り広げ、その後の影響は他国にまで及んだだろう。

数の問題に置き換えれば、少なくともこれが最小の被害だったのだ。被害ゼロなんてありえない。誰かしらが被害者になる。それなら被害者は少ないほうが良いに決まっている。

これより大きなラティアをアルバザードにもたらさなかっただけでも良かったのだ。そう紫苑は心の中で言い続けた。

レインはその場に蹲って吐いてしまった。げーげーと音を立てて吐く。食べ物はもうほとんどでない。それでも吐き続け、胃液ばかりを出す。顔は涙で歪んでいた。無理もない。

レインの背中を擦る紫苑。そしてその背中を擦るアルシェ。ハインは呆然と立ち尽くしていた。英雄になんてなりたくもないという顔だ。だが、だからこそ彼は英雄にふさわしい。このラティアを出世とみなすような人間にヴァルデを渡さなくて良かった。

6e0r6

アルシェは叫び、怒鳴り声を上げた。そして顔を真っ赤にしてフェンゼルの死体を蹴りだした。蹴って踏み、唾を吐く。丸太のようにフェンゼルは動かない。それでもアルシェは蹴り続けた。誰一人、父親のハインでさえ、アルシェを止めなかった。

突然、紫苑の中に言い知れない怒りと憎しみが起こった。アルシェを突き飛ばしてフェンゼルの髪の毛を引っ張り、顔を向けさせた。唾を吐きかけて、思い切り拳で顔面を殴りつけた。殴って、殴った。

「オマエのせいで、オマエのせいで！」

フェンゼルの歯に当たって紫苑の拳から血が吹き出る。歯が折れ、吹き飛んでいく。鼻を殴って骨を折り、頬を横から殴って頬骨を折った。

腐ったアルタレスの顔は心同様、ぐしゃぐしゃに潰れた。紫苑は髪の毛を離して、頭を地面に放り投げた。

-M_e 6C Λ- 7-シ....δ 6

シcΛ 6laシ....r 6 とだけ静かに答えた。

レインはまだ吐いている。吐くものがないのに吐いている。そして頭を押さえて嗚咽していた。ハインはそんな若者たちを静かに見ていた。

6lecΛ 6 と呼びかけたとき、目の前がくらっとした。あれ？と思ったが早いか、紫苑は地面に突っ伏しそうになった。咄嗟に抱きかかえてくれる強い腕を感じた。

シ l

目覚めたときは病院にいた。目を開けるとレインがいた。始めは病院だということが分からなかった。レインがアルシェを呼びにいく。アルシェが紅茶のカップを台に置いて駆けてくる。2人が何か話しかけてくる。

ああ、そうだ。私はアトラスにいて、アルカで話しかけられて……。確か、雨に濡れて……ヴァルデが光って……私が魔導師で……フェンゼルを倒して……。あれ、その後、どうなった？

起きる紫苑。体に異常はない。どこにも障害を負っていない。レインが事情を説明してくる。フェンゼルを倒した後、紫苑は倒れたそうだ。そう、そこまでは覚えている。

原因は魔力の使いすぎだそうだ。なんだそりゃと思ったが、どうもそうらしい。魔力の使いすぎで精神が疲労して、意識を失ったらしい。

6lecΛ, <cJ eC Λeδ 6

63cΛeΛ-6

6e33 JcΛ, ΛcΛ -C Λ-3シ la 11 Jel -J36

信じがたいが、そうらしい。気付くと紫苑は点滴を受けていた。ああ、生命維持というか、栄養点滴か。病気で寝込んだとき、何度か日本でも打ったことがあるわね。だが、体は意外に軽く感じる。ただ、動けばすぐに具合が悪くなるのは目に見えている。

紫苑が寝ている間に世の中は随分動いたようだ。フェンゼルを倒したハインはフェンゼルの計略を公表し、アルテナを救った英雄として次のアルタレスに決まったようだ。

アルシェは今後、召喚省に入り、タレスになるという。

レインはハインに誘われ、召喚省への内定を早くももらったそうだが、レインはシミフェに行った後、大学院に行きたいと言ったそうだ。

紫苑のことは口外せず、アルシェとレインも現場にいなかったことにしたい。それでいい。ハインを立てなければ意味がない。その代わり彼が色々便宜を立ててくれるはずだ。

実際、ハインにかけられていた容疑は冤罪と分かったし、レインとアルシェの指名手配も解かれた。アーディン殺害の容疑はハインの力でもみ消されてしまったという。

紫苑は釈然としないものを感じた。

ハインによる内輪への説明では、アーディン殺害は紫苑のしたことで、そのことでレインとアルシェが罪に問われることは少なくともない。同時に、アンスもなく異世界から来た人間を裁く政治システムもアルバザードにはない、とのことだ。

だが、釈然とはしない。アルシェは紫苑の気持ちの問題だと言ってきた。

ザナの月のリディアの日にアルタレス就任の儀を行うという。まだ 1 月ほど先だ。レインはラルドゥラの月は紫苑が治ったら丸々休んでヴァカンスに行こうとやってきた。改めてアルバザードを案内したいという。紫苑は喜んでOKした。

へ ✕

紫苑はアルナの家の一室にいた。ここにもすっかり慣れたが、この 1 カ月はほとんどいなかった。紫苑の書を書き終えると、読み返す。今月は色々なことがあった。レインの立てた旅行計画は神話の軌跡を辿るものだった。

前回の尻が痛い鈍行旅行とは打って変わって、ハインの力で特急はおろか、空路も海路も自由自在だった。出発したのはリディアの日。カテージュまで飛行機で連れて行ってもらい、そこで海鮮料理を楽しんだ。……太った。

カテージュで 1 泊してからの特急で南カテージュまで行き、そこから運転手付の車でテージュ海まで行った。海から南に船を出した。あるとき、レインが空を指して、あそこがテージュだといった。

テージュとはヴァステの時代に悪魔たちが降ってきた空のことで、テームスの空というのが原義らしい。空のそのの部分だけなんだか歪んで黒ずんで見える。

目の錯覚だろうか、空間がぼやけて見える。でも恐らくこれは錯覚ではないのだ。多分、伝説通り、宇宙にある悪魔の巣へ繋がっているのだろう。また、アルディアではテージュに巨人が降り立ち、アシェットがそれを征伐したそうだ。

船長が網を引くと、魚介類が上がった。その場で新鮮なまま焼いたりして食べた。潮の香りが新しいそれはカテージュで食べたものよりもおいしかった。

アルシェがふざけて蟹の鉗で紫苑の頬を挟んできた。内陸に住んでいて海が珍しいのか、レインは揚げられた魚介類を物珍しそうに見ていた。埼玉県民としては同じ思いだ。

紫苑は蛸を取ると、後ろから近寄ってしげしげ網を見ているレインの眼前に突きつけた。レインはぎゅっと叫びをあげて尻餅をついた。紫苑とアルシェが大笑いすると、レインは貝殻を投げつけてきた。

夜は船の中で寝た。3人とも酔いがないようで良かった。夜、2人に連れられて甲板に出て、星空を見た。地球でもこんな綺麗な星はみたことがなかった。新白岡ではいわんやだ。ウチじゃほとんど星なんて見えない。ちらほらだ。

よく「星の数ほど」という慣用句を量の多いことのたとえで使うが、あれは現代人には分からない感覚ではないか。だが、紫苑はこのとき初めてこの慣用句のメタファー源を実感した。

次の日はミュール大陸の跡を見た。大陸といってもオーストラリアほどもない最小の大陸だそうだが、マダガスカル島よりも大きいので、確かに島というには大きすぎる。

跡だというのは、この大陸がヴァステの戦火で滅ぼされてしまったからだそうだ。神々の戦いはかくも凄いものなのかと感心した。人間のフェンゼルが放った魔法でさえあれだ。確かに頷ける話だ。

ミュールを見た後はヘリコプターでカテージュへ帰った。ヘリに乗ったのはもちろん、初めてのことだった。お嬢様のレインも、お坊ちゃんのアルシェも初めてだそうだ。思ったよりヘリの乗り心地はよかった。何より上空からの景色が美しかった。

カテージュに着くと特急でワッカに行き、そこで1泊。翌日は丘陵をハイキングした。紫苑はすっかり元気になっていたのも、やはりレインが一人ばてていた。

でも、日本の山のように陰しくなく、木々が多くない。日本の山は「青々とした」と表

現される。つまり木が多い。だがワッカはそうでもなかった。木がないわけではないものの、草原のようだった。

上空から見て思ったのだが、アルバザードの山は禿山が多い。試しに子供が山を描くときは何色で塗るかと聞いたら茶色だという。日本だと半分は緑で書くだろかなと思った。

面白いことに、色ネタを聞いてみたところ、太陽は白だそうだ。ちなみに先日飲んだ白ワインは緑と表現されていた。色々な違いがある。もっとも、海が青で土が茶色なのは同じようだが。紫苑は土が灰色な文化もあるだろうななどと考えていた。

ハイキングを終えて帰ると、イルケアに行き、今度は良いホテルで 1 泊。翌日はルークスに行き、商業的に歴史のある建造物や旧街区を見て回った。そこで 1 泊して、次は飛行機でアルシアへ向かう。

アルシアの 11 魔将が構えたという独立国を巡礼し、泉の水を飲んだ。魔力が増すという。アルシェはそれであるとき紫苑の魔力が上がったんじゃないかとからかってきた。でもあながち冗談でもないかもとレインが真顔で言った。

翌日はアルカンスへ飛んだ。ここは神々の戦いのラヴァスが起った土地でもあり、その終焉の土地でもある。ここにはアルマが大量に存在するため、ラヴァスの後、3 人の人間がこの土地を巡って争ったが、三つ巴になり、いつまでも決着がつかなかったそうだ。

その 3 人とはスレア、ブレア、トレア。彼らの名前をそれぞれ利用したじゃんけん当たるアトラス独自の遊びがアルカンスだ。

ルールはじゃんけんと同じ。-ㄣ-ㄥ-ㄥ という掛け声とともに手を出す。-ㄣ で一拍、ㄥ-ㄥ で一拍、-ㄥ で一拍。「じゃん・けん・ぽん」の掛け声と同じだ。

ただ、手の出し方は違う。手を下にして前に突き出す。スレアの手は手を上にひっくり返して向ける。

ブレアの手は出した手を丸めて作る。トレアの手は出した手を下に下げて作る。スレアはブレアに勝ち、ブレアはトレアに勝ち、トレアはブレアに勝つ。上から下にかけて勝っていて、一番下が一番上に勝つ。人間の持つ上下の空間能力を利用した認識しやすいゲームだ。

アルカンスでアルカンスをしようということになり、ラヴァス終焉の地で 3 人は勝負した。アルカンセアンの掛け声とともに勝ったのはレインだった。自分が一番敬虔深いから

だと威張っていたのが可愛らしかった。

アルカンスで 1 泊してから今度は 2 日かけてサヴィア大陸に行き、その中のルティア国へ行った。ここはアシェットのリディアの故郷だそうで、魔法の国として有名らしかった。

アトラスで有名な大国はアルバザード、ルティア、メティオの 3 国だ。ルティアもミロク革命の波を受け、アルティス化されていた。都市はやはり円形都市で、カルテを中心とした宗教都市だった。

ルティアは風が異様に強い時期があるそうで、悪魔サティが襲ってくると人々は信じているそうだ。

中央ルティアで降り、電車を使い、ルティア家が住んでいたと言われる城や城跡などを見学した。

ルティア城内の古びた館を通ったとき、この館は改築されたものだと説明を受けた。なんとルティア国のお姫様のリディアが時の女王リーザと喧嘩して、アステル神を召喚したせいで、館が壊れてしまったとのこと。とても信じがたい話だ。

また、ルティアは特に召喚が優位な国だったようで、召喚士が特に権力を持っていたという。神との繋がり大きな国で、神を模した偶像が至る所に置いてあった。リディアが歴史上最強の召喚士であったことも頷ける。

リディアは神々から愛され、エルトもサールも召喚できるたった一人の召喚士ユティアとして君臨した。また、魔法にも長け、その能力は悪魔ヴァルテに匹敵するのではといわれたほどだった。まさに第一使徒の名に恥じない能力を持った、歴史の中心的人物である。

中央ルティアの美術館には神々を描いた絵が多数所蔵されていた。面白いことに、どれも写実主義や新古典主義のような描き方で描かれていた。印象派のような描き口は見られず、人々が神を実在であり、かつ彼らに会うことが滅多にないと感じていたことが伺えた。

人々は滅多に会えなくてありがたくて、そして決して架空ではない神にあこがれ、その姿をできるだけ忠実に写し取ろうとしたのだ。そこで重視されたのは光の陰影や色彩ではなく、できるだけ緻密な神々の描写だった。

神が神話上の架空の存在ではない彼らにとって、恐らくこれらの絵は新古典主義ではなく、ロマン主義でもなく、単なる純粋な写実主義だったのだろう。

ルティアにはリディア像が置かれていたが、その子供のような小柄さに紫苑は驚いた。

ドラクロワの民衆を導く自由の女神のような女性を想像していたからだ。

絵も像と同じだった。リディアの肖像画は幼い子供、せいぜい日本の中学生くらいの容姿で描かれていた。それが紫苑にはとても意外だった。

リディアの肖像画は夫が描いたものだそうだ。彼女は魔法写真を嫌い、自分の顔を絵に残させた。ところが恥ずかしがりだったらしく、愛する夫にしか描かせなかったそうだ。

ルティアの料理はアルバザードのものとは違った。何日も滞在して庶民の味を堪能しないことには詳しく分からないものの、少なくともアルバザードと違うことは分かった。

ホテルのレストランで出された料理は決して庶民的ではなかった。それでもアルバザードとの違いは堪能できた。

北東の海で取れたという鮭を中心とした料理が振舞われた。燻製、ムニエル、果ては刺身まで。鮭尽くしだ。鮭の刺身は紫苑にとっては回転寿司でもお馴染みくらいありふれたものだったが、何せ鮮度がまるで違った。寿司は油がよく乗っていた。

一方、レインとアルシェは珍しがっていた。レインは食べた後に、口の中が臭うという嫌がっていた。そういえばそうかもしれない。だから日本人は緑茶で殺菌して食中毒を予防したり生臭さを防いだりするのだが。

ルティアに4日ほど滞在した後は2日かけてメティオへ飛んだ。ここは少し南国寄りで、暖かかった。早くも夏という感じだ。アシェットのソーンのルシーラを務めたクミールの故郷だそうだ。

やはりここもアルティス化されており、円形都市になっていた。アルティスは北方より南方から先に広まったため、ここには敬虔深い信者が多い。歴史が違うのだ。

アルバザード以上にルフィやらラーサやらを着ている人間が多い。というか、アルティスの服以外を着ているとあっという間に浮いてしまうほどだ。

中央メティオで降り、クミールの居城へ向かった。遺跡にはクミールの像があった。ソーンのルシーラを務めた彼女は平生は病弱だったが、戦闘時に覚醒すると驚異的な強さを誇り、双の鎌を軽々と振り回したという。

クミールの想像はもっと巨躯の女だったのだが、それは鎌を持つにはあまりに細い腕だった。また、美人で儂く痩せていて、とても戦士だったとは思えない体をしていた。特に魔法が得意だったとも聞かないため、彼女の強さの秘密が何だったのか、紫苑は詳しくア

ティーリを読み返したい欲求に駆られた。

観光を終えると料理になった。メティオの料理は比較的辛い。そして美味い。香辛料が利いている。紫苑は汗をかいてしまった。

メティオは 3 国の中で最も米の消費が多く、米を常食としている世帯もあるらしい。米を食べる上に辛い料理なので、インドやら韓国やらを思い出す。

翌日はアリディアというメティオ内に存在する小さな国に行った。イタリアに対するバチカンのような位置関係だ。ここは英雄ソーンを暗殺した少女リディアの功績を称えてアルシェの残党が立てた国だ。

ここにはアルシェとソーンの抗争に関する遺跡と資料がたくさん残されていた。そのほとんどは当時というより、後世になって集められたもののようだ。

メティオで 3 日滞在した後はアルバザードに戻り、サプリの村というところへ行った。ここはリディアの生家があったそうだが、アルディアの時代に焼失してしまったので、跡地しか残っていない。

アシェットのルシーラのセレンが始めに住んでいたのもこの村だ。身寄りのない当時 10 歳のセレンは、養父母を失った当時 7 歳のリディアと二人暮らしをしていたそう。昔の子供は偉いなあ。

セレンは神話上、異世界の人間だったそう。それに対してはヴァルテの意見は賛否両論らしい。

そうと聞いて紫苑はレインとアルシェの顔を交互に見た。

……まさか、ねえ……？異世界っていったって色々あるんでしょうし……。

しかし 2 人は訳知り顔で苦笑するだけだった。

サプリで 1 泊した後、3 人はアシェルフィに向かった。サプリよりアルナ寄りの街だ。アルナの膝元ともいえる。原義は「月が泉に映る街」だという。

アシェルフィではアシェットが暮らしていたという。一部のランティスが通った学校や、使徒メルが通った幼稚園などが遺跡として残っていた。

また、アシェットのアルシェ側が暮らしていた家や、ソーン側が下宿していたクミールの家も遺跡として残っていた。クミールのアルバザードの家は豪邸だったが、もうすっか

り観光地になっていた。アルシェの家も同様だ。

アルシェの家からソーンの家は北西に進めばすぐだが、そこには深い森があり、行く手をさえぎっている。そこでアルシェの家から出て西に林道を進み、街に入り、中央の噴水へ行き、そこから北上してクミールの家に行くという手法を取っていたそう。驚いたことにその道は未だに現存していた。

噴水から南西に進むとそこにはセレンらが通った学校があった。歴史的に非常に価値のあるものだ。3人は彼らが300年以上前に通った道を同じように登校してみて、一体感を感じ、言い知れぬ喜びに包まれた。

アシェルフイでは2泊した。始めはソーンの家泊まり、次にアルシェの家泊まった。非常に光栄なことだともはや感じている自分がいるのに気付いた。

紫苑が選んだ部屋はリディアの部屋だった。レインと一緒に寝た。入って左手にベッドがあった。2人で寝れる大きさだ。

その後、3人はアルナへ帰り、カルテに行った。そもそもアルナのカルテにはかつてアルバ家の城が建っていた。そしてその周囲はアルナの城下町だった。そんなところの上空に無限空アルテージュが生まれた。

アルディアの時代になるとチームスの封印が解け、空からアデルと呼ばれるモンスターたちが降ってきた。

当時のアルシェはソーンと共闘し、アシェットを作り、アルテージュを通してチームスの元へ行き、これを倒した。紫苑が見上げると空がテージュと同じくぼんやり霞んでいるところが見える。あれがそうなのか……。

その後、一旦アルナの家へ帰った。アルシェは自分の家に帰ったので一旦別れた。一休みしてから、今度はアルナの街区をそれぞれ案内してもらった。

東西南北の街区をすべて行ったが、全部の道を行ってはいまだ1年あっても足りないだろうから、名所と呼ばれるところだけを見て回った。一人でカルテと商業区の一部を覗いていただけの紫苑にとっては気付かないことでいっぱいだった。

こうしてアルバザード、いやアトラス周遊は終わり、ラルドゥラの月は終わった。紫苑の書は思い出でいっぱいになった。メル月は辛い時期で、困難の時期だった。それとは打って変わってラルドゥラの月は楽しみの日々だった。

3人でアルナの家居間にいた。レインのアンズで報道を見ている。今日がハインのアルタレス就任だ。儀が執り行われるという。歴史の裏で暗躍した3人は表舞台に立つことなく、多くの国民と同じ手法で報道を見ていた。

儀式が昼過ぎに始まった。北区にあるアルバ家の新王宮で儀式は執り行われた。宮殿の前には絨毯が敷かれ、その上を男性と若い女性が歩くのが見える。

男のほうがアルバ王だそう。そして女のほうの時のアステル、アルテナだという。この人が……。話には何度も出てきたけど、見るのは初めて。なんとなく感動。そうか、私たち、この人を守ったんだ。今更実感が湧いてきた。

アルテナはまだ27歳ほどだという。若い。実質上の最高権力者にしてはあまりに若い。しかも彼女はあのルーキーテを打ったフェンゼルが恐れた人物だという。

ただ、アルテナがこれまでに魔法を使った記録はないそう。同様にフェンゼルも。だから国民は魔法と言われてもピンと来ないらしい。それどころかその能力を疑う者さえいるようだ。

だが、数々の遺跡が魔法の存在を肯定するため、魔法そのものの存在を疑う者はほとんどいないそう。まったく、凄い世界だ。

若きアルテナはそれは美しかった。白人の血が強いのか、完全な白人ではないものの、肌が白く金髪で目が青い。鼻が高く細くて顔が日本人より長い。背が高く細身。要するに白人、だ。でも権力者でこんな女優みたいに綺麗なんてなあ……不公平だわ。

ハインはナーシャをして跪き、アルテナに魔杖ヴァルデを献上した。遠くから見ている群衆のざわめきがマイクに入ってくるが、すぐに静まった。

アルテナはヴァルデを受け取る。

⑥<-Coo, h-cA -lCee>J le V-JC-C <eAZel -lJ--l l -C lc> -l -JC-leJ 9-lu6

次に、アルテナは恭しくルーフをしてアルバ王の前に跪き、同じようにヴァルデを献上した。

だが、ヴァルデの返還は当然召喚省の役目。これは形だけだ。

アルバ王は事前の段取りどおりアルテナを制した。

⑥C c eC U-<-l Caal, -JCeJ -JCeA-, 4-A -A lel l-cZ -J6- VceJ h-cA -lCee>J e> -JC-leJ

ノ→

ハインは凛々しく「Völk」^⑥と答えた。群集から歓声が起った。

やっと終わった。長かった……。

フェンゼルを倒し、レインを救い、ハインをアルタレスにし、アルテナを守り、アルバザードの政治を守り、ひいてはアトラスを守った。紫苑は自分の役目が終わったと感じた。

儀式もやがて終わり、3人は、ふうとため息をついた。レインがアンスを消す。安堵というか疲労というか、なんだか色んなものが交じり合った複雑な気持ちだ。日本語でもアルカでも表わせまい。

「Me^⑥JoΛ, c> (aμ, -Λ 7e 7c7 (c7Λo 1-Λ- 7oo7

7ooΛ^⑥> 74a 7o77 -7aδ

「Me^⑥--, eΛ <c7

7ooΛ^⑥>>, Λ-77,, 7-1 7e 7cc7 >e 7ec7- >cl 74a 7eΛ 7-7 7o77 -1 -Λ

「Me^⑥--, >- 77eΛδ 7-77o, 7oΛ 7oo7- - 7e77

アルシェは去っていった。

レインと一緒に図書館へ行く紫苑。アルナはそろそろ始まるディアセルに備えて着々と準備をしている。街中がお祭り気分だ。そもそもディアセルのほうが祭りの規模がメルセルよりも大きいので、なおさらだ。

そういえばここに初めて来たときはメルセルで騒いでたなあ。何だか訳が分からなかったけど、今なら何で騒いでるのかよく分かるわ。

あそこ、レインは大変だったんだなあ。なんでヴァルテナのにメルセルを祝わなかったんだらうって不思議だったときもあったけど、お父さんをなくしたばかりだったんだもんね。その上、メルセルの直前にネブラに襲われて。

メル 366 年は最悪だったわね。でも 367 年はこうして問題も解決したし、私やアルシェって友達もできて、きっとこの子にとっても良かったんじゃないかな。

でも……私の役目は恐らくもう終わったんだと思う。メルティアはこの先私をどうするつもりなんだろう。地球に返すのかな。このまま放置するのかな。どちらにせよ一長一短だ。

レインは気を利かせてそのことをアルシェに相談したそうだ。レインは紫苑にアトラス

に残ってほしいらしい。ハインの伝でアンスを申請してくれないかと頼んでいた。

アルシェがハインに言うとは大歓迎だという話だったそう。それは嬉しい。アンスがあれば生きていける。

ただ、一生地球に帰らないのも親が心配だ。そして……何をどう言おうと私はやはり異世界の人間だ。ここで生きて死ぬるものなのだろうか。

図書館に着いた。魔法の本を読み漁る紫苑。レインはいつものように自分の好きな本を日向に出て読んでいる。この時間がレインには至福の時らしい。

ヴァルデを使えた以上、自分が魔導師だということは分かった。でもどうすればヴァルデ無しでもフェンゼルやハインのように魔法が撃てるのだろうか。調べたところによると、魔法の素質は先天的なものらしい。

簡単にいうと、瓶の大きさが人によって違うらしい。1滴も水が入らない瓶や一口分しか入らない瓶もあれば、タンクのような瓶や底なしかと思うほどの瓶があるらしい。ただ、それは瓶の容積の問題で、実際に水、つまり魔力を入れないと意味がないそう。そりゃそう、いくら大きな水筒でも水が入ってなきゃ何も飲めない。

瓶に入っている水の量も生まれた時点で異なるそう。一般に瓶の大きさに比例するそうだが、生まれたとき全然水が入っていないのに思春期ごろに爆発的に増える人間もいるという。また、何かのきっかけで水がたくさん入る人間もいるという。

基本的に魔力は筋肉と同じで、使うほど疲労するが、急速後に超回復するものだという。そして逆も然り。怠けると萎える。つまり、一流の魔導師は常に修行を怠らないわけで、勉強して習得した外国語などと同じようなものだ。

魔力を鍛えるには魔法を使うほかに、神に祈る、呪文を唱えるなどがあるそう。呪文の効果はルーキーで検証済みだ。そこで紫苑は最近図書館に入り浸って効果的な呪文の作成に熱中している。

アルシェはヴァルデのおかげだろうといていたが、レインと紫苑はわりと真剣だった。アルシェがいうにはもともと誰にも少しは魔力があるのだからヴァルデがあれば使えてもおかしくはないそう。だが、それならヴァルデをハインに渡す必要はなかったし、ましてルーキーを防ぐだけのバリアを張れたはずがない。そうするとアルシェは納得したようだったが、それくらい彼の頭なら分かるはず。どうも紫苑が魔導師であることを拒絶したいようだ。なぜだろう。

魔法の本に載っているやり方で何度か魔法を試してみた。が、出ない。当たり前といえ
ば当たり前なのだが、やはりヴァルデで増幅しないと魔法を使うまではいかないのか。

レインはそんな紫苑を見てにこりとした。始め、レインは紫苑が魔法を使おうとすると
怖がって机の下に隠れた。猫みたいで可愛いなと思った。が、余りに出ないので最近では
すっかり笑いの対象だ。

おかしいなあ。見舞いに来てくれたとき、ハインさん、自分がヴァルデを使ってもあそ
こまで使いこなせなかったはずだって言ってくれたのに。アルバザードの人はリップサー
ビスはほとんどしないみたいだからただのお世辞ってことはなさそうなんだけどな。呪文
が違うのかな？

紫苑はひたすら呪文を唱えては魔法を使おうとした。ちっとも光は出やしない。そんな
平和な昼下がりだった。

⊕ へ

ディアセルはランティス最大の英雄リディアの誕生日を祝った日だ。メルセルというの
はメル暦を作ったランティスのメルの誕生日のことで、彼女の誕生日が元日になっている
ので祝っている。英雄度としてはリディアのほうが格上なため、ディアセルが一番の祭り
となっている。

ディアセルとメルセルの前後は夜間外出が可能になる。紫苑はレインとアルシェと遊び
通す気だった。なにせここ数日は彼らは学業と仕事に没頭し、紫苑に構ってくれなかった
からだ。

レインはあれだけ休んでいたにもかかわらず、試験を 1 位で通過したそう。アルバザ
ードの人間は勤勉で学問が好きだという。その中のまして東大に当たる学校であつさり首
席通過とはまことに恐れ入る。

アルシェはあと半年足らずでタレスになるので、研究を終わらせようと忙しくがんばっ
ているそう。紫苑の魔法に対する冷たい態度は彼の研究者としての立場から出たものなの
だろうと思う。

ディアセルの朝はいつもと違った気がした。メルセルには感じなかった違いだ。空気の
違い？いや、街の雰囲気の違いだ。窓を閉めた部屋からでも分かる。さて、今日は 3 人で
何をして遊ぼうか。

などと考えていると、レインが慌てて部屋のドアを叩いた。どうしたのとドアを開けると、アンスを開いたまま、左腕を突き出してきた。そこにはハインの映像付のメッセージが書かれていた。

” -Λ θε< V-μλε c> <cJ, - l-cZ -μλεJ ο l-cZ Keμ,, JoΛ CcJe <-γC -I -μCeJ μεC”

ΛccΛ ℥h-δ leΛ-l....℥

℥ΛcΛ C-Λ lcC Jo-τ Ca eC CcΛ)- μ-γτ℥

VcΛ γ-c ℥leΛ- -γC Jcl γcμoγ -Jμ℥

ΛcV γ-c ℥γ-----τ℥

両手を一杯に広げるレイン。画像がぶれて空中を飛んでいく。

神を召喚するから付き合ってくれって……なんてメールなの……。

℥-με, I- Jeμ Caδ ℥

℥h-o, I- laΛ- γo- -Ca℥

すると後ろからアルシェがひょこっと顔を出してきた。

℥JoΛo, ΛccΛ℥

℥JoΛo, Λoc C -JCeμ℥

℥-Λ eC -μετ℥ と笑うアルシェ。

今朝はレインが朝食を振舞った。アルシェはまだだというので彼と一緒に食べた。その後、召喚が夜 8 時に行われるというので 3 人は一日遊び通すことにした。誰も言わなかったが、これが別れになるかもしれないと皆感じていた。

ディアセルは盛大だった。どこもかしこも人だらけ。こんなに人がいたのかと思うほどだ。露店が出て、どこがどこの区だか分からないくらい盛況だ。北区が一番穏やかだが、それでも誰も働かないオフィスから飾りがいくつも出ていた。

フェンゼルが破壊した道に行ってみたが、そこも華やかに飾られていた。そして慰霊碑が置かれていた。

カルテは特に盛況で、動けないくらい人でごった返していた。何だかもう食べられないくらい色んな菓子や間食をした。ただ一言、楽しかった。

その後、一旦家に戻って 3 人でレインの 17 歳の誕生日を祝った。ディアセル生まれの子は大変重宝がられ、羨ましがられるという。レインはプレゼントをあげる機会が減るから親は喜ぶのよとおどけてみせた。

アルシェは今日召喚に着て行く綺麗な礼服をレインにプレゼントした。レインはとても喜んでいて。いつの間にサイズを知ったのだろう。アンスのない紫苑は何も買ってあげることができない。誰かに頼めば買ってもらえるだろうが、それでは意味がない。

しかし、異世界からほぼ空手で来た紫苑にあげるものなどなかった。紫苑は考えこんだ結果、紫苑の書をあげることにした。ここにはレインと過ごした思い出が詰まっている。品物ではなく、思い出だ。

レインは紫苑の書が自分たちにとってどれだけ重要か知っていた。紫苑の書は写真のないアルバムだ。

レインは受け取れないと言った。受け取ったら紫苑はいなくなっちゃうんでしょう？と言った。紫苑は黙った。もしそうだとしたらこれが最後の機会になるわというと、レインはおずおずと受け取った。

“ΛαΛ 4αΛ ρα leΛ VαΛΛ -I7-, ΛcαΛε

ささやかなパーティの後、紫苑たちは荷物の整理をし、礼服に着替えてからカルテへ向かった。すっかり召喚は北区にある召喚省で行うものだと思っていたら、カルテというので意外だった。

カルテは召喚省の名の下に一時貸切となった。今日でないと逆にヴァルデの返還だとマスコミが騒いで紫苑たちを参加させられないという。表舞台に立てなかった紫苑たちへのハインなりの配慮なのだろう。神に会えるのが本当だとするなら見てみたい。

カルテに入る 4 人。ハインは護衛さえつけていない。カルテに入るとテーベの中からヴァルデを取り出した。そりゃそうよね、持って歩いたら即見つかるわ。

そのままカルテンの中に入る。4 人だと少し狭いかと思ったが、意外とそうでもなかった。

ハインが祈りを唱える。呪文だ。神を召喚しているらしい。ヴァルデが赤く光る。来る……。紫苑は直感した。すると石段サリュの上に白い光が現れた。

lecΛ:ρcJρ “ρα eρ 7α7 -I-J ΛcαΛ laΛ-ρ ΛαΛε

ぼそっと呟くレイン。紫苑は光を見つめながらも“ρα eρ 7α7 -I -I-J ΛcαΛ laΛ-ρ ΛαΛ”が正しいのではないかと思い、そして次の瞬間には 7α7 が格詞になっているので良いのだと気付き、レインが敬虔であることを再認識した。私はこんな瞬間でさえ語学女なのか……。

光が止むと、そこに男女が立っていた。凜々しい顔立ちの若い男と美しい若い女性だ。

アルデスは笑う。随分と豪胆な人物だ。そしてアルバザードの人間の凄いところはそれを真に受けてちゃんと適度に緊張を解くところだ。自分には真似しがたい。

ハインはヴァルデをアルデスに渡す。アルデスは礼を言って受け取る。神が人間に礼を言うのか……。人類の祖先が神と同じと考えるとそう遠くない存在なのかもしれない。

-μleJ ⑥h-c, ⑥cαΛ, ⑥aμ ⑥c ⑥e< V-J⑥μc- -⑥ -⑥ -⑥Je μe⑥
cl ⑥c⑥ >cμ⑥ ⑥e⑥⑥⑥

一斉に目が紫苑に注がれる。何を言ってるの？ ヴァストリアを返せって、何のこと？

⑥eμ ⑥-cl, ⑥④a eΛ ⑥-⑥leJ Λ-Λ ⑥eΛeJ ⑥aδ ⑥

⑥cαΛ ⑥eα ⑥

私がヴァストリアを着ている？ このレインの買ってくれた商店街の宗教服が……？

そのときレインがハッと息を飲んだ。そして紫苑の頭を指し、⑥>....>-δ ⑥ と言う。アルシェも気付いたようで、ハッとして小さく ⑥VclΛ-Λr ⑥ という。

指の先を見てようやく紫苑は意味が分かった。そう……彼らが指をさしていたのは髪飾りだ。髪を結わくための紐だ。2つの綺麗な玉飾りがついた紐で、確かレインがネブラに襲われていたときに戦いづらいからという理由で咄嗟に使ったものだ。

偶々傍に置いてあったので付けただけだし、てっきりレインのものだと思っていた。いや、事実レインのものだったのだろう。

だが、紫苑が付けていたし、レインはゴムを自分でいくつも持っているので返せと言わなかった。だから何となく時間が経つうちにいつの間にか紫苑の物になっていたが、まさかこれが殲滅武具ヴァストリアだとは……。これは確か……。

⑥cαΛ ⑥④a e⑥ V-J⑥μc- e μclc- ⑥a⑥c- ⑥e ⑥clcJ <c⑥-⑥ - ⑥a >c-Λδ ⑥

⑥eμ ⑥-⑥, ④a e⑥ e⑥Kc ⑥

やはりそうだった。これは殲滅武具ヴァストリアがひとつ、エルフィだ。

紫苑は神話の記述を思い出した。エルフィは2個の美しい玉からなる髪飾りで、玉同士は美しい紐で結ばれている。2つの玉はエルトとサールを示すもので、紐は両者の橋渡しを意味する。

エルフィは元はリディアの育ての親のナルムの形見となったただの綺麗な髪飾りだった。リディアがテームス殲滅を公言するころに、エルトのルフエルは何かサールと協力することに対する証を持てないかと考えた。

V-JCPC- c la,, 4-A l-cZ VceP-C <eAZel J-J Jcl Ca,, 4-A la JolJ-C -AJe lel C-leJ Yac Ca,, 4-A -A J-J-C CaJe cl J- -Jc-, <Me> AeJP- -AC,, C-I -A JeP-C -Ao e <eAZel JcA,, Jol -A elK-C - P- C -PA-, eV-C V-JCPC- 1 lel Ca, 4-, elKc le Cc JeP laC lel I-CcJ, lecA,, -A A- Ve> -I -C Ca - >-J,, Jol -A leJp-J ucV e AoJ -I elKc Jol -PC,, Yal Ca, Jol Cc hoC CeP JeA >-A -PC,, lecA, Cc C-A I-A- Jcl Ya,, Jol Me elK - AeJP- e J-CeeS I -A eV-C V-Ple, Me JeK P-A Ca - h-cA -I-Cee>J lel h-C -AC,, ucAJ, -A eC J-CI-A C -PC- CcJee, 4-, C-leJ,, -A Jc >el,, <eAZel JolJ V-A V-l le JeC -A,, C-I I-Je J-J JeA eA V-l P- Je -ACeJ,, Jol Cc Me -Ao >cA uc MeC, lecA,, h-c, -A eV-C heJ -I C J-C- e AeJP- C -Jc- - JoV JoAe <-I-JaJc,, Ca <-I- eC ” V-IJ lclcA JC-J JoJc eVcC” ,, 4-, Me Jel <eAZel,, 4-A uc Ca, Cc Me -C> -I -A CcI-C I-A- cJA,, Cc KcJ JeA olC- Cc I-f elK,, J--, lecA...V-AC-AC >-A -A cA Vcl Cc e> >--J,, -A Cc- Cc, lecA,, Cc eC >cV- -AJ -AC,, I-aoV-6

そうか……。紫苑は静かに目を閉じた。これがあのカテゴリーで見つけた遺書の謎の答えだったのか。答えは予め与えられていたというのか。そして私たちはそれに気付かなかったというのか。

それにしてもあの箱の鍵の番号までちゃんと吹き込んであるとは。番号は 45239。00000 から始めたから、どうりで中々辿り着かなかったはずだ。

V-IJ lclcA JC-J JoJc eVcC —— 汝らの医師が悪しき高官を追い払うだろう

医師とはハインさんのこと、そして高官はフェンゼルのこと。

各単語の中にはアルカの数が含まれている。V-IJ には V-I(0)、eVcC には Vc(?) という具合に。

なぜこれがパスワードって分かったかって？それは lclcA だ。ドゥルガさんは男なので、lclcA とは普段は言わないはず。CccleJ と言うはずだ。それをあえて lclcA と言っているのだから、意味があるはず。

その時点で、これは何かのパスワードのニーモニックなのではないかと気付いたというわけだ。

しかしながら、この結末はむなしすぎる……。紫苑は項垂れた。もしエルフィをレインが付けていれば、アーディンを殺さずにすんだだろう。

-PleJ Cc eA J-f-C elKcδ lecA6

lecA C-uc, AoA eA lecA-C,, laaPp- eV-C Ca -I eleA c> feeJ-JC,, I- JoC AoA lecA Jcl Ca,,

ℓ-ℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓℓℓ, ℓℓ ℓℓℓℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ, ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ - ℓℓ ℓ
ℓℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ, ℓℓ ℓℓ ℓℓ, ℓℓℓℓℓ ℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓℓℓ, ℓℓℓℓ, ℓℓℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓℓℓℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ - ℓℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ - ℓ ℓℓ ℓℓℓ
ℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ

ハタと悩みこむ 3 人。ハインはただ表情を崩さず立っている。アルタレスの貫禄が備わっている。

ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ

えっと見上げると、ハインは ℓℓ, ℓℓℓℓ といい、呪文を唱えた。そしてまた光が輝く。

ℓℓℓ ℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ, ℓℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓ

アルデスとルフエルが去る。そして代わりに出てきたのは 1 人の悪魔だった。悪魔といっても美しい姿をしている。中性的で男女が分からない。しかし紫苑はハッキリと見覚えがある。悪魔メルティアだ。

ℓℓℓℓℓℓℓ ℓℓℓℓℓ

ℓℓℓℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓℓℓ

ℓℓℓ, ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ

ℓℓ ℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ

ℓℓℓ, ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓℓ

ℓℓℓ, ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓ - ℓℓ, ℓℓℓℓ

ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ

ℓℓℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓℓℓℓ, ℓℓ ℓℓ ℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓℓ
ℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓ, ℓℓℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓℓ
ℓℓ ℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓ ℓℓℓℓ, ℓℓℓ ℓℓ, ℓℓ ℓℓℓℓ ℓℓℓℓ - ℓℓ

ℓℓℓℓℓ, ℓℓ, ℓℓ ℓℓℓℓ ℓ ℓℓℓℓ ℓℓℓ ℓℓℓ

“h-c....”

メルティアはそこで言葉を止めた。紫苑は無言で頷く。レインとアルシェの表情が暗くなる。

“Λαλ <-Jc> Λ-Λ αλ >- Veμλ JeCe,, Jαλ -Cαl-J eΛ λcμ >cYa Λαλ c> Cαμ JeCeδ ”

“4-, Jαλ Cαμ, -Λ θco Cc - <c- Ccl,, clθ-JJαδ ”

“CYa le S-l-Λδ ”

-Jel “Jαl Cc eC, λcoΛ”

“Λαλ....--S Vcl,, Λαλ Λ- θelJ αl JαlC >cl Λαλ >cC μ- e ΛαJ <λ J-lC Cc<- Vc- -J,, cl Sα>
<-Λ Λαλ μ-λ Cαλ>-,, Λαλ Λ- Ve> α θelJ”

“--,, Cα le YeC,, -Λ eC μJcc- e >el,, -Λ θco λc- Cc - >el l -Λ >elλ-C Cc -l -Cαl-Jδ ”

“h3....μδ λ-Λθ Jαλ Λαλ μeC Cα - CYaC”

“θcλ Cc e> Jcl -Cc VeΛ....”

う……でもまあ、若い私にとってはそれくらい何てことはない。紫苑はふたたび頷いた。しかしそうなるも夏から冬へ逆戻りか……。風邪、引くだろうな。体が対応してないから。オーストラリアから突然帰還したようなものね。

lecΛ “λcoΛ....CYa leeV -Cαl-Jδ Λαλ Λ- e>C eλCα Λαλ VαμC >cl μec-,, λcoΛ, Λαλ l--θ CYa,,
Λee, cγλ λccC γαγγα -λel”

λcoΛ “lecΛ....”

泣きつくレイン。見るとアルシェは泣きそうなのを堪えている。彼も紫苑にいてほしいようだ。でも私は異世界の人間だ。それに、そもそも異世界旅行がしたかったのだ。ここが自分の世界になったら異世界旅行ではなくなっちゃうでしょう？

しかし、どう割り切っても涙は止まらない。3人は抱き合って泣いた。するとそこに水を差すようにメルティアが言う。

>elCc- “-lC, Cc λα Cα - Cαδ αV-....-Λ >elλ Cc -l -Cαl-J <λ Jel C-C J-lC”

“eθθ CYa Jα JeΛθ”

“-λ, Cα eC Jα<,, 4-Λ Cc eC λ-Z - Cα,, Jαλ Cc γα Cαδ ”

“Λαλ μeΛJ, “μeC, lee>J >elCc-r” Vclλ-λr Cα....Vclλ-λr”

紫苑は飛び上がって喜んだ。レインとアルシェも同様だ。

“Jαλ α> -Λ >elλ λc- Cc -Cα λαC J-lCδγα> Cαλδ -lCc....<c-JJel Ccl”

“レ-ル 7-ル 10-ル eル ヲル 7el7-ル,, 70ル 7a 70ル eル7 0ル 7el,, 70ル....7-, 7--ル, 74a 700 10ル -
7el le 74a 7el7-ル 10ル -7a 7e7e7 70ル c <c7, 10ル 8-7 <-ル 7c-7el e> <c-77el 10ル-ル,, 70ル
74a 7el7 10ル -7a c> 7c-7el 7 cl7-ル 7e70

“7c7a,, -> 7c7- 107 1-7ル 7c, 7c070

するとメルティアは光を放った。赤い光だ。そう、一番最初に見た光。そして次の瞬間、
紫苑は眩しい白い光に包まれていた。レインが咄嗟に手を伸ばす。アルシェがレインを抱
きとめて離さない。

-7e “7c077 -17e 7-ル 7-ル 7c70

レインの手が離れる。白くて柔らかくて暖かくて小さな……頼りない手だった。私がい
ないとどうにかなってしまいそうなほど。

lec7 “7c077 7077- - <c-77el 1Δ 10ル-ル, 7ee, le7-770

そしてまた闇が訪れた。闇の中を魂だけがさまよい、光に向かう。光のドアをくぐると
……紫苑は目を開けた。

そこは新白岡の自宅だった。紫苑は机の椅子に座っていた。ドアのほうを向いている。
振り返るとカーテンの開けられた窓がある。夜だ……。いや、これはアルバザードの夜で
はなく、あの連れられたときの夜なのではないか？

とっさに時計を見る。変な文字が書いてある。……いや、何も変じゃない。ただのアラ
ビア数字だ。時間は 8 時過ぎ。確か私が連れてこられたのはもう少し前だったようなこの
くらいだったような……。

確か私は下で牛乳を飲んで……日記を……紫苑の書を書いて……泣いて……。夢はず
……ない。だって口の中は牛乳の味がしない。さっきレインの誕生日祝いで食べたアルバ
ザードの料理の味しかない。

紫苑は制服を着ていた。さっきはルフィなんかを着てたのに……。紫苑の書は……。ない。
探したが、どこにもない。机の上にはケータイが置いてある。開いて日時をしてみる。

2005 年 11 月 30 日の水曜日だ。間違いない……。メルティアの言葉どおり、あのときの
ままだ。何一つ、変わっていない。

ただ、変わったといえば紫苑の体だ。一度も散髪をしなかったので半年分、髪が伸びて
いる。少し年も取っているはずだ。小学生の体ではないからもう気付きはしないが。親は

髪が伸びたことに気付くだろうか。もともと長かったからな、気付かないかもしれないな。

第一、突っ込まれたところで前からこうよと言えば親はそれ以上突っ込みはしまい。髪が急に伸びるはずがないのだから。異世界に半年行っていたなんて嫌疑をかけられることはありえない。

突然、ケータイが鳴った。びっくりした。こんな音だったっけ。操作に一瞬戸惑う。母親からのメールだった。

「ごめん、今日は紫苑の誕生日だったね。できるだけ早く帰るからお祝いしようね」

不思議なもので、半年読んでいなくても日本語はすぐに思い出せた。いや、思い出すというより空気を吸うような当たり前の感覚だった。

……ううん、お母さん、もう私の誕生日は今日じゃないのよ。でも、ありがとう。

一階に下りる紫苑。家に鍵をかけて外に出る。空気がアルバザードと違う。排気が多い。星が少ない。車が怖い。気をつけて歩く。でも、この国は夜、外に出ても良い。

駅まで歩いてみる。すべてが久しぶりに見える。当たり前だ。でも、この世界の人間にとって紫苑は少しも久しぶりな存在ではない。

駅をぐるっとすると紫苑はまた歩いて帰った。コンビニに寄って久々に自分で何か買おうと思ったが、鞆がないので財布がない。そうか、ここじゃアンスもないんだっけ。不便ね……。

信号待ちしていると、車が寄ってきて窓が開き、男が顔を出す。白岡まで行きたいんだが道が分からないので乗って案内してくれないかという。そうだった、ここは治安が悪い国だった。こんなバカが現実に存在する国だった。紫苑はため息をつく、まくし立てた。

“Cc lb ㄥ-λ ㄱㄱl Ccl CcJ eC -<eC -l -λδ h-r l-l- Cc lb -λ eC λeδ -λ eC ㄥcλ le V-λcC lecλ ㄱaCc-, V-JC-C <eλZel ㄱcλ V-Mle lel V-JC-Mc-, -lㄱ-C -Cc-l-Jr C-l Cc ㄥccC -λ ㄱcλ ㄱeㄱ ㄱcλC eλ λ- Ve> CcJδ h-cZeλrㄱ

男は「えっ？えっ？」と言って日本人らしい哀れな反応を示し、何やら小声で汚らしい捨て台詞を吐いて去っていった。日本語が分からないと思ったのだろうか、自分で畏だつたと告白したかのような言葉だった。ばーか、どっちも分かるのよ、私は。

ふうとため息をついて家に入る。夜あまり外にでないからか、こういう経験は珍しい。

新白岡はもっと治安が良いかと思っていた。夜はあまり良くないのか、単に偶然なのか。まあそんなことはどうでもいい。

紫苑は家に帰ると、部屋へ戻った。「お祝い」ねえ……もうお腹いっぱいなんだけどな。さて、また明日から学校か……。これからの人生どうしよう。もう異世界旅行は叶っちゃったし、今までの人生目標を塗り替えないと。

でも、アーディンの件で異世界旅行が自分の逃げだときちんと向き合うことができた。今となっては、私がすべきことは………なんだろう。とりあえず他人から逃げないことなのかな。自分の足でしっかり立てるだけの力を付けることなのかな。

ただ、異世界に逃げることは止めよう。まして架空でないならなおさら。だって私の世界はやっぱりここだから。

レインはアルシェと付き合うのかな。ちょっと悔しい……と正直に認めよう。あいつはカッコいい。私は多分……あいつのことが好き。8つ上だけど、全然平気。そんなの好きになったら関係ない。

でも、異世界じゃねえ……遠距離恋愛すぎるわ。彼にも可哀想だしね、やっぱりレインのほうがあってるのかな。

私としてはのんびりレインよりも私のほうがあいつに合うと思うんだけどなあ。アルシェにレインはちょっと退屈じゃない？話題が合うのはアルバザードの人間だからであって、慣れれば私もついていける。なんて……親友のこと悪く言うことないよね。

よし決めた。もし来年アトラスに行ってみて 2 人が付き合ってなかったらアルシェに好きだと告白しよう。遠距離でもかまわない。恋が続く限り。

そうなると、あとはアルシェがそもそも私を好きかってことなんだけど……どうなんだろう。彼女がいる気配はなかったし、私とレインのことも気に入ってたみたいだし。どっちなんだろう。あるいは子供に見られてどっちでもないとか？ああ、先にこっちの問題解決しとけばよかったなあ。

紫苑はため息をついた。今日のことを紫苑の書に書こうとする。

あ、そうだ。レインにあげちゃったんだ。

いいや、明日またあの店に行って、同じ本を買おう。そしたらレインと少しでも繋がっ

ていられる気がするから。あのエルフィの2つの宝石みたいに。

⑥ ㄱㄴV-, ㄴecΛ....-ㄲe....- ㄴc-ㄴel....rㄹ

紫苑はエルフィで結ぶふりをして、髪を束ねた。

手を離すと、髪は指を通して砂のように流れ、黒い滝を作った。

——終

後書

現代の日本文学に共通しているものは何だろう。明治維新を境界とする文明開化の影響か。あるいはアジアを西欧の魔手から守ると旗印を掲げておきながらアジアを支配し、あまつさえ西欧に負けるとあっさり寝返り尻尾を振るような、そんな日本人の二重性が為した混成文化だろうか。あるいは現代のIT社会が代表するような電腦社会、情報社会だろうか。現代の日本文学は何を共有しているのだろうか。

俗悪に言えば、それは金だ。日本は資本主義の民主主義でできている。文学も小説などの商品として市場に出回る。毎月いくらかしか売れなそうな文学専門雑誌でさえ、商品として流通している。仮に誰も買わなければ商品にならないので売られない。市場の評価は売れるか否かで決まる。

文学も資本主義の社会にあつては売れるか否かという評価を免れない。世界一短い手紙を書いたヴィクトル＝ユゴーは、その手紙で出版社に「？」と書いた。出版社は「！」と返した。これは「売れ行きはどうだい？」「素晴らしく売れてますよ！」ということの意味する手紙だが、かの文豪でさえこうして資本主義の下に筆をふるっていた。

売れない作品は商品にはならない。商品化されなければ作者には金が入らないし、知名度も上がらない。こうして文学から売れないものは消え、売れるものが残る。民意を反映したこのシステムの短所は、民意が常に正しい判断をするとは限らないということだ。

岩波新書などの売り上げは年々落ちこんでいる。新卒の給料を語るときに岩波書店が引き合いに出されたのは遠い昔の話になってしまった。

さらに、いまの子供は本を読まないといわれて久しい。学力も少子化が拍車をかけたせいで年々下降している。大人は本を読めというが、その大人でさえ本を読んでいない。少なくとも新書や名作の類は読まない。市場で売れる本を読む。

民意は必ずしも知識の源泉となる良書を選ばない。むしろ楽しいだけの本を選ぶ傾向がある。それが現在の子供の学力低下や大人の思考力不足などの深刻な問題を引き起こした。これは民意の起こした弊害だ。

簡単に言えば、人気がある＝良書とは限らないということだ。

良書の定義は人によって異なるが、人気は売り上げで量れる。だから後者が尚更目立ちやすく、前者は後者に食われてしまいがちだ。

残念なのは、マイノリティにとっての良書がマジョリティによって市場から追い出され

てしまうことだ。マジョリティにとっての良書が残ることは資本主義なので仕方がないが、マイノリティの良書まで追い出してしまうことは問題だ。売れないもの＝いらぬものという発想で、マイノリティの良書が消されてしまうのは残念だ。

もしマイノリティが良書を出すならパトロンを付けるか自費で出すしかないという時代が続いた。これは暗黒の時代で、偉大な文筆家でさえたびたび迎合という儀式をして口を糊しなければならない時期があった。

ところがいまはインターネットのおかげでマイノリティはほんの少しの金で良書を出せるようになった。ネット上の公開という形でだ。

新しい媒体は新しいジャンルを生んだ。ブログをそのまま本にして出版したようなジャンルがそうだろう。だが、インターネットはそういったマジョリティの寵児だけでなく、マイノリティによる良書をも平等に囲ってくれる。誰が見ようが見まいが、メジャーだろうがマイナーだろうが、インターネットを使えば簡単に作品を公開できるわけで、これは素晴らしいことだ。

私に関していえば、マイナー側に立たされることが多い人間だ。メジャーを嫌うわけでもマイナーに走るわけでもなく、気付いたらマイナーにすることが多い。

マイナーは不便が多い。何かと金がかかるし、嘲笑の的になりやすい。ただ少数であるというだけで様々な不便を強いられる。そこで私が立てたストレスの解消法はメジャーマイナーという枠を取り払うことだった。そして代わりに立てた価値観は高尚さだった。

学ぶということが好きなため、知識や知恵に関することは高尚だと捉えた。アルカは高尚さの好例だった。

マイナーが高じると、マイナーを極めたい自分が生まれる。どうせ悪いなら最下位を目指そうという屈折した究極を求める気持ちと同じだ。そのせいで、どうせマイナーならとことんマイナーでいたい、世界でたった一人の奇特な人間になりたいと思う自分が生まれた。しかしそれは半分の自分でしかなく、もう半分は人に認めてもらいたい自分だ。

例えば『紫苑の書』を読んで誰かが共鳴してくれればそれはそれで良い。一方、誰も共感できずに理解できないなら、それはそれでやはり良いのだ。矛盾する願いを持つということは良いことだ。なぜなら必ずどちらかひとつは叶うのだから。

アセットに所属して外国人の仲間たちとともに人工言語アルカを作っていたせいで、

思春期の頃は異世界ファンタジーの荒唐無稽さを切に感じていた。折りしも当時の日本はティーンズ文庫がどんどん隆盛していった時代だった。

なぜ異世界の設定は西洋を模したもののばかりなのか。なぜ魔法などで言語が通じるようになるのか。なぜ日本と同じくお辞儀をするのか、なぜ日本と同じく雨が降ると手の平を上に向けるのか。なぜ来いというジェスチャーはアメリカでいうところの行けに当たるのか。なぜ異世界なのに、気付かない細かいところがあまりにも日本的なのか。

小中学生だった私は随分不思議がった。それが単に作者の知識不足であるとか、そこまで読者は細かい設定を必要としていないとか、あるいはもっといえば日本とある程度似ていないと共感できないからだと知るには時間がかかった。日本人の他の子供は何ともなくそんなことをすぐに理解してしまう。だが、私は周りと比べてあまりに異文化を知りすぎていた。そういった疑問を強く抱かずにはいられないほどに。

異世界ファンタジーの非リアルを感じるほどに、リアルな異世界を想像してみた。もしリアルなら言葉も文化も通じないはずだ。アセットのように。そんな小説はないのだろうか。そう思った。しかしもちろん、資本主義の下にそんな高尚なだけでまったく売れない存在はありえなかった。

リアルな架空を作るには言語や文化や風土が必要だ。アセットにいてアルカを作っていた自分ならそれが可能だと気付いたのは中学のときだった。しかし、それを小説にしようと思うほどアルカは成熟していなかった。

高校、大学になるにつれて、このリアル異世界ものを書こうという気持ちが強くなっていった。大学になったときには具体的に、日本人の少女が異世界に行ってアルカを学ぶというコンセプトが浮かび上がった。

アルティス教の始祖がシオン＝アマンゼという少女であるということと、私自身が女だったら紫苑という名になるはずだったという奇しき縁から、その小説の主人公の名がまず決まった。

決まったのはコンセプトと紫苑という少女の名。しかし、紫苑がアトラスに行って何をするかなど、つい最近まで少しも決まらなかったことだった。アルカを覚えさせる前半部が最も書きたかった部分で、後半のシナリオは紫苑をアルバザードの外へ出すための口実に過ぎない。

なお、後半のシナリオはかなり最近になってからできたものだ。アセットが管理する『幻想話集アティーリ』にはレイユのアルテナの時代にフェンゼル＝アルサールというア

ルタレスが謀反を起こしたため、タレスのハイン＝アルテームスが討伐し、アルタレスになったという歴史的事件がある。

私はこの事件の裏に実は紫苑がいたのだというシナリオを加えた。それが後半部の内容だ。もちろんこれは『幻想話集アティーリ』の正規の話ではなく、私オリジナルの遊びだ。

『幻想話集アティーリ』では正しくハインがフェンゼルを倒したになっている。紫苑の存在など劇中劇のようなもので、架空の中の架空でしかない。

『紫苑の書』で私は何をしたかったのか。それはリアルな異世界を描きたかったということだ。写実主義で書きたかった。ただし、紫苑という個人の主観的な視点で。そして出来事を写真のように捉えたかった。この意味において紫苑の眼は写実を行うカメラのレンズにあたる。

その書き方には偽りがなく、誤魔化しもご都合主義もない。だから私は禁忌の払拭に力を入れた。人間の死や性や排泄はすべて禁忌とされ、隠される。だが、写真で取ってしまえばそれは風景画や肖像画や運動会の様子と同じく、画素の中にデータとして収められる。人間の目に禁忌と映る画像もカメラにとっては少しも禁忌でない。カメラには禁忌がない。だからこそ完全に写実的でいられる。

私はリアルな世界を作りたかったので、カメラの視点を選んだ。だから性も死も排泄もすべて取り入れた。普通ならカットするような描写も一々取り入れた。風景、特に実在する日本の街並みの描写に力を入れたのもそのためだ。

それが面白いかどうかと言われればむしろつまらない。そこらの公園を取った写真が面白くないのと同じだ。しかし私が作ろうとしたのはまさにそこらの公園の写真なのだ。だが、文字化することによって、ただの公園を焦点化された意味のある公園にできる。アトラスも同様で、なんでもない日常や禁忌を平等に書くことによって初めて焦点化され、有意義なものになる。それがしたかったのだ。

日常の一コマなど取るに足らないものだ。記憶してもすぐに消えていく。それを写真に残すと見るたびに思い出すことができ、その一瞬が特別だと考えるようになる。リアルを切り取るにより、無意味な日常を有意味な思い出に変えられる。アトラスもそうだ。文字化して切り取ることによって取るに足るものに生まれ変わる。

ところで、もうひとつしたかったことがある。当たり前だが、異世界で生きるという経

験を書くことだ。リアル異世界は言語と文化と風土を独自に持つ私たちにしかできないことだから、極めて貴重で高尚だ。

しかし、私はアルカを学ぶ人の姿が書きたいわけではなかったし、フィールドワークに傾倒しているわけでもない。ただ、リアル異世界で人が生きるのを書きたかっただけだ。その願いを叶える手法がアルカや日本語であつたに過ぎない。

私がアシェットにいなければこれを書くことはなかっただろう。作った言語がアルカでなくとも良かったし、地の文が日本語でなくとも一向に構わなかった。アルカと日本語は手法でしかなく、オルタナティブなものでしかない。

地の文だが、あれは実はすべて紫苑の視点だ。「～だわ」とか「～かしら」などと書いてある口語の部分は紫苑の心の中から見た文で、頭の中で考えている言葉だ。ふつうの小説では丸括弧に入れられるべきものだ。

一方、それ以外の地の文は紫苑が頭の中で思ったのではない。幽体離脱といったらいいか、紫苑が頭上に幽体離脱して自分を頭上から見ているような視点、それがこの小説の地の文だ。だから紫苑が認知していない場面は原則として書かれていない。

アルカもアンティスも作中で読者に学ばせようとしていない。紫苑の目が気付いた部分しか書いていないため、一々手取り足取り説明してはいない。アルカの概説書や教科書や研究書なら既にあるし、アンティスについても『アルバシェルト』という大著がある。

なので『紫苑の書』でアルカとアンティスを長々と書く必要はない。紫苑が彼女の目で気付いたことをただカメラのように書いていく。一人の日本人の少女が異世界にいったら何をどう見聞するのか。それが書きたかったのだ。

リアル異世界に身を投じる以上、地の文はそこを生きる紫苑の視点でなければならない。作者の目を通すのはいけない。リアル異世界にいるのは紫苑であって私ではない。だから地の文もすべて紫苑の目線でなければならない。

紫苑の目線で書く以上、レインを最大のインフォーマントとする。ところがレインは国民のプロトタイプではないため、アンティスをすべて反映しているわけではない。アンティスに従う部分とレイン独自の個性が混在している。紫苑は当然その違いを知ることができない。そして上記の理由でその違いが説明されることもない。

本文にはアルカだけで書いてあり、解説のないところが多い。その理由は説明済みだが、結局のところ本書はアルカやアンティスを知っている人間が読んでほくそ笑むようなもの

であることは間違いない。もちろん、まったく知らない人間でも大筋を理解できるような配慮はしてあるが。

ところで、なぜ私はリアル異世界を望んだのだろうか。いい加減でご都合主義な異世界が嫌いだったという潔癖さだけでは説明がつかない。異世界だけではない、絵画についても写真のような写実主義が好きだ。

ところが面白いことに、私は写真には一切興味がない。このコントラストは非常に自己分析の際に重要で、興味深いことだ。簡単にいえば写真のようなリアルさが好きである一方、現実の写真は好きでなく、架空の絵は好きだということだ。

ここからいえるのは、私が好きなのはリアルな架空だということだ。そして特に風景や建造物や動植物や機械などよりも、私の興味は専ら人間に向かうというのも特徴だ。さらに、人間の中でも若い男女、とりわけ女に興味に向かうのも特徴だ。最も簡単にまとめれば理想の女性像を求めていると言い換えられる。つまり、私のアイデアだ。

なぜここまでリアルな架空としてのアイデアを渴望したのだろうか。それは当然私のこれまでの人生に原因がある。私は少年のころ少女の友人が多く、いつも少女と一緒にいた。年が上になれば「付き合う」という形で少女らと接した。いわゆる彼女に当たる存在が途絶えたことがほとんどなかった。そのため、本来思春期で築くべきアイデアを正しく築くことができなかった。

私は恋人に忠実な面があり、付き合っている間は他に目が行かない性質で、ショーウィンドウの服を見ても付き合っている恋人が着たらどうかとしか考えない。恋人が緑が好きなら緑を尊重するし、小柄なら小柄が可愛いと思い、長身なら長身が綺麗に思う。むしろ彼女が長身であるというより、周りのすべての女が低いだけだと思うほど、周りが見えなくなる性質だ。

だから恋人たちは私のアイデアに必要以上の影響を与えてしまった。つまり、干渉してしまったというわけだ。そのせいで純粋な私のアイデアは築かれなかった。それが逆説的に私のアイデアへの渴望を秘かに強めた。

つまるところ、私のアイデア渴望はこのようなことが根底にある。そしてアイデア渴望がリアルな架空を求め、リアルな架空のひとつの下位概念がリアルな異世界だった。そしてそのリアルな異世界を書いた小説がこの『紫苑の書』だったのだ。

この作品はこうしてできた。だが一方で、私のアイデアそのものはまだ見つかっていない。

それは今までの女性ではないし、架空の紫苑でもレインでもない。また、アイデアな世界もまだ見つかっていない。アセットから与えられたアルバザードが私のアイデアというわけではないからだ。

しかしそれでも私はアイデアを求め、何を見ても「何か違う」と思い続ける日々を送っている。どれが正解か分からないのに、何となく違うということだけは分かるというのは不思議な感覚だ。

いつかアイデアを求めなくなるときが来るだろうと思う。それは考えることや望むことをしなくなった老いた自分だろう。望むことに疲れ、期待することに苦痛を感じた未来の自分だろう。そのときの自分がこの作品を読めば、きっとアイデアが見え隠れするこの作品を青いと思うだろう。そして老いた自分を哀れむだろう。そんな日が来るのかと思うと、自分が自分でなくなった気がして面白い半分、不思議だ。

新生版の後書

メル 19 年リュウの月ギルの日

『紫苑の書』の新生翻訳が終わった。案外、幻文が多くて難航した。

また、原文を読んでいて読みにくいと思うことが多かった。文が詰まっているし、改行も少ない。

複線にもならない脱線が多々あり、「この記述は必要だろうか」と思うことが多かった。自分は思ったほど文が巧くなかったと実感した。

ネット小説は売り物でない。だから好きに書けるのが良いところだと後書で述べた。だが、それは同時に独りよがりにもなる。

原文はずいぶん独りよがりだった。翻訳版は手直ししかできないが、それでも前よりはマシになったはずだ。

前半パートが短すぎやしないか。アルカのチュートリアル小説なのに、説明が少ない。気付いたら紫苑がアルカをマスターしているので、読者は付いていけないだろう。

特に新生は習得が難しくなったので、あれだけの記述で読者はアルカを理解できるだろうか。恐らくムリだ。

かといってウィキの概論で述べているようなことをすべて盛り込むと、小説にならない。ある程度チュートリアルっぽい側面を出しつつ、小説は小説と割り切らねばならない。

目標は、紫苑を通じてアルカに興味を持ってもらうこと。興味を持てば概論を読むだろう。

また、あくまでチュートリアルなので、読めばそれなりにアルカができるようになるという利点も残したい。読めば完全マスターというわけにはいかないが、そこそこの知識は付くように作った。チュートリアル小説としては、この程度でいいだろうと思う。

アーディンのシーンは『玲音の書』にまで続く絶大なトラウマになるわけだが、原作では扱いが軽すぎた。

今回は紫苑の胃痛をより明瞭に打ち出した。また、さりげにアーディン死亡後、仲間の男の台詞が『玲音の書』のフラグになっていたりする。

ネットで紫苑やレインを好きな人がいるようだが、翻訳をしてみて、不思議に思った。
作中で、紫苑はかなりひどい醜態を晒している。

男を蹴るわ、生理になるわ、胃腸を壊すわ、下痢になるわ、インフルエンザで吐くわ、
レインを殴るわ、少女を殺すわ、キレてフェンゼルの死体に唾をかけるわ、ロクなことを
していない。

レインについても実は大差ない。吐くわ、キレルわ、暴れるわ。

セレンはリアルな人間像を描こうとするあまり、綺麗な人間の汚い部分をわざと暴くよ
うに書く癖がある。

だから、恐らく萌えキャラとは最も対極にあると思う。萌えっことはそんなことしない。
なのに、それなりに理解者が出てきたのが不思議だ。

リディア嬢は紫苑が好きらしい。アシェットではレインに軍配が上がる。ネットでもそ
うかな。

キレても吐いてもアシェットの中でレインは可愛いらしい。彼らの感性は少し違うのか
もしれない。

一方、アルシェが好きというのは聞かない。結構活躍していたと思うのだが。

また、登場人物は基本的に自分に似ているなど思う。つまり、彼らはセレンに似ている
ところがある。

『紫苑の書』時代の紫苑はセレンがモデルの一人だったので、無理もない。『玲音の書』
になると、静がセレンなので、紫苑からセレン成分を取り除いた。

その結果、セレン好みの萌え紫苑ができあがったというわけだ。

セレンと一番遠いのはレインだ。セレンはレインには全然似ていない。

……あれ、アシェットでレインが人気で、セレンがレインに似ていないとなると？

さてw

新生に思っていたのは、男女の位相差が濃厚だということだ。

制の文章を一行下に置いて、新生の翻訳文を書いていく作業だったが、制文を見ている
と紫苑がやたらガラ悪く見えて困った。

ただ、ユンク語はあくまで有標だ。なのにヒロインがどちらも女だから、『紫苑の書』はチュートリアルとしてどれだけの意味があるのだろうかという気がする。

制のころはこれでもよかったのだが、新生だともっと早くにアルシェを出すべきだったかもしれない。だが、シナリオのフロー上、それはできなかった。

作者の精神状態がずいぶん異なるなというのも切に感じた。

当時は嫁に逃げられた直後なので、よほど人格が破綻していたのか、文が硬い。それに孤独で、攻撃的だ。まあ、そういう奴だったから逃げられたんだろうな。

「ほたる一、おかえり。FF4 リディアでウーウーウマ(°▽°)踊ろうぜ！」

——とかだったら、逃げられなかったかもしれない。いや、別の意味で離婚か。

後書ひとつ取っても今とずいぶん違うなあと思う。気難しい小僧という感じがする。逆に今は社会人になってしまって、揉まれて汚れてしまったのかな？

そうかもしれない。ミールも紫苑も玲音も、どこことなく、綺麗だった。研いだナイフみたい。綺麗だけど、危険な感じ。

今はなまくら刀かも……。刃物と消しゴムは丸くなったら使えないよw

まあ、それはさておき、翻訳版にしか収録しなかった小ネタが随所に転がってますので、初めて読む人だけでなく、2周目の人も楽しめる内容になってるんじゃないかと思います。

-Λ lePc cJ7-Λ Caal Λ- lol o AclP

<ccΛ- PcLc-,

JePeΛ -Pε-Z-Pλ